
世界の狂う重さ

ん？ん？ん？ん！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の狂う重さ

【Nコード】

N8931E

【作者名】

ん？ん？ん？ん！！

【あらすじ】

【此処】がどこかもよく分かっていないけれど、僕はそれなりに今の生活を気に入っていた。僕はいつたい何をしたいのか、何をすればいいのか、そんな事さえも分からないままに、何となく毎日を過ごしていた。でもそんな幸せな部類に入るであろう僕達の生活は、ある”物”或いは”人”によって一気に狂い初めてしまった。僕に何が出来るのだろうか、僕には何か出来るのだろうか。それともやはり何も出来ないのだろうか。

完結しているこの小説ですが、【世界の狂う重さ（追加改悪版）】
というまあ言わば完成版のようなものを現在書いております。出来
ればそちらの方をこそ見て頂きたいと思う所存でございます。

序 01

「ねえ茉莉君。^{まつり}一つ君に相談があるのだが。」

今日も彼女は、そうやって話を始める。

いつだって、彼女と僕の会話は、その言葉で始まった。

始めの内は、煩わしく感じたが、今ではこの予定調和が、非常に心地よくなっている。

狂わない事は大事なことだ。

狂わないということは、

正常であり続けるという事で、
変わらないという事だから

「聞いてくれるかい？」

やはりいつもと同じように、彼女は言葉を続けた。

いつもの場所で、

いつものように、

いつもの口調で。

この変わらない世界を、僕も彼女も愛しているのだ。

僕らの世界は、

昨日と同じように今日へ。

今日と同じように明日へ。

いつまでも、いつまでも。続いていくと思っていた。

そんな筈はないのに。

でも僕は信じたかったのだ。この狂った世界にも、変わらぬ事が確かにあるのだと。

彼女は優しく僕に微笑んでいた。

僕の答えを待っている。答えは聞かなくても分かっているだろうに。それでも待ってくれている。昨日と同じように。

そうして僕は、昨日と同じように、いいよ、と答えた。もう幾度となく繰り返された、法則にしたがって。

それなのに。彼女は、

いつもと変わらぬ表情で、

いつもと変わらぬ口調で、

いつもと変わらぬ抑揚で、

まるで呼吸をするかのような自然さで、

いつもと違う事を言った。

「あのね、一回死んでみようと思うんだ。」

序 02

冗談だと思った。そんなものは冗談だ、くだらない、と。
またいつもの悪ふざけだと思ったし、そうである事を心の底から望んだ。

そうでなければならない。

これは、冗談でなければならないのだ。
もし違うのならば、彼女は。

彼女は、時々答えようのない質問をして、僕を困らせる。
今回もその類だと思った。思おうとした。

だけど、彼女の瞳はこれ以上ない程に澄んでいて、迷いを全く感じさせない。

それで僕は、これが冗談ではない事を、認めざるを得なくなったのだ。

そうか。

ついに。

彼女も。

彼女までも、狂ってしまったのだろうか。

いいや、そんな筈はない。
だって彼女は。彼女は。

「どうしたんだい？ぼーっとして。いつになく間抜けづらだよ。新
手の顔芸なんだとしたら、大して面白くもないから、即刻やめてく
れないかい？」

ああ。よかった。いつもの彼女だ。

彼女は狂ってしまった訳ではなかったのだ。

「ああ、ごめんごめん。君が急に変な事を言い出すから。それにし
ても、何気にさらっと酷いことを言っね、^{しお}栞」

「酷くはないさ。本当の事だから。」

「いや、それが酷いんだよ。ところで栞」

ん？と首を傾げる栞。長い髪がさらりと横に流れる。いつ見ても綺
麗な髪だ……じゃなくって。

「んん？また顔芸かい？止めときなよ。君の顔芸のスキルの無さは
哀しい程だよ。」

「いやいや違うよ！！顔芸のスキルとか欲しくもないし。というか、
何で今日はそんなに攻撃的なのだ。」

やはり。

やはり、狂い始めているのだろうか。
この世界と同じように、彼女もまた。

「じゃあ何だい？君の顔がクルリクルリと変わるから、私もそつい
う風に誤解してしまうんだよ？」

「いや、だから」

そうか。もう先程の彼女の発言には触れないで、このまま流してしまおう。とそう考えた矢先に、彼女によってあっさりと話題は戻された。

「あのね。何でも無いのなら私の相談に乗っておくれよ。真面目に言ってるんだよ?」

やはり。

彼女は。

ゆるやかに、しっかりと。

狂い始めて。いるのだろうか。

「私、一度死んでみようと思うんだけど。」

序―終

とりあえず落ち着こう。

まだ大丈夫だ。

今ならまだ、彼女を拾いあげられる筈。

「……………いや、あのね、【一度】死んでみるっていうのは何？」

すると彼女はキョトンとした後、にんまりとして僕に言った。

「何を言ってるのさ。そのままだよ。言葉どおり。」

「それだと余計に困るんだよ。」

「何がさ。君は言葉も理解できなくなっちゃったのかい？」

「一回死んだら生き返れないだろ？」

何故僕はこんな話をしているのだろ。

「そんな事はやってみなければ分からないじゃないか。」

ケロリとした顔で彼女は言う。

「やってみなくても分かるよ。人は、一度死んだら生き返らない。」

「そうかな？」

「そうだよ。君も何度も見ただろう。ゆるやかに狂って、消えていく人たちを――！」

「……………その件なんだがね、茉莉君。」

思い出したくも無い場面を、いやがおうにも思い出し、それをまた記憶の底に封印して、それでも感情の奔流を抑えきれずに、少し激昂してしまった僕に対し、彼女はいたって冷静に言葉を続ける。

「彼らは、本当に死んでしまったのかな？」

それが当然の事だと。

それが当たり前の疑問だと。

僕を誘導するように、

妖艶なその口唇で、

彼女は言葉を紡いでいく。

「【此处】から出て、【元の世界】に戻ったんじゃないかな？それだけの事なのさ、きっと。だから」

もうこの世界で存在を保っているのは、僕たち二人だけだ。

他の人々は、狂いながら、悶えながら、死んでしまった。

否、彼女の言うように、それを正確に確認した訳ではないのだ。

ある日目が覚めると、当然のように彼、或いは彼女たちは、いなくなってしまうのである。

だから僕は、本当は、彼女の言わんとする事が分かっている。分かっているのだが、その決断は、取り返しのつかない結末を迎えそう
で。

だから僕は、変わらないこの毎日を感じたくて。
彼女を引きとめようとしている。

でも彼女は、そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、笑いながらこう言うのだ。

「私、一回死んでみようと思っただけど。」

と。

口には出さないが、彼女の言葉の裏に隠された思いを、僕は痛いほどに理解してしまっている。
そう、彼女は誘っているのだ。

（ねえ、だから一緒に行こうよ）

と。

「その現象は始めは【病氣】と言われていた。「狐憑き」とか「イタコ」とか、そんなものの一種なのだ、と。実際、始めの内は、症状も大した事なかった。

病氣　まあ、実際そんなに単純に割り切れる問題ではないんだが、説明に便利だからここでは病気で統一するよ　に罹った人間は、特殊な能力を発現する。そう、巷で言われている、いわゆる超能力の類だね。始めの数年の間は、それこそくだらない能力ばかりだった。

ん？聞きたいのかい？そうだな、あまり気は進まないんだが透視能力があるだの、浮遊できるだの、そういうくだらない、いかにも想像力の乏しい人間の考えそうな能力だよ。

で、だ。えーと、何て読むのかな、んん、まつり君？で、いいのかな？

ふん、そうか。私の日本語能力もまだまだ捨てたものじゃないようだね。そうそう日本語と言えね、高校のテストで、僕は唯一日本語のテストで百点を取ったことがないんだよ。あの日本語のヘタレ教師が本当に嫌な性格だね。いやあ今思い出しても腹が立つ。ああいうのは死ねばいいんだよ。日本のためにも、ひいては世界のためにも。何が「ほら百点が欲しいなら、分かるだろ？少し捲くって見せてくれるだけでいいんだ。」だよ。ええい忌々しい。思い出すだに鳥肌が立つ。何であんなのが教師になるんだ。日本の政府はこれだから……………

ああ、すまない。

思わず、君の存在を忘却していたよ。

気にしないでくれたまえ。ちよつと昔のトラウマを トラウマ
ティック・エクスペリエンスを 思い出して……

いやごめん、そこらへんに突っ込みを入れるのは止めてくれ。

や、や。違つよ。違つ違つ。ちよつと言つてみたかったから言つて
みただけで。

ああ、だから違つんだ、

ちよ、ドSか君は。そんな事を言つのは止めてくれよ、恥ずかしい
じゃないか。

コホン、では気を取り直して話を続けようか。

次は、その後の政府の対応だよ。君が真面目に歴史学の授業を聞いて
いれば、この辺の説明は省略できたんだけどね」

2話 栞の講義―02

「医者がさじを投げたと分かるや政府は
話だから、本当は話すのも嫌なんだけど
事にした。」
まあ凄くありがちな
【病人】を隔離する

その時点での政府の認識なんてそんな甘いものだったんだ。その程度で解決出来ると思っていたんだろね、あの連中は。全く真剣にこの問題に取り組もうとしてなかったんだよ。

君もその身を持って体験してるだろうが、知っての通り私達のこの【能力】は非常に多岐に渡る。何故発祥するのか、何が原因で人間にこのような能力を駆使する事が可能なのか、物理法則はどうなったのか、治療する方法はあるのか、エトセエトセ。その他諸々あるんだが、これらの問題のただ一つとして、政府も医者も答えを見つけていない。この国の、無能さが垣間見えるようだね。

ん？さつきから口が悪すぎるって？

……うん。不快に感じたのなら謝るよ。

……ん？ああ、余りその話には立ち入ってくれるな。

ふう。やれやれ。君もなかなか話をそらすのが好きだね。ソラシャーだね。

いやごめん。だから、突っ込むのは止めてくれよ。止めようとは思っただけだね、つい言ってしまうんだよ。

え？だから、分かるでしょ？反らすから、ソラシャーだよ。話を。

分かっててなじらないで欲しいな。私だって恥ずかしいんだから。

全く。君のせいで変な性癖に目覚めてしまいそうだよ。

あ、いやいや今のは失言だ。記憶から抹消してくれたまえ。

……………さあさあいい加減に話を戻そうか。さっきから全然話が進んでいないような気がするよ。

それでね、それでも政府は一つの結論を出した。それは成果とも言えないくだらないものなんだけど、まあ政府としても何らかの発表　少なくともそれらしき物をしないと、格好が付かなかつたんだろうね。

それは能力に関する、現在定義とされているものだ。

3話 能力と代償（政府の発表）（前書き）

今回の部分は、この世界感の根幹となる部分ですので、頻繁に書き直すと思います。

3 話 能力と代償（政府の発表）

・能力の発祥は、抑えきれない感情の発露によって起こる。どのような感情でも起こり得るが、能力の性質上、負の感情の方が発現確立が高いことが確認されている（絶望・憎悪・歡喜・等）

・能力を発祥したものは、特別な能力を得る代わりに、【代償】としてそれに見合う何かを失う。得た能力が強力であればあるほど、代償も比例して大きくなる。

・代償として払うものは、物とは限らない。感情や記憶など、我々の常識では一般に支払いが不可能と考えられるものも、その対象に含まれる。

・代償を誰に、或いは何に差し出しているのか、詳しいことは不明。患者自身の思い込みであるという案が支持された事が、あったが、これは、遠見、透視、靈視など、【視る】事に関する様々な能力と引き換えに、片目を失った男の例を筆頭とする、その他様々な例によって否定されている。

・得る能力は、能力発現の時の感情、及び当人の愛好によって大きく左右される事が確認されている。前述の男は、盗撮で8度逮捕されている。【視る】という事への関心が人一倍強かった模様。7度目の逮捕の際、刑務所内部で能力の発現を確認した。その時の詳細は別紙参照。

・代償には、大きく分けて3つのタイプがある。

1、能力を使用した回数に比例して、その都度代償を支払っていく

タイプ。これは、物理的な能力に多く見られる。このタイプの患者は、能力を使わなければ普通の人間と変わらない。

2、能力が発現した時に、先に全て支払ってしまうタイプ。前述の盗撮魔はこのタイプに当てはまる。彼は、左の眼球を代償として支払い、特殊な右目を手に入れた。

3、能力と代償の関係は比例していると前述したものの、詳しい所は現在調査中である。一見、代償だけを支払い続けているように見られる患者、能力だけを得ているように見られる患者も、確かに存在しているのである。これを、特殊なタイプとして、3つ目の枠を設けた。能力と代償は、総和で比例しているのかもしれない。更に詳しい考察については、別紙を参照の事。

・なお、能力の使用は、特別な事情が無い限りこれを一切禁止とする。もし許可無く使用が発覚した場合、ただちに法的制裁を与える。

4話 栞の講義―03

「さすがにこの定義は知っているだろう？歴史学の授業の始めに習う所だからね。こない加減なものを定義にするなんて、よっぽど政府も困っていたと見えるね。結局何も分かっていないのに、いかにも分かった風に書いている。全くもって小賢しいね。それでこの定義なんだけど、私が思うに……

ん？何だいその顔は………もしかして、知らないのかい？

あきれたな。君は授業というものをなんだと思ってるんだ。

いや、そんな固い事を言うつもりはないけどね。どんなサボリヤーでも、少なくとも始めの数回は授業に出るものだと思ってたから。

うん。まあ、私の思い込みなんだけど。

んん、ごめん。そうだよ。サボる人だからサボリヤーだよ。だからごめんって。

………君と話していると、すぐ話が横道にそれるな。やれやれ、僕の意外と苦手なタイプかもしれないよ、茉莉君、君は。

うん、話を戻すよ。えーと、どこまで話したかな。

………ざっと見た感じ、君の体には目立った特異点はないようだね。何を代償としてるか、聞いてもいいかな？

ふん、言いたくない、と。

まあそうだろうね。私だって自分の能力をひけらかすのはごめんだからね。

うん、でもまあ、ここでは信頼する事が大事だからね、気が向いたらでいいから教えてくれたまえ。

ん？私の能力？

………君は変態さんだなあ。女性の秘密をそんなに気安く聞くものじゃないよ。

え、信頼？

………まあいいじゃないか。ほら、話を続けるよ「

5話 栞の講義―04

「一向に前に進まない研究に　私はこれは本気でどうかと思うんだが　医者はついにサジを投げた。そして、医者がサジを投げたと分かると、今度は政府が強行手段に踏み切った。

何だと思う？ありがちでくだらない決断だよ。

うん、そうだ。患者を隔離したんだね。

始めの一ヶ月ほどは、それで上手くいったかに見えた。でも、そんな事はまったく意味をなさなかった。

その理由は、大きく分けて二つある。

一つは、患者の数が増えすぎて、収容する場所が足りなくなった事。これは単純なようで、なかなか深刻な問題だよ。取るに足らない些細な症状の患者まで、政府は次から次へと隔離していった。

その結果、次第に魔女狩りのような状況になって来たんだ。

人よりほんの少し優れている。

人と少し違うだけの人まで、患者として収容されていった。

二つ目、こちらの方により政府は辟易したようだね。

強い能力を持った者を、閉じ込める事など、元から不可能だという

ことだ。

各地で脱走事件が相次ぎ、隔離病棟はその機能をまったく果たさなくなつた。

いくつか例を挙げてみようか。

・人の心を操る能力と引き換えに、人間はもちろん、動物や植物、生き物全てに嫌われるようになった能力者は、看守を操って、堂々と脱走した。

・さつきの定義に出てきた男は、発現した自分の能力に磨きをかけ、病棟の警備の綻びを【視て】、夜中に脱出した。

とまあ、挙げだしたらキリがないが、他にも様々な場所で脱走事件が起こつた。

その結果、政府の隔離計画は見事に頓挫した」

6話 茉莉と栞 01

「次は……………」

「いやちよつと待ってくれ」

思わず僕は止めた。栞 たぶん、しおりと読むだろうの話は、直ぐわき道に逸れるし、反応も面白いので、そこまで退屈ではないのだが、いかんせん長すぎる。きつと放っておいたらこのままずっと喋っているだろう。

「むう。何だい？せつかくノって来た所だったのにさ。」

むう、とか素で言うところが面白い。今まで周りにはいなかったタイプの人間だ。

「君の話は面白いんだけどね、ちよつと休憩しようよ。」

「ふん、軟弱だな。まあいい。ココの説明もしないといけないしな。続きは歩きながら話そうか。」

どちらにしる話すのか。本当に話すのが好きなんだな。

「分かった、じゃあ行こうか、栞」

すると彼女は一瞬ムツとした顔をしたが、直ぐに気を取り直して歩き出した。

「あのねえ、茉莉君、ナチュラルに呼びつけにしないで欲しいなあ。その前に、名前で呼ぶ事を許可した覚えも無いよ。」

うつん。そうか。そういうの意外と気にするタイプなんだな。覚え
ておこう。

「ああ、ごめんごめん、じゃあなんて呼べばいいかな。」

「栞様と呼びたまえ。」

「え、いや、それは」

「ふふふ、冗談だよ。栞でいいよ。」

あ、そう。栞でいいんだ。なかなかユニークな子だな。

「じゃあ、行きましようか、栞様」

「君ねえ、しまいには怒るよ。」

彼女はちよつと本気で怒ったように見える。うーん
、加減がまだよく分からないな。

「ごめんごめん。じゃあ、そろそろ本当に行こう。案内してくれる
んでしょ?。」

「ここが、図書館だ。」

最初に図書館に案内するあたり、この子の性格が伺える。

「ちなみに、ここを支配しているのは千賀子さんだ。」

うーん。何だろう。今変な単語が聞こえた気がするが。

「じゃあ、次に行きましょう」

「いやいやいやいや、ちょっと待って。色々疑問点があるんだが。」

「……聞くわ。」

「……とりあえずね、【支配】とかいう単語が聞こえた気がするんだけど。」

「言ったわね。」

「……」

「……」

「ええ！！そこで会話終わるの！！」

「そつよ？」

ええ！？何かしらんが疲れてきた。

「えつとね、いくつか聞いてもいいかな。」

「構わないわよ。」

さつきから何か口調が変わった気がするんだが、それには触れてもいいものだろうか。何を聞こうか軽く逡巡していると、急に栞がもじもじし始めた。

「千鶴子！！そろそろ止めてくれないか！！」

「えー、いいじゃない。この子新入りでしょ。たまには楽しませてよ。」

栞が急に一人芸を始めた。どうしようコレ。

「それはまた今度にしてくれ。」

「今度今度つて、あなたいつもそうやって逃げるじゃない。」

「そんな事はないさ。それよりそろそろ本当に止めてくれないか。ムズムズして変な感じなんだ。」

「え？どこが？」

「いいから！！」

「もう、分かったわ。じゃあまた今度ね。」

僕はしばらくの間あっけにとられていたが、

「嫌な所を見られてしまったね」

という栞の気まずそうな声で正気に戻った。

「ああ、君の意外な一面を見てよかった……………かな。」

「いや、違うんだ。だいたいまだ出会って一週間も経ってないのに、意外な一面も何もないだろう。」

「え、じゃあアレが素なの？」

「違うさ。嫌な風に勘違いするね、茉莉君。」

「ああじゃあアレだね。能力の【代償】に関係してるんだろ？」

「んん。あながち間違っではないんだけど、君はきつと二つ大きな勘違いをしているよ。」

僕の体が急にぐらりと傾いだ。ん？変だな。こんな所で眩暈か。

「一つはね、それは【代償】じゃなくて、【能力】の方だよ。」

「それはどう……………」

いう事だ、と続けようとしたが、口が上手く動かせない。というか、さっきから体が上手く動かせない。

「そしてもう一つはね、それは僕的能力じゃないって事だ。」

2話 図書館の支配者―02

「あら！！ねえ凄いわよ栞！！この体とっても動かし易いわ！！」

女口調で喋る男の声が聞こえる。誰だろう。

「いやあ、千鶴子。動かし易いとしても、それはさすがに戴けないな。」

「あら、そうかしら。逆になかなかイケると思わない？」

これは。…………うつ、頭が痛い。

「【逆に】って言ってる時点ですでに駄目だと思うよ。」

「ん、そうかしら？そうね。じゃあ、逆の逆にイケてると思わない？思うでしょ。」

「何だか自信满满だけど、まさかそれで何かの解決が得られるなんて、思っていないよね？」

「お、思ってる訳ないでしょ。」

そうか。少し分かってきた。これは。今喋ってる女口調の男は、僕だ。

「そういう時はね、言葉を詰まらせない事が肝要だよ。」

「そんな事より、どう？この子。えーと、名前はなんだったかしら？」

「茉莉君だよ。なかなかシャレてていい名前だね。」

そついう事なら、さっきの栞の不可解な行動は。そして今の僕の状態は。

「そうね。確かそんな名前だったわね。で、どうなの彼は？面白い？」

「まあ、それなりにね。……………それより、そろそろ体を動かせるんじゃないかい？茉莉君。」

栞に言われて、体を動かしてみる。指先がぴくりと動いたが、やはり体は自由に動かせなかった。

「駄目みたいだ。……………ん？」
喋る事が出来た。なるほど、まだ殆ど分からないが、千鶴子さんの能力を、少しだけ把握した。

「あら？もう声が出せるの？つまらないわねえ。栞にしろ、茉莉君、だったかしら？にしろ、抵抗力が高すぎるわよ？」

「というか、君の能力が弱って来てるんじゃないかい？千鶴子君。」

「んーそうかなあ？そんな感覚はないんだけどなあ。」

「まあ、【能力】についてはまだまだ分からない点の方が多いからね。」

「うわぁー!!!」

何だか背筋が非常にむずむずしてきた。痒いというか、何というか、

これは堪らない。

「ちよちよちよ、ちよつと千鶴子さん、何をどうしているのか分からないけど、そろそろ止めてくれ!!」

「えゝ、どうして?」

「か、体が!!ムズムズして!!」

僕がそういうと、急に千鶴子さんはテンションを上げて聞いてきた。

「え!?!何処が!?!体の何処が!?!」

横から眺めていた栞が、若干あきれた声で言う。

「千鶴子君。毎回思うんだが、その問いかけは明らかにセクハラだよ?」

「いいじゃない。この時の反応が私の楽しみなんだから。」

「……………楽しみか。楽しみとは、それはまた微妙な。」

「うわああああ!!ちよつとちよつと!!そんなのどうでもいいからもう止めてくれ!!」

「だ・か・らあ、体のど・こ・がムズムズするのか言ってよ。」

「君の能力っ!!なんだからっ!!そんなのっ!!分かってるっ!!だろっ!!背中だよっ!!背中っ!!だから早くっ!!」

「ああ、君は背中なのね、人によって違うのよ、ムズムズする部位

が。ちなみに栞は……………」

「千鶴子君！……！そろそろ出て行ってあげなよ！！」

「あらあら、……………そんな怖い顔しないで欲しいわ。それじゃ、また後でね、茉莉君。栞ちゃん。」

3話 図書館の支配者―03

「ふう。」

「落ち着いたかい？茉莉君？」

一時はどうなる事かと思ったが、千鶴子さんが出て行くと、背中のムズムズはすぐに引いていった。

「ああ。何とかね。」

「それで？どうする？千鶴子君には会っていくかい？今は図書館に
いるらしい。」

「いや、そうだな、うーん、出来れば、遠慮しておきたいね。」

「ふふつ、言うと思ったよ。でもまあ、最初の挨拶は重要だからね。
入ろうか、図書館に」

「……………まあそうだろうね。何となく、そんな気はしていたよ。」

「とういかな、本当は、図書館の紹介はもつと後に回そうと思って
たんだよ。私は。」

「ええ！？でも最初に図書館に来たじゃん。」

「じゃん、って君。……………だからね、図書館の場所の紹介だけして、
さつさと次にいこうとしていたんだよ。それなのに、君がぐずぐず
してるから。」

「ぐずぐずって……………」

「本当に勘弁して欲しいよ、お陰で千鶴子君だけじゃなく、^{えい}頼娃くんも紹介する必要が出来てしまったじゃないか。最後に回そうと思つてたのに。」

「えー君？アルファベットの？あだ名か何か？」

「いや、違うよ。【えい】だよ。え【い】。というか、ベッタベタなボケをするねえ、茉莉君。」

「いや、別にボケたつもりは無いんだけどね。頼娃つてのはどんな子なの。」

何処か沈んだ声で栞が答えた。

「……………【図書館の支配者】だよ」

どこかで聞いたような名前だな。というかそれは……………

「それは、千鶴子さんのあだ名じゃなかったっけ？」

「いや、それは違うよ。」

「いやでもさつき君が……………」

栞はちよつとだけ考え込んだが、直ぐに思い出したようにいった。

「ああ、アレはだから、千鶴子が勝手に私に言わせただよ。」

そういう事が。

「ふーん、で、頼娃つていうのはどんな人なの？」

栞はやはり少し沈んだ声で言った。

「……………だから、【図書館の支配者】だよ。」

何でさつきから声が沈んでるんだろうか。

「何かさつきから微妙に元気がない気がするけど。」

「うん。ちょっと私は頼娃君が苦手だから。」

それは余り理由としては成り立っていない気がするんだが。

「ふうん。それはまたどうして？」

「あつさり聞くんだね、君は。そういう事を。……………彼はね、ちょっと性格が特殊なんだよ。うーん、まあ、能力者っていうのは、どこかしら変な人が多いもの何だけだね。私と彼は、何というか……………そう、相性が悪いんだよ。相性が。」

「相性、ねえ。」

彼女が特殊な性格というなんて。どんな奴なんだろう、興味でてきたな。

「はあ、あんまり気が進まないけど、そろそろ入ろうか、図書館に。千鶴子君をあまり待たせてもいけないだろうしね。」

そこで名前を出さないあたり、本当に頼娃という人が、苦手なのかもしれない。

4話 図書館の支配者―04

およそ見た目からは想像もできない、ギギギという音を立てながら、
こんな表現を使うなんて、自分でもどうかと思うが
嫌
そうにドアは開いていった。

えええ、ここ本当に図書館か？

入って5秒と立っていないが、僕はこの一応【図書館】という呼称
があるらしい部屋から出て行きたくなってきた。

回れ右をして出て行こうとしたが、後ろは栞がしっかりと塞いでい
る。塞いでいるばかりか、

「ふふふ、どうしたんだい茉莉君。速く前に進みなまえよ。」

とか言いながら、ぐいぐいと後ろから押してくる。

もしかして楽しんでないか？コイツ。

やれやれ仕方ない。覚悟を決めて進むか。

「うおうっ！！」

一歩目を踏み出したその床が、ぐにゃんと沈みこんだ。

見た感じ、なんてことない普通の床にしか見えないのに、こんなにや
くを素足で踏み潰したような奇妙な感触とともに、僕の足は5cm
ばかり沈んだ。さらに力を込めれば、それに比例してその分沈みそ
うな感じだ。

「あはは。ほらほら速く進みなよ。」

「えーと、栞？何か床が沈むんだけど。」

「つくくく。うん。だから？」

栞は腹を抱えてくすぐすと笑っている。さっきまであんなに塞いでいた人間とは思えない。

「だから……とりあえず……そうだな。何で床沈むのかを聞いてもいい？」

「まあ、そのくらいは教えてあげようか。それは、【微妙に落とし穴】だよ。」

目じりの涙を拭いながら栞が言う。
「というか、そんなには面白くないでしょ、今の。栞の笑いのツボがよくわからない。」

「微妙に？」

「そう、微妙に。そのまま進んでいくと、ずぶりずぶりと沈んでいき、その深さは最終的に、落とし穴にかかった人間の、腰骨の上30cmにまで達する。」

「ん、んん？」

何だその反応に困る落とし穴は。

「だから、左右どちらかに避けて進むといい。その落とし穴が有効な範囲は見た目より相当狭いから。」

「……………もしかして、その何とか落とし穴を作るのが、その頼娃とかいう人の能力？」

それを聞いた栞が、あきれた顔で言う。

「そんな訳ないだろう。」

そんなちやっちい能力の人間は【此处】にはいないよ。それに、それだと【図書館の支配者】という名前に、欠片も関係ないじゃないか。

その【微妙に落とし穴】は、鞘香【さやか】君が、趣味で作ったものだよ。……………そうだな、君が混乱するといけないから、鞘香君の紹介は、実際に会った時にするとうかが。」

また新しい名前が出てきたか。何か少し疲れてきたなあ。

「うん……………まあ……………いいんだけどね。」

「だからほら、左右に避けて速く進みたまえ茉莉君。」

栞にそう急かされたものの、とても直ぐに進むつもりにもなれず、僕はあらためて辺りを見回した。

5話 奇妙な図書館―01

何度見ても、変な雰囲気にする部屋だなあ。

僕は一通り視線を巡らせた後、もう少し詳しく各部分を見ていく事にした。

まず、僕たちが入って来たドア部分。

入る時は何の変哲もないものだったが、こちら側から見ると、そのドアもまた、この怪しげな雰囲気を作るのに一役買っていた。

栞の体の横から覗く漆黒のドアは、この部屋から去るものを、威圧し、拒んでいるかのようだ。

さらに、5本の赤い縦筋が刻まれている。規則性のないその赤い線は、流れる血を想起させて、嫌な感じを受ける。

何より、開く時の音は、引き戸にもかかわらず、ギギギ、だから困ったものである。油を塗るなり何なりすればいいのに。

少し訝しげな目を向けてくる栞に、あいまいな笑みを返し、僕は視線を右に転じた。

「……………うーむ。」

何だろうかコレは。とても大きくて、白くて、細長い……………コレは？

見る。

眺める。

見る。

……………うーん。一向に何なのか分からない。

「それがよっぽど気になるみたいだね、茉莉君？」

「ん？うん。まあね。」

「それを見る時はね、もう少し広い視点で見るといい。」

「広い視点………ねえ。」

一歩二歩と後ろに下がる。ん？コレは。

「つつわぁー!!」

ガクン、と、またしても唐突に沈み込む僕の足。

「あはははは、もう!! 君はどれだけ私を笑わせたら気が済むんだい？」

やはり彼女の笑いのツボがよくわからない。

「うわわわわ。さ、さっきのより沈む気がするんだけど？」

「そうだねえ。ふふ。」

さらにさらに沈んでいく僕の足。

「ちょ、ちょっと不味くないかな、コレ。」

「ああ、不味いね。その【微妙に落とし穴】は、底がないから。」

マジで!?

「えええ!! ちょ、ちょっと槩!! 見てないで助けてよ!!」

「うふふふふ。どうしようかなあ。」

「えええ、んな、ちよつとっ！！助けてっ！！！」

「ふふふふ。あっはっはっはっはっは！！！」

栞がついに爆笑し始めた。時を同じくして、ゆるやかな下降も停止した。

うおおおお、恥ずかしい！！

僕の今までの人生で、一番恥ずかしいかもしれない。この年になって、本気で助けを求めてしまうとは。く、この恨み、晴らさでおくべきか。

そんな僕に、まだ笑いの収まらない栞が、話かけてきた。

「あは、まあそんなに睨まないでくれよ、茉莉君。私のアドバイスのお陰で、アレが何かは分かったんだろう？」

確かにそれはそうなのである。

僕はもやもやした気持ちを抱えたまま、もう一度壁を見上げた。

それは圧倒的な大きさの、骨だった。

それにしても、こんな大きさの動物がいただろうか？

いや……まさか……これは……

「これは………恐竜の………」

「そつだ。そしてこの骨は本物だよ。」

「本物！？何でこんな所に………」

「ま、それを気にしたら負けだ。」

うーん、何が？具体的にどの変が負けなのだろうか。

………というか、それは一旦置いておこう。それよりも気になる事がある。

むしろ、何故今まで気づかなかったのか不思議なくらいだ。

「何か、天井の高さが………いや、部屋の広さが………おかしくない？」

「気付いたか。面倒臭いからもう少し後で説明するつもりだったんだけどね。………これは、亜空【あくう】君の【能力】だよ。口で説明しても理解しづらいだろうから、詳しくは実際に会ってからしようか。」

6話 奇妙な図書館―02

巨大な骨の向かい側には、数え切れない程の本が、無造作に詰め込まれている。もしコレが無ければ、ここが図書館だと言われても、僕は最後まで納得しなかっただろう。

「さ、いい加減進もうか茉莉君。どうしても【微妙に落とし穴】が心配なら、私が先導してあげてもいいが。」

「いや、それはいいよ。じゃあ行こうか栞。」

後から馬鹿にされる気がするので、ここは意地でも僕が先に進む事にする。

およそ本を読む場所とは思えない明るさの通路　骨と本で囲まれたその微妙な空間は、もう通路というべきだろう　が、延々と続いている。

暗くなっていて、通路の終わりが見えない。断定するべきではないのだが、亜空とかいう人の【能力】はとても強そうだ。

慎重に辺りを　主に下のほうを　見回しながら、ゆっくりと進む。

「なかなか面白いものを見させてもらいました。」

「いええー!!」

急に横から声をかけられ、思わず変な声を出して飛び上がってしまった。

そんな僕を見てやはりくすくす笑いながら、栞は声の主に声をかける。

「穎娃君、何で君は、いつもそんな変な場所にいるんだい？」

「変な場所とは酷いですね。僕のこの神聖な図書館を」

「いや、そつちじゃないよ。……………やれやれ、分かっててボケる人が多いよなあ、【此处】には。」

「まあまあ、少しも面白みのない会話よりマシじゃないですか。会話というのは、楽しんでするべきだと僕は思いますよ。さて、何故この場所にいるのかという事です、今ちようどこの辺りの整頓をしていた所なんですよ。」

と言う黒マントの少年の周りは、他の場所よりもさらに煩雑として
いる。本当に掃除していたのか疑わしい所だが、初対面でそんな事を言うのもどうだろうと思い、もう少し二人の会話を静観する事にする。

「ふん。掃除、ねえ。むしろ散らかしているようにしか見えないね。」

「あはは。まあそうですね。千鶴子さんに言われて、最初はその気まんまんだったんですが、どんどん面白い本が出てくるんですよ、これが。」

「最初から掃除なんてするつもりなかったんだらう？」

「ふふ、そこら辺はご想像にお任せします。……………そんな事より、その、えーと、そうだ、茉莉さんを紹介して頂きたいのですが。」

「相変わらずいい記憶力をしているね。それとも、【能力】を使っ

たのかい？」

「いえいえ、コレは僕の純粋な記憶力です。そんなに易々と使ったりしませんよ。貴方も苦手でしょう？僕のこの【能力】。」

「まあね。……………茉莉君！！ほら、彼が顥娃君だよ。」

「よろしく、顥娃くん」

握手のために手を前に出しながら、顥娃君をもう一度見る。

それにしても黒いなあ。全体的に。

上下をスツとした黒のスーツ　いや、よく見ると学生服のようにも見えるな　で決め、その上から、これも黒のマントを羽織っている。

黒縁の眼鏡が　よっぱど黒が好きなのかな　よく似合っている。

一概には言えないが、身長から推察される年は、あきらかに十代前半だ。僕より3〜4才くらい下だろうか。

「こちらこそよろしく願います、茉莉さん。」

握手に応じながら、顥娃君がクリクリした瞳で覗きこんでくる。

「ふむふむ。ん？……………これは。」

何だ？……………なにか、心の底まで……………見透かされてるような……………

「栞さん、彼、結構カンがいいですね。臃げながら気付いているみたいですよ」

7話 頼娃の能力

「ふん。やっぱりね。ねえ茉莉君。能力を教えてもらうわけにはいかないのかなあ？君の能力、非常に興味深いよ。」

「……………」

僕がどう答えたものか迷っていると、すぐに栞が言葉を繋いだ。

「まあ無理にとは言わないけどね。私の事を信用できてからでいいよ。」

すると、その声を受けて頼娃君が栞に聞いた。

「栞さん、彼はどんな人なんでしょうか。」

「うーん、どんなと言われてもねえ。まだよく分からないなあ。悪い人では無さそうだけど。」

「そうですか。でも、これは。あまりに。いや……………気にしたら駄目ですね。僕の悪い癖です。」

「そうだよ。彼は悪い人じゃないよ。きつとね。」

僕に対する評価を、僕がいる前で平然と話している二人に、思わず口を挟む。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。何で急にそんな話をしてるんだ？」

僕がそういうと、無邪気な笑顔で頼娃君が答えた。

「僕的能力はですね、【人の想いを読む】事です。詳しい説明は

さすがに控えさせて頂きますが、大まかに言っとそんな感じです。」

そんな。そんな能力は。

反則ではないのか？

僕は思わず握手していた手を離れた。それを見た頼娃君は、笑顔を崩しはしなかったものの、少し傷ついたような表情を見せた。

「ああ、すみません。いつまでも手を。」

「あ、いや、違うんだ。その。」

あわてて言いつくろおうとする僕。しかし何を言えいいのか分からないので、しどろもどろになってしまう。

「いえ、いいんですよ。慣れてますから。」

「いや、違うんだ。今は反射的に……」

言えば言うほど気まずい雰囲気になりそうで、黙り込む僕。

頼娃君に聞こえないようにだろうか。小声で栞が僕に話しかけてくる。

「茉莉君。そういう事さ。最初にこの能力は少しキツいだろう？だから後に回そうと思ったのに。」

え、さつき君、頼娃君の事を、苦手って言ってなかった？等といえる雰囲気ではもちろんなく。

「お心遣いありがとうございます、栞さん。」

笑顔で栞に対応する頼娃君。今の声が聞こえていたのか。

「うむ。いや。ああ。すまないね。」

そして、めずらしく狼狽して応じる栞。

「
.....」
「
.....」
「
.....」

「あらあら、あなたたち三人して、どうしたのよ？葬式みたいな顔しちゃって。」

微妙に気まづくなってしまった空気を打ち破ったのは、自称【図書館の支配者】だった。

8話 千鶴子（再）登場

どこことなくほつとした風な声で、それでも皮肉を言う栞。

「やあ千鶴子君、君はいつもいつも元気だねえ」

「うふふ、そうよあ。元気なのが私のステータスだからね!!」

無意味にビシッとポーズを決める千鶴子さん。

青っぽいスカートに、上は黒のジャージを着ている。その隙間から覗く白い服は、制服だろうか。

外見からだけでは、【代償】を伺う事が出来ない。

が、一つ気になる点があるとすれば、ポーズを決めたせいで強調された、肘まで覆う真っ白な手袋だろう。

整った顔

かわいい、というよりは、美人という表現がしっくりくる

が、少しヒクヒクしている。きつと、この雰囲気は何とかしようと、気をきかせてくれたのだろう。

意識して少し明るめの声を出し、千鶴子さんに挨拶する。

「貴方が千鶴子さんですね。どうぞよろしく。」

「こちらこそよろしく、茉莉君。……………ふふ。君の体はな

かなか良かったわよ。また今度、是非【貸して】ちょうだいね。」

「はは。まあ、気が向いたら。」

「まあ、気が向かなくても貸してもらう事は出来るんだけど、そこは貴方の意思を尊重するわ。同意があった方が色々こちらとしてもいいしね。」

なにげに、この人の能力は、非常におそろしいな。

【体の自由を奪われる】事に比べたら、頼娃君の心を読むくらい、大したことないんじゃないか……………と、そんな風に思えた。

「駄目だよ茉莉君、ソコできっちり断っておかないから、増長するんだよ。」

朶も会話に加わってきた。

というか、それを君に言われる筋合いは無いと思うが。

「意外と速かったですね、千鶴子さん。例の本は見つかりましたか？」

と頼娃君が聞くと、少し残念そうな顔で、千鶴さんが答えた。

「ごめんね。まだ見つかってないの。」

「いえ、いいんです。もともと、あるかどうか分からないものですから。」

「そう？まあ此处を探索するの結構面白いから、今度はあっちの方を探してみるよ。」

「そうですか？それは助かります。」

「いいっていいって。じゃ、そういう事で。また会いましょうお二人さん。」

そう言って、救世主は颯爽と去っていった。

9話 図書館の支配者―05

「さあ茉莉君、私達もそろそろ行くでしょうか。」

千鶴子さんが行ってしまうと、千鶴子がその声をかけて来た。

頼娃君の事もあり、なんて答えていいのか迷った僕は、結局あいまいに頷いた。

そんな僕を見て、黒衣の少年は朗らかに言う。

「先ほどの事は本当に気にしていませんよ。他にも見て回る場所があるんでしょう？どうぞ、僕の事は気にせず行って下さい。」

そういう言い方をされると、こちらとしても困ってしまう。

逡巡する僕に、栞は速く行こうと急かす。さっきの事はあまり気にしていないようだ。本人が行っている通り、ああいう事はよくある事なのだろうか。それはそれで悲しい気がするが。

「ほら、いつまでもじもじしてるんだい？置いていくよ？」
すでにドアを開けて廊下に立っている栞が僕を呼んでいる。

「ほら、栞さんが呼んでますよ？」

やはり笑顔で頼娃君が言う。

何だかとても居た堪れない気分になって、無駄を承知で僕は言う事にした。

「ねえ、頼娃君。」

「はい、何でしょうか。」

「君に言っても、無駄なのかもしれないけど、やっぱり、言う事にするよ。」

何度見ても綺麗な瞳だ。【人の想いが見える】というその能力で、どうやったらこんな瞳が維持できるのか。

その吸い込まれそうな瞳を見ながら、僕は言った。

「穎娃君、僕は確かに最初、君のその能力を怖いと思ったけど、それは、最初の衝撃が強かったただで、それは違うんだよ。僕は、君のその能力が、確かに恐ろしい。でも、君自身は怖くないっていうか。……………その。君がその能力を悪い風に使うようには見えないんだ。……………だから。……………その……………」

結局しどろもどろになってしまった。

「ありがとうございます。そういう事を、言ってくれる人は珍しいので、本当に嬉しいです。皆さん、思っても口には出さない方が多いので。どうせ僕には何を言っても無駄だと思っんでしょうか。」
そう言う穎娃君の顔が、始めて少し曇って見えた。
僕には、やはり彼が悪い奴には思えなかった。

「ああ、だから僕は、君の事は怖くないよ。」

僕がそう言つと、しばらく俯いて何かを考えてから、言った。

「僕を信頼してくれたお礼に お礼といつては何ですが

、少し僕の能力について、付け加えておきます。確かに僕は、【人の想いを見る】事が出来ますが、そんなにはつきりと見える訳ではありません。鍛えるともっとはつきり見えるのかもしれませんが、少なくとも今は、その人が怒っているとか、悲しんでいるとか、そういう事が見えるだけです。」

10話 茉莉と栞 02

廊下に出ると、栞がうんざりした顔で待っていた。

「まったく君は、女の子をどれだけ待たせたら気が済むんだい？」

「いやいや、そんなには待っていないでしょ。せいぜい5・6分くらいだよ。」

「……………君は、……………本当に……………」

僕がそう言つと、栞は何だか本気で怒ってしまったようだった。というよりは、呆れたように見える。

ぶつぶつとその後何かをつぶやいていたが、直ぐに気を取り直したように、顔を上げて聞いてきた。

「で？ 穎娃君と何を話していたんだい？」

出来れば言いたくなかった。恥ずかしいと言つのもあるが、能力は話さない方がいい気が、何となくしたからだ。

「……………言わないといけないかな？」

「……………」

無言で睨んでくる栞。何だか分からないが、コレ以上怒らせても仕方ないので、さっきの事をかいつまんで 穎娃の能力の事など、伏せるべきと判断した所は伏せた上で、 話す事にした。

話が進むにつれ、栞の顔は暗くなっていった。そして話終えた僕に、諭すように言う。

「いいかい茉莉君。彼をあまり信用するな。」

「彼って、頼娃君かい？何でさ。あんなにいい子を。」

僕がそう言つと、栞はやれやれといった感じで首を振り、

「忠告はしたからね、後は君の勝手だよ。」

とつぶやくように言つた。

自分が嫌っているからといって、そのあまりに酷い言い分に、僕は少し栞に憤りを感じた。

「さあ、次はここにしようか。では、入りたまえ。」

榊が示した扉のドアには、【研究所兼探偵事務所兼占い所】と手書きで、書かれた紙が張られていた。うーむ、汚い字だな。それにしてもいろいろ兼ねすぎだな、これは。

……………とりあえず、ノックでもしてみようかな。

コツコツと音が響く。

3秒ほどのタイムラグの後、

「開いてますわ。どうぞ、入ってらっしゃい。」
という女性の声が聞こえた。

「っ痛!!」

声の通りに、ドアを開こうと、取っ手に手をかけると、僕の手に電流が流れた。

「あら、すまないわね。その仕掛けの事をすっかり忘れてましたわ。」

と、情性で開いたドアの隙間から見える女の人が出た。いかにも【占い師】という格好をしている。黒のローブに、顔の下半分はベールに覆われている。今時、こんな分かりやすい服装の占い師がいるものなのか?……………いるんだろうなあ、現に目の前にもいるし。

それよりさっきの電気は何だったんだ?確か仕掛けとか言っていたが。

悩んでも仕方ないので、答えを知っていそうな目の前の占い師に聞いてみる事にした。

「始めまして、茉莉といいます。貴方は？」

「私は【占い師】の、千寿【せんじゅ】よ。以後お見知りおきを、ミスター茉莉。」

ミスター？えらく上品な喋り方の人だな。

「こらこら、【自称】が抜けているよ、千寿君。」

と、後ろから栞が突っ込む。さすがに慣れて来たけど、君って、微妙に口が悪いよね、栞。

「あら、自称ではありませんわ。私は立派な占い師ですわよ。」
売り言葉に買い言葉、のような感じで応じる千寿さん。

「そうかい。それにしても君の占いが当たった所を見た事がないんだけどね。」

「まあ！！そこに直りなさい栞さん！！ちょっと説教が必要なようですわね！！」

次第にヒートしていく二人を慌てて止めに入る僕。こっちは聞いたことがあるのだ

「ま、まあまあ。ちょっと栞も言いすぎだよ。」

「ふん。私は言いすぎた事なんて、今まで一度もないよ？いつだって本当の事しか言っていないからね。」

「ほらそれだよ。たとえそうだとしても、そんな言い方をしなくてもいいじゃないか。」

僕がそう言つと、栞はふん、と言って黙つた。

あらためて千寿さんに向き合つて、聞いたかつた事を聞いてみる事にする。

「このドアの電流、さつき仕掛け、とか言つてましたが、コレは？」

「それはね、鞘香【さやか】君が作った【微妙に静電気発生装置】だよ。」

鞘香つて……………ああ、例の、【微妙に落とし穴】を作つた子か。ロクなもの作らないなあ、その子。

「とりあえず、入る事をお勧めしますわ。」
と、部屋の中の人物が言つた。

2話 混沌の部屋―01

部屋の中は ここは、やはりと言っておくべきだろう
混沌としていた。

ドアの張り紙に書いてあった三つの職業に使うのであろう道具が、
何の規則性もなく散乱していた。
せめてそれぞれのスペースにわけるとかさあ……………色々方法がある
だろうに。

口調からはお嬢様という印象を受けた千寿さんだが、この部屋の汚
さは気にならないのだろうか。

「その辺に座るといいですよ。」

と、とても座るスペースのなさそうな場所を指さしながら千寿さん
気にならないらしい。……………やれやれ。

仕方なく隙間を見つけて座る。

栞は遠慮なく足でその辺のものを払って座ったようだ。

「ん？君一人かい、千寿君。」

座って一旦落ち着くと、栞が千寿に聞いた。

「ええ。そうですね。……………そういえば珍しい事ですね。どこ
に行ったのかは知りませんわ。」

「ああ、それは構わない。どうせ直ぐに帰って来るんだろう？待た
せてもらうさ。」

「ええ、それは、私も別に構いませんわ。いつ帰って来るかの保障
はしませんわよ。」

「……………そうか、ふむ。では、30分ほど待っても帰って来なかったら、他の2名の紹介は後回しにするよ。それで構わないよね、茉莉君。」

構わないも何も、こちらは始めからその件については栞に任せきっているのだ。

僕は、黙って頷いておいた。

「ふむ。ねえ千寿君、ちょっと口が寂しいから、コーヒーでも入れてくれないかな？」

またそうやって刺激するような事を。実は栞ってドSなのか？いかにもプライドが高そうな千寿さんの事だ、これはまた人波来るなあ、と僕は密かに溜息を吐きつつ身構えた。

「なっ！！なっ！！なんて無礼な！！自分で入れればいいでしょう！！」

無礼な、っていうのもどうなのかなあ、と思ったけど、もちろんそんな事は口に出さず、僕は変わりに

「まあまあ、変わりに僕が淹れるよ。コーヒーマーカーとか有るのかな？」

と千寿さんに聞いた。

3話 混沌の部屋―02

「コーヒーマーカーなら、確かその椅子の下に……………あら？
見当たりませんかね。……………なら多分こちらの【微妙に鍋
型電子レンジの】中に……………ああ、ありましたわ。これですわ
ミスター茉莉。」

手渡される。……………なんでそんな所にあるんだろう。とい
うか、場所を把握しているのが凄い。
それにしても、【微妙に鍋型電子レンジ】か。鍋型である意味がま
ったく分らない。

「水場は、廊下に出て左に15メートル程行った所にありますわ。
ついでに私の分もお願いしますわね。」

「じゃ、行つてきますね。」

なんの躊躇いもなく、客人に淹れさせる辺り大物だな、この人も。
さつきから損な役回りだなあ、と内心ぼやきながらドアを開ける。

「あ、ちよつと茉莉君。」

「っ痛う」

忘れていた。そういえばこのトラップがあつた。【微妙に静電気発
生装置】だったか。

「……………せつかく呼び止めてあげたのに。」
不満そうな声を出す栞。

呼び止めてくれるのは有り難いが、明らかに今のタイミングはおか

しい気がする。

明らかに開けてから声を掛けたよね、君。

「ふむ。まあ君の痛がる顔を眺めるのも、それはそれでいいのだが、さすがに何だか可哀想だから教えてあげよう。」

やはりドSか、コイツ。

恐らく恨みがましい目をしているだろう僕に、栞は落ち着きはらって言った。

「そのドアは、【利き手と逆の手で開ければ電流は流れない】」

何だそれ。僕は恐る恐る左手でドアを開けてみた。
なるほど、電流は流れなかった。

「……………これってさ。どうやって利き手を判断してるのかな。」

「さあ、知らないね。私はそんな事には興味ないから。……………どうしても知りたいなら、鞘香君に直接聞くといい。」

ふむ。気が向いたら聞いてみるか。僕は結構興味があるし。

気を取り直して、取りあえずこのコーヒーマーカ―を洗いに行く事にした。

4話 茉莉の回想―01

廊下を歩く。

抱えたコーヒーマーカーがカチャカチャと音を立てる。

左右を白い壁で挟まれた廊下は、病院を想起させる。

左側に規則的に並んだ窓から、優しい光が差し込んでいる。

その光に、心が癒される気がした。

……病院………か。

歩きながら、僕は昔の事を思い出していた。

その白い部屋の中には、三人の男がいた。

一人は、僕。

一人は、僕の主治医。

そして一人は、この病院の院長。

「どうですか？」

「ええ、経過は良好です。【能力の抑制】。最初は不安でしたが、
どうやら上手くいきそうですね。」

「そうですか。それは結構な事です。このまま上手くいけば、他の
患者にも応用していきましょう。」

と、そこで言葉を切り、院長は僕に視線を向けて言葉を続ける。

「どうですか茉莉君。気分の方は。」

睨みつける。

後ろ手に縛られた腕が、ギシギシときしむ。余り痛みは感じなかった。

噛まされた猿轡からは、唸り声しか出す事ができない。

「ふふふ。怖い怖い。」

「院長、あまり刺激なされないように。」

「ああ、これはすみません。彼をからかうのが面白くて、ついつい………ね。」

「気持ちは分かりますが院長、そろそろ薬を投与する時間ですので。」

「そうですね、では、よろしく願いますよ。」

「ええ、お任せ下さい、院長。この研究が上手くいった暁には、お願いしますよ?」

「ええ、分かっています。」

その後交わされた、二人の笑い声が、酷く酷く、耳障りだった。

5話 発明家と探偵の登場

「うをを！！ちよつとちよつと君！！それを水で洗ったら駄目だよ！！」

という悲鳴じみた女性の声で、僕は現実引き戻された。

いつの間にか僕は、持って来たコーヒーマーカーを、水道で洗う構えに入っていた。

……む。駄目だ駄目だ。また無意識の内に行動してしまった。気を取り直して、このコーヒーマーカーを洗うとするか。

「うええ！！ちよつとちよつと君！！だから駄目だって！！」

誰だろう。さつきから騒がしいなあ。

「……………」

とつと洗ってしまおう。

「えええ！！話を聞かない人がいるよ！！どうしよう英知【えいち】君！！ああ！！ああ！！だから駄目なんだ！！って！！」

騒がしい声の女の子が、今にも水が滴ろうとしたコーヒーマーカーを、僕から無理矢理引き剥がした。

「……………っ何を！！」

「ちよつと君ねえ！！人の話を聞かないにも程があるんじゃないかな！？」

目の前で、とても憤慨している女の子がいた。

「あ、ああ、ごめん。」

何故だろう。何故さつき僕は、この女の子の言った事を無視したんだろう。確か、コーヒーマーカーを水に漬けるなとか何とか。

「そんなにピリピリするなって鞘香。その男、見た事ない顔だぜ？
っていう事はアレだよ。彼は例の【転校生君】だ。ん？あれ？転校
生ってのはおかしいか。でもまあ、使いやすい記号だから、この際
使っちゃまう事にするか。っていう事はアレだよ。鞘香の【代償】で、
聞こえにくく成ってたって事だろ。」

コーヒーマーカーを大事そうに抱えた女の子の後ろにいた、どこか
斜に構えた男が口を挟んだ。僕が呆氣に取られていると、さらにそ
の男は言葉を連ねる。

「っていう事はアレだよ、きつと聞こえていたけど気付かなかった
ただだぜ。っていう事は……………」

っていう事はアレだよというのはこの男の口癖だろうか。だとすれ
ば、何というか、鬱陶しい口癖だな。恍惚として、何か自分の世界
に入ってしまったているように見える。放っておけばいつまでも喋り
続けそうなその男を取りあえず無視して、鞘香らしき女の子に離し
かけた。

6話 【自称】発明家

「始めまして、茉莉と言います。貴方は、鞘香さんですか。」

いかにも疑わしげな目をして、睨まれる。

「……………そうだけど。貴方さあ。さっきこの【微妙にコーヒーマーカー型通信装置】を壊そうとしたでしょ。略して【びこつう】を！！」

……………今度は通信装置か。色々つつこみどころがありすぎて困るなあ。

コーヒーマーカー型にする意味は何なのか？とか、

通信装置なのに、その大きさと持ち運びに不便なのでは？とか、

何でいちいち作ったものに【微妙に】とかつけるのか？とか、

僕が言うのも違うと思うが、後ろの男を無視していてもいいのか？とか、

そもそもそれをコーヒーマーカーと最初に言ったのは、千寿さんですよ？とか、

何で君の声がさっき僕には聞こえなかったのか？とか、

他にも考え出したらキリがない程の疑問点があるが、差し当たり一番気になった事を聞いてみる事にした。

「あの、君、その格好は何？」

「貴方に答える義理は無いと思うんだけどな。」
と、熊が言う。

いや、熊の着ぐるみを着た女の子が言う。

いやまあ、答えなくてもいいんですけども。……………できれば答

えて欲しかったなあ。

仕方ない。それなら個人的に二番目に気になっていた事を聞いてみよう。

「なら、その、びこ……………えっと」

「【びこつう】？」

「そう、その【びこつう】もそうなんだけど、何でいちいち頭に【微妙に】って付いてるの？」

「……………貴方に答える義理は無いと思うんだけどな。」

駄目か。なら、もう一つ。

「【微妙に静電気発生装置】は、どうやって利き手を判断してるんだい？」

「あ、あなたアレ掛かったんですか！？」

急に嬉しそうな顔で聞いてくる（おそらく）鞘香さん。

掛かったっていうか、アレは始めは誰でも掛かるんじゃないかなあ。何の障害もない状態で、利き手じゃない方の手でドアを開ける人は、とても少ないと思うんだが。

「うん、掛かったよ。それで、どうやって利き手を？」

「……………貴方に答える義理は無いと思うんだけどな。」

駄目だ。文字通り話にならない。

7話 【自称】探偵

「おいおいお前ら！！ちょっと酷くないかい？何で無視するかなあ。」
一人で延々と喋っていた男が、やっと気付いたのか、喋りながら近付いて来た。

「やー！！よろしく！！茉莉、だったね確か。」

「はあ、どうも、よろしく。貴方は？」

「俺か？俺は【探偵】の英知【えいち】だ！！いい名前だろう？そう思うよな、お前も！！ほら握手しようぜ、握手。」

「あ、はあ。そうですね。いい名前だと……思います。」

握手を交わす。何だか軽そうな人なあ。それにいきなり呼びつけか。同級生くらいに見えるんだが。まあそんな事は気にしないが。

「だろあ？気に入ってるんだよ。この名前。お前、結構話せる奴みたいだな。」

決めるのはやつ！！。悪い人間に簡単に騙されそうな人だ。この分だと、どうせこの男の【探偵】というのも【自称】なんだろう。

「ほら、鞘香も挨拶しろって！！」

すると、熊が仕方なさそうに話始めた。
「……………鞘香です。よろしく。」

「よろしく。」

「んん？何かあったのかお前ら。ほら握手しろよ握手。」

英知に言われて、いかにも嫌そうに手を差し出してくる鞘香さん。少々迷ったが、結局握手を交わした。

「あれ、そういえば、貴方、自己紹介する前から私の名前を呼んでなかった？」

ええ、今さら！？もう少し早いタイミングで気付くべきだろううそれは。

「あ、ああ、それは、その君の【微妙に】シリーズに何回も引っかけたからね、僕。その度に君の名前を聞いていたから、いつの間にか覚えてしまっていたみたいで。」

「をを！！掛かったんだ、君！！あのちやちなトラップに。それも何回も！？何だか嬉しいな。」

ちやち、かな？普通掛かると思っただけど。……………それとも、ひょっとして、普通は掛からないのか？

「あああ！！そうなの？君は掛かる人啊。そっかそっか。……………」

……………あらためてよろしく、【発明家】の鞘香です。」

僕のトラップに掛かる宣言がよっぽど嬉しかったらしい。急に上機嫌になった熊は、改めて自己紹介してくれた。

8話 英知と茉莉 101

「ところで茉莉、お前こんな所で何をやっていたんだ？」
そう聞いて来る英知。

「ああ、コーヒーをね、淹れようと思ってたんだ。」

「そっかそっか。でもお前がコーヒーメーカーとってたのは、通信装置だぜ？もう缶コーヒーでいいんじゃない？すぐソコに自販機あるからそれですましちまえよ。ああもしかして場所分らないか？だったら俺が案内してやるよ。ほら行こうぜ。」

「そうだな。何も持っていないよりはいいか。」

「ああ、助かるよ。なら連れて行ってくれ、英知。」

「お、いいねえ。呼びつけか。ますます気が合いそうな奴だ。」

「を、話はまとまった？私は先に部屋に行ってるから。」
と、熊。

「ああ、オッケーだ。それじゃ行こうぜ茉莉。」

「ところでさ、さっき彼女の声が、聞こえていた筈の音が聞こえなかったんだけど。」

「ああ、それか。それはな」
そこで少し躊躇う英知。

「……………まあいいよなあ話しても
ないし。いいよな？ うん、いい筈だ。」
鞘香は能力隠してる訳でも

自問自答の結果、教えてもらえる事になったようだ。

「あんな、彼女の能力は
まあ多分こっちはお前もある
程度想像ついてるんだろ？」
【物を創る】事だ。」

それは僕も何となく分かっていた。知りたいのは

「それで【代償】だ、彼女の代償は、能力を使えば使う程、【存在感が薄くなる】事だ。最初は声が聞こえなかったのはその為だろう。その証拠に、一度認識した後は、普通に会話出来たたる？」

なるほどね。だいたい把握できた。

「……さらに詳しい事を聞きたいなら、直接鞘香に聞いてくれ。……さすがに気が咎めて来ちまった。やっぱり許可無く能力の事を話すべきじゃないな。」

「いや、十分だよ。ありがとう、英知。」

「あ？ああ、いいっていいって。お、ほら着いたぜ。さっさと買った。全部で4本か？半分出してやるよ。」

「いや、5本だ。栞がいる。いや、それはいいよ、僕が全部出す。さすがに悪いし。」

「ああ、栞がいるのか。いいって、遠慮するな。俺が二本分出してやる。ほら、360円。」

強引に押し付けてくる。始めの印象からは想像もつかないくらい、いい人だ。第一印象を簡単に覆す人を、僕は始めて見た。

「じゃ、ありがたく使わせてもらっよ。」

9話 束の間のコーヒープレイク

左手で慎重に扉を開く。

「あつはつは。何びくびくしてんだよ、茉莉？ああそうか、お前これにかかったんだっけ？だけどそんなにびくびくする程には、痛くなかっただろ？」

「いや、びくびくとか言わないでくれよ。それも全く無いとは言わないけど、単純に開けにくいんだよ、このドア。左手だとさ。」
「いいながら、左側にノブの有る、手前に開く造りのドアを開く。右手には缶を3つ抱えていたので尚更開けにくかった。」

「やれやれ、やっと来たか、茉莉君。缶コーヒーにしたんだってねほら、それでも構わないから、迅速に配ってくれたまえ。」

辛辣な口調で言い放つ栞。ねぎらいの言葉の一つも無い。頼娃君の時の事を、まだ引きずっているのかもしれない。

「や！何だか久しぶりって感じだな、栞！！そして相変わらず口が悪いなあ、お前。」

「おお、英知君か。久しぶりと感じるのは、きつと君たち三人が引き籠もっているせいだろう。」

「ひでえな。まあ確かに、前から読みたかった長編推理小説が偶然にも手に入ったから、それを読む為に3日間、食事や排泄の時以外ずっと本を読んでいたからな。その罵倒も甘んじて受けるさ。いやでもアレめっちゃめっちゃ面白かったんだって。なんたって」

「そうか、そんなに面白かったのなら、また今度貸してくれたまえ。」

だから、不要なネタバレは御免こうむるよ。」

「犯人の妹の親友があそこであくるとは、と、そうか。それはいい。是非実際に読んでみてくれ。」

また自分の世界に入りそうになった英知を、無理矢理止めた栞は、ほら今のうちに速く配れと言いたげに、視線を流した。

僕は頷くと、近くの椅子に座っていた千寿に缶コーヒーを差し出した。

「む、ごくろう。……おっと、違いましたわ。どうもありがとう、ミスター茉莉。」

千寿は、どこか高貴な所の生まれなのかもしれない。

続いて、少し奥の椅子に座る鞘香に手渡す。やはりまだ熊のきぐるみを着ていた。

「をを、ありがとう。私の分も忘れずに買ってくれたんだね。」

彼女の能力を勝手に聞いてしまった僕としては、なかなか重い言葉だった。駄目だ駄目だ。動揺しては。

英知が栞にすでに缶を渡していたので、自動的に、最後の缶は自分で飲む事にした。

缶コーヒーを飲み、一息ついた所で、栞が言った。

「うむ。期せずして自己紹介が済んだようだな。ではそろそろおいとまして次に行こうか。茉莉君。」

僕たちは、別れの挨拶を交わして、部屋を後にした。

10話 茉莉と琴―03

「む。そろそろお腹が空いたな。よし、次は食堂に行くのでしょうか。茉莉君。」

僕としても特に異論はないので、素直に頷く。

コツコツと、廊下に二人分の足音が響く。

建物の広さからは考えられない程に閑散とした独特な雰囲気にも、だんだん慣れてきた。

ここでの食事は、どういうシステムになっているのかは分からないが、注文した料理が、しばらく待つと、完成した状態で自動で出てくる。

誰かの【能力】を使用しているのか、機械に作らせているのか、詳細は分からない。

そしてそれが関係しているのかどうなのか、【食堂】だけやけに離れた場所にある。

コツコツ

この建物は、全体的に白を基調としている。

その白は、どこか病院の壁を想起させて、僕のを精神をザワザワさせる。

今日は様々な人にあつたせいで、僕の精神は、少し不安定になってしまっているようだ。

コツコツ

速く終わって欲しい。

この単調な景色の繰り返し。

あの嫌な薬の香りを、いやがおうにも思い出してしまふ。

コツコツ

食堂が無駄に遠いと、いつも思う。

そう、無駄に遠い。

無駄に。無駄な……………無駄な。

無駄な。僕は。無駄な。

コツ、カツウン

栞が豪快にこけた。おいおい、何もない廊下でこけるなよ。

……………有り難かった。

危うく。また。僕は。

顔をしとどに打ったらしい栞は、額を抑えながら立ち上がり、微妙に恥ずかしそうな顔をして言った。

「む、茉莉君。今のは今すぐ記憶から抹消してくれたまえ。」

顔は恥ずかしそうだが、声は落ち着き払っている。

もしかして、僕の様子を見て、わざとこけたのだろうか。

いや、それはさすがに考えすぎだろう。僕を正気に戻すだけなら、こける必要は全くない。

……………のか？さっきの僕は、正常に声が聞こえていたか？

彼女が今こけたのは、天然なのか、恣意的なのか。

どちらでもいい。

そんなのはどちらでもいい。

僕は今、彼女に感謝している。

僕は、栞に笑いかけ、今の事を記憶から抹消する事を誓った。

11話 茉莉と栞 04

ちゅるる、とスパゲッティをすすり上げ、ふと思い出したように栞が聞いてきた。

「そういえば茉莉君。ここに来て確か今日で一週間だけど、ここに来てからこっち……………誰と誰に会った事があるんだい？」

それに対し、僕は切り分けたハンバーグを口に運んだ後答えた。

「……………それは皮肉かい？栞。ここに来てからの時間のほとんどを、ベッドの上で過ごした僕に対する。」

フォークで貝を刺し、それを見つめながら応じる栞。

「いや。別にそんなつもりじゃなかったんだが。そう聞こえたのなら謝るよ。」

にんじんとパセリを、一度に口に運ぶ。

「まあそうか。というか君も知ってた筈だから、そんな事聞かないか。」

水をごくりと嚥下し、栞が応じる。

「ああ、君の回復力には驚かされるよ。……………さっき聞いたのは、そういう意味じゃなくてね、だから、誰か君の部屋に訪ねて来た人はいないか、と聞きたかったんだ。」

オレンジジュースをずずず、と飲み干し、

「……………いや、君だけだ。」

と、少し考えて答える。

栞は、食事に使用したフォークを、ナプキンで拭いている。

鈍い光を放つソレの角度を変え、映り込む蛍光灯の光を眺めながら、
栞が言う。

「ふむ。まあ【此处】の人間は、基本的に自分の縄張りを大事にするからね。それも仕方ない、か。……………という事は、だ。」

そこで一度話を止め、コツ、と綺麗になったフォークを机に置いて
栞が言った。

「君が会ってない人間は、あと3人だね。今日中に全員回ってしま
おうか。」

言いながら、栞は僕の目を覗き込んでくる。大丈夫かい？と聞かれ
ているような気がした。

4章 空間を創る者 1話―再来

「ふむ。次はどこに行こうかな。どこか希望はあるかい？茉莉君。」

希望と言われても困る。

一週間前から建物の中に居たとはいえ、感覚的には、今日始めて見て周る所なのだ。

「……………どういつ部屋があるのかな？朶。」

「む。そうか。失礼した。つい失念していた。……………つつ
！！」

何の脈絡も無く、急に朶がピクリとした。

「ちょ、朶。どうしたんだ？」

僕が聞くと、朶はすぐに顔を上げて言った。

「あら、何でもないよ。茉莉君。」

「……………【あら】？」
もしかして。

「どうしたんですか？茉莉君。」

「……………とりあえず、騙すつもりなら、口調をもう少しど
うにかした方がいいと思うんだけど。」

「え、え？な、何のことかしら？……………あ、いや、えーと、何の

事かな茉莉君。」

「え、まさか今さら取り繕えとでも？」

見るからにおろおろしているが、それでも騙そうとする栞。もとい千鶴子さん。

「と、取り繕うって何の事かな？……………何の事だい？」

もはや始めから騙す気など無いのではないかと、疑ってしまう。

「いや、とにかく。……………もうバレてますよ？千鶴子さん。」

「何のことかしら？」

彼女がそう言ったあと、明らかに違う口調で、さらに言葉を重ねる栞。

「ほら、もうバレているぞ。……………だから、そろそろ、止めてくれ。」

「……………もうー！何でばれるのかしら？」

本気で言っているのだろうか？

「……………何でも何も。」

思わず、少しあきれ口調でつぶやいてしまった。

「あら！？理由がわかるの！？茉莉君！！今後のためにも、是非教えて欲しいわ！！」

本気でわかってないのか。

「いやだから……………」

……………待てよ。

……………言わない方がよさそうな気がする。

「……………すみません。やっぱり分かりません。勘違いでした。」

「そう？……………むー、何かみんな似たような反応するのよね、この質問をするとき。」

そうか。考える事はみんな一緒、か。

「ち、千鶴子くん。そろそろ、っ！！」

うーむ、前の時は急だったから分からなかったけど、落ち着いてみると滑稽だなあ、これ。

「ちょっと待って、栞。まだ要件を伝えてないし。」

「っ！！覚えてっ！！おきたまえっ。千鶴子君っ！！」

「あはは。怖い怖い。じゃ、手短に話すわよ、茉莉君。次に行く場所が決まってるんじゃないんなら、是非私の部屋に来るといいわ。歓迎するわよ。」

全然怖がってなさそうに言う、千鶴子さん。

「……………っ！！っ！！」

対照的に、もはや声を出すのも辛そうな栞。

「……………わかったから、取りあえず出て行ってあげたら？……………あとから怖そうだよ？」

「そう？じゃ、待ってるからね、茉莉君。」

彼女がそう言うと、栞の体がくにやりと崩れる。

慌てて駆け寄ると、栞は下を向いたまま、くっくく、と笑っていた。

怖い。怖いです栞さん。

「彼女には少しお灸を据える必要があるな。茉莉君！！次は予定を変更して、【映写室】へ行こうか！！」

2話 マシンガンターカー 01

「着いたよ、茉莉君。」

ケロッとした声で栞が言った。

「え、あれ？君、怒ってたんじゃないの？」

「……………誰に？」

「え？……………だから……………千鶴子さんに。」

「千鶴子君に？私が？何で？」

え？本気で怒ってないのか？

「いや……………ついさっき。」

栞はしばらく考えた後、言った。

「……………ああ。私があれぐらいで怒る訳ないじゃないか。
演技だよ、茉莉君。」

演技！？演技には見えなかったけど……………彼女がそういう
のなら、そうなのか？。

「ちょっとどいてくれないかなああなた達、邪魔になっっているって分
からないかなあ、本当にもう、あ実はわかってやってるね、酷い
なあそうやっていつもみんな私にいじわるするんだね、あれそうい
えば見たこと無いねあなた。けどそうやって初対面なのに……………」

.....また、.....変なのが。

.....いや、訂正。また個性的な人物が現れた。

ここまでの経験から考えると、【此处】に居る人間は、それぞれに、かなり強い【能力】を有しているようだ。

【能力】が強いという事は、それだけ何かを【代償】として差し出しているという事だ。

まだこの人の【代償】も分かっていないのに、変な人、というのは失礼にあたるだろう。

凄いい勢いで喋り続ける目の前の女性。文節の区切りが少し分かりにくい。

手を振り、足を振り、頭を振り。

.....そんなに力いっぱい喋らなくても。何だか、見ているこっちが疲れてくる。

綺麗な金髪が、めちやくちやに揺れている。

青みがかった瞳が少々釣りあがっていて、どこか猫を連想させた。

3話 マシンガントーカー 02

..... ハーフか？それにしては、流暢に日本語を話す。

「少し落ち着きたまえ、フォリス【ふおりす】君。」

「私は落ち着いているわ、あなた達がそうやって私の進路をふさいでいるからこうやって注意しているだけよ、だからすぐにそこをどいて欲しいなあと言っているのよ私は、ああそれと私の質問に答えなさいよそのあなた、ほら黙ってないで、ちよつと無視しないでよどうしてそうやってみんな.....」

「やれやれ。..... 茉莉君。彼女はフォリス君。ほら、挨拶したまえ。」

「あ、よろしく、僕は.....」

「僕は？あなた自分の事を僕っていうのね。あれね、【図書館の支配者】君と同じね。あの子って何だかちよつと暗いのよね。暗いイコール僕とかいう法則があったりするのかしら、ああでもそれは違うわ、私の昔の友達で.....」

自己紹介も満足にさせてくれなかった。ううむ、どうしたものか。

「え、と、..... フォリスさん？」

「さん？あらあなた私の事をフォリス【さん】って呼ぶのね、いいわよフォリスで、その悪口女は別にして、私のことはみんな呼びつけにするの、だからそんな風に呼ばれたら気持ち悪いわ、あそう

だところでああなたの名前を早く教えてくれないかしら、あそっいえば名前といえは……………」

相変わらずもの凄い勢いで喋り続けるフォリス。栞は、悪口女と言われた時にピクリと眉を上げたが、後はどこか疲れたような顔をしていた。

……………さて、どうしたものか。

「茉莉」

迷った結果、率直に名前だけを言ってみた。
フォリスに余計な情報を与えるべきではない、と判断したからだ。

「祭り？何が急に何を言うのかしらあなた、ここで祭りなんて一回も無かったけど、あもしかして私にだけだまってみんなでやったのかしら、そうやって私だけ仲間はずれにして、やんなっちゃうわね まったくいつもいつも、祭りなんてくだらないんだから、あれ私分かったそういえばまつりって人がここにきたんだよね、それがもしかしてあなた、そうよねそうよね、という事はああそうか字が違う、茉莉ねあなた、なるほどでもそれとこれとは関係ないわなんで私の進路の邪魔をしたのか聞いてもいいかしら、でも別に必ず答える必要はないと言っておくわ、でないと……………」

いちおう目的は達した。でも彼女のマシンガントークは止まる気配もない。

助けを求めて栞の方を……………あれ？栞がない。

「いつまでそこに立ってるんだ、彼女の言う通り、早く君もドアの前を退きたまえよ。」

ぐい、と腕を引かれる。何の受け身もしていなかったので、僕の体は簡単に彼女によって移動した。

「あらやつと分かってくれたのね、じゃあ急いでいるのでいったんここで、ではまた後でね茉莉」

彼女の話がやつと止まった。また後でっていうか、僕たちもその部屋に用があるんだけどね。

「ヴお……………！！っうむ！！」

その事を言おうとした僕の口を、栞の手が塞いだ。思い切り睨みつけられる。

フォリスが部屋の中に入っていくのを確認すると、手を離して僕の事を罵った。

「茉莉君。少しは空気読んでもものを読みたまえよ。せつかくフォリス君が黙ってくれたのに、何故また蒸し返そうとするんだい？」

「いやでも僕たちもあの部屋に」

「……………」

無言で睨みつけられる。

……………いや、普通に怖いんだけど栞さん。

やがて彼女は軽く溜め息をつくど、気を取り直したように言った。

「まさかフォリス君がここに用があるとはね。千鶴子君には悪いが、あの部屋は後回しにしよう。フォリス君のマシガントークと、千鶴子君の悪ふざけを同時に相手にするのは、さすがに骨が折れそうだ。」

4話 茉莉と栞 05

廊下を歩きながら、栞が僕に訪ねた。

「まさか【映写室】でフオリス君と会うとはね。……………」という事は、あと会っていないのは、木霊【こだま】君と、亜空【あくう】君か。……………ふむ。どちらに先に会いたいかな？ 茉莉君。」

「いや、だから、僕に聞かれても。」

名前だけではどんな人なのか分からないし。

僕がそう言つと、栞は少し考えるような顔をした後、言った。

「ふむ。そうかい？……………そうだな。……………なら、聞き方を変えようか。【言霊の部屋】と、【増減の部屋】と、どちらに行きたい？」

「いや、……………部屋の名前を言われても。」

むしろ余計に混乱したような気がする。言霊とか、増減とか、そんな名前の部屋、聞いたことがない。

「ふふ。そんな名前の部屋、聞いたが事ない、って顔だね。」

僕はそんなに分かりやすい顔をしていたのだろうか。何て答えようか迷ったあげく、結局無言でいた僕に、栞はくすくす笑いながらさらに言葉を続けた。

「あはは、うん。そうか。……………じゃ、そうだね、私が決めようか。ここから近い方の、【増減の部屋】に行こうか。」

「ん、あ、うん。じゃあ……………」

そうしようか、と言おうとすると、すぐに栞が言った。

「ほら、着いたよ。ここが【増減の部屋】だ。」

近っ！！もしかしたら栞の奴、僕がどう答えてもこっちの部屋に来るつもりだったんじゃないのか？

5話 広い部屋―01

「つつええ!？」

部屋に入るなり、僕は素っ頓狂な声を上げてしまった。後ろで栞がくつくと笑っている。

間違えて外に出てしまったのか?と思った。

部屋の広さがありえない。図書館の時も確におかしかったんだけど、これは……………。

開けた空間は、端がかすんでいて見えない。

見えないって、ここ室内、の筈、なんだけどなあ……………。

部屋の中心 中心が何処なのか分からないんだけど

に、椅子に座って本を読んでいる男がいた。

部屋の余りの広さに、不安になって後ろを見ると、ちゃんとドアが会った。栞も相変わらず笑っている。開いたドアから見える廊下は、今までと何も変わらずに、ちゃんとそこにあった。

「お、ようこそ、【増減の部屋】へ。お前が茉莉って奴か？」

椅子に座って本を読んでいた男が、本から顔を上げて言った。

「あ、はい。茉莉です。よろしく願います。あなたが、亜空【あくう】さんですか？」

「ああ、そうだよ。あ、そうだ、始めに言っておくけど、敬語はやめてくれよ、気持ち悪いから。」

「ああ。分かった。」

「ところで亜空君、前に頼んでおいた物、できたかい？」
後ろから琴が言う。

「いや、まだだ。つかできねーよ、あんなの。俺の力にも限界はあるんだぜ、当たり前だが。」

「そうかい？ 確か君、前に私に「俺に不可能はない」とか豪語してた気がするが。」

「あーあー、そうでした！！作ってやつから気長に待ってる！！」

「ふふ。気長に、ね。ずいぶん弱気じゃないか、亜空君。」

「んだと！！弱気になんかなくてねえ！！分かったよ！！すぐに作ってやる！！」

「ああ、よろしく頼む。」

言いながら琴は、にやりと笑ったように見えた。

6話 広い部屋―02

「ああそつだ茉莉、俺の能力の代償だけど、【把握できない空間がある】事だから。」

朧をしばらく睨んでいた亜空が、ふと思いついたかのような、気軽さで言った。

「……………は？」

思わず、間の抜けた声を出してしまう。亜空は、今何を？僕の聞き間違いでなければ、【能力】を持つ者にとって、弱点ともいえる、

【代償】を言ったような気がするが。それもあつさりと。

……………聞き間違いか？いや……………でも確かに。

「あつはつは！！おいおい茉莉！！何だよその顔は？」

僕の顔を見て大笑いする亜空。失礼な奴だ。でも今はそんな事より。

「……………いや、だって、」

「だっても糞もねえよ。いいか茉莉？俺みたいな、明らかに日常生活に支障が出るような事が【代償】の人間はな、先に言つといた方がいいんだよ。こんなのは。後から妙な誤解されるのも、胸糞悪りいしな。」

曇りの無い笑顔で、言い放つ亜空。

「……………」

分かるような、気が、しないでもない。だが、……………【代償】だぞ？逆手に取られれば、すなわち即弱点へと通じる。【代償】何だぞ？その考え方は分かるが、肯定することは、僕には、出来な

い。

「おいおい茉莉よお、そんなに深刻な顔するなって、俺だって、見ず知らずの人間に易々と話したりはしねえよ。でもお前は、これからここで一緒に暮らす仲間だろ？だから、言っのさ！ある種の信賴の証として。……………あ、でも、言わない人間の考えも分かるから、お前が妙な事を考える必要はねえからな。つまり、変わりに自分の【代償】を……………みたいなさ。」

「……………」
む。確かに一理有る。一理有るんだが、でもしかし……………

「そんなに深刻に考える必要はないさ、茉莉君。彼はそういう性格なんだから。」
背後から栞が言う。

「そうだぜ茉莉。こういうのはオープンにいきたい、ってのが、俺の考えだからさ。」

「あ、ああ。分かった。」
そういう考え方も有るのかと、腑には落ちていないものの、納得は出来た。

「ところでさ、茉莉は自己紹介に来たとして、栞は何をしに来たんだよ？」

「んん？それはあれさ、茉莉君に【此处】を案内してあげていたのさ。」

「ふん、そうか？俺はてっきり、例の物の催促の方が本題だと思

っただけだ。……………まさかお前が人のために、ねえ？」

「いや、気のせいだよ。そっちはついでだ。」

いつもと少しも変わらない平坦な声で答える栞。

そんな栞を、舐めるような目で見て、

「ふーん、ま、そういう事なら、それでいいんじゃない？」

と、視線を上に向けながら言う亜空。

もしかして、二人は仲が悪いのだろうか？と、僕は思った。

7話 木霊と亜空

「よーすー！木霊あ、いるか？」

ピシャン、と元気よく扉を開く亜空。

今亜空が乱暴に開いたドアが、【言霊の部屋】の入り口だ。他の部屋と違い、木で出来ているのが異様だが、後は、横開きの普通のドアだった。

普通のドアなのだが、何故【此处】のドアは、ノブ付きだったり、引き戸だったり、統一感というものがないのだろうか。建物を建てた人は、いったい何を考えてこんな造りにしたのだろうか。

挨拶を済ませたという事で、取り敢えずの目的を達した僕たちは、これまでと同じように、部屋を辞そうとした。一度はそのまま別れる運びとなったのだが、栞の「後は、木霊君だな。」という発言を聞いて、気が変わったらしい。「俺もいくよ」と半ばむりやり僕たちと一緒にいくことになった。栞は少し不満そうな顔をした気がしたが、すぐに了承した。

目的地に向かって歩いている最中、上機嫌に喋り続ける亜空と、それに応じる僕と栞。

彼の【代償】を聞き、止めようと思っても、少し意識して彼を見てしまう。見ている限りでは、よく分からない。

【把握できない空間がある】、か。どういう意味何だろう。

……………止めよう、邪推だ。

そうして、部屋に着いた。木のドアであるという事意外は、全然他

のドアと変わらないその外見に、少し違和感を覚えた。いや、がっかりしたというべきか。僕は、【言霊の部屋】というその名前から、もっと重厚なイメージを抱いていたのだ。始めの図書館が、印象的過ぎたのかもしれない。

部屋にたどり着くなり、亜空はドアを勢いよく開けた。
おいおい、そんなに力を入れたら、ドアが壊れるぞ？

部屋を見回しながら、幾度か「木霊あ？」と呼んでいた亜空は、やがて溜め息を吐いて振り向いて、言った。

「つれ？おかしいな、いないぜ？なあ栞、他に木霊のいそうな所に心当たりとかあるか？」

「いや、彼は特に縄張り意識が強いから、ここにいないとなると……」

そこで栞は、考え込むように視線を下げ、もう一度上げた所で、何故かにやりと笑い、答えた。

「ちよっと、分からないな。ふふ。」

8話 木霊の代償

気になって、栞の視線の先を追うと、其処に男が立っていた。
亜空の影に隠れて見えなかっただけのようで、どうやら始めから、
そこに立っていたようだ。

「んー、だよな？……茉莉は心当たりとかあったりしな……
……いよなあ。」

と亜空が、少し困惑したように言った。

もちろんそんな場所に心当たりなんて無い………のだが、
亜空のすぐ後ろに立っている彼は違うのだろうか？

僕がその事を指摘しようとする、栞が目で静止してきた。ん？何
で止めるんだよ？栞にその事を聞こうとすると、亜空の後ろにいた
男が、

「から、………ってさつきから………ってる？」
と、怒鳴った。何て言ったのかよく分からなかったが。

「うおおお！！木霊てめえ！！何でそんなにドアから近い所に立っ
てるんだよ！！知ってるだろ！？俺の【代償】！！！」

「トレに………もって。それに、………によとそ
僕の勝手………」

何だ？何が起こってるんだ？

どうやら、亜空は【代償】のせいで、木霊の姿が見えてなかったようだ。

じゃああつちの男の妙な喋り方は？

んん？よく分からない。少し情報が少なすぎる。

僕の困惑をよそに、木霊君と亜空は、何やら言い争っていた。

内心非常に困惑している僕に、一連の騒動を見て笑い転げていた栞が、救いの手をさしのべてくれた。

「あははは、そろそろ君の混乱を解消してあげようか。とその前に……」

そこで一度間を置き、いまだ言い争う二人に声を飛ばした。

「なあ木霊君！！言ってもいいかい？君の【代償】を！！」

栞がそう言つと、今まで本当に言い争っていたのかと疑いたくなるほど冷静な声で、木霊君は言った。

「別に　よ。隠して　る　け　も　　し。それ　ずれ　や　も
かるこ　　し。」

やはりその男が、何を言っているのかよく分からなかった。

9話 朶の講義―05

「さてと、一つずつ整理していこう。まず、混乱の元となっている、彼ら二人の【代償】から。」

亜空君の方は、さっき君も直接【空間の部屋】で聞いたように【把握できない空間がある】事だ。君がどの程度理解しているのか分からないが、こうなった以上、私が知っている範囲でもっと詳しく言う、【半径3メートル以内の物体が認識できない】事だ。まあコレは、今どうなっているかは分からないんだが。【代償】はどうやら、本人の体調や気分なんかで、多少変化するみたいだからね。

この【代償】はね。私が知ってる中ではかなりやつかいな部類に入るね。

ん？何故かって？……………それは、【認識出来ない】だけで、実際は【ある】という事だよ。想像してみるといい、その【代償】を持ってドッジボールしてる自分を。ボールを受ける事なんて普通は出来ないだろう？もっと怖いのは、ボクシングなんかの、近接戦闘の場合だよ。敵意むき出しの相手が近くにいるというのに、それがまったく認識できないんだから。

む。その顔は、分かったみたいだね。

……………ん？ああなら何故木霊君の声が聞こえたのか？か。うん。もっともな質問だ。抜けてるように見えて、やっぱり君はしっかりしているみたいだね。茉莉君、君は。

それはね、【周りの壁に反射した声】が聞こえているんだ。だから、亜空君の耳元で何かを言っても、彼は分からない。

……いやいや、何を言ってるんだ君は。私がそんな事する筈ないじゃないか。いやいや、しないよ。想像で言ってるんだよ、想像で。

む。意外と信用ないんだな、私は。

……まあいい。それで……

ん？ああ、物体が把握出来ないのなら、何故ドアを開けられるのか？か。

うん。いい質問だ。それはね、さっきも言ったように、【認識できない】だけで、実際には【ある】からだよ。

ん？さあ？それは訓練したんじゃないか？色々と。実際、本人にしたら死活問題だからね。どうしても気になるのなら、後から本人に直接聞いてみるといい。」

「次に、木霊君の【代償】だが、【前日に使用した能力の量に比例して、伝えられない言葉が増える】事だ。

ふふ、まあ分からないだろうね。例を出しながら説明しよう。

まず始めに彼が言った言葉は「 から、 ってさつきから ってる ろ？」だが、コレは本来、「だから、何だいつてさつきから言ってるだろう？」となる。

ああ、まあ驚くのも無理はない。でも、心配しなくても、慣れればこのくらいは普通に出来るようになるよ。言葉は確かに聞こえないが、口は動いているから、それをよく見ていればいい。それプラス、彼の【代償】の法則を知っていれば、復元はさらに容易になる。

同様に、次の、「ト レに こうと もって。それに、 こによ とそ 僕の勝手 ろ？」は、「トイレに行こうと思ってね。それに、どこに居ようと、そんなの僕の勝手だろ？」となるが、この最初のト レは、あきらかにトイレだろう？このことから、彼が今日「あ行」を使えない事が…… っと、ああすまない。言っのを失念していた。彼が伝えられなくなる言葉は、常に【行単位】だ。

だから、最後の「別に よ。隠して る け も し。それ ずれ や も かるこ し。」は、同様に「別にいいよ。隠している訳でも無いし。それにいずれ嫌でも分かる事だし。」となる。したがって、彼が今日伝えられなくなっている言葉は、「あ行」「だ行」「わ行」「な行」だと分かる訳だ。

……あはは、そんなに不安そうな顔をしなくてもいいよ。

……ふむ。彼が昨日何をしていたのか少し気になるね。普段はこんなに失う事はないのに。」

「まあともかく。彼ら二人の【代償】が分かっていたら、さっきの現象は容易に説明できる。つまり、

1、トイレに行こうとしていた木霊君が、ドアの前に立っていた。
というか、ドアをまさに開けようとしていた。

2、そのタイミングで、ちょうど私たちが来て、亜空君がドアを開けた。

3、ドアを開けたのはいいが、亜空君は、彼自身の【代償】のせいで、木霊君の姿が見えなかった。私たちは、亜空君の影になっていて見えなかった。

4、対して、名前を呼ばれた木霊君は、「何だい」と返事をした。
もつともこれは「何だ」だったのかもしれないが。ちょうど【代償】で、全ての声が消えていたから、声は全く聞こえなかった。……

…ふむ。一語まるまる消えるなんて、珍しいパターンだ。実に興味深い。

5、だから、……ん？ドアの目の前で名前を呼ばれて、冷静に「何だ」とは言わないだろう、って？まあ普通はそうなんだろうけど、そこは木霊君だからね。彼はいつも冷静だから　ほら、見てみるといい、あの2人、一見言い争っているように見えるが、実際に騒いでいるのは亜空君だけだろ？木霊君は受け流しているだけだ。

どうせ彼の事だから、亜空君を適当にいなしながら、僕たちの話を聞いているんじゃないかな。

6、それで、彼の【代償】を思い出したのか、それとも訪ねて来たのが亜空君だと気付いたのかは知らないが、彼は少し大きめの声で「から、　　ってさつきから　　ってる　　？」と言ったんだ。

以上、些細な点は違つかもしれないが、大まかな流れはこうだろう。これでQEDだ。」

11話 茉莉と栞 06

「やら ったみたい。と け、僕が木 ます。
よろしく、茉莉く。」

まさに僕たちを見ていたようなタイミングで、木霊君が声をかけてきた。

何と言われたのかはつきりとは分からなかったが、「茉莉」と呼ばれた事と、目の前に差し出された手を見て、僕も挨拶を返した。

「こちらこそ、よろしく願います、木霊君。」

「あーおい！！木霊てめえ！！まだ話はいちやいねえぞ！！」

出された手を、僕が握り返そうとすると、それを おかしな表現だが 邪魔するかのようには空が割って入った。

「と か、くく。は しがつく、つか 前、僕は
別 君とけ かけて るつもりは け。」

栞がぼそぼそと、すぐに木霊君の言葉を補填してくれた。

「とうかね、は空君。話がつく、つかない以前に、僕は別に君と喧嘩しているつもりは無いんだけど。」

「おーし、よく言った！！そこに直れ！！」

は空の様子を見て木霊君は、溜め息を大きく一つ吐き、僕たちの方を向いて言った。

「やれやれ、気が進ま も がるが、 やら僕は、
く て し ければ ら よ。またこ、ゆっく
りとは してみた も、茉莉く。」

「やれやれ、気が進まないにも程があるが、どうやら僕は、亜空君の相手をしなければならぬようだ。また今度、ゆっくりと話してみたいものだね、茉莉君。」

栞がやはりぼそぼそと訳してくれる。正直、ありがたい。

そうして、自己紹介もそこそこに、木霊君との邂逅は終わった。

【言霊の部屋】を出て、次は約束通り【映写室】に行こうという話になった。

千鶴子さんは……………

頭がぼーっとして。

アレ？話をしたから千鶴子さんが来たのか？

……………いや、違う。コレは。

自分の意思とは関係なく、ぐらりと体が傾ぐ。

「ちょ、茉莉君？」

心配そうに顔を覗きこんでくる栞。

「……………」

……………まずい、コレは。

「茉莉君！？おい！！誰かいないか！？ちっ！！コレだからこの建物は！！人が少なすぎる！！ちよっと待ってる茉莉君！！すぐに誰

か呼んでくるから!!」

たったった、っと離れていく足音を聞きながら、僕の意識は薄れていった。

こうして、僕の【此处】での一日目、もとい七日目は幕を閉じた。

幕間 茉莉の日記（前書き）

栞と一緒に茉莉の日記を読んでも見る場合は茉莉の日記【<http://ncode.syosetu.com/n9663e/>】へ。
「同一作者の他の作品」という所から飛んで下さい。

日記を読まなくても、一応スジは通るようにするつもりですが、日記内に、複線が多数張られる予定ですので、読んで頂ければ幸いです。

幕間 茉莉の日記

ぺらりとページをめくる。

「ん？何だい？それは。」

いつの間にか部屋に来ていた栞が、上から覗き込むようにして聞いた。

「ん、ああ、いたのか栞。……これは、日記だよ。ここに来てからの。」

「日記！？はあん、日記なんて書くのかい？君は。」

「何だよ！！僕が日記書いてるのが何かおかしいか？」

「いや、ちょっとびっくりしただけだ。ふうん、君がねえ。そういうキャラには見えないが。君はもっとこう暴力的な……」

「ええっ！！僕ってそんなイメージなの！？」
だとしたらちよっとシヨックだ。

「あはは、冗談だよ。相変わらず直ぐに間に受けるんだね、茉莉君、君って奴は。」

「……………君の冗談は、微妙にたちが悪いんだよ。」

「ふん。そうかい？ところで、結構なページだね。何ページくらいあるのさ。」

「さあ、ページ数は直ぐには分からないけど、50ページは超えるんじゃないかな。」

「……………そういえば、君が【此処】に来てから、そろそろ1ヶ月になるのか。」

「相変わらず君は記憶力がいいね。人の事なのにそんなに覚えてるんだから。……………明日でちょうど1ヶ月なんだ。だからこうして

」

「……………感傷に浸っている訳かい？」

何でそういう言い方をするんだよ。まったく、栞。君という人間は。

まあいいさ。今日は何だが、すがすがしい気分だから。

「ほら、栞。君も読むかい？」

「ふん。まあ暇つぶしにはよさそうだね。」

と、やはり憎まれ口を叩きながら受け取る。

そして僕は、椅子に腰掛けて日記を読む栞を見ながら、この1ヶ月の事を思い出していた。

5章 崩壊の前触れ 1話 英知と茉莉 01

「茉莉！！いるか！？」

ガチャッと乱暴にドアを開きながら、英知が部屋に入ってきた。声が狼狽し、幾分、焦っている様に見える。

「どうしたんだ？そんなに慌てて。」

「今日何処かで、鞆香を見なかったか？」

鞆香には……………今日はまだ会ってないな。というよりも、

「いや、悪いけど見てないよ。今日はまだ一步も外に出てないんだ。朝起きてからこっち、ずっと君に借りた本を読んだ。」

9時に起きたから、都合3時間も読んだ事になるのか。

「そうか。お前ならもしかして、と思ったんだが。……………分かった、ありがとう茉莉。もしも鞆香を見つけたら知らせてくれ！！」
言って、慌しく部屋を出て行こうとする英知。只事ではなさそうなその様子を見て、つい僕は彼を呼び止めた。

「ちょ、ちょっと待てよ英知！お前らしくも無い。そんなに慌てて、いったい何があったんだよ？」

僕の声によって、ドアの前で一時静止した英知は、やがてぎこちなく振り返り、幾度か深く呼吸を繰り返してから答えた。

「ああ、そうだな。お前の言う通りだ。確かに俺らしくなかったよ。」

表情が、いつもに比べるとまだぎこちないが、それでも大分落ち着いてたようだ。

「…………ふう。よし、じゃ、もう一度聞くぞ、茉莉。鞘香を最後に見たのはいつだ？」

最後に見たのは、えーと、確か、

「昨日の昼過ぎに、食堂で見たよ。」

「昨日の昼、か。その時、何か変わった様子は無かったか？」

少し考えて答える。

「いや、特には思いつかない。」

「そうか。…………ところで、その時鞘香は【熊の着ぐるみ】を着てたか？」

「着てなかった。」

「ふむ。ならそれは確実に鞘香だな。もし着ていたのなら、そんな事をする理由が分からないが、誰かの変装という線もあったんだが。…………となると、昨日までは普通…………いやむしろ落ち着いた状態だった訳か。」

うーん、と考え込む英知。

「あ、いや、会ったっていつでも、ちょっとだけなんだ。ちょうど入れ違いになったみたいで、挨拶程度でその時は分かれたから。だから、その、変な所があったかどうか、確実な事は言えない。」

「いやそれはいいんだ。この場合、鞘香を【見た】という事実が大事なのであって。」

話し始めた時から薄々は感じていたが、悪い予感が拭えない。

「もしかして、鞘香が」

「そうだ。鞘香がいなくなった。単純に見つからないだけなのか、【代償】のせいで存在が薄くなってしまっているのかは分からないが。」

2話 【代償】というもの

「俺が主に心配しているのは、鞘香の見つからない理由が、【代償】の方に有った場合なんだ。ただ見つからないだけだったら、俺の行為は少々大げさ過ぎるのかもしれないが。その場合でも、やはり心配だ。今まで鞘香は必ず、夜、自分の部屋に帰る前に一度、【研究所兼探偵事務所兼占い所】に顔を出していたから。」

やはりいつもより余裕がないように見える英知。考えを纏めさせるためにも、合いの手を挟む。

「という事は、昨日は部屋に一度も来なかったのかい？」

「いや、朝に一度顔を出したんだが、昼食を取りに行くと言って出て行ってから、部屋に帰ってきていないんだ。」

「でも、君もさっき言ってたように、それはさすがに心配しすぎなんじゃないか？たまにはそういう日だってあるさ。一人になりたいような。」

「ああまあ、普通だったらそうなんだけどな。鞘香だから問題なんだ。……つまり、彼女の【代償】が、【存在感が薄くなる】事だから。」

「……………だから？何だか、よく分からないんだけど。」

「まあな、お前が分からないのもよく分かる。……………そうだな。なあ茉莉、【存在感が薄くなる】っていうのはどどういう事だと思う？」

「…………それは、言葉のまま、【そこに居る】という事に気付きに
くいんじゃないのか？」

「そうだ。じゃ、その【代償】が進行していくとどうなると思う？」

「ますます……………気付きにくくなる？」

「そう、だから、その内誰からも無視されるようになるかもしれない。
いや、無視しているんじゃないくて本当に気付いてないから余計
にタチが悪いんだが。」

「そうか。……………という事はつまり、彼女が毎日寝る前に、必ず部
屋に行っていたのは。」

「そうだよ茉莉。彼女は毎日眠る前に確認をしておきたかったんだ。
【自分がまだ確かに、存在を認めて貰えている事】を。」

「なるほどね。僕はまだ、【代償】の事を甘く考えてたみたいだよ。
」

「理解が速くて助かる。」

「だから夜は、八時になると必ず部屋に帰ってたんだね。」

「そうだ。刷り込み……………とはちょっと違うけど、毎日会う事で、
少なくとも俺だけでも、アイツの事を忘れないでおこうと思ってさ。
……………ちよっと臭かったかな。」

少し照れながら言う英知。やはりコイツは滅茶苦茶いい奴だ。

「そんな事無いさ。逆にちよっと尊敬したよ、お前のこと。」

茶化すように言う。張り詰め過ぎて気まずくなってしまった場の空気を、和ませる意味ももちろんあったが、半分は本気の発言だった。

「そつ、尊敬とか止してくれよ！！恥ずいだらー！！」

少しの間、和んだ空気を楽しむ。

「それで」

そこで一旦言葉を止め、真面目な口調で聞く。

「それで、心当たりの場所はもう回ったんだろ？」

英知もその空気を一瞬で感じ取り、真面目モードに移行する。

「ああ、鞘香は……というか【此处】に居る奴はほとんどそうなんだが、行動範囲が狭いからな。思いつく限りの場所は全部回った。それで、もしかしてと思ってお前の部屋に来たんだが……」

「そうだ！それを聞きたかったんだ。なんで僕の部屋が、もしかして、なんだ？僕はそんなに、鞘香と仲良くないと思うんだけど。」

「お前がどう思ってるのか知らないが、それは違うよ。お前はアイツのお気に入りだ。【作品】に掛かってくれる訳だしな。」

苦笑しつつ言う

「貴重な実験台ってワケ？」

「あ？お前………そうか、知らないのか。」

「え？何が？」

「どういう訳か、お前は最初から掛かりまくってたみたいだが、鞘

香のトラップは、もちろん【作品】はトラップだけじゃないけど、普通は掛からないんだ。」

「普通は？」

「つまり、アイツを認識してから、始めてトラップにも掛かる………
…というか、普通は鞘香に会うまでは、掛かる掛からない以前に、そこにそれがある事に気付けないんだ。お前は、まあ………うーん、鞘香と波長でも合ってたんじゃないかね？」

そうなのか。何で僕は最初から掛かったんだろ。波長………合ってるかなあ？
彼女が、僕が何度もトラップに掛かった事を聞いて、やけに喜んだのはそのせいかな？

「じゃ、俺そろそろ行くよ。もう一度探し直してみる。お前と話せてよかったよ。何だか落ち着けたから。鞘香を見かけたら知らせしてくれ、じゃ。」

手を上げて挨拶をしながら、部屋を出て行こうとする英知を、僕は再度呼び止めた。

「待ってくれ、僕も一緒に探すよ。」

3話 探索―01

「思っただけだね、君が探して見つからないのなら、それはやはり、彼女が全く予想外の場所に居るって事じゃないかと思ったんだ。」

僕の説明を聞いて、英知が少し困った顔をする。

「いやそれは先刻も聞いたけどさ、だからって『人が普通行きそうにない所から探す』っていう理屈は、あんまり納得がいかないんだけど。」

「そうかなあ。だから、誰にも会いたくない時が会ってさ？」
二人で廊下を軽く走る。

「いや茉莉お前、俺の説明聞いてたか？アイツは、人に見つけて貰えなくなるのが怖いんだぜ？何で自分からそんな場所に行くんだよ？」

「それでもそういう気分になる事もあるんじゃないかな？」

「いや、うーん、まあ、考えにくいが。」

先行していた英知が、目の前の部屋のドアを開ける。

「それにさ、少しずつ可能性を潰していった方がよくないか？」

部屋の奥まった部分に、隠れるように階段があった。何で部屋の中に階段があるんだろう。

「……いや、その考え方はよく分らん。まあ、俺一人では見つけれなかったから、こうしてお前の案を採用してるんだけどな。」

木で出来た階段を上る。ギシギシと嫌な音が響く。

「……………ていうか、二階とか有ったんだね、【此处】。」

「まあな。変な所にあるからな、階段が。他の住人の部屋も全部一階にあるから、むしろ知ってる奴の方が少ないんじゃないかと思う。俺だって、この前偶然見つけたんだ。」

階段が軋む。壊れないよな？

「なんかよくわかんねーよな、【此处】って。ああそっいえば、屋上もあるぜ。見たらきつと驚く。一応確認はするよな？」

もちろん、と頷く。それにしても驚くってどういう意味だろう。

「何だか、隠し部屋 というより、隠し階、みたいな感じだね。」

英知に続いて階段を上りきる。階段と廊下の間にもまたドアがあるようだ。

「そうだな、何を隠す必要があるんだろうな。でも、この前一通り見た感じ、変な物は何にも無かったぜ？だから、それはさすがに考えすぎかもな。」

英知が開けたドアから覗く廊下は、一階と殆ど同じだった。

4話 探索―02

英知と一緒に順々に部屋を探していくが、一向に鞘香が見つかる気配はない。

むしろ、当たり前といえば当たり前だが、全く人の気配が無かった。その上、本当に同じ建物内なのか疑いたくなるほど、2階はボロボロだった。

部屋の配置は一階と同じのようで、探していない部屋の方が少なくなつた頃、そのドアに行き当たつた。

「んん？鍵、かかってんな。この部屋。」
とドアノブをいじりながら英知。

「え？建てつけが悪くてあかない、とかじゃなくて？」

「いや、確かに鍵が掛かつてる、ホラ。」

英知に進められて、僕も実際にノブを回してみる。ガシャンガシャンというこの手ごたえは、確かに鍵独特の物だった。

「うん、確かに。……もしかして、ビンゴかな？」

「かもな……………」

「……………」

僕らはそこで黙り込んでしまった。仮にこの部屋がビンゴなのだとしても、僕らには開ける手段が無い。

「ここの鍵　もしくは合鍵でもいいんだけど　持っていない？」

「持つてる道理が無い。」

「だよね。」

さて、どうしたものか。一つ思いつくのは、体当たりでぶち破る方法だけど、それは少し非現実的にすぎる。フィクションならまだしも、現実のドアがそんな方法で開くものか。……いや、でも……。

僕と似たような思考をしていたらしい英知が、こちらを伺うような感じで聞いてくる。

「体当たり、とか、してみるか？」

他に解決策が思いつかないので、僕はとりあえず首肯する。

「まああれだ。もしかしたら開くかもしれないぜ？このドア、見るからに年季入ってるし。」

確かに。同じ階の他の部分と同様、ここのドアもボロボロだった。試す価値はあるのかもしれない。

5話 穿たれし穴

「やっぱりというか、案の定と言うか、…………開かないな。やれやれ、フィクションはやっぱりフィクションか。」

扉に背をつけて座り込む僕たち。もう少し体力をつけないといけないな。

「……………はあ、疲れた。……………ところでさ、英知。聞いてやいけないのかもしれないけど、その、君の【能力】でドアを開ける事はできないの?」

「いや、無理だ。そんな力技に向いた【能力】じゃない。ちなみにお前は?」

「無理だと思う。」

「だよなあ。【能力】を使って開けるのなんて、最初に思いつくほうほ……………って、え?【思う】?もし出来るんならそれで……………あ、いや、悪い。詮索してる訳じゃないんだ。」

いいんじゃないのか?英知になら、本当の事を言っても。でも、信じてもらえるのか?こんな事。……………でも英知ならもしかして。

「あのさ、僕的能力なだけで……………」

「何だよ改まって、別に気にしなくても……………と、真面目な話みたいだな。」

僕の目を見て、英知も真剣な表情になる。

「あの、さ、覚えてないんだ。自分の【能力】も【代償】も。信じられないと思うけど。」

そう、信じられる訳がないんだ、こんなこと。

自分の【能力】もしらないなんて。

そんな、壊れた玩具みたいな【能力者】なんて。

「信じるよ。」

「え？」

「だから、信じるよ。」

茶化す様子も無く、真面目に言い放つ英知。

「え、で、でも、【能力者】が【能力】を知らないなんて……………」

「いいよ。何か理由があるんだろ？」

嬉しかった。

自分が今まで【此处】の皆に対して感じていた疎外感。それが少し楽になった。

「んん？俺が信じる事を、信じてねー顔だな、ふむ。」

英知は、しばらく悩んだ後、やがて顔を上げて続ける。

「コレが」

いきなり上着を捲くり上げ、

「俺の【代償】だ。」

わき腹の辺りを指差す。

そこには、黒い……しみ、かな
あつた。 何かの模様にも見える

「コレがな、痛むんだ。」

否、違う。それは 穴、だ。

何かに魅せられる様に、僕の意識はソレに惹き付けられていく。

6 話 鍵

「やれやれ、こんな所で逢引かい？」

栞の呆れた様な声で、僕は我に返った。

え？

栞？

「え？は？え？栞？何で？」

思わず狼狽してしまう僕。何か【此处】に来てからこんなのか
りだなあ。

「おいおい、何を動揺してるんだ茉莉。そんなんだから変な誤解を
招くんだよ、お前は。……あのな、栞、俺がちよっと怪我をしち
まって、それを茉莉が診てくれてたんだよ。」

と言いつつ、さりげない動作で服を戻す英知。

なるほど、栞には知られたくないらしい。

それだけ僕を信用してくれたという事だろうか。

僕も英知に話を合わせる。

「そ、そうなんだよ。」

すると栞は、目を細めて僕らを見ながら問い返す。

「ふうん。怪我。こんな所で、ねえ。それも茉莉君が診てた、と。」

まずい、明らかに疑っている。

まあ当然だろう。僕が栞の立場だったとしても、そんな話信じ難い。

「…………それより、君こそなんでこんな所にいるのさ。」
誤魔化しきれるとはとうてい思わないが、とりあえず話をそらして
みる。

「ふん、私は散歩だよ。」

「散歩？こんな所を？」

「悪いかい？」

悪くはないんだけど。

何だか適当に返事されたみたいで、いまいち納得がいかない。

栞が視線を英知に移して聞いた。

「その怪我とやら、酷いようなら私が診てあげてもいいが。」

わき腹を庇う様に押さえながら、栞を見据える英知。どうやら、穴
を見られたかどうか探っているようだ。

もつとも、栞の表情はいつもと変わらないので、そこからそれを推
し量る事は、とうてい無理だと思った。

「いや、もう大丈夫だ。」

「それならいいが。それにしても、人に診て貰う様な怪我なのに、
もう平気なのかい？」

いいと言っておきながら、重ねて聞く栞。

英知の事を心配しているというよりも、英知のその反応に、疑問を
持ったようだった。

「ああ、大丈夫だ。心配してくれて有難う。ところで栞」

それ以上聞かれる事は不味いと判断したらしい英知は、重ねて質問した。

「君ならもしかして、この部屋の鍵が何処にあるか知ってるんじゃないか？」

チャリ、と一本の鍵を取り出す栞。

「ん？コレだが？」

「え？何で栞が持つてるんだ？」

と聞くと、やはり表情を変えずに答える。

「落ちていた。」

落ちていた？なんでまた。

「ど」

「貸してくれ！！」

何処に落ちていたのかと聞こうとした僕の声搔き消すように、少し興奮した英知の声がかぶさる。

「ああ、構わないが、その代わ」

「有難う！！」

おそらくその後何らかの条件を付けようとしていたのだろう栞から、半ば引つ手繰る様にして鍵を受け取ると、英知は早速ドアを開け始めた。よっぽど鞘香の事が心配なのだろう。

気分を害した様子もなく、栞は英知を見ていた。

「ところで栞、その鍵をどこで見つけたんだい？」

「ん、ほら茉莉君。開いたみたいだよ。」

僕の質問には答えず、栞は開け放たれたドアを指差す。

無視されたというよりは、答えたく無いようだった。

7話 そうゆうプレイ

「鞘香さんは!？」

部屋に入るなりそう聞いてみる。

「いや、いなかった。いなかったんだが」

部屋の奥の方から声がした。

影になっていてよく見えない。

「変わりに千鶴子さんがいた。」

近寄ってみると、確かにそこには千鶴子さんがいた。

両腕を後ろで縛られて、口にはガムテープが張られている。

両足も縛られているようで、床に横たわっている。

英知がガムテープをゆっくりと剥がしていく。

「ぶはっ、どうしたのよ、あなたたち。」

口が自由になるなり千鶴子さんはそう言った。

「いやいや、それはこっちの台詞だ。」

「千鶴子さんこそ、何があったんですか？」

「何がって、何が？」

何かもなにも。

「どうしてこんな所で、縛られていたんですか？」

僕がそう聞き直すと千鶴子さんは、英知に解いて貰った腕をさすりながらにこやかに答えた。

「ああコレ? コレはそういうプレイよ。」

いや。

いやいや。

「は？プレイ？」

「そうよ。自分で自分を縛ってたの。自縛プレイ。」

「いや、けど、後ろ手に縛られて……………」

「あら？出来るわよ？」

言いながら、英知に解いて貰ったロープを拾い上げる。

「ほら。こうして、こうして、ここを通して、ふぁいごにほほふひふえひつふあれふぁ、ね？」

確かに彼女の両腕は、さっきまでと同じ状態になっていた。んだけど、問題はそういう事じゃない。

「いや、まあ。自分で縛れるのは分かったんですけど、何でそんな事をする必要があるんですか？」

「楽しいじゃない？」

んん。楽しくはないと思うんだけど。
というかそういう事でもなく。

「あの、そもそもですね、自分で縛る縛らない以前に、この部屋鍵が掛かってたと思うんですけど。」

まさかそれも自分で掛けたとか言うのだろうか。
嫌な予感を覚えて、ドアを振り返る。

しかしそのドアには鍵穴が無く、サブターンも無かった。
どうやら、内側からは鍵が開けられない作りらしい。

……………？

何に使われていた部屋なのだろうか。

まあとにかく、懸念事項の一つを解消できた僕は、改めて千鶴子さんの方を見た。

すると、僕が振り向くのを待っていたらしい千鶴子さんは、

「密室って萌えるよね！！」

と、ビシッと変なポーズを決めた。

それは答えになっていないし、何かもうこの人よく分からん。

「ほら、いいかげんにしてやれよ。茉莉が困ってるだろ。」

今まで静観していた英知が千鶴子の肩に手を置きながら言った。

「えー、もうちょっといいじゃん。茉莉君って、反応がいちいち大きくて楽しいのよ！？」

「ああ、知ってる。でもまた今度にしてくれ。」

知ってるって何だよ。否定してくれてもいいじゃないか。

8話 誰かの電話

それからしばらくの間、二人は僕の事などほったらかしで言い争っていた。

否、言い争っていたというよりは、千鶴子が一方的に捲くし立てているのを、英知がいなしているような感じだったが。

それを見ながら僕は、ふと、栞がない事に気付いた。てっきり僕に続いて部屋に入って来たと思っていたのに。

そもそも栞は、何故この部屋の鍵を持っていたんだろう。落ちていたと言ったが、それは本当なのだろうか。

その【落ちていた】という鍵の、部屋の中に何があるのか、気にはならないのだろうか。

……考えていても、答えは出なさそうだ。

栞の考える事は、一ヶ月たつ今になっても、よく分からないのだから。

僕が悩んでいる間に、いつの間にか二人の言い争いも終わったようだった。

もっとも、千鶴子さんは、せっかく……とか何とか、まだぶつぶつ言っているが。

「それで、本当は何であんな事になってたんだ。」

そう聞く英知の声は、あきらかに調子が違っている。千鶴子さんも、その様子から何かを感じ取ったらしく、真面目に

少なくとも

僕にはそう見えた 答えた。

「分からないの。昨日の夜は、ちゃんと自分の部屋で寝た筈なんだけど、今日、目が覚めてみるとあぁなつてて。」

腕を組み、難しい顔をして考え込む英知。

「誰にやられたのか、分からないか？」

「分からないし、検討も付かないわね。」

僕だって検討も付かない。そんな事をする意味が分からないからだ。そもそも、これは鞘香さんの事と何か関係があるのだろうか。

「よく思い出してくれ、何か心当たりとかそういうのは？」

「ん？どうしたのよ？何かいつもより真剣じゃない？」

と茶化す千鶴子さん。

対して英知は、真剣な表情を崩さずに、

「鞘香が、いなくなっただ。」

と短く言った。

千鶴子さんは、悪かったわねとつぶやき、何かを思い出そうとした。

「ひょっとするとアレかしら。んー……………違うような気がするけど。」

「

言ってみてくれ。」

「ん、昨日ね、夕方くらいに、急に立ちくらみがしたの。」

「それで？」

「うん、その時にね、【能力】が暴走　　というか、何というか
制御できなくなっちゃって。私の意志とは関係なく、誰かの身体
に飛んだのよ。」

「それが誰かは分からない？」
確認する英知。

「分からないわ。それに、いつもと違って、身体の主導権は、完全
に向こうにあって、私はただ見てるだけ、みたいな感じだったわ。」

「ふうん、つまり盗聴みたいな感じか？」

「ん、言い方は悪いけど、そんな感じね。向こうも気付いてなかつ
たみたいだし。」

「それで、その時に何を聞いたんだ？」

「何かね、ノイズ　　みたいな何か変なのが酷くて　　誰の声
だったのかは分からなかったんだけど、「すみません、違います。
わたしじゃありません。おそらくそうだと思います。ええ。まさか
あんな物が本当にあるなんて。ええ、はい、ええ、大丈夫です。何
とかします。はい。では。ガチャ」、って。」

英知が意外そうな顔をして言う。

「ガチャって、【此处】に電話何かあったか？」

「んー分かんないけど、私たちが知らないだけで、きっとあるんじ
ゃないの？」

ふむ、と英知は、目を瞑って本格的に考え込んでしまった。

千鶴子さんの言った事はどういう事なんだろう。【あんな物】っていうのが何かは分からないけど、それが鞘香さんの消失、及び千鶴子さんの変な状態に関係しているような気がする。

【私】という一人称を使っているんだから、電話をしていたのは栞かフォリスなのか？

ああいや待てよ。

「千鶴子さん、その、今言った言葉は、まったくその通りなの？」

「ん？その通り？どういう事？」

「いや、だから、つまり、聞いたそのまま。一言一句違わずに言ってる？」

「えーと、うーん、どうだろう。昨日の事だし、あんまり自身ないかも。」

つまり、電話をしていたのが誰かは結局分からない、と。
千鶴子さんだから尚更である。

9話 探索―03

「ああああああ!!」

千鶴子さんがいきなり叫んだ。

考え込んでいた僕は、びつくう、と飛び上がってしまった。
やばい、またからかわれる。

と思ったが、千鶴子さんはそれどころでは無いらしく、

「ちょ、ちよつと!!今つて何時なの!？」

と慌しく英知に聞いた。

腕時計を覗きつつ答える英知。

「んーと、一時……半。」

「正確には!？何分!？」

「27分。」

それを聞いた千鶴子さんは、ますます焦ったように言う。

「ごめん!!私もう行くね!!鞘香ちゃん見つかるといいね!!」
慌しく出て行ってしまった。何だっていうんだろう。

うーん、きっと【能力】か【代償】に関係があるのだろう。そう理解する事にした。

「よし、じゃ、行くか。2階もあと少しだ。」

次のドアを開く。

部屋を見回しながら、前から疑問に思っていた事を、ふと思い出したので聞いた。

「あー、そういえばさ、始めてあった時、何であんな話し方してたの？」

「あんな話し方？」

どうやらこの部屋にもいないようだ。あと残りは……………3部屋か。そういえば屋上があるとか言ってたな。

「っていう事はアレだよ。ってやつ。」

「あーアレな。アレは、その時はまっけた本に影響されてさ。主人公の探偵の口癖だったんだ。」

……………どんな小説だろう。そんな口癖の探偵はちよつといやだ。

「ふーん。英知って時々急に変な喋り方するけど、それも本に影響されてだったのか？」

「そうだよ。……………変っていうな!!」

「いやだって変だし。例えば、そうだな……………【最後に】って何だよ。セリフの最初にいちいち【最後に】っていうのおかしいだろ？」

「おかしくない!!それがかつこいいんだよ!!」

「……………意味が分からないって。【最後に、よう茉莉!!】って言わ

れた時は焦ったよ。何となくスルーしたんだけど。」

「おかしくないって!!……………てか、おかしいと思ったんならスルーするな!!」

「ん、いや【代償】かと思って。聞くのは悪いかな、と。というかさ、どんな小説なの？それは。」

「推理小説だよ。」

「え!!もしかして探偵の口癖？」

「そうだよ。決め台詞の、【最後に貴方が犯人です!!】っていうのは痺れるぜ!!」

「……………」

英知の性格が、少し分からなくなってしまった。

10話 探索―04

「…………あの部屋って何に使われていたんだろうね？他の部屋はちゃんと内鍵があるのに、あの部屋だけ無かったけど。」

千鶴子さんの一件が有った後、少し気になって他の部屋のノブも見ていったが、どうやらあの部屋だけがああいう風になっているようだった。

「いや、俺に聞かれても困るけど……………そうだな、予想できるのは、設計ミスとか、後は、何かを閉じ込めるため、とか。」

一部屋だけ設計ミスする事なんてあるんだろうか？いやだからこそ設計ミスっていうのか？かといって閉じ込めるっていうのもまた物騒な話だな。

……………とりあえずは保留にしておこう。

「僕としては、千鶴子さんがヤケに落ち着いてたのが気になるんだよね。僕にはプレイって言ってたけど、実際は誰かに閉じ込められてた訳だよね？アレ。にしては落ち着き過ぎっていうか……………」

「まあ、それは、千鶴子の場合、いざとなればどうとでもなるからな。」

「どうとでも？」

「だから、【能力】を使って誰かに自分が閉じ込められている事を伝えればいい訳だから。今回は偶然　正直偶然っていうのは疑わしいと思うんだが　朶が鍵を持ってたからそれで開けたけど、

もし無くても壊せば済むし。」

なるほど。助かろうと思えばいつでも助けられるから落ち着いてたのか。

……………ん？という事は、

「アレ？それだとさ、僕たちが外でこそこそやってる時にどっちかに伝えればよかったんじゃない？状況が分かれば、それこそ僕たちだってもっと乱暴な手段も取れた訳だし。」

僕がそう聞くと、英知は少し苦そうな顔をして言った。

「……………多分、楽しんでたんだよ。プレイっていうのも、あながち嘘じゃないのかもしれないな。」

「……………」

それを聞いて、僕も何となく苦い気分になってしまった。

11話 屋上へ

廊下の端に隠れるようにして、その梯子はあった。

壁から鉤型の鉄棒が連続で飛び出している。

学校の側面とか、煙突の内側とかに着いているアレだ。

行き止りのように見える壁の右側に、ほんの少しだけスペースがあり、そこに隠れるようにそれは有った。

そのスペース自体も、全て影になってしまっほほど小さい。

普通に生活している限りでは、こんなもの見つけれないだろう。

二階への階段の時も思った事だが、コチラはますます「隠し」って感じだった。

「……よくこんなの見つけたね。」

「ああ、俺って探検好きだから、コレを見つけた時は燃えたぞ!!」

その気持ちは分からなくもない。

「……これ、本当に大丈夫なのか？めちゃくちや錆びてるけど。」

「だーいじょうぶだって!!前上った時も何とも無かったし。心配なら俺が先に上ってやるよ。」

無言で先を譲る。

英知はああ言うが、正直凄く不安だ。一応下で受け止める準備をしておこう。

ひよいひよいと、軽い身のこなしで、何の問題もなく上り終えた英知が、速く来いよ、と上半身を覗かせて呼ぶ。

やはりあまり気が進まない。

が、いつまでもこうしていても仕方がないし、屋上に興味が無い訳でもないの、自分の身体を前に押し出した。

握った先から、ポロポロと錆が落ちていく。

今すぐにでも折れてしまいそうだ。

ぐ、やっぱり止めようかな。何で英知は平気なんだろう。

やれやれ、下りる時の事を考えると気持ち沈むなあ。

いつ落ちてもおかしくないと、正直気が気ではなかったが、無事に上り終えた僕を、英知と扉が迎えた。

重厚な金属で出来ており、他のドアの悠に二倍はあるだろう。

城門の小さいバージョン、というイメージだった。

屋上は、何か特別な場所なのだろうか？

「ほら、開けてみるよ」

と場所を譲る英知。自分は前に開けているから、という事だろう。

思っていたよりもずっと軽い力で、その両開きの扉は開かれていった。

12話 茉莉の回想―02

「 なっ！！？」

開いた扉から飛び込んできた世界は、ただ、ただ、白かった。

手すりも、床も、

見渡す限りが白い。

なんだ？

なんなんだ？

振り返ると、扉は其処にしっかりとあり、その黒い色に、安心感を覚える。

淵の方まで歩いて行き、白い手すりに掴まり、改めて辺りを見回す。

やはり、見渡す限り真っ白だった。

景色というものが、無い。

世界が色を失ってしまったようだ。

でも僕の手は肌色で、いつの間にか横に立っていた英知の頭は黒色で。

僕たち二人は、この白い世界に混じり込んでしまった異物のようだ。

心配そうに見つめ込む英知の顔が見える。

嫌だ、怖い、何で、僕は、僕は

「ええ、ええ、はい。それで。ええ。ありがとうございます。ええ、はい。ええ、では、そういう事で。」

妙に甲高い声が、鬱陶しい。

本来ならば白いのであろう白衣のようなものを着た男が、電話を終えた。

僕の主治医だ。

電話を終えた奴は、気持ち悪い笑みを顔に張り付かせたまま、コチラへ近付いて来る。

「茉莉君。研究を次の段階に進める許可が出たよ。君も嬉しいだろう？」

ふざけるな。

嬉しいはずがない。

こんな、モルモットみたいな扱いを受けて。

相変わらず僕は、後ろ手に拘束されていた。

目の端に見える注射痕が、自分で見ても痛々しい。しばらく立てば消えるとか言っているが、正直怪しいものだ。

僕が無言で睨みつけると、奴はにんまりと笑って続ける。

「聞きたいかい？実験がどういう風に進むのか。聞きたいだろう？」
自分が言いたいんだろう？いちいち聞いてくるな。

僕が無反応でいると、案の定奴は勝手に喋りだした。

塞ぐことの出来ない耳から、嫌でも奴の甲高い声が入ってくる。

「【能力の抑制】の研究を前から僕が研究していたのは知っているだろう？……君の血液をちよつと貰つてね。」

勝手に取つておいてよく言つよ。

「おお恐い目だねえ………でまあ【ソレ】をね、【血清】として、他の患者にも試してみる許可がやつと降りたつてワケ。」

何だつて！！止める！！そんな！！

拘束具がキシキシと軋む、が、それだけだった。

「ふふ、いい反応だねえ。ま、君がどれだけ反対しよう？もう決まっちゃたんだなあ、残念ながら。君はせいぜいそこで、自分が奇妙な【能力】をもつてしまった事をくやむといいよ。」

高笑いを残して、男は部屋から出て行つた。

13話 認識―01

「……………い！！おいつて！！」

目の前に心配そうな英知の顔があった。

……………頭が痛い。

どうやら、僕は床に倒れているらしい。

背中に床の感触を感じる。

手触りは普通の床だ。

違うことといえば、ただただ白い事。

心配そうに覗き込む英知の後ろには、やはり白い 空間があつた。あれが空、なのか？

……………なんだよ。何だコレ。

不安定に、なる。

ああ、まずいな。

この場所にいると僕は、病院を思い出してしまう。

「……………白い。」

僕が意識を取り戻したのを確認すると、英知は僕に呼びかけた。

「落ち着け！！いいか茉莉！！【此处】も空は青い。お前にどう見えてるか分からないが、空は青いと【認識しろ】！！」

認識するとはどういう事だろう。

「……………だって、確かに【此处】の空は……………」

「違う！！青い！！俺を信じてそう【認識】するんだ！！」

よく分からないが、ここは従おう。

空は青い。空は青い。

【此处】の空は青い。

いつの間にか、白かった筈の空が、青くなっていた。

「……………え？」

起き上がって周りを見る。

空は青くなったが、他のものは相変わらず白い。

「大丈夫か茉莉。とにかく今は急いで下に降りよう。よく分からないが、今のがお前の【代償】の可能性もあるんだから。」

「……………」

「詳しい事は降りてから教えるから！！」

英知に引きずられるように、僕は屋上を後にした。

14話 英知の考察―01

僕らは一階の食堂へ来ていた。

そういえば昼飯をまだ食べておらず、それなら説明がてらついでに……という事だ。

僕の目の前にはカルボナーラ、対面の英知の前にはサラダが置かれていた。

「ん？そんなちよつとでいいのか、英知？」

「ああ、俺はもう食べてるから。」

「ふーん、悪いな。」

「いって、ゆっくり食べるよ。それにどうせ説明にも時間がかかるだろうし。……それで、本当にもう身体は大丈夫なのか？もしも

【代償】だったら大変だからな。」

「うん、大丈夫だ。有難う。」

それに、なんとなくだがアレは、【代償】とは関係がない気がする。そう、ただ、昔の事を思い出して気分が悪くなっただけだから。

「そうか………なら、説明を始める前に、いくつか確認する事があるから答えてくれ。」

確認する事？なんだろう？

僕は頷き、英知の次の言葉を待つ。

「まず一つ目、お前にはさっきの屋上の風景はどういう風に見えた

？」

人差し指を立てながら英知が訪ねた。

「どんなって、お前も見ただろ？とにかく真っ白だよ。ただただ真っ白なんだ。何も無い。そう、何も無いという表現がしっくりくるかな。」

英知はふむ、と少し考え、中指を立てて、言う。

「次に二つ目、お前が倒れた事と、その何も無い景色は関係があるか？もしくはあると思うか？」

どうだろう。アレは【代償】では無いと思うが、あの白い景色のせいで思い出したのだから……

「無くはない……かな。これは僕的感覺、というか感想みたいなものだから、言わないでおこうかと思ったけど、アレは多分【代償】とは関係がないよ。」

「三つ目。俺が【認識】しろと言った後、空はちゃんと青く見えたか？」

薬指を立てながら言った。

「それが一番僕には不思議なんだけど、見えたよ。今まで確かに真っ白だった筈なのに。いつの間にか青くなってた。」

英知は頷いて小指を立てる。

「四つ目。自分の言動を誰かにむりやり捻じ曲げられたと感じた事は？」

急に質問の傾向がえらく変わったな。まあもちろん答えるんだけど、………考えを、捻じ曲げる？どつという意味だろう。そのままの意味

なら、そんな事はないと思うが。

「ない……………と思う。」

「そうか。」

英知は何やら少し難しい顔をした後、親指を立てて言った。

「五つ目。これが最後で、一番重要な質問だ。」

そこで英知は一度言葉を溜め、何故か心配そうな顔をした。
意味が分からなかったが、僕は先を促す意味で首を縦に振った。

「茉莉、お前、【此处】に出入り口らしき物が一切無い事に
気付いているか？」

15話 英知の考察―02

「おそらく俺の予想では、【此処】にいる俺たちは、二種類の拘束を受けている。」

英知に言われて、始めて出入り口が無いという事を知り、いや気づき、呆然となる僕に、英知はさらに言葉を重ねて来た。
二種類の拘束。

拘束とは、どういう意味だろうか。言葉のまま捉えるなら、【此処】から出れないように拘束されているのだろうか。

……………だとしてももう一つは？

僕の顔をやはり何処か心配そうに見ながら、英知は言葉を続ける。

「二種類。つまり、肉体的な拘束

お前に今言った通り、

【此処】には出口が無い。だから俺たちは【此処】に知らぬ間に拘束されてしまっている。 、それと、精神的な拘束だ。」

「精神的な、拘束？」

「ああ、さっきの反応を見た限り、お前俺に指摘されるまで、出入り口の事なんて考えた事もなかっただろ？」

確かにそうだ。英知の言う通り、気付かなかったし、考えた事もなかった。

「それが精神的に拘束されている状態だよ。」

「いや、いや、待ってくれ、待ってくれ、よく分からない、というより、頭が付いて行っていない。」

「……………そうだな、例えばもう一つ、【そもそも【此处】はどこなのか？】って考えた事は？」

「……………それも、ない。」

「そういう事だ。つまり、俺たちは思考を縛られている。何かを考えたくとも、まず問題点に至れないように。」

「問題点に……………至れないように。」

「ああ、誰か分からないが、こんな事を仕組んだ人物にとって、都合の悪いことを知られない為に、だろう。」

そんな、そんな。僕は。【此处】に来てから一ヶ月にもなるのに。その間何の疑問も抱かず、この閉鎖された空間で暮らしていたのか。何の疑問も抱かず、【此处】などという不安定な言葉で満足して。僕だけじゃない、他のみんなも。

……………待てよ。

そもそも何故僕は今【此处】にいる？

どうやって？

どういう経緯で？

どういう理由で？

ああ、分からない。何も分からない。
何も、分からなく成ってしまった。

16話 英知の考察―03

「大丈夫か茉莉！？精神を強く持て！！自分の意思を持つんだ！！」

自分の、意思。意識。意思。

「無理矢理にでも一度気付いて 【認識】して しまえば、拘束は緩まる筈だ。俺がそうだったように！！だからしっかりと自分の意思を持て！！」

意思を、

考えるのが恐い。

【此处】は、

分からない事を考えるのが恐い。

だから、

新しいことを知ることが恐い。

僕は、

今有るものに満足していればいい。

僕は！！

「……………なるほどね、意思を強く持って、【認識】する、ね。」

自分を縛っていた見えない鎖が、一つ切れるのが見えたような気がした。

僕を見ていた英知は、一つ大きな溜め息を吐いて言った。

「お前なら大丈夫だと思ってたよ。さあ、早く食べないと冷めちゃうぞ、カルボナーラ。」

話の内容が衝撃的過ぎて、英知に言われるまで、すっかりカルボナーラの存在を忘れていた。

フォークを回してこぶを作り、口に運ぶ。

すっかり冷めてしまっていたが、何だか無性に美味しかった。

「……………コレも、誰かの【能力】なのかな？」

英知は英知でサラダにドレッシングを掛け、レタスを3枚程一気に頬張る。

「おそらくな。一人の能力なのか二人の能力なのか分からないけど。」

「精神的拘束と肉体的拘束を別々に担当してるって事？」

「ああ、出ないと、負担が大きすぎる。それ以前に、その二つは似てるようで全く種類の違う【能力】だから、一人で拘束してるなんて、物理的に考え難い。……………まあ、滅茶苦茶力の大きな【能力者】がいるって考えも捨てきれないが。」

「そんな絶大な力を持つ人がいたらどうしようもない気がするけど……………」

「まあそんなに暗い顔すんなって。さっき言ったように、その確立

は低いと俺は踏んでいる。それに、もし仮にそんな奴がいたとしても、付け入る隙はあるさ、俺たちがいい例だ。」

「付け入る隙、ねえ。僕は、なんていうのかな、君のお陰で、偶然、大丈夫だったけど、全員が全員呪縛から抜けられるとは限らないと思う。」

「まあな。けど別に全員が抜ける必要なんて全然ないぜ？そんな事をするより、俺とお前で犯人を捕まえればいい。」

「んな無茶な。」

「無茶じゃないさ、俺たちはもう、考える事が出来るんだからな。」

「知は力なり、って？」

「そうだ、分かってるじゃないか。」

「わからいでか。」

「……………それにしても、せめてあと一人くらい味方を増やした方がいいんじゃないか？」

「駄目だ。誰が犯人か分からない以上信頼出来ない。それに、そんなに時間も残っていない気がするんだ。」

「何の時間？」

「僕がそう聞くと、

「……………そうだな。有り体に言えば、俺たちに残された時間、かな。」

本気なのかどうなのかよく分からない口調で、英知はそう言った。

17話 不信と信頼とそれ以外の何か

「何の話をしているんだい？」

前触れも無く、

気配も無く、

唐突に、栞が現れた。

僕はもちろん飛び上がりそうになったが、意外なことに、不意を付かれたのか、英知も驚きを隠せないようだった。

しかし直ぐに平常心を取り戻したようで、冷静に栞に対処した。その胆力をちよつと分けて貰いたい。

「……………栞か。何でこんな所に？」

「おいおい、おかしな事を聞かないでくれよ、英知君。ここは食堂だよ？共用施設じゃないか。私がいる事に何の不自然がある？」

「……………ずいぶんと遅い昼食だな？もう四時になるぞ。」

ちらと腕時計を見て言う。もうそんなになるのか、千鶴子さんを見つけてから。

時間の流れを、今日は格別早く感じる。

英知の言葉を受けて、栞は若干あきれた様な顔をして応じる。

「そんなの私の勝手じゃないか。今日は少し用事があってね、遅い昼食になってしまった。それに何を根拠に昼食と決め付けたのかわらないが、四時なら晩飯の可能性も考慮して然るべきだと思うが。君らしくもないね、「探偵君」？」

最後の探偵君というのは皮肉だろう。

その後も二人は、聞きようによつては口喧嘩ともとれる会話を交わしている。

今まで気付かなかった　　というか気にも留めてなかった
が、この二人、実は仲が悪かったりするのだろうか？

それにしても。

少し用事？千鶴子さんが居た部屋の前で会った時は、散歩とか言つてなかったか？

それに。

それに、よく考えてみると先程の鍵の件は不自然すぎる。

よくは見えなかったが、あの鍵にはタグのようなものは付いていなかった。それなのに桀は、何故持っている鍵を、あの部屋の鍵だと断言出来た？

さらに、拾つたというのやはり疑問が残る……気がする。

というよりはむしろ、あの部屋の鍵は桀が掛けたんじゃないのか？

そのまま加速しそうになる思考を、中断させたのは桀の声だった。

「ちよつと茉莉君。どうして英知君がこんなにピリピリしているのか、教えてくれないか？」

「……………え？……………それは。」

なんだろう、何て答えればいい？

「別に機嫌が悪いわけじゃねえよ。そんなに穿って見るなよ、桀。」

言いよどむ僕の変わりに答える英知。対して桀は浅く溜め息を吐き、
「…まあ、いい。ところで君達は、さっきからいったい何をやって
いるんだ？」

と言つた。

そうか。栞にはまだ聞いてなかったか。あの時はドアの鍵の事で頭がいっぱいだったから。

「……………鞘香さんを探してるんだ。何処にいるか知ってる？」
僕がそう言つと、栞は無反応　かどろかは分からないが、僕から見れば感情の変化は伺えなかった　だったのに対し、何故か英知に睨まれた。

「なんだ、それならさつきそう言ってくれば良かったのに。」

視線を栞の方に向け、どこか投げやりな口調で英知は言う。

「で、何か知ってるのか？」

「図書館に入って行くのを見たよ。」

ピク、と眉を動かしてさらに聞く。

「それは、いつの事だ？」

「そうだな。確かアレは、今日の、十一時くらいだった。」

「十一時？……………そうか、ありがとう。よし、行ってみよう栞。」

言うが早いか、さつさと歩き出す英知。

僕は慌ててその後を追った。

18話 疑わしき者

「どうしたんだよ英知、さっきからちよつと変だぞ？」
食堂から続く長い廊下を歩きながら聞く。

「そうか？そう見えるのならそうなのかもな。」

「……。だいたい、何でさっき栞に鞘香さんの事を聞いた時、僕の事を睨んだのさ。」

「茉莉。俺はな、栞を疑っている。」

疑っている？

「え？」

「だから、栞が俺たちを閉じ込める【能力者】の一人だと考えている。」

「そんな……だけど……栞は……」

怪しいのかもしれない。

「栞は？」

「………分からない。」

「まあお前が栞を擁護したくなる気持ちも分かるけどな。怪しい事は怪しいんだ。二階の千鶴子が閉じ込められてた部屋の鍵の事もそうだし、さっき食堂へ入って来たタイミングもそうだ、他にもいろいろ、挙げだしたらキリがない。」

「…………でも、僕は。」

栞は。栞だけは疑いたくない。

「いいよ。お前の変わりに俺がその辺は背負ってやるから。その変わりと言っては何だが、お前は鞘香を疑ってくれ。」

「え！？鞘香さんを？でも英知は。」

「正直よく分からないんだ。アイツの可能性も結構な確立であるんだよ。この消失騒ぎだって、計画の一つなのかもしれない。けど、どうしても俺は、アイツ　　鞘香　　では無いと思ってしまふ。いや、思いたいんだな。だから、お前が変わりに疑ってくれ。」

「……………分かった。」

そつだ。僕は、栞を疑いたくない。

長い廊下の終わりが見えて来た頃、急に英知が言った。

「ん！？……………なあ茉莉、お前今何か言ったか？」

「別に何も。」

「おかしいな。確かに……………いや、気のせいかな？」

少し歩くと、かすかにノイズのような音が聞こえた。

コレの事か？英知が言ってるのは。いや、それにしては全然声には聞こえないし。

「やっぱり聞こえる。お前にも聞こえるだろ？行っちゃだめ、って。」

「悪いけど、聞こえない。」

「……………おかしいな。幻聴か？それとも誰かの【能力】か？」

と言って立ち止まる。

僕も耳を澄ましてみるが、やはり何も聞こえない。

さっき聞こえたノイズの様なものも、英知に言われたから聞こえた気がしただけだったのだろう。

「そろそろ着くし、先に図書館を確認してしまおうよ。」

「……………そうだな。気にしてても仕方ないか、もう聞こえないみたいだし。」

そして僕たちは再び歩き始めた。

6章 「アル・アジフ」 1話 図書館の支配者―06

「開けるけど、異論は？」

図書館のドアの前で立ち止まり、英知が聞いて来た。

「ないよ。」

「まあお前にある訳ないか。畏の可能性もあるんだが……………言
つてても仕方ないか、開けるぞ。」

相変わらず広い。

そして相変わらず独特の雰囲気だ。

「ああ、やっと来たんですね。」

ふらりと、暗闇の奥から黒衣の少年が現れた。

闇と一体化、いや、闇を従えているように見えた。

……………って、どういう感想を抱いてるんだ僕は。 穎娃君に
対して失礼すぎる。

「穎娃く……………ふぐっ！！」

呼びかけようとした僕の口を、英知の手が塞いだ。 何をするんだと
抗議しようとしたが、英知は真剣な表情で図書館の奥を見ながら言
った。

「気をつける、何か様子がおかしい。」

もう一度頼娃君の方を見る。今度は観察するように。

身体中から力が抜け切っているように、何だか全体的にだらんとしている。

俯いているので、表情を伺うことは出来なかった。

その様子はやはりどこか、闇を纏うという表現がしっくりくる。

いつもと様子がまったく違う。

「もう少し早く来てくれるかと思ったんですけどね。何をしてたんですか？」

警戒を解かずに、英知が返事をする。

「どうだろうな。俺はそれより、頼娃が何をしてたのかの方がよっぽど気になるね。」

「あはは、僕の私生活なんて聞いても仕方ありませんよ？」

闇に紛れて、体が半分見えるか見えないかの位置に立つ頼娃君は、少し楽しそうに言った。

「ところで頼娃、ココに鞘香が来なかったか？」

ゆらりと身体を揺らして、答える頼娃君。

「来ましたね。来ましたけど、1時間程前に帰りましたよ？」

手に持った本が………ほんの少し光った、か？

いや、多分見間違いだろう。

「そうか、それは困ったな。どこに行ったか知らないか？」

英知がそう聞くと、

実に。

実に。

楽しそうに、頼娃君は笑った。そして、ひとしきり笑って言った。

「ふふふ。本気で言ってるんですか、それ？英知さん。」

……………そろそろ何か発言しないと、僕が居る事を忘れられ
そんな感じだが、特に言える様な事もないし、雰囲気でもないので、
僕はさらに沈黙を続け、二人を見る。

「どういう意味だ？」

少し困惑気味に聞く英知。

頼娃君が左手に持っている本が、また一瞬光った気がする。
ゆるりと右手を上げ、僕らの中間を指差す頼娃君。

……………ん？何だ？別に何も無いけど？

何も無いと思ったんだけど、正面に見える英知は、何故か口をパク
パクしている。

どうしたんだろう？

どうしたのか聞こうとした僕の声と、

英知の叫ぶ様な声と、

頼娃君の宣言するような声が、

「どうした、英知？」

「鞘香！？」

「貴方達が入って来た時から、ずっとそこに居たじゃないですか。」
重なり、よく分らない音になって、どこか虚ろに響いた。

2話 太古の意思―01

英知も頼娃君も何を言ってるんだ？

鞘香さんなんて何処にも……………どこ……………に……………も？

そこに 僕と英知の中心に 鞘香さんは居た。

悲しそうな顔で。

困ったように、佇んでいた。

最初から……………そこに立っていたのか？

「をを、気付いちゃった……………うつん、気付いてくれたんだね。」

今にも泣き出しそうな顔と声で、鞘香さんが言った。

そこに居た事に、全く気付かなかった。いや、気付かなかったのか？

……………それにしても、英知が気付けないなんて事があるか？

「あ？え？鞘香、いつから？……………いや。いや！！そう

か！？もしかして！！最初から！？」

僕よりも英知の方が動揺が大きい。

「あはは、酷いですね、二人とも。気付いてあげなかったなんて。」

頼娃君が言う。

アレは……………あの、黒衣の少年は、本当に頼娃君なのか？

さつきから、台詞にいちいち棘を感じる。

「鞘香！？鞘香！！あの！！俺！！……………ごめん。」

憔悴仕切った様子で英知が鞘香さんに言った。

「あは、何が……かな。謝るなんておかしいよ英知。ほら、茉莉君も困ってるじゃん。」

無理矢理笑おうとして、余計に崩れてしまう笑顔。

僕は、何も、言う事が出来なかった。

「鞘香、俺は。」

同じ様に崩れてしまいそうな顔で、英知が鞘香の肩を掴もうとする。しかしその手は、何も掴めなかった。

それを見て、嬉しそうに笑う頼娃君。

本当に。本当に、アレは頼娃君なのだろうか。

「うふふ。ずれてますね。位置が。まだちゃんと認識できてないなんて。英知さん、本当に大切に思ってるんですか？鞘香さんの事。」

「あ、あの、私。ごめん!!」

微かに保っていた笑顔が、崩れそうになり、それを隠すように、鞘香さんは走って部屋を出て行ってしまった。

「鞘香!!」

しばらく呆然としていた英知だが、気を取り直し、慌てて後を追う。その斜め上から黒い巨大な物体が降り注ぐ。

何だアレ？

………っっ!!

「おい!!英知!!上!!前!!危ない!!」

冷静さを失っている筈なのに、それでも英知は僕の声に機敏に反応して、咄嗟に後ろに飛んだ。

ずずんという重量音とともに、その物体は着地した。

「うふふ。貴方たちにはもう少し聞きたいことがありますから、行かせる訳には行きません。」

背後から聞こえる頼娃君の声。

そんな事よりも。

今日の前に有るコレは。

現実なのか？

僕達の目の前には、オブジェだった筈の恐竜の骨が、意思を持ったかのように立ちはだかっていた。

3話 太古の意思―02

「穎娃！！てめえ！！このでかぶつを今すぐ退ける！！」

立ち塞がる骨を指差し、怒鳴る英知。

今にも穎娃君に掴みかかりそうな勢いだ。

「おっと、動かないで下さい。僕は別に、あなた達に危害を加えるつもりはありませんから。」

対照的に穎娃君は、あくまでも冷静に返事をする。

「うるさい！！退けろつつってるんだ！！」

英知が、ここまで感情をむき出しにしている所を見るのは初めてだ。

「だから、質問に答えてくれたらいくらでも通してあげますよ。」

聞き分けの悪い子供に諭すように、平坦な声で黒衣の少年は告げる。

「つつ！！」

口で幾らいつても無駄と判断したのだろう。

僕が止める間もなく、英知は穎娃君に向けて駆け出した。

それを遥かに超える速度で、僕たちの頭上を越えて行く巨大な骨。

「……………おいおい、あの大きさでなんて速度だよ。」

「……………まいったなあ。」

ますますこの状況を切り抜ける確立が下がってしまった。

あと20歩という所で、英知は行く手を塞がれた。

「くそつ！！！！」

「つぶつぶ。そろそろ質問に答える気になりましたか？……………」

なんなら、このまま踏み潰して差し上げても構いませんが。」

身体を流れるように揺らし、颯娃君は言った。

間違いない。

今、手に持っている本が光った。それも、先程までよりもかなり強い光だった。

おそらくあの本が、骨が動いている事と何か関係しているのだろう。

…………… なんとか、あの本を手放させる事が出来れば、あるいは。

どうする？

颯娃君の意識は、完全に英知の方へ行っている。

このまま静かに近付いていき、奪ってしまうか。

距離的には…………… きわどいが、やってみるしかないだろう。

視界に入らないよう、回り込むように少しずつ移動していく。

じりじりと、出来るだけ音を立てないように。

英知は、途中で僕の意図に気付いたようで、激昂したフリを続けながら、颯娃君の注意を引いてくれている。

いいぞ、もう少し。

もう少しだけそのまま颯娃君を引きつけておいてくれ、英知。

よし、颯娃君の背後についた。

このまま一気に走り込もう。

4話 太古の意思―03

「うふ、茉莉さん。そんな事を僕が許すわけがないでしょう?」

今まさに飛び込もうというタイミングで、急に僕の方へ体を向けて言う頼娃君。

「バレバレにも程がありますよ? あはは、それにしても酷い作戦だ。もう少し何かあるんじゃないですか?」

「……………いつから気付いていた?」

英知が問う。

どうやら、かなり冷静さを取り直したようだ。

「英知さん。あなた、演技の才能が全くありませんね。途中から、まったく怒りの質が変わりましたよ。」

そうだろうか?

鼻屑目で見ているからかもしれないが、なかなか真にせまった演技だと思っただけ。

実際、半分以上、本気で怒ってただろうし。

「まあ、そうですね。なかなか迫真の演技だと、実は僕も思いました。でも忘れたんですか? 僕の【能力】。」

……………しまった。

馬鹿か僕は。

完全に失念していた。

一ヶ月前の事とはいえ、そのぐらい覚えておけよ、自分。

「さつきと真逆の事を言いますけど、実際ね、凄いいと思いますよ、英知さんの演技。僕も途中まで完全に騙されていました。感情をあそこまで隠せるなんて、英知さん、過去に何かそういう訓練でもしたんですか？」

……………つまり、僕のせいかな。

英知は上手くやってくれていたのに、まったく、締まらないな。

というか、これからどうしよう。

正直、もうあまりいい案が浮かばない。

「ですから、そのままじっとしていて、僕の質問に答えて頂くのが、ベストの方法ですよ。……………おっと、動かないで下さい。つい手が、まあ、本なんですけど、滑って、踏み潰してしまうかもしれません。」

話の途中で、英知をけん制する事も忘れないあたり、ますます抜け目がない。

「ではまず茉莉さん、もう変な気を起こさない為にも、英知さんの横に移動してください。」

本をまるで武器のように構えながら、宣言する頼娃君。

……………ここは、従うしか、ないか。

あくまで警戒を解かないようにしながら、英知の横に移動する。僕のミスによって状況は悪化したと言ってもいいくらいだが、別に英知は責める様子も無く、状況を観察していた。

5話 穎娃の能力（改）

「で？何が聞きたいんだよ。」

警戒を続けながら、英知が聞く。

「回りくどい話も結構好きなんですがね、今回は単刀直入に聞きます。……貴方達のどちらかが、【此处】を作っているんですか？」

穎娃君もすでに気付いていたのか。

「【此处】？作る？それは何の事だ？」

あくまで知らないフリをする英知。イニシアチブを取りたいのだから。でも

「無駄ですよ。貴方だけならいざ知らず、今ここには茉莉さんもいるんですから。」

「ちっ！！全くめんどくさい【能力】だな！！」

ん？

英知がめんどくさいと言った瞬間、穎娃君の顔がわずかに歪んだ。気がしたが、直ぐに何事もなかったかのように話を続ける。

「さあ、無駄だと分かったら、いい加減話してください。【此处】の構成に関係しているのか、いないのか。」

「してねえよ！！大体そんなのわざわざ聞かなくても、それこそお前のその忌々しい【能力】で探ればいいだろうが！！」

「いちいち五月蠅いですね！！貴方達は馬鹿みたいに、ただ僕の質問に答えていればいいんですよ！！」

怒鳴りながら、本を振り下ろす。

それに呼応して、恐竜の右足が、僕たちから、そう離れていない位置に振り下ろされる。

圧倒的に有利な立場の筈の頼娃君は、しかし英知の言葉に過剰な反応を示す。

自分の【能力】を馬鹿にされるのがそんなに嫌なんだろうか？

「……………馬鹿にされるのが嫌なのではなく、分かったような言い方をされるのが嫌だけです。……………何も知らないくせに。」

「分かったような、言い方？」

……………アレ？その前に、今僕喋ったかな？

何かさつきから、僕の考えた事に頼娃君が反応しているような……………

……………いや、気のせいかな？

「ああイライラしますね！！その鈍さ！！もしかして僕を怒らせる為にワザとしてるんですか！？」

「いや、え？どどういう事？」

「だからっ……………だから！！ああもうめんどくさい！！僕の能力は【人の心を読む】事です。」

「だからそれは……………知ってるよ。」
感情が見えるという話だった。

「違いますよ茉莉さん。……………鈍いのもそこまで来ると、罪になると知るべきです。」

語尾には僕に対する苛立ちが、色濃く出ていた。
何が、何でそんなに……………もしかして、信じたくないけど、そういう事なのか？

そうして頼娃君は、僕が気付いたという事を読みとり、冷酷な笑みを浮かべ、ダメ押しのように宣言した。

「そうですよ、前に言ったのは嘘です。僕は……………人の思った事をほぼ完全に読む事が出来ます。」

6話 姿無き訪問者―01

「……………話を戻します。閉じ込めている【能力】と関係ない、というのはおそらく本当なんでしょう。始めからそちらは、僕もあまり期待していませんでしたし。質問を変えます。英知さん　　っ」
ゆらりとゆれる。

気のせいかもしれないが、少し苦しそうにも見える。

「　貴方が僕らを閉じ込めている【能力】について、少し前からいろいろ探っているのは知っています。調べて分かった事を全て話して下さい。」

「断る。」

少しの躊躇いもなく断言する英知。

それは、別に話してもいい気がするんだけど。

むしろ話して、頼娃君にも協力してもらえば……………

「……………やれやれ、いい加減自分の立場をわきまえて欲しいんですが。」

そこで僕の方へと顔の方向を動かし続ける。

「……………茉莉さん、そう思うのなら英知さんを説得してくれませんか？それとも、貴方が話してくれるのでも構いませんが。」

話すと言っても、僕はまだ、ほとんど何も知らないような状態だし。となると

「なあ英知、話してもいいんじゃないか？頼娃君にも協力してもらってさ　　っ」

「駄目だ。」

取り付くしまもない返事が返ってきた。どうしてそこまでかたくなに拒むのだろう。

と、その時、背後のドアがギギギと開く音が聞こえた。

誰が入って来たのか？

英知も頼娃君も、もちろん僕も、意識をそちらへ向ける。

しかしどういう事なのか、

はたしてそこには、誰もいなかった。

?

アレ？おかしいな。何で誰もいないのにドアが開いたんだろう。
僕たちは、数秒間無言でドアを見守ったが、誰かが入ってくる様子もない。

そして、結局誰も通らないまま、開いた時と同じように、ひとりでにドアはギギギと閉まった。

ドアに刻まれた赤い筋が、嫌な感じに栄えた。

……もしかして英知がやったのか？

僕もまだ知らない、そのなんらかの【能力】をもってして。

そう思つて英知の方を見るも、その表情からは何も伺う事は出来なかつた。

今の出来事に驚いているようにも見えるし、全く動揺してないようにも見える。

結局、見た目からは何も分らない。

……もう少し、観察力を鍛えた方がいいな、僕も。

なら、**颯**娃娃君が？

でも一人が二つの【能力】を持つなんて事は無い筈だ。

僕の知る限りでは、**だけど。**

顔を正面に向け直すと、ちょうど頼娃君と視線が合った。

「茉莉さんがやった………のでは無いようですね。という

事は、英知さんでしょうか。だとしても、今の一連の動作にどういう意味があるのか、全く見当が付きませんが、何かを外に出す訳でもなく。何かを中に入れる訳でもなく。どうなのでしょう、英知さん？」

口調から判断するに、どうやら頼娃君でもないらしい。
となるとやっぱり英知か？

「さあな。俺がやったとは限らないし、例え俺がやったとしても、お前に教える義理はないな。」

「とはいえ、消去法で、貴方しか残らないんですよ。」
そこで一つ大きなため息をつく頼娃君。

「……………分かりました。そんなつもりは無かったんですが、少々痛めつけないと、貴方は分からないようですね。」

ぶらり、と力なく垂れ下がっていた腕を、ゆらゆら、とどこか頼りなく上げていく頼娃君。

本がだんだんと鈍く光りだす。

頼娃君の腕と連動して、恐竜の骨の足の部分が、振り上げられる。それを見ても、英知は眉一つ動かさない。

いやいや！！そんな余裕かましてる場合かよ！！
英知って怒ると以外と頑固なんだなあ。

とかそんなのんきな事を考えてる場合じゃなく。

……………本気で不味いな、どうしようか、コレ。

8話 図書館の支配者―07

「最後にもう一度聞きます。僕に何か話すつもりは、ありますか？」
腕を振り上げた体制のまま聞く頼娃君。

「無いよ。少なくとも今のお前には。」

「そうですか。では」
言って、ゆらりと腕を振り下ろす。

「ちょー！！ちよつと！！待ってよー！！」
それを遮るように口を挟む。

どうにかこうにか間に合ったようで、頼娃君の手は止まっていた。
英知に何か考えがあるのかとも思って黙っていたが、もう限界だ。

何を考えているんだ英知は！！僕が止めていなければ本当に……
！！

頼娃君だつて！！

「どうしちゃったんだよ！！頼娃君！！本気か！？本気でそんな事をしようとしたのか！？冗談じゃ済まないかもしれないんだぞ！？
怪我じゃ済まないかもしれないんだぞ！？」

僕が興奮して捲くし立てるのを、頼娃君は冷めた目で見ていた。
その目には、いつかの綺麗な瞳の輝きは、欠片ほども伺う事は出来なかった。

本当に。本当にどうしてしまったというんだ。
僕の話をも黙って聞いていた頼娃君は、やがて静かな声で返した。

「……………それで？」

「それで、って。」

「だから、それがどうしたんですか？別に僕だって冗談でこんな事
しませんよ。」

「冗談じゃない、って、それじゃあ……………」

「ああ、まあ、殺すつもりはありませんよ、もちろん。骨を二三本
折って、それで」

「それを！！それを本当に何とも思わないのか！？どうしちゃった
んだよ、頼娃君！！君はそんな子じゃ」

「分かったような事を言わないでください！！」
突然大声を出す頼娃君。

「そんな子じゃない？違いますね。僕はもともとそういう性格です。
貴方に僕の性格を決められたくは無い。そう、分かる筈がないんで
す。僕の気持ちなんて。」

「そんな　　そんな事あるもんか！！！！君は！！！」

そこで不意に、今まで黙っていた英知が口を開いた。

「……………茉莉、ちよつと落ち着け。なあ頼娃！！ちよつとだけ
時間をくれないか！！茉莉と二人で相談したい事がある！！」

「……………少しなら待ってもいいですが、その後に今度こそ、
【能力】について知っている事を話してもらいますよ。全て。」

「それも含めて相談したいんだよ。」

「……………ちょっとというのは何分くらいですか？」

「20分程。」

「話になりません。5分です。」

「15分。」

「…10分です。それ以上は待てません。」

「分かった。よし、ちょっと来い、茉莉。」

言いながら、英知は部屋の端の方へと移動する。

頼娃君の【能力】の事を考えると、余り意味が無いように思っけど、僕もそれに従う。

そんな僕らに、後ろから頼娃君が声を掛けてきた。

「分かってると思いますが、もし逃げようとしたら
手に持つ本が再び鈍く光る。」

「ああ、分かってるよ。」

英知は、背中を向けたまま返事をした。

9話 英知の考察104

「よし、ここまでくればいいか。」

颯娃君から10メートル程離れた位置で足を止める英知。

「あまり時間がある訳でもないから、手短かに話すぞ。」

「うん。それはいいんだけどさ、さっきから英知ちよっとおかしくない？頑なというか、何というか。」

「ん？そうか？別にそんなに普段と変わらないつもりんだけどな。俺としては……………まあ、お前がそう見えるのならそうなんだろう。鞘香のことが気になって、どうしても、な。」

「ふうん」

それだけだろうか。もっと何かあるように感じたんだけど。

「それでさ、確かに鞘香さんの事は心配だけど、それなら尚更話しちゃった方がいいんじゃない？その、調べて分かった事を。それで部屋から出た後、手分けして鞘香さんを探せばいいんじゃない？」

「いや」

そこで言葉を切り、颯娃君の方を伺いながら続ける。

「それはいろいろと不味いな。」

「いろいろと？なんでさ？」

食堂でやったように、人差し指を立てつつ言う英知。

「まず、話したからと言って、颯娃が俺たちをこのまま解放してく

れるとは思えない。」

「そんな、でも約束したじゃないか。」

「約束はしてないさ。向こうがそう言ってるだけで。」

「……………確かに、そうだけど。……………そうだけど！！頼娃君は約束は守るよ！！」

「……………本当にそう思うのか？」

どこか冷めた目で覗き込んでくる英知。

やめてくれよ！！何で英知までそんな顔をするんだよ！！

確かに、今の頼娃君はおかしいけど……………いや、本当におかしいのか？自分で言うようにアレが素の……………違う！！頼娃君は。頼娃君は！！

英知の目を見て答える。

「……………そう思う。」

英知は何か言いたげに僕を見ていたが、無言のまま視線を逸らし、

「まあ、それもいいんじゃないか。」

とつぶやくと、中指を立てて続けた。

「次に、あの骨なんだが……………」

頼娃君の後ろで強い存在感を示す骨を指差して、英知は言った。

「……………あれはおそらく、鞘香の作品だ。」

10話 英知の考察―05

「あの骨が……………鞘香さんの、作品？あんな大きな物が？」

「ああ、ほぼ間違いないと思う。」

「いや、でも、あんな大きな作品を作れるのか？僕が今まで見た限りでは、とてもあんな物を作れるとは思えないんだけど。」

「……………いや、俺自身、言ってて信じ難いんだけど、なんていうのかな、その、感覚？というか雰囲気、というか……………とにかく、そうとしか考えられないんだ。」

英知にしか分からない感覚があるのだろう。そこまで言うのなら、アレは鞘香さんの作品なんだろう。

「それで、それが何が問題なんだ？」

「……………うん、問題というか……………アレが確かに鞘香の作品なら、あの骨は水に弱いという事になる。と思う。」

珍しく歯切れが悪いな。鞘香さんの作品の弱点が水、というのは何となく気付いてたけど、確かに、あの大きさに効くのかどうかは疑問が残る。というよりそもそも、

「仮にアレが鞘香さんの作品だとしても、そんな量の水、どこから持ってくるんだ？」

「それは俺に考えがある。千寿に雨の天気を【見て】もらえばいいただ」

俯いて難しい顔をする英知。そのままの体勢で続ける。

「どう考えても、もう一手足りない。」

千寿さんに見てもらおう？どついう事だろう？

「千寿さんに見てもらっていつのは？どついう？」

「……………」

黙り込む英知。

「英知？」

「……………話してもいいんだが、それを話す前に」

もう一度頼娃君の方を軽く伺う英知。

「アイツの、頼娃の【能力】についての俺の予想を先に話すよ。」

そうか。何でもかんでも聞かない方がいいな。頼娃君に僕の心を【見】られたら元も子もない。

「頼娃の【能力】だけどな、鍵は、【視線】だと俺は考えている。」

11話 疲労

視線？ 穎娃君に見られたら心を読まれるという事だろうか？ だとしたら真正銘防ぐ手段がない。ん？ でもそれだと英知はどうやって【見】られるのを防いでたんだ？ 別に姿を隠すような行動はしてなかったと思うけど。それ以前に隠れられるような場所も無かったし。ああそうか、こういうのか詳細は分からないけど英知の【能力】で壁を作ったりしてたのかな。【見えない手を動かす能力】てとがあるかもしれないな。それだとさっきのドアが勝手に開閉した現象も説明がつくし。相変わらず目的は分からないけど、それは英知の事だから何か

「で、
つまり
？
だから、
り？」

それに穎娃君もどうしちゃったんだろう。アレはあきらかにおかしい。アレが素の性格だと言ってたけど、やっぱり僕には信じられない。信じたくない。千鶴子さんの事といい、鞘香さんの事といい、今日は何か色々な事が変だ。【此处】が少しずつ変になっていってしまってるみたいで、嫌な感じだ。大体【此处】は

「おい！！こんな所で寝るなよ！！茉莉！！」

「……え？ あ、ああ。悪い。別に寝てないよ。」
しまった。またいつの間にか考え込んでしまった。

英知は少し呆れた顔をしてため息を吐く。

「寝てないのは分かってるよ。目、開いてたしな。……………大丈夫なのか？ やっぱりまだ体調がよくないんじゃない？」

「いや、大丈夫。すぐに考え込んじゃうのは僕の悪い癖なんだ。」

「そうか？しっかりしてくれよ、ここが踏ん張りどころなんだから。」

腕時計をちらりと見て続ける。

「……もうあんまり時間がないな。やっぱり10分じゃ足りなかったか。」

足りなかった、というか、僕たちが無駄話をしてたせいじゃ……いや、半分以上僕のせいなんだけどね。

「よし、本題に入るぞ、あの骨をどうするかについてだ。」

「颯娃君からさっきあらずと見られてるのは問題ないの？」

「大丈夫だろ？さすがに読心術は使えないだろうし。」

「いや、でも見られてたら心も【見】られるんじゃない？」

僕がそう言つと、英知はキョトンとした。そして自分の額に右手を当てると、僕の額に左手を当てた。

「……ん、熱はないみたいだけど。……この騒動が終わつたらちよつと寝た方がよさそうだな、茉莉。多分お前、自分で想像してるより、遥かに疲れてるぞ。」

……そうかもしれない。今日は色々な事がありすぎた。英知の言うとおり、今日はゆっくり休もう。
その為にも

「ありがとう。時間も無いし、二度手間で悪いんだけど、もう一度話してくれるかな、頼娃君の【能力】について。」

12話 頼娃の能力（改々）

「ま、要約してしまえば、頼娃とは視線を合わせるな、って事だな。」

英知は、さっきは2分くらいかけた話を、ものの5秒で終わらせた。

.....。

【話が長くなる原因の半分以上は僕にある】、という今さっきの認識を、【少なくとも半分は英知のせい】に、心の中でそっと訂正した。

英知はこういう時、話が相当回りくどくなる。推理小説の読み過ぎで、どこぞの探偵みたいな話し方をするからだ。

答えに至るまでに、余計な道を回って回って、結論には最後の最後に辿り着く。

.....さっきだって、始めからそう言ってくれば良かったのに。

「...つまり、視線が合った時だけ、心を【見】られるって事だね。」

「そういう事だな。さらに付け加えるなら、【その時に考えている事ほど読まれ易い】んだろう。さっき俺に「そういう訓練でもしたのか？」とか言ってたのは、おそらくカモフラージュだ。」

「.....でも、僕が頼娃君の後ろに回りこんでる時にも気付いたよね。アレは？」

「あーあれか。アレは……………」

少し言いよどむ英知。

「俺のミスだ。あの時は鞘香の事でカツとなつてたからな。ついイライラして目を合わせちまった。まあ、そのお蔭でヤツの【能力】についてある程度の確信を得られたんだが。」

それはつまり、先程の作戦が失敗したのは、半分は英知のせい、だから先程も別に怒った風もなくという……………いや、考えないでおこう。英知はそんな奴じゃない。

「で、あの骨に雨を当てる方法だけど……………」

うん、一番大事な所だ。それによって今後の行動が決まる。僕は思わず前のめりになり、

「すまん、思いついてない。」

そのまま前に倒れそうになった。

「いやさ、それを二人で相談しようと思つてたんだが、どうやら時間が足りなかつたみたいだ。……………あと一分ぐらいか。」

「……………ほとんど何も決まつてない気がするの、は気のせいかな？」

「気のせいだ、多分。……………そうだな。どうにかしてもう少し時間を稼いでみるから、何か作戦を考えてくれよ、茉莉。」

え、僕が!?

いやそりゃ頼りっぱなしにするつもりは無かつたけど、それにしてももう少し情報が欲しい所だ。

「とりあえず千寿さんの【能力】だけでも……………」

「時間です。」

聞こうと思ったら、頼娃君の静かな声に遮られた。

えー？どうすんの。

目で英知に問いかけるが、英知は

「期待してるぜ、相棒。」

と言って、先に頼娃君の方へ戻って行ってしまった。

.....いや、期待されてもさあ。

13話 駆け引きⅠ 01

カツ、カツ、と颯娃君の方へと歩く。

巨大な骨が、いやがおうにも威圧感を与えてくる。

んー、こんなの本当に止められるのか？

…水が弱点ってさっきの話では出たけど………うーむ、改めてじっくり見ると、とてもとても。水なんかで何とかなるとは思えない。

コツ、コツ、とさらに歩を進める

黒衣の少年は、ひた、と僕を見据えている。

目を見なければ大丈夫な筈なのだが、不安な気持ちがあふれてくる。

近づくにつれ、さらに存在感をます巨大なオブジェ。今でもまだ僕は、心のどこかで、こんなものが動く筈がないと思っている。

………水。水、か。結局千寿さんの【能力】っていうのはどういうものなんだろう。【雨を見る】とか言ってたか。

………うーん。意味不明だ。雨が降っているのを見るのなんて、僕にだって出来る。となるとやはり別の意味があるのだろう。

【見る】というのがよく分からない。

【降らす】なら【天候を操る能力】とか色々考えられるんだけど。

………【見る】か。やはりもう少し具体的な事が分からないと、作戦を立てづらい。

カツン、カツン。

英知の横に着いた。結局何も思いつかないまま。

「さて、では、どうぞ。」

あくまでも静かに、英知に対して発言を促す頼娃君。

「あー、そうだな。その前に、もう一つだけ聞いてもいいか？」

「これ以上の質問はお断りします。」

「待て待て。今聞こうとしてるのは、【調べて分かった事】と関係のある質問だ。その情報によっては、俺の持つ考えの意味が変わってくる。」

「……………こちらをちゃんと見て、もう一度行つて下さい。」

長い沈黙の後、頼娃君はそう言った。その口振りからして、英知が【能力】についてある程度気付いている事を踏まえた上での質問だろう。

英知は、顔を頼娃君の方へ向けて言った。

「今から聞くことは、【此处】を調べて分かった事と関係がある。」

「……………いいでしょう。質問を許可します。が、こちらからも一つ提案があります。」

英知の体がピクツと震える。

「今後発現する時は、きちんと互いの目を見て話す事にしましょう。なにせ真剣な話ですからね、相手の目も見ないというのは、失礼

に当たるでしょう?。」

頼娃君は、皮肉交じりにそう言った。

【能力】を知った事で、こちらが有利になったかと思ったがとんでもない。

あの話し合い中に、【視線】について僕たちが気付く事など、想定済みだったという事か。

英知と一瞬視線が合う。が、どう返したものか。

「俺ってさー、人見知りだから、それはちょっと」

苦しい言い訳をする英知だが、

「駄目ですね。」

あっさり否定される。やはりここは譲らないか。

英知の質問がどういうものかは分からないが、多分それが時間稼ぎの策なのだろう。となると、その話の間に僕が何らかの策を思いつくしかない。

不安しかないが、正直もうそれしか、この状況を打開する手段などないだろう。浅く頷いて、英知に合図を送る。苦い顔で、英知も軽く頷き返した。

「
分かった。」

少年は、にこりと笑むと、言った。

「では、質問をどうぞ。」

14話 駆け引き102

考える。

考える。

この状況を切り抜ける、手段を。

そんなものは無いのかもしれない。

英知ですら何も思いつかなかったのだ。

探偵を自負する英知でさえ。

…いや、何も、ではないのか。

むしろ何かは思いついていたと考える方が正しいだろう。

でないとなんの10分間の意味が、まるで無くなる。

現に、「一手足りない」とも言っていたし。

一手。英知は少なくともそこまでは考えていたのだ。あと一つ何かがあればこの状況を解決できる所まで。

……一手か。何が足りない？人か？物か？それとも

いや、違う。今考えるべきはそこじゃない。

そこは最後でいい。まずは英知と同じ段階まで辿り着かなくては。何か最後の一つが必要となる段階まで。

考える。

考える。

僕は【此处】へ来てから、考えるという事を余りしてこなかった。というよりは、何者かに邪魔をされて、させてもらえなかったのだ。

鈍ってしまった頭を、回転させる必要がある。
今頼れるのは、自分しかないのだから

「どうしたんですか、質問があるのなら、早く言って下さい。無為に過ごせる時間を、僕は余り持ち合わせていませんので。」
頼娃君は、少し笑いを帯びた声で言う。

「今言うよ、そんなに焦るなって。……それにしても、お前は本当にややこしい言い回しが好きだな、頼娃。」
たいして英知は、落ち着いた声で返す。

状況は、こちらにとつて相当悪いのに、普段と少しも変わらぬ声で、やはりそのあたりは大物だと思う。

「今のをややこしいと言うようでは、貴方の底も知れてますね。」

「別に今の言葉に対して言った訳じゃないさ。……お前さ、いつからそんな憎まれ口を叩くようになったんだ？」

「元からですよ。ただ、今までは声に出さなかっただけで。」

「心の中では思ってた？」

「そうです。」

「ふん。じゃ、何で声に出すようになったんだ？」

「……そんなのどうでもいいでしょう。気分ですよ。」

「その本のせいじゃないのか？」

英知がそう言った瞬間、頼娃君がごくわずかに動揺した。僕のが間違っていないければ、だが。

「……………急に变なことを言わないで下さい。本のせい？何を言いますかと思えば。頭は大丈夫ですか？」

しかし返す言葉には動揺など微塵も含まれていない。それどころか、さらに棘を多めに含ませた言葉を英知に返す。やはり思い違いか。

「頭は大丈夫だと思うぜ？それでさ、その本の題名だけど、恐らく

」

「だから！！それがどうしたんですか！！そんな事に何の意味があります！？早く質問に移って下さい！！さっきも言ったように、僕は時間的余裕を余り備えていませんので。」

急に怒鳴る頼娃君。あの本の題名に、何かあるのか？

いや、単純に、英知が時間を引き延ばそうとしているのに気がついたのだろう。

「やれやれ。短気は損気だぜ？エセ支配者さん。」

「ふ。貴方だつて、充分口が悪いと思いますけどね。迷探偵さん。」

そんな事を考えている場合ではないと分かっていたが、少し考える。なるほど、「名」ではなく「迷」という事か？

そんなの口頭だけでは伝わらないんじゃないかとも思ったが、英知はそれこそ直ぐに理解したらしい。

「は。お互い様だな。」
と返していた。

この二人、実は気が合うのかもしれない。

「……で、質問だが」

英知はそこで一度言葉を切る。どの本の探偵の真似なんだろうか。いや、結構みんな似たようなものかもしれない。

「千鶴子さんと一番最近会ったのはいつだ？」

僕は、【此处】に来てから少し受動的になり過ぎていたかもしれない。

与えられる情報に満足して、それを疑ってみる事を、半ば放棄していた。

英知が教えてくれる情報も、栞が与えてくれる情報も。

一度与えられれば、それは全て正しいものとして、認識して来たような気がする。

それは誰かに操られていたとかではなく。

きつと僕の弱さだ。与えられる事に慣れてしまった、僕の弱さだ。

【此处】に来るまでは、そんな事は無かった筈だ。いや、まだ思い出せないんだけど。

だとしても、今ここで、自分で考えるということを出すべきだ。情報というものは、自分で取捨選択してこそ価値を持つものなのだから。

つと、違う。駄目だ。いや、違わないんだけど。

また思考が脇道に逸れてしまっている。今考えるべき事から微妙に。

とりあえず、大量の水は、千寿さんから得られると仮定して考えを進めよう。

英知のその発言から疑い始めてしまったら、本当にキリが無くなるし、今ここに至って、英知を疑う事に何のメリットもない。

とにかく、千寿さんの【能力】は、【雨を降らせる】という事にしておこう。

詳しい事は、必要が出て来た時に詰めていけばいい。

頼娃君は、少しの間何の反応も示さなかった。

というよりは、どう反応していいのかわからないようだった。

「……………それが本当に、【此処】の事と何か関係があるのですか？」

「あるから聞いているんだろう？それにそんなに心配なら、俺の心を【見】ればいいじゃないか。」

「いえ、分かりました。答えましょう。」

「ふうん。ずいぶん物分りがいいんだな。もっと疑って掛かると思っただが。」

「疑ってばかりでは何も始まりませんからね。」

「は。よく言うぜ。」

その言葉の終わりに英知は、僕にだけ聞こえるように、ポツリと言い足した。

「回数制限があるのかもしれない。」

もしそうならば、現状がかなり楽になる事は間違いない。

だがそれはまだ、あくまで英知の憶測の域を出ない。

今の一瞬のうちに、すでに【見】ていたという可能性も否定できな

い。

穎娃君は、やはりどこか冷めたような声で言う。

「千鶴子さんですか、……………昨日、ですね。」

「昨日の何時ごろだ？」

「だいたい6時くらいです。」

「それは夕方のか？」

「そうです。聞かなくてもそのくらい分かりそうなものですが。」

「念の為だよ。何時に別れた？」

「7時…………19時です。」

「何の為に会ったんだ？」

「……………そんなプライベートな事が、本当に【此处】の事と関係があるんですか？」

「あるから、聞いている。何度も言うが、どうしても気になるなら【見】るといい。」

「……………どうでしょうかね。」

穎娃君は、そこで少し逡巡した。ように見えた。

【能力】を使ったかどうかは分からない。

が、回数制限とまではいかないまでも、【代償】の関係だろうか、積極的には【能力】を使いたくないような印象を受ける。

やがて少年は、小さく溜め息をついて言った。

「……………以前から探している本がありましたね。それを探すのを手伝って頂いてました。」

そういえば、一ヶ月程前にこの部屋を訪れた時も、同じような事が有った。……………と、思う。

という事は、一ヶ月間も探してるのか？いや、もっと前からかもしれない。

僕は、この果ての見えない図書館から、一冊の本を探している自分を想像して、少しげんなりした。

駄目だ。僕にはとてもじゃないが出来そうにない。

「それはその本か？」

言いながら、英知は頼娃君の手に納まる本を指差した。

「そうかもしれませんが、そうでないかもしれません。」

「つまり答えたくない、と？」

「……………」

その質問に対して頼娃君は何も答えず、その結果、暫しの間沈黙が場を支配した。

16話 駆け引きー04

それで、だ。

水を千寿さんから得られるとしても、まだ問題がいくつもあるな。

1、千寿さんが水を用意したとして、それをどう掛けるか。

雨を降らせる事が出来るなら、これはさほど問題ではないように思える。その雨が掛かる位置に骨を誘導してやればいいんだから。

2、骨をどうその場所まで誘導するか。

1にも関係してくるけど、これは千寿さんの【能力】によるな。室内でも降らせる事が出来るのなら、この問題は有って無いようなものだけど……………いや、あまり樂觀視はしない方がいいだろう。かといって、室外にあの骨を連れ出すとなると、これはかなりやっかいな話になってくるな。あのサイズのドアを、骨が通れる筈もないし。それに動きもめちゃくちゃ俊敏だから、誘導なんてものが成立するものなのか？第一、【此处】で屋外なんていったら、屋上しかないんだぞ？僕が知る限りでは。もしかしたら、英知の【能力】で何とか出来るのかもしれないし。……………いったん、保留にしておこう。

3、英知の【能力】が何なのか？

今更言ってもしょうがないが、さっきこれだけでも聞いておくべきだった。作戦を考えるに当たって、この情報はかなり欲しい所だ。それによつて、出来ることと出来ないことかなりの差が出てくる……………どうする？英知の【能力】も勝手に想像して作戦を立てるか？……………いや、それは違った時のリスクがあまりに大きい。が、英知は【代償】を持っているんだから、何らかの【能力】は持っている

る筈だ。それを生かさない手はない。生かさない手はないんだけど………くそっ！！コレも保留だ。

4、そもそも千寿さんとどうやって連絡を取るか

コレはなにげに一番難しい問題じゃないのか？この問題がクリアできないと、そもそも作戦も何もない。にも関わらず、外に出る方法が思いつかない。僕が英知が一度部屋を出るのが一番現実的なのだが、2でも少し触れた通り、あの骨の素早さは異常だ。あの大きさであの速さ、っておかしいだろ明らかに。まあぼやいても仕方ないんだけど。あの骨がある限りそれはほぼ不可能と言えるだろう。かといって他に方法があるかと言われると………ないんだよねあ、残念ながら。

5、ドアの開閉の謎。

アレにどんな意味があるのか、結局やったのは英知なのか。その辺を考える必要があるな。

………英知の【能力】を予測する所から始めた方がよさそうだ。直接聞けたら一番楽なんだけど、今この状況で、それは出来ない相談だろう。

「質問は以上ですか？では、調べて分かった事を伺いましょう。」
少年は緩やかに切り出した。

先程までの沈黙など、まるでなかったかのように平素な声で。

「おいおい、自分で話を切っておいてよく言っぜ。」

「答える必要がないからです。」

「それはお前が決める事じゃないな。」

「いいえ。僕が決める事です。繰り返す事になりますが、貴方は自分の立場というものをもっと理解するべきです。」

頼娃君の背後に佇む骨が、存在を誇示するかのように大きく震える。

それを見ても英知は動じず　内心どうかは知らないが、僕からはそう見える　あくまで純粋な話し合いに持ち込もうとする。

「なら俺も話さないまでだな。」

「っ！！ですから！！ああ！！何故貴方はそんなに！！」

英知を睨み付けるその目には、明らかな苛立ちが見える。

……………　というか、本当に、英知は骨が怖くないのか？いくらなんでも挑発し過ぎだと思っただけ。

「……………」

「……………」

またも暫しの沈黙が流れた後、結局折れたのは頼娃君の方だった。

「……………仕方ありませんね。答えましょう。」

話すことに問題が無いと考えたのか。英知の頑固さに辟易したのか。それとも。

何にしる一安心だ。頼娃君が力に頼る事を危惧していたが。

少々痛め付けた所で、口を割らないと判断してくれたのかもしいい。

「確かにこの本は、昨日千鶴子さんが見つけてくれた物です。」

「本当か？」

「嘘をつく事にどれだけの意味が？」

「ありすぎて困るくらいさ。」

「そこは信用して頂くしかありませんね。」

少し笑いを含んだ声。

「始めから信用してるとも。一応聞き返したただけだ。」

「そうですか、それは光栄です。それで、何か分かりましたか？」

英知は、ああ、と小さく頷いて、言う。

「その本の題名は」

「またも、間。」

「【ネクロノミコン】じゃないか？」

英知の能力を考えるに当たって、まず先程のドアの開閉は外せないだろう。穎娃君の反応からして、あの事象に英知が関係している可能性はかなり高い。そしてもう一つ忘れてはならないのは体に開いた穴。英知の【代償】。そんなに詳しく見ていないので、確実な事は言えないが、何かの模様のように見える黒色の穴。あとはそれだけか。やれやれ、前途多難だな。

【代償】。【代償】は、【能力】と少なからず関係がある。という事を栞から聞いた。自分で文献を調べたわけではないが、この発言を疑う必要は無いだろう。

亜空の【能力】は、【空間を創る】事で、そして【代償】が【把握できない空間がある】事。

鞘香さんは、【能力】は……【何かを作る】事かな？ 正確にはちょっと分からないけど。そして【代償】が【存在感が薄くなる】事。これは多分、自分の存在を使って何かを作っているんだろう。

後の人は、どちらか片方しか分かってない人　　千鶴子さんの【人に少しの間乗りうつる能力】？、千寿さんの【雨を降らせる能力】？、木霊さんの【言葉が伝えられなくなる代償】、そして穎娃君の【人の心を見る能力】　　と、両方とも分らない人　　栞、フォリス、それから僕　　に分かれるが、この法則には従っている筈だ。

そして英知の腹に開いた【穴という代償】。これらの事から考えると、英知の【能力】も【代償】と関係している筈だ。筈なんだけど………穴？体に？どついう事だろう。それとドアが勝手に開いた事の間にある関係？

…さっきは、【見えない手を動かす能力】とか考えたりましたが、それは頼娃君の【能力】の、視線の秘密に気付いてなかったからだ。今となつては、それは考え難いかもしれない。穴と、見えない手では、関係が無さ過ぎる。

そもそも、ドアを開けたのは本当に英知か？他の誰かが開けたんじゃないのか？

例えば、外でドアを押して直ぐに隠れ、見えないくらい細い紐で、思い切り引けば、あの状況は再現できる。

いや、それはないだろう。再現できたとしても、理由が希薄すぎるな。あまりにも。

とすればやはり英知が？

いや、でも………分からない。

逆に。そう、逆に頼娃君の【代償】を考えてみようか。分からない事をいつまでも考えていても仕方ない。

思考を止めてはいけない。考え続ける事が大事なのだから、今は

「違います。」

否定した。あっさりと。これ以上ないくらいに。

あれだけ自信満々に言っておいて、これは相当恥ずかしいのではないかと、そおつと英知の顔を伺い見る。

が、まったく何ともないようだ。少なくとも外見上は。顔も赤くな
ってないし。

それどころか、その顔には、薄く笑みを浮かべてさえいる。

「そうか。違うのか。安心したよ。」

「負け惜しみにしか聞こえませんか。もともと、本の題名が分かつた所で、何も変わらないと思います。」

「何かは変わると思うぜ？」

「そうですね。何かは変わるのかもしれませんが。くだらない何かが。」

「【アル・アジフ】。」

ぼつり、と英知はつぶやく様に言った。

悠然としていた顚娃君が、少し驚いたような表情をしていた。

英知はそんな顚娃君には構わず、よく分からない言葉を繰り返す。

「【アル・アジフ】だろ、それ。【ネクロノミコン】じゃ無いのな
ら。」

「……………違います。」

紡ぐ言葉は先程と変わらないが、

僕が見て明らかな程に、顚娃君は動揺していた。

アル……なんだ？

英知は今なんて言った？

それに、頼娃君は、何であんなに動揺しているんだろう。

18話 散らばる思考

頼娃君の【代償】を想像するに当たって、まず考えなければいけないのはもちろん【能力】の事だろう。

さつき……………いや、かなり前から気にはなっていたが、英知も、それから頼娃君本人も、

【能力】の事を、人の心を【読む】のではなく、【見る】、と表現している。

最初はそんなのどうでもいい違いだと思っていたが、そうではないだろう。

どうでもいい違いなら、あんなにあからさまな言い方はしない。明らかに意図的に、英知は【見る】事を強調していたのだから。

【見る】という事と、【読む】という事はどう違うだろう。

結局はどちらも、相手の考えている事を知る事が出来る点では同じだが。

……………知るまでの過程が違う？
そうかも知れない。

【読む】というのは、其処にあるものを、文字通り読むのだろう。それが今回は、人の心だというだけで。

対して、【見る】だとどうなるか。

あくまで推測だが、見えてしまうんじゃないか？

読むは自分から意図しての行動だから、もし読みたくなければ眺めていればいい。

文字を模様に変換するのは、想像するより遥かに簡単なのだから。

だから、頼娃君の【能力】は、人の心を【見る】んじゃないくて【見えて】しまう事じゃないのか？

そして、それならば、僕が今まで【能力】だと思っていたものはむしろ【代償】の側じゃないか？

さらに、それが【代償】だとすると、骨を動かす、すなわち【何かを動かす】というのが頼娃君の本当の【能力】じゃ

待て。待て。

話を飛躍させすぎだ。それも変な方向に。

何の確証もないのに、このまま思考を続けても、泥沼に嵌るだけだ。いや、むしろもう嵌っているのかもしれない。

何だか考えが纏まらない。

正しい方向に進んでいるのかも分からない。

ああ、なんだか頭が重い。

考えるという事が、こんなに難しい事だったなんて。

少しだけ。

そう、少しだけ頭を休ませようと、僕は、今まで話半分に聞いていた二人の会話に、意識を傾ける事にした。

19話 偽物、本物 - 01

「今更言い逃れはみつともないぜ？」

「言い逃れも何も、本当に違いますからね。」

平静を装おうとしているが、装いきれていない。
言葉に動揺が混じっている。

「は。あのな、【見】えなくてもそれくらい分かるんだぜ？」
対照的に英知には、どことなく余裕らしきものが見えてきた。
何だかんだいっても、やはり緊張していたのだろう。

「……………さつきも言いましたが、それが分かった所で何だという
んですか？」
さすがに誤魔化し切れないと判断したのだろう。
遠回しにはあるが、頼娃君は認めた。

「いや、助かったよ。もし本物だったら、どうしようかと思ってた
からな。」

「英知、さつきから気になってたんだけど、【ネクロ…………】何とか、
とか【アル…………】何とか、とか、って何？」
このままでは僕だけ置いてけぼりになりそうだったし、どうしても
気になったので聞いてみる。

「何だ、知らないのか？茉莉。」
と言いながら振り向く英知。

背中を見せたら危ないと思ったが、

颯娃君は、黙って英知の背中を見ている。

まだ動揺が収まっていないのだろうか。

英知の自身の根拠を、考えているのかもしれない。

目が、「何か思いついたか？」と聞いてくる。

僕は無言で、微かに首を横に振った。

それを見て英知は微かに頷き、口パクで、「とりあえず時間を稼ごう。」と言うと、体の向きを戻した。

「【ネクロノミコン】っていうのは、簡単に言えば魔道書だ。それで、颯娃が今持ってる、【アル・アジフ】っていうのは、そのレプリカ、つまりパチモンだな。おそるるにたらず、って訳さ。」

またも挑発するような事を言う。

本当に恐れる必要は無いのか？

さっきまでの事を考えると、そんな事はないような気がするけど。

ふふふふふ、と、颯娃君が笑い出す。

「どんな秘策があるのかと思いきや。心配して損しましたよ。」

「どういう事だ？」

「あはは、ですから、全然認識が甘いんです。」

「強がりな止めるよ、だってそれ、レプリカだろ？」

頼娃君は、おかしくてたまらないらしく、腹を抱えて笑い始めた。

不安になって英知を見ると、

「……………はあ、やれやれ。とりあえず、時間稼ぎは成功みたいだ。

……………とりあえずは、な。」

小声で、返事とも、独り言ともとれる言葉が返ってきた。

20話 偽物、本物 - 02

「先程から、偽物だの本物だの言っていますが、その認識からして間違っているんですよ。」

さっきまでとは微妙に声の質が変わっている。

余裕を取り戻したのだろうか。

「そもそも、【ネクロノミコン】というのは」

そして、何か知らんが語り始めた。

.....なるほど。

正直、時間を稼げたという英知の発言の意味が分からなかったが、こういう事が。

そういう風に煽れば、語り出すとふんだんだろう。

.....やっぱりこの二人、どこか似てるよなあ。

「【ネクロノミコン】。【死者の書】と言われたりする本ですが、本当に存在するか否かは不明です。僕はすると信じていますけどね。そもそも、【ネクロノミコン】というのは、アメリカの怪奇作家、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの作品である、【クトゥルフ神話】の中に出てくる魔道書です。.....何を言ってるか分からないって顔ですね、茉莉さん。もう少し多方面の知識を蓄えてはいかがですか？.....まあ、分かりやすくいうと、作中作の本です。作中作くらい分かりますよね？つまり存在しない本。とされています。」

……よく分からない。

英知は分かっているみたいだけど。

つまり結局は、無い、という事か？

いや、でも、今持っている本は？

それに、アルなんとかの事もあるし。

語り始めた頼娃君は止まらない。

「しかし、作中作でありながらも、その魅力に取り付かれた熱狂的なファンが、幾度も再現を試みています。1973年にはアウルズウィック・プレスが、1993年にはジョージ・ヘイが、2004年にはDonald・タイスンが、それぞれがそれぞれの思惑の元、偉大なる魔道書の復元を試みた訳です。」

……どうしよう。何を言っているのか、さっぱり全然分からない。

ん、というか、もの凄い記憶力だな。

好きこそ物の何とやら、か？……ちょっと違うか。

「そして、今僕が持っているのが、プレスが記した【アル・アジフ】という訳です！！」

堂々と、頼娃君はそう言い切った。

ドドーンという効果音が聞こえてきそうだ。

……けど、僕はやはり意味が分からなくて呆然としていた。

頼娃君は、そんな僕の反応を見て少し気分を害したらしい、不機嫌な声で付け足すように言った。

「つまり、コレは偽物であり、本物でもある本。魔道書としては、

充分すぎる力を備えているんですよ!!」

「ちよつと待て。」

颯娃君をさえぎるように、英知が言葉を挟んだ。

21話 偽物、本物 - 03

「……………何ですか？」

興を削がれて、幾分不機嫌になりながらも、律儀に訪ね返す頼娃君。

「……………俺の記憶が確かなら、読めない筈だぞ、その本は。」

「……………」

無言で先を促がす頼娃君。興味を持ったらしく、目に真剣味が増す。

「確かソレは 仮にその本が本物だったとしても 全ペー
ジが無意味な文字で埋め尽くされていた筈、だ。読める訳がない。」

いやいやいや、ちょっと待ってくれ、頼娃君だけならまだしも、何
で英知までそんな事知ってるんだ？

え？もしかして常識なのか？

知らない僕がおかしいのか？

困惑する僕を気遣うように、英知は言葉を継ぎ足した。

「あー、そんな顔するな、茉莉。こんな事は知らなくて当然だ。た
だ単に俺が、【ネクロノミコン】に関する推理小説を、昔読んだ事
があっただ。それで」

どんな推理小説なのか、全く見当もつかないが、そういう事なら、
一応、理解した。

でもその話がもし本当なのだとしたら、あの骨を動かしている、強
力な力は、どういう事なんだろう。

「それで、どうなんだ、頼娃？」

「答える必要は無い、と言ってしまってもいいんですが、それだと面白くありませんからね。答えましょう。それは確かにその通りです。アラビア風の文字で書かれています。さらに、作者はこの作品を書くに当たって、はつきりと【贋作】だと名言しています。」

「だったら」

「だとしても!」

反論しようとした英知を押さえ込む用に、言葉を続ける頼娃君。

「だとしても、そんな事に関係ないんですよ。【偽物】だとか、【本物】だとかいう事はね。」

「……………」

「大切なのは、それを作った人の感情の強さです。強い感情は【能力 ちから】になる。例えそれが負の感情であろうとも。……貴方たちだって、思い当たる所はあるでしょう? でないと、【此处】にいる訳が無いですしね。」

確かにそうだ。

僕が【能力】を持つきっかけになったのは

……………っ、……………っ、……………っ。

駄目だ。思い出せない。どうして? 鎖は解けた筈なのに。だけど、なんとなく、思い出したくないとも思う。

「さあ、英知さんから大体の情報も得られましたし、もう貴方たち

は用済みです。」

少年の背後で、巨大な骨が震える。

関係ない話をしながら、ちゃっかり【能力】は使っていたらしい。

「死んで下さい、とはさすがに言いませんが、しばらくおとなしくしててもらいますよ。」

と頼娃君が言っのを受けて英知が、

「今の生活、結構気に入ってたから、これだけは使いたく無かったんだけどなー」と呟いた。

そして、

頼娃君が本を振り下ろすのと、

「とりあえず逃げろ、茉莉」と言いながら、英知が服の中　　ち

ようど穴が開いていた辺りか　　に右手を突っ込んだのと、
図書館のドアが再度勢いよく開いたのは、

ほぼ同時だった。

「やれやれ、やっと来たか」と、誰かが呟いたのが聞こえた気がした。

22話 創造しい男

そして。

僕達と顚娃君の間には、広いスペースが開いていた。

英知の【能力】かとも一瞬思ったが、入り口から響いて来た声によって、何が起こったかは大体理解できた。

「おいおい、何だコレ!!何だコレ!!?撮影か!!?撮影なのか!?!?とりあえず危なそうだったから【広げて】みたけど、もしかして邪魔しない方がよかったのか!?!邪魔をしちまったのかな俺!?!」

亜空だった。

どうやら、【能力】を使って僕達と顚娃君の間に、新たな空間を創ってくれたらしい。

「っ!!!よりもよつて!!!」

顚娃君が再度本を振るう。

恐竜の骨が、恐ろしいスピードで迫って来る。

が、それよりも亜空が創る方が早い。

結果、顚娃君は、骨とともにかるうじて見える程に遠くに行ってしまった。

それを見て、英知は溜め息を吐きながら手を服から出した。何をするつもりだったんだろう。

聞いてみたい所だったが、それより早く亜空が僕たちに近付いてきた。

「おいおい！！おい！！何だよアレ！？骨！！それも恐竜！！アレって動くんだな！？凄くね！？本物か！？ものほんか！？本物のか！？どうなってるんだ！？」

「興奮するのも分かるが、少し落ち着いてくれ。」

「これが落ち着いていられるかってんだ！！なあ茉莉！！どうなんだ！！本物なのか！？撮影なのか！？特撮なのか！？本物なのか！？」

「いや、ちょっと落ち着いて、質問も被ってるし。」

「落ち着いた。で！！どうなんだ！？」

「………………。一応、本物みたいだね。」

「うおおー、すげー、と騒いでいる亜空。」

「まあ、巨大ロボとか好きそうではあるな。」

「対して、僕は酷く混乱していた。」

「タイミングが良すぎる。」

「漫画やドラマじゃないんだから、コレはいくらなんでもタイミング

が良すぎる、と。

もしかしたらコレさえも罠なんじゃないか、と。

「……………少し腑に落ちない部分もあるが、こうなったら乗らない手はない、亜空――！」

「何だ？俺も特撮に混ぜてくれるのか？」

「……………ああそうだ。」

「え、ちょ、英知？」

焦る僕を視線で制してくる。

いや、でも、コレを特撮で通すのはさすがにキツくないか？
いろいろと。そう、いろいろと。

「それでな、今からきっかり五分後、この部屋を元の大きさに戻してくれ。出来るだろ？」

「ああ、もちろん出来るぜ！……………でもそんな事したらせつかくの骨が壊れちまわないか？」

「そのくらいでは壊れないから大丈夫だ。頼んだぞ――！」
そう言っつて、英知は出口の方へ走って行った。

最後の頼んだぞ、は、僕に対して言ったように見えた。
というか多分そうなんだろう。

……………いくらなんでも無茶振りすぎるよ、英知。

「いや、それはいいけど、っておい!!……………行っちゃった。何だよ。もうちょっと説明してくれないとよく分かんないだろうが。なあ茉莉、つい興奮しちまって考えてなかったけど、コレってどういう撮影なんだ?ビデオカメラも近くに見えないし。」

それは僕が聞きたいよ。

「ん!?!ん、と、アレ、だよ、ほら、千鶴子さんに頼まれたんだ。特撮を撮ってみたいんだって。ビデオは遠隔操作らしいよ。それも実験したいらしい。」

「ふーん、【映写室】から?フォリスのヤツ、随分上達したんだなという事はこれ今写ってるのか?」

フォリスの何がどういう風に上達したというんだらうか。

適当に口から出任せを言っただけだから、苦しい、苦しい。

「えー、どうだろうね、今はほら、休憩中だから。」

「ふーん……………とうお!!危ねえ!!」

いつの間にか骨が接近し、僕らに向かつて足を振り下ろしていた。

亜空が咄嗟に【広げた】からよかったものの、

あんなのに潰されたら死ニマスヨ?本当に。

頼娃君の本心を確認したい。切実に。

「おい茉莉!!休憩中じゃなかったのかよ!!」

「えーどうだろう、ごめん僕の思い違いだったかもしれない。それよりも、あの骨の動きを警戒して欲しいんだけど。」

「警戒っておまえ、まるで当たったら怪我するみたいな言い方だな。撮影だったら安全な素材使ってるもんなんじゃねえの？知らんけど。」

「念の為だよ。予行演習も兼ねてるんだ。……………一応安全な素材だけど、まともに当たったら怪我くらいはすると思うから。」
当たったらきつと死んじゃうから。もっと真面目に警戒して下さい、お願いします。

「……………今お前、予行演習って言わなかった？」

しまったな。失言だ。

本当に、この亜空という人間は、鋭いのか、鈍いのか、よく分からない。

「……………言ったよ。」

「それってさ、まるで俺が来るの分かってたみたいな言い方じゃねえ？」

どうする？

ここは相当大事な所だぞ。

言い間違える事は許されない。

……………いや、まてよ。

コレは、逆に、チャンスかもしれない。
でも、賭けである事には違いないな。
それも相当危険な。

まあ、最初から選択肢なんて無いけどね。
やるしかないよな。

「あれ？伝えてくれなかったのかな？……てつきり亜空は、この
撮影のために【図書館】まで来たんだと思ってた。」

亜空がこの場所に來たのが、どういう理由かによって、この、僕達にとって都合の良いすぎる登場が、畏か否かが分かる。

……という考えのもとにした質問だったが、亜空の答えは、しごく当然の物だった。

「……………え？そんなの聞いてないぞ？」

キョトン、とした顔でそういう亜空からは、芝居をしているような様子は受けなかった。

どついう事だ？あの都合のいい登場は、本当にただの偶然だったのか？

僕が疑り深くなりすぎてるだけなのか？

「……………本当に？誰かに呼ばれてここに來たんじゃないのか？」

「ああ、別に。自分の意思で來たけど。」

「何で？」

「そりゃ、借りてた本を返しに……………って、何でそんなに俺がここに來た理由なんて気にするんだよ！！！」

「……………」

「沈黙！？沈黙か！？そこで取るべき選択肢は、決して沈黙ではないと俺は主張したいと思っ！！っとうぞ！！うぞ。」

途中で再度空間を【広げる】亜空。

なんだか、早くも少し慣れて来た様に見える。

亜空の【能力】は、本当にとてつもないな。

名前忘れたけど、【アル・】っていう魔道書で、強化されてる筈の骨を、普通にあしらっている。

まあ、直接触らず、空間を【創って】いるのだから、そんな関係ないのかもしれないけど。

どちらにしろ、敵には回したくないタイプだ。

骨の方はしばらく心配ないとして、問題は亜空がここに来た理由だな。

当人は自分の意思で来た、と言ってるけど、それはやはり都合が良すぎる気がする。

疑り深過ぎるのも確かに問題だけど、今日のこの場に限っては、そうも言っていられない。

変に気を抜いたら死んじやいそうだからな。マジで。

だから僕はさらに質問を重ねる。

「……………何で、今日借りてた本を返そうと思ったの？」

「そんなのどうでもいいだろ？それよりぼちぼち……………」

「大事な事だから！！ちゃんと考えて答えてくれ！！」

亜空は、そんなものの何が大事なんだよ、と、口ではぶつぶつ言っていたが、真面目に考えてくれているようだった。

考えながらも、骨は裁き続けている。

いや、普通に凄いな。失敗しても死なないと思っているとはいえ、正確な角度で【広げ】続けている。

そして、

「ああもう、邪魔だな!!!!」

と、骨を今までの倍以上の距離まで【広げた】と同時に、あ、思い出した。とつぶやき、続けた。

「栞に言われたんだよ、図書館の本をそろそろ返した方がいいんじゃないか、ってな。」

3話 命懸けの特殊撮影Ⅰ 03

……また、栞か。

……栞は、敵、じゃ、ないと、思っただけだな。

「おーい？せつかく思い出してやったってのに、何でそんな反応なんだ？ぼーっとして。」

「……………いや、うん。それで、どういう風に言われたの？撮影の事は全然言ってなかった？」

「ああ、撮影のさの字も出なかったぞ。」

「おかしいな……………」

首を横に捻り、悩むようなジェスチャーをしながら、僕は別の事を考える。

栞が仕組んだという事は……………どちらとも取れる、な。

さっきまで疑っていたように、僕らを陥れる為の罠である可能性と、僕たちを助ける為に、適切と思われる人物を、さりげなく送り込んできた可能性と。

……………あと、全く偶然に、栞と亜空がそという話をした、という可能性も一応ある。

ただ、最後の場合以外は、栞が【図書館】の内部がどうなっているか、という事を、ある程度正確に把握している必要がある。

そして、最後の可能性はこの場合考える必要はないだろう。
偶然を疑って、亜空がここへ来た理由に至ったのに、その理由の方
を今度は偶然にしてしまったら、堂々巡りになってしまう。

という事は、やっぱり、栞は知っていたのか。
どこからどこまで？

魔道書の事は？ 鞘香さんの事は？ 骨の事は？

……疑問は尽きないが、考え始めたらキリがなさそうだ。
あんまり考えている時間も、余裕もないし。

僕が顔を上げると同時に、亜空が聞いてきた。

「何をそんなに考え込んでたんだよ？ 今俺そんなに複雑怪奇な言葉を
言った覚えはねえんだけど。」

「僕にとっては複雑怪奇だったんだよ。」

「はあ？」

「それより、そろそろ5分になるんじゃないかな？」

「いや、あと1分ほどある。そして茉莉」

あんまり大した事でもなさそうに、とんでもない事を、亜空は言っ
た。

「さっき言おうと思ったんだけど 最後一気に【縮める】分

も考えると

そろそろ【広げる】のも限界だ。」

「……………」

今までずっと余裕そうだったのに、急にそんな事を言わないで欲しい。

4話 存在意義

「……………それで、具体的に言つと、あとどれくらい【広げ】られるの？」

「んー、そうだな。っと！！今のも含めて、あと……………4回くらいかな。」

実質あと3回しかないじゃないか。
そつという事はもう少し早く言つて欲しかった。

「いや、そんな不満そつな顔されてもな。言おうとしたら、お前が急に大声出したから。」

どうやら不満が顔に出ていたらしい。今度から気をつけよう。
大声、という事は多分、大事な事だからの時か。

まあ、自業自得と言えば自業自得だな。

……………さて、と。どうしようか。

あらためて考えてみても、過酷な状況だなあ。
選択ミスイコール死だなんて。

こんな状況は、今まで生きてきて始めてだ。当たり前だけど。

「……………一旦【縮めた】ら、もう一回【広げる】回数が増えたりしないの？」

「しないな。【広げる】のも、【縮める】のも、同じように【能力】使うから。っな!!」

早くも一回分無駄にしてしまう。

いや、厳密に言つと無駄にはなつてないんだけど。

「……なあ茉莉。これ、撮影なんかじゃないんだろ？」

ふと、急に真剣な表情で言う亜空。

「……………」

「なあ、俺真剣に聞いてるっ!!んだぞ。珍しく。」

あと一回。

自分で珍しくとか言うなよ。

……どうなんだ。亜空の事を信用してもいいものだろうか。

「……………」

今日一日だけで、随分疑り深くなったという、実感がある。

穎娃君の豹変、【此处】という場所、そして琴。

何もかもが疑わしく思えてしまう。

恐竜の骨が、恐ろしい勢いで迫つて来る。

何度見ても、この恐怖に慣れる事はないだろう。

「どうなんだ!? 茉莉!!」

怒声ともとれる声とともに、今までとは比べ物にならない程の距離、骨を引き離す亜空。

「……………そうだよ、ごめん。……………理由は……………これを取り切った
ら、話すから。」

僕は、結局亜空を信じる事にした。

信じるという事を忘れてしまったら、自分のアイデンティティを、
失う様な気がしたから。

僕がそういうのを聞いて、亜空は大きく頷くと、自信満々に言った。

「そういう事なら任せておけ。【代償】に食い込むから、出来れば
使いたくなかったんだが、まだ充分【広げ】られるから!!」

5話 チェック

「よし、そろそろ5分だな!!」

そう言う亜空の額には、汗の玉が幾つも出来ている。

【代償】とはまた別に、【能力】を使う事で、疲労も溜まるのかもしれない。

何も出来ない自分が腹立たしかった。

「おい茉莉、そこにいるな!?あと10秒経ったら【縮める】から、出来るだけ大きな声で合図してくれ!!」

「分かった!!」

と大声で返す。

頼娃君にも聞こえるかもしれないが、そんな事も言ってもらえない。

何せ、亜空には僕はもう【認識】出来ていないのだ。

かといって、状況的にあまり亜空から離れる訳にもいかない。

……だんだんと、骨との距離の【広げ】方が際どくなっているのは、気のせいではないだろう。

そういえば、頼娃君はどこだ?

さつきから、執拗なまでに襲ってくる骨に意識が行き過ぎて、いつの間にか見失ってしまっていた。

慌てて辺りを見回すが、姿は見えない。

壊れた本棚の裏側に隠れているのか?

それとも　それとも、英知を追いかけたのか？
だとしたら英知が危ない！！

……………落ち着け。

ここで僕が落ちつかないでどうする。自分に出来る事を確実にしよう。

僕は、出来る限り大きな声で、

「今だっ！！」

と叫んだ。

これだけ巨大な空間だ。

どのように縮むか分からないが、相当大的な衝撃があるだろうと、全身を身構えさせる。

が、いつまで経っても衝撃は来ない。

それどころか、何も起こらない。

「あ！？おかしいな！？何でっ！！っと！！……………っっー。」

困惑していた亜空は、一瞬【広げる】タイミングを誤ったらしく、間一髪で骨の攻撃を交わした。

否、少し掠ったようだ。痛そうに顔を顰めて、腕を抑えている。

その時、僕の目の前にある本棚の陰から、くすくす、と笑い声が聞こえて来た。

「ふふふ。茉莉さん、貴方は本当に、詰めが甘すぎですよ。」
本棚の陰から、今までの比ではない光を放つ本を片手に、黒衣の少年が姿を現した。

6話 チェックメイト

「…………ふふ。僕が、貴方たちが空間を【縮め】るのを、黙って見ているとも思っただんですか？今現在敵という立場にいるこの僕が。」

「……………」

確かに、少し油断していた。

亜空の【能力】によって、さし当たったの脅威である骨を、完全ではないにしろ、無力化出来ていたから。

万が一にも、気を緩めてはいけない場面だった。

恐竜の骨は亜空に任せて、僕だけでも、颯娃君に注意を向けておくべきだった。

…………などと反省しても、もはや手遅れだけど。

「おい茉莉！！どうなってる！？つくそ！！何で【縮め】られない！？」

……………もしかして、亜空の奴、颯娃君の事が見えていないのか？
そこまで消耗してしまっているのか？

亜空のいる位置と、颯娃君のいる位置は、軽く5メートルは離れているのに。

という事は、骨は！？見えているのか！？

慌てて見ると、骨と亜空の間は、10メートル程開いていた。
見えている……………と思いたい。見えていてくれ。

でも、見えていたとしても、このままでは

「もう、手遅れですよ。」

考えないようにしていた言葉を、顚娃君が引き継ぐ。

そして、黒衣の少年は、禍々しい光を放つ本を振り上げた。それに呼応して、骨の足が、ぐい、と持ち上がる。

「つつ 亜空！！！」

僕の悲痛な声に反応し、咄嗟に空間を【広げる】亜空。

5分前までは、骨の位置の空間を正確に【広げ】ていたが、今のア
レは明らかに当てずっぽうだった。

偶々骨の位置と重なったから良かったものの、そう何度も偶然が続く訳がない。

「……もう足掻いても無駄ですよ？ 亜空さんも限界みたいですし。」
冷淡に、そう言い放つ少年。

ある種、高揚した表情で、さらに言葉を続ける。

「茉莉さん。だから言ったでしょう？ 貴方は、魔道書の【能力】の強さを、過小評価し過ぎたんです。そしてこれで
言いながら腕を持ち上げ、」

「チェックメイトです。」

振り下ろした。

「……………」

振り下ろしていなかった。

否、振り下ろせなかったのか。

少年の振り上げた手を、誰かの手が掴んで、支えている。

支えた手の持ち主は、少年に対して、静かな口調でこう告げた。

「まあ確かに、チェックメイトだったね。君の、だけど。……………」

「うやら今回は、私の方が一枚上手だったようだ。」

7話 収縮、そして崩壊

え？栞？今まで何処に？というか、え？

栞は、顚娃君の手から魔道書を払い退けようとした。

が、どれほど強い力で握っているのか、まったく取り落とす様子が無い。

まるで、魔道書の方が、顚娃君の手にへばりついていてるかのように見える。

「…………やはり、駄目か。亜空君！！！」

大声で亜空を呼ぶ。

「ああ！？その声は栞か！？いったいゼンたい、どうなってやがる！？」

「詳しい説明は後だ！！取りあえず、【縮めて】くれ！！今なら大丈夫な筈だ！！」

「……………あとから絶対説明してもらってからなっ！！」

亜空が空間を【縮める】。

広大な空間が、収縮する。

あの無数にある本と本棚はどうなるんだろうと思ったが、空間が縮む時に、近づき、ぶれて、重なった。

あの二つってでも、別々の本だよな。

と思って見ていると、その本に、次々と本が重なって行く。

タイトルまでは読み取れなかったが、表紙を見た限り、全て違う本のようだった。

…………… という理屈なんだろう。

一つの本から、さまざまな本が生まれる？ 枝分かれでもするということのか？

でもその場合作者はどうなる？

誰が書いたという本が、どういう理由で存在する事になるんだ？

考えれば考える程、意味が分からなくなる。

それとも、【能力】について考えるときに、理屈なんか考える方が野暮なんだろうか。

自分の体も、ぶれているみたいで気持ち悪かった。
実際、軽いめまいと、吐き気を覚えた。

みるみる部屋は【縮んで】行く。

…………… おいおい、どこまで小さくなるんだ？

いい加減に止まらないと…………… 骨が…………… 天井に……………

何事もなかったように、骨は、天井まで達し、そして亀裂が入るのが見えた。

…………… マジで？

ばりばりと嫌な音を立てて、天井が崩れる。

降って来る瓦礫から、必死に身を隠しながら、

この部屋って、元はこんなに小さかったのか。

と、取りようによっては、現実逃避とも取れるような事を考えていた。

8話 壊れてしまったその部屋でー01

「……………つつ。よっ、つと。」

身を隠した本棚から這い出す。

体中いたるところが、ぎしぎしと痛む。

幸い、大怪我はしていないようだ、この感じだと明日の朝の筋肉痛が怖い。明日一日、動けないんじゃないかコレ？

つつ、と、顔に冷たい雫が当たった。

雨、か。上手く、行ったのかな？

天井を見上げる。

否、天井だった部分を見上げる。

黒色の煙を上げる骨の隙間から、灰色の曇り空が見えた。

視線をほんのわずかに右に転じ、天井を破壊した原因へと焦点を合わせる。

恐竜の骨は、時折バチバチと音を立てている。

……………電気製？それとも とにかく、急に動き出す、といった心配はないように見える。

みんなは何処だ？無事なのか？

周りを見渡すと、最初に亜空が目についた。
瓦礫の隙間に、うつ伏せに倒れている。

「亜空！！」

と大声を出しながら近寄る。

「大丈夫か！？」

「…………… よお茉莉。無事だったか。他の奴も、上手く【広げ】られてるといいが。…………… ああそれと、どちらかと言えば、なんて言うまでもなく、大丈夫じゃないぞ。もう限界だ。俺は寝るから、後は頼んだ。」

そう言つて直ぐに、亜空は意識を失った。

寝る、と言つてはいたが、これは…………… 気絶してるな。

早い所、ベッドへ連れて行かないと。

慌てて立ち上がった僕の目の前に、

雨に濡れて、さらに深い黒に染まったコートを着た少年が、ふらふらと、立っていた。

「……………」

「……………」

まだ、やる気なのか？

少年の、俯いた顔のその表情は、濡れた髪に隠れて、伺う事が出来なかった。

9話 壊れてしまったその部屋でー02

「……………無事ですか？」

少年は、低い、不安定な声で、言った。
掠れていて、聞き取りにくい。

「……………僕は無事だよ、とりあえず。」

いつでも咄嗟に動けるように、警戒を維持したまま答える。

「……………そうですか。そこに倒れている亜空さんは？」

本人も言っていたように、どちらかと言えば無事ではないのだけだ。

それを正直に答えるのは、どうしても抵抗がある。

亜空が戦力外になったのをいい事に、さらに何らかの攻撃を加えられたらひとたまりもない。

僕の体だって 亜空ほどではないにしろ、動くのも正直つらい
くらいには ぼろぼろなのだ。

どう答えたものか考えていると、少年は頷いて言った。

「そうですか、一応、無事は無事ですね。よかった。」

しまった。本当に学ばないな、僕は。

頼娃君には【能力】があるんだから、隠し通せるような事でもない
だろうに。

でも今、よかった、って言わなかったか？さつきから雰囲気もおかしいし、少しくらいは信用してもいいのかもしれない。

いや、駄目だ。もう裏切られるのは嫌だ。

「………………。そんなに警戒しないで下さい。とい
つても無理でしょうね。残念ながら。……………信じてもらえる、
もらえないは別にして、一応言っておくと、僕にはもう戦う意思は
ありません。」

信、じて、いい、のか？いや、でも、

そんな風に葛藤する僕を、しばらく見つめていた頼娃君は、やがて、
ポツリと言った。

「今更…………いや、今だから、ですか、いわゆる、言い訳的なもの
を、させて頂いてもいいですか？」

10話 壊れてしまったその部屋でー03

とつとつと、穎娃君は、自分で表現する所の、「言い訳」を話し始めた。

それは、確かに僕に対してのものだったが、それと同等かそれ以上に、誰でもいいから、誰かに聞いて欲しかったのだろう。

僕は、少しだけ警戒を緩めて　　英知や栞なら、まだこの段階では気を抜かないのだろうか。………まあいいさ、それが僕という人間なんだから　　穎娃君の独白を聞くことにする。

「……………始めは、本当に話を聞くだけのつもりだったんです。【此処】という不安定な場所から脱出するために、少しでも情報が欲しかった。それで、色々調べているようだった英知さんに話を聞く事にしたんです。」

「　それは、普通に聞くのでは駄目だったのかな？何もあんな方法を取らなくても。」

鞘香さんにあの骨を作らせて　　ん？いやでもそれは、本当の所どうなんだろう。後から詳しく聞いてみよう。

僕たちに暴力で言う事を聞かそうとした。

「ええ、今思えばそうなんです、その時の僕は、普通に聞いても教えてくれる訳がないと思っていました。思い込んでいました。………多分その時にはもう、ある程度取り込まれてしまっていたんです。」

「取り込まれる？」

「……説明が前後してしまいましたが、あの本【アル・アジフ】には、強い【能力】が込められています。この辺りは改めて説明するまでもないでしょう。」

覚えている。確か、筆者の想いが強ければ、例え本という媒介であっても、【能力】を持ち得るとか、そんなような話だ。多分。

話の腰を折るつもりは無かったので、そんな曖昧な認識ではあったが、頷いて先を促がした。

「……それだいたい会ってます。そしてあの本は、込められた想い【能力】が強過ぎた。僕の予想の遥か上でした。」

頼娃君の【能力】、会話する時にはなかなか便利だな。

……いや、不謹慎だな、こんな事を考えるのは。

「それは貴方が、今この【能力】のいい面しか見ていないから、そう思うんです。」

少し自嘲的な口調で、頼娃君が僕の思った事に答える。
ん？別に今目線を合わせてない筈だけど。

「……それは。……いえ、それは後にしましょう。とにかく僕は、しだいに【アル・アジフ】の巨大過ぎる力を、制御しきれなくなりました。」

「でも、確かアレは偽者の本とか言ってた？」

「いえ、そうですが。それはやはり違います。あの本はもはや、本

物よりも【能力】が強いかもしれません。」

「本物よりも？」

そんな事があるんだろうか。

「ええ、そこがやつかいな所なんです。人の想いというのは、計り知れませんから。【ネクロノミコン】を信仰し過ぎた余り、本物より強い魔道書となったんです。」

頼娃君は、本を持っていた方の指先を見つめながら続ける。

「つまり、本物はこうである筈だ、という想いです。本物の【能力】はこんなものではない。本物の【能力】に少しでも近づくために、もつともつと【能力 ちから】を、という妄信です。」

妄信、か。

「そして、最初の話に戻る訳ですが、僕は 僕も その思いに取りつかれました。もつともつと強い【能力】を、もつともつと強大な力を、という風に。」

そう喋る頼娃君の声は、少し震えていた。

その震えは、恐怖から来るものか、興奮から来るものか。

でも僕は、独白を止めようとは思わなかった。

11話 壊れてしまったその部屋でー04

「……………こうなっちゃってしまっただけで、隠しておく意味もないので、話しておきますが、僕の【人の心を見る】という【能力】は、【能力】であると同時に、【代償】でもあります。」

唐突に言われて、反応に困った。

【能力】が同時に【代償】？どういう事だ？

……………そういえば、ずっと前に栞に、そういう珍しいケースもあるという様な話を、聞いたような気がする。

「…確かに僕みたいな人は、レアなケースみたいです。」

また僕の思った事に反応した。

なるほど。見るのではなく、視えてしまうのか。

「そうです。人の心が視えるのは確かに便利ですが、出来る事なら僕はそんなもの視たくはない。」

分かる気がする。

知りたくない事も、隠しておきたい事も、人それぞれあるだろうから。

頼娃君は、何故か少し躊躇ったが、結局続きを話し始めた。

「……………僕は、人と付き合うのが怖いんです。」

「……………」

「笑顔で接して来る人も、心の裏では酷い事を考えていたり、他の人がついた嘘を、そうと分かってて受け止めたり。……正直もう疲れしました。僕はこんな【能力】、欲しくなかった。」

「気持ちは分かって、口で言うのは簡単だけど、そんな薄っぺらい事を言っても、意味はないだろう。」

「……あ、そうか。コレも視えてるって事か。てことは言ったのとはば同じなんじゃ……どうしよう。」

「……どうしようもない。なるほど、確かにつらそうだ。」

「そういう意味では、茉莉さん。貴方と話すのは楽しかったです。貴方ほどに裏表が無い人には、始めて会いました。……もっと早くに、会っておきたかった。」

「気のせいかな？」

「楽しかった、とか、会っておきたかった、とか。さつきから語尾が過去形になっている。」

「……… 頼娃君？」

「自業自得とはいえ、あんな事をしてしまった以上、もはや【此処】にも僕の居場所はありません。」

「悲しそうな顔で、少年は続けた。」

「………僕は、【此処】から脱出します。」

12話 壊れてしまったその部屋でー05

「ちょ、ちよつと待って!!」

「【此处】から出る」と、言い残して、そのまま去ろうとする頼娃君を慌てて引き止める。

「何ですか？」

「出るって、【此处】は出れるものの?というか……………とにかく、ちよつと待ってよ!!」

「引き止めないで下さい。あんな事をしてしまって、本当なら、今貴方とここに在る事だって辛いんです。罪悪感に押し潰されそうです。」

逃げ出したい気持ちも分からなくはない。でもそれは。

「それは、ずるいんじゃないかな？」

「ずるい？」

ピクリと反応して、完全に体をこちらに向ける。よかった。どうやら引き止められたようだ。

「ずるいとはどういう意味ですか？」

「だって、それは逃げるといふ事だろ？」

「逃げて……………いません。」

「逃げてるじゃないか！！謝る事もせずに！！亜空や英知だって、ちゃんと謝って、話せば許してくれるよ！！」

「許してくれませんか！！」

頼娃君の声が、少し熱気を帯びる。

「やってみないと、分からないじゃないか！！」

「分かります！！きっと皆、話せば許してくれますよ。上辺だけはね。でもきつと、心の底では僕を憎み続けるんです。僕はソレを視続ける事に、耐えられる程強くない……………」

「だからそれが逃げてるって言ってるんだ！！」

頼娃君は、まだ何か言い返そうとしたが、やがて暗い顔になって言った。

「……………そうですね。確かに僕は、逃げようとしています。」

そして、今にも泣きそうな顔で続ける。

「でも！！でも、それしか方法が無いじゃないですか！！傷つくのが嫌なら、触れ合わない事しか方法が無いじゃないですか！！」

「……………それ以外にも、きつと方法はあるよ。」

「慰めはよして下さい。それがあるなら、僕はとっくに」

「……………僕も一緒に探してあげるから。英知にも亜空にも、鞘香さんにも、僕も一緒に謝ってあげるから。」

「……………でも、僕は。」

ついに頼娃君は、堪え切れずに泣き出してしまった。

そんな少年に、僕は、嘘くさくならないように、恥ずかしさを懸命にこらえながら、言葉を掛けた。

「あのね、もう一回くらいは、人を信じてもいいんじゃないかな？」

13話 壊れてしまったその部屋でー06

僕の腕の中で、颯娃君は泣いている。

もう恥ずかしいとか言ってられない、とか、ここが颯娃君が人を信じられるかの重要なポイントだ、とか、こんなのは僕のキャラじゃないのに、とか、

様々な思いが心を巡ったが、

僕は、結局颯娃君を抱きしめてあげた。

少年の孤独な気持ちは、痛い程に分かるから。

否、分かっているつもりだから。

それを少しだけでも、取り除いてあげたい、と思った。

「……………もう、大丈夫です。すみませんでした。」

しばらく声を囁らして泣いていた颯娃君は、そう言っ僕から離れた。

その顔は、迷いが取れたように、幾分スッキリしているように見えた。

それが僕の思い込みでなければいいけど。

「すみません、みつともない所を見せてしまいました。」

「うん、もう大丈夫みたいだね。」

「ええ。何だか楽になりました。今まで一人で抱えていた悩みを、

吐き出してしまったからでしょうか。ありがとうございます。」

「いや、おれなんていいよ。
ちよっと恥ずかしい。」

「皆さんにちゃんと謝ります。許してくれないかもしれませんが、それはもう仕方ないですし。」

「きつと皆許してくれるよ。」

「……………そうですね。本当に、貴方に会えてよかった。……………
…まずは、亜空さんと栞さんをベッドへ運び……………！？」

「どうしたの？」

頼娃君が、何かに反応するようにピクリと震えた。
そして、何かを考え始めた。

「……………これは、……………という事は、……………まずい、ですね。」

14話 ヒトリメ

「まずいつて、何が？どうかしたの、頼娃君！？」

まさか魔道書の後遺症か何かか？

いや、それは考えにくいか。

意識もはつきりしているみたいだし、

それより何より、あの時のような禍々しい雰囲気、微塵も感じられない。

「……………そうだとすると、……………何故今まで気付けなかった？」

頼娃君は、まだぶつぶつと呟きながら、何事かを考えている。

焦っているのがよく分かる。でもこの状況で、焦るような事が僕には見つけれない。

骨も、動く気配はないし……………何だ？

「……………いや、まさか。……………茉莉さんの【能力】は……………」

僕の【能力】？

僕の【能力】って言ったのか？今。

「茉莉さん！！！」

先程の発言について聞こうと思った矢先に、もの凄い勢いで頼娃君が話し掛けてきた。

「な、どうしたの？」

「いいですか、これから僕が言う事を、たとえば意味が分からなくても、黙って聞いて下さい。」

小声でかつ早口なので、聞き取りにくい。

突然何を言い出すんだと思ったが、少年の顔が余りにも真剣なので、僕は黙って頷く。

「まず、この紙を」

言いながら、一枚の紙切れを僕の手押し付けてくる。

その紙には、僕を始め、【此処】にいる人物の名前が書かれている。

何故こんな紙を持っていて、それを僕に渡して来るのか。

色々聞きたい事はあったが、黙って聞くと約束した以上、僕はそれを無言で受け取った。

「それを、部屋に帰った後、無意識のうちに触れるような所に置いて下さい。無意識の内に、というのが重要です。」

事前の宣言通り、さっぱり意味が分からないが、頷く。

僕はその紙を、とりあえずポケットへとしまった。

それを確認し、小さく頷いた頼娃君は、話を再開する。

「おそらく【此処】には、【記憶を消す】、あるいは【記憶を書き換える】事が出来る【能力者】がいます。それに対抗するには、貴方の持つその【能力よ」

そこまで言った所で、

図書館の支配者であり、

【人の心を見る】事の出来る【能力】と【代償】を持つ人物であり、
僕の友達でもある少年は、

忽然と、何の前触れもなく、まるで最初から居なかったかのように、

姿を消してしまった。

15話 茉莉の回想―03

事態が余りにも自分の想像を外れた時や、
堪え切れない恐怖に襲われた時、
人は、笑い出してしまう。という様な事を、
何かで読んだ様な気がする。

が、その時の僕は、ただただ呆然と、その場に突っ立っていた。

意味が分からない。
人が消えるなんて事。

「……………ッ！！？」

駄目だ。
何で。

よりによって、こんな時に。

僕は、亜空と、栞を、ベッドに……………運ばないと……………いけな
い……………の……………に……………

コツリ、コツリ、と耳に障る音を響かせて、男は僕の周りを、ゆっ
くりと周る。
きつと、僕をいらだたせる為に、わざと足音を立てているのだろう。

「茉莉君。いよいよ実験を始める訳だけれど、何か言っておきたい事はあるかなあ？」

語尾を上げて、猫なで声で、そう聞いてくる。

「……………」

「おやおや、無視するなんてひどいなあ。」

「……………」

それでも無視を続ける。

出来る事なら、コイツとはもう一生喋りたくない。

「まあそれもいいと思うよ。個人の意思は尊重されなければならないらしいからねえ。黙秘権とかいうやつ？」

ククク、と意地の悪い笑いを語尾に被せる。

意思を尊重するのなら、まずはこの縄を解けよ。

医師は、にんまりと気味の悪い笑みを顔に張り付け、言葉を続けた。

「じゃあそろそろ始めようか。今回の実験が上手くいけば、君達を持つその忌々しい【能力】についての研究が、一気に進展する事は間違いない。」

「……………」

「だからそんな顔をしないでくれよ。よりすぐりの子を選んでおいたから、きつと君もすぐに気に入ると思うよ。新しい生活が。」

医師が、白い液体の入った注射を、僕の腕にした。

そして僕は、だんだんと意識が遠くなっていくのを感じた。

16話 栞の講義―07

「……………ん。やあ、目が覚めたみたいだね。まあ良くはないと思うけど一応聞いておくと、気分はどうか？」

ああ、まだ動かない方がいいよ。怪我はしてないみたいだけど、ずいぶん疲労がたまっているようだったから。

……………ふふ。君ならそう言うと思ったよ。それでだね、君はどこまで覚えている？

だから、何がどうなって、どういう風にあの図書館が破壊されたかだよ。

ちなみに、あの図書館に行った事は覚えているね？

うん、そうか。なら、その前の事は？何故あの図書館に行く事になったのかという理由は？

ああ、うん、そうだね。そういえば、まだお礼を聞いてないな。

何のって、君ねえ。この部屋まで運んであげたお礼だよ。もの凄く重かったんだから。私だって女の子なんだよ。

………うん？いや、私一人でじゃない。当たり前だろう。騒ぎを聞きつけて部屋まで駆けつけた千鶴子君と一緒に、だ。だから、彼女とあとフォリス君にも、ちゃんとお礼を言っておきなよ。

………ところで、部屋を壊したのが誰か、覚えているかい？

いや、骨だとかそういう直接的な事じゃない。………そうだな、じやあその骨がどうやって動いていたか覚えているかい？あんなものが単独駆動するとは考え難いんだが。

………。………そうか。

………君に、一つ相談、じゃなく質問があるんだが

「力の象徴」、という言葉で、何を思い浮かべる？

「……………ふうん、恐竜、か。」

何でそれを一番始めに思いついたのか、聞いてもいいかな？

……………何となく、ねえ。そう、何となく、か。

何となくというのはね、本人はそう感じているだけで、本当は何かしらの理由があって選んでいる場合が多いんだよ。それを踏まえた上でもう一度聞くけど、何か理由を思いつかないかい？

……………そうか。なら本当に「なんとなく」思いついただけなのかもしれないね。

そういう私も、「なんとなく」話しておきたい話があるんだよ。奇遇だね。

分かりやすい力は、分かりやすく滅ぶ。

歴史上における強権者というものは、えてして、自らを正義と考えている人々によって滅ぼされる可能性が高い。

これは別に強権者に限った事ではなく、全てのものは、いつかは滅ぶのだけでも。

人は、自分よりも恵まれている人を、基本的に嫉妬し、時には憎む事もある。

私は、【能力者】というだけで逮捕される今の世界も、だから似たようなものだと思うのさ。

そんな中で、【能力】をひた隠しにして生きている人間のストレスは、どれ程のものだと思う？

いつか、自らの手で、それらを全て破壊してしまいたいと思う人間が出てきても、当然だと思わないかい？

権力や、政治力、力にもいろいろあるけど、一番分かりやすいのは暴力だね。

その象徴として、恐竜を利用するのは、なかなかいい手なんじゃないかな。

何より恐怖を植えつけやすい。ん？どうした、青い顔をして？

……ふふ、思い出したら怖くなってきたのかい？

本当に強い人は、それを他人に気付かれないようにしているだけなんだよ。

決して弱い訳じゃない。弱者を装っているだけで。

だから、分かりやすい力は、分かりやすく滅ぶ。

彼は、やり方を間違えたんだね。

………彼って、誰の事だって？

………さあ？分からないな。別に誰かを想像して話してる訳じゃないし。

最初に言った通り、「なんとなく」話してるだけだからね。

さて、そろそろ私は行くよ。
君は、もう一眠りしておく事をお勧めするよ。

18話 認識102

栞の忠告に従って、あのあともう一眠りした。

そして今日が覚めた訳だけど、何だか気分がボーっとしている。ちゃんと寝た筈なのだが、少しも眠れていないような感覚さえ覚えた。

それでも、体の疲れは大分とれていた。相変わらず筋肉痛は酷いけど。

あれからどれくらいの間が経ったのだろう、と思い時計を見ると最後に時計を確認してから、まだ5時間程度しか経っていなかった。

12時か。

窓がないので、外の様子は伺えないが、もうすっかり真夜中である。もっとも、本当に外の空間が【暗い】とは限らないんだけど。

冴えきらない頭で、図書館であつた事を思い出す。

恐竜の骨が襲つて来たこと、亜空がタイミングよく現れた事、そして天井が崩れた事。

.....何か、すっかりしない。

何がすっかりしないのかは分からないが、とにかく何かすっかりしない。

さっきの栞との会話中も始終感じていた事だが、何か違和感を感じる。

何かが足りないような、

否、そうか、これが英知の言っていた、思考を捻じ曲げられるという事か？

だが例えそうだとしても、どうしようも無いじゃないか。

何かを忘れているんだとして、それを思い出す取っ掛かりがない。

もやもやとした何かを、考えるともなく考えていると、控えめなノックの音が、ドアの方から聞こえて来た。

「栞から、お前の目が覚めたって聞いてな。明日にしてもよかったんだが、どうしても今日話しておきたい事があるんだ。」
英知が、疲れた顔で壁に体を預けていた。

19話 見たモノ、見ているモノー01

あれだけ色々な事が有ったのだ、疲れるのも当たり前だろう。

現に僕は、今までダウンしていたのだ。

寝てた、というよりは、ダウンしていた、という表現の方が、我ながらしっくりくる。

出来る事ならこのまま朝まで寝ていたいくらいだ。

というか、何でこんな変な時間に目が覚めたのだろう。

なんだかんだ、自分でも意識していないだけで、興奮しているのだろうか。

否、たぶん。

何かが気になって、何かを忘れているような気がして、何かをしなければいけない気がして、寝れなかったのだ。

……まあそれも、今回はプラスに作用した事になる。

壁にもたれ掛かる英知は、ただ単に疲れているようには見えないから。

もっと、精神的に、疲れているように見える。

「まずは助かってよかったね。英知のお蔭だよ。色々とお疲れ様。

……それより、どうしたの英知？何かあったのか？」

「ん？……ああ。やっぱりお前には隠しきれないか。」

身体も確かに疲れているのだろう、英知は、ふらふらと頼りない足

取りで僕のベッドまで歩いて来ると、言った。

「実はな。鞆香が見つかった。というより、見えるようになった、
ってという方が正確か。」

「それは」

それは、良い事なんじゃないのか。

でも、それにしても英知の顔が優れない。

でも僕は、それ以上先を考えるよりも早く、言葉を続けてしまっていた。

そんなに簡単に、喋るのは止められない。

それでも車よりは、簡単なのだろっけど。

「よかったね。」

英知は、苦笑を浮かべつつ、答える。

「ああ、ありがとう。それ自体はよかったんだけどな。………見
つかった後、口を聞いてくれなくなっちゃまって。」

その言葉の意味が、直ぐには入って来なかった僕に、補足するように英知は話し始めた。

20話 見たモノ、見ているモノ102

「お前に図書館と亜空を任せた後、俺は急いで千寿を探しに行ったんだ。

その事には何の苦労もなかったよ、なにせ、いつものあの【研究所兼探偵事務所兼占い所】で、水晶を眺めていたからな。

それで、事情を簡単に説明して、千寿を屋上まで連れて行ったんだよ。【雨の空】を【見て】もらうために。

そこまでの一連の流れにも、まあ色々と瑣末な問題が、有ったには有ったんだが、今回聞いてもらいたい話とは関係ないから飛ばすぞ。

それで、雨が降り始めてから、二分後くらいに、上手い具合に天井が崩れて、作戦は成功した訳なんだが。

ああそうだ、上手くやってくれてありがとな、茉莉。正直、俺の意図が何処まで伝わってるのか、凄く不安だったんだよ。

そこで、ふいに鞘香が俺の方を見ている事に気付いたんだ。

今考えると、それ以前の事も見られてたんだろうけど、俺はその時、図書館を出てから、始めて鞘香の存在に気付いたんだ。

俺も今まで知らなかったんだが、アイツの【代償】である【存在感】は、【作品】が壊れる事で回復するみたいだ。

可逆の【代償】なんて、有るとは想像してもなかったけど、多分アレはそういう事なんだろうと思う。

正確に確認出来た訳ではないが、下から煙が立ち上って来るに比例して、アイツの姿がよく見えるようになったからな。

俺は慌てて鞘香にかけよりながら声を掛けた。

でも、アイツは、確かに俺の方を見てるんだけど、俺の事は見てないんだよ。

なんか、虚空を見てるっていうか、虚ろな目をしてたんだ。

それから 部屋に戻ってから今までずっと アイツは何を話しかけても、反応してくれないんだ。

俺に対して怒ってるのかなら、まだよかったんだが、もし俺が、図書館でアイツの位置が正確に見えなかった事によって、アイツの心の傷を、えぐってしまったとしたら

正直、やりきれないよ。」

21話 見たモノ、見ているモノー03

「……………」

話がそれでひと段落したのは、雰囲気から何となく分かった。が、僕は、その後に続けるべき言葉を、すぐには見つける事ができなかった。

疲れた顔のままだが、英知は、話を逸らすかのように続けた。

「……………」 ああ、そういえば、屋上に向かう途中で、電話を見つけたんだ。」

下手に慰めるのも違うと思うし、もし続きを話すのなら、自分のタイミングで話したいだろう。

僕は、その逸らした話に、意図的に乗る事にした。

「電話？」

「ああ、2階に有ったんだけど。……………」ただ、その部屋、前に
というか今日だけど 見た時は、電話なんて無かった筈な
んだけどな。お前も一緒にいただろ？」

そこでそう聞くといい事は、昼間に鞘香さんを探して巡った部屋の
一つに有ったという事だろう。
確かに、そんな物は見なかった。

「単に俺たちが見落としてただけなのか？それとも……………」

「その電話って、隠されていたの？」

「いや、全然普通に置いてあった。屋上に向かうときに、通り過ぎる時に覗いたら見えたくらいだから。」

「それなら尚更、二人とも見逃すなんて事があるかな？」

「それなんだよな、俺一人だったら、見落としの可能性も考えれるんだけど、流石に二人して見落とすのは考えにくいんだよな。」

見落とす。

あるいは忘れる。

そうか、それは、もしかすると。

図書館でのモヤモヤについて考えていた僕は、その考えに容易にたどり着いた。

「……………もしかして、見えなかったんじゃない？」

「見えなかった？そんな訳が……………いや、もしかするとソレも鞘香の【作品】か？」

「いや、それもあるかもしれないけど、僕が聞いたかったのはつまり……………その部屋って、千鶴子さんを見つける前に調べた部屋じゃないの？」

「えーと、あの部屋は……………ああ行ってこう、探したんだから……………ああ、そうだけど。それがどうか……………そうか!!」

「うん。僕たちって、千鶴子さんと話すまで、
【此処】には電話な
んて無いものとして、決め付けてたよね。」

22話 フタリメ

「なるほどな。そう考えた方が、いろいろしっくり来るな。」

英知も、僕の考えに同意してくれた。

つまり、千鶴子さんから謎の会話について聞いた時点で、【此処】における電話を【認識】した僕たちは、その時点で始めて、電話が見えるようになったという考えだ。

【認識】するまで見えない電話なんて、正直意味が分からないけど、今更そんな事を言い出してもしょうがない。有るものは、有るのだから。

それに、そんな事を言い出したら、あの自力で動く骨の方がおかしい。

.....いや、違う。

違うんだ！アレは、あの骨は、自力で動いていた訳じゃなくて

.....。

ああ、頭が、酷く、痛む。

ぼんやりと霞む頭に、英知の声が響く。

「　　という事は、やっぱり全ての突破口は、あの電話だな。さつきまで鞘香の事でごたごたしてたし、俺の精神的にも余裕がなか

「つたんだけど、こうなったら調べてみるか。なあ茉莉、お前も来るか？……………ん？茉莉？どうした！？」

「電話を調べる、って？鞘香さんの事は放っておくのかよ！！」

心配してくれる英知に対して、僕は、自分でも、何故そんな事を言ったのか、よく分からない事を言った。

無理矢理に理由をこじつけるなら、

刺すような痛みで、混乱した頭は、

英知のその電話を調べるといふ行為に対して、鞘香さんに対する英知の接し方に、ある種の軽薄さを覚えていたのかもしれない。

「……………何を怒ってるんだ？おまえ。」

「怒ってないよ！聞いているんだ！鞘香さんの事は放っておくのか！？」

「……………何を言って……………お前、もう今日は休んだ方がいいんじゃないのか？」

「質問に答えろよ！！」

自分でも、何をこんなに怒っているのか分からない。
とにかく、とにかく。頭が痛かった。

「……………チツ！別に放って置くわけじゃないだろ！？俺は自分が出来る事からっ！！しようとしてるだけだ！！」

「何で今そんな事するんだよ！！鞘香さんが心配じゃないのか！？」

「心配に決まってるだろうがっ！！……………くそっ！！……………」
……………電話は俺一人で調べとくから、お前は今日はもう寝とけ！！」

しかし、怒声とともに部屋を出ていった英知と、僕が次の日会う事は無かった。

次の日も、その次の日も。

23話 定期報告ー01（前書き）

妙なタイミングで、前文を入れてしまい、申し訳ありません。

私は、この物語はあくまでも茉莉のみの視点で行こうと思っていたのですが、

それでは最終的に、「作者だけが意味が分かっている」という、本末転倒な事になりそうな気がしたので、泣く泣く、それを止める事にしました。

というよりは、単純に作者の腕不足です。すみません。

それで、これから、【茉莉が知りえる筈がない場面】については、タイトルの先頭部分に【 】をつける事にします。

と言っても、あまり多用するつもりはありませんので。あしからず。

そんな人がいるのか分かりませんが、あくまでも茉莉のみの視点で読みたいという人がいましたら、【 】マークの所は飛ばして読んで下さい。

出来る限り飛ばして読んでも分かるように努力します。

最後に、ここまで読んでくれてどうもありがとうございます。

よろしければ、この後もお付き合い頂ければ幸いです。

23話 定期報告Ⅰ 01

その人物は、音も無く部屋へと入った。

その部屋は、一見何もない部屋だ。
全体的に薄汚れて、悪い見方をすれば、廃墟のように見えなくもない。

その人物は、部屋の机の上に置いてある電話へと手を伸ばした。

数回の呼び出し音の後、電話が繋る。

『……………今日はちょっと遅くない？……………まあそれはいいや。
で、首尾はどうか？』

電話の向こうから、少し甲高い男の声が響く。

それに対して、その人物は、事務的に応答する。

「上々です。全員の確認が取れた訳ではありませんが、しっかりと、
被験者【穎娃】に関する記憶も、消えているようです。」

『ふうん。それで？』

「はい、混乱を避ける為にも、しばらく現状を維持すべきかと。」

『面白くない。』

「は？」

『それは面白くないなあ。そんな無難な作戦は、とてもじゃないけど面白くない。……………そうだ、あの本有ったよね、ほら、何とかっていう、凄い【能力】の。』

「【アル・アジフ】ですか？」

『そう、それ。それを使おう。ちゃんと回収してるよね？』

「はい。回収はしていますが……………しかし。それは危険すぎるかと。」

『……………いつから君は、僕に命令できるようになったのかな？』

「……………いえ、そういう訳では。申し訳ありません。」

『……………うん、分かればいいんだよ、分かれば。それじゃ、そういう事だから。よろしく。』

「……………。」

溜め息とともに電話を切った所で、その人物は、部屋の中に自分以外の人物の気配を感じた。
その人物が振り向くと、人影がサッ、と部屋から出て行くのが見えた。

その人物は、溜め息を一つ吐いた後、急いで、その人影を追いかけた。

8章 そして少しずつ世界は… 1話 再銃撃―01

「いつまで寝てるのかしら、馬鹿なんじゃないの、あなたそんな自堕落な生活が続けていたら今にきつと痛い目を見るわよ、そんな事も分からないのかしら、そんなんだから貴方は」

ああ!!五月蠅い!!

気持ちのよい眠りを妨害された僕は、
眠い目をこすりながら、時計を確認する。

………見間違い、じゃないよな。

………うーん、フォリスの言い分も分からないでもない、
でもない。

というか、フォリスは昨日の騒動を何処まで知っているんだろう。
僕が疲れているのは分かっている筈なのに。

まあそれにしても、これはさすがに寝過ぎかもしれない。

時計は、3時を指していた。

頭のぼやけ具合から言っても、夜の、という事はないだろう。

「あなた本当におかしいんじゃないの、起きたんなら起きたって言いなさいよ、だからって馬鹿正直に「起きた」なんて言ったら叩くけど、それより何で私の事を無視するのよ、わざとでしょ、わざとなのね、酷いと思わないの、思わないという事は」

無視していた訳じゃなくて、寝起きで咄嗟に反応出来なかったただけなんだけど。

まあそれもいい訳である事は間違いないか。

それにしても、もう少し静かにして欲しかったりする。

「ああ、フォリス、おはよう。」

「おはようっていうのは、どこまでいうのかしら、今の貴方みたいな状況でいうのは、間違っているような気がするわ、でも起きた人がおはようっていうのは別におかしくないから、結局」

最近、フォリスのこのマシンガントークにも、あまりたじろがなくなつた。

慣れとは本当に恐ろしい。

「で？どうしたの、フォリス。僕の部屋にくるなんてめずらしい、というより始めてじゃない？」

「そうね始めてね、思ってたより23倍も部屋が綺麗だからびつくりしたわ、そうよそうよ、千鶴子が呼んでるわよ、それを伝えに来たんだったわ、そもそも貴方」

どれだけ汚いと思ってたんだよ、僕の部屋。

23倍、という微妙な数字に突っ込む事は、きつとしてはいけないのだろう。

それよりも、千鶴子さんが？

何の用だろうか。

2話 再銃撃102

廊下を歩きながら、横を覗き見る。

金髪の女の子は、前を向いて歩いている。

僕が見ている事に気付いている様子はない。

まあこういう場合、実際は気付かれている可能性が、半分以上あるものだけだ。

気付いているのか、いないのか、ただ黙々と歩き続けるフォリス。

……………んー、調子狂うな。マジで。

いつもがいつもだけに、こう黙りこまれると、何というか、怖い。

何で黙っているのか分からない所も怖い。

部屋から出た所で急に黙りこんだのだ。

それまで勢いよく喋り続けていたのが、嘘のように、唐突に。

お腹でも痛いのかと思ったが、ここまで黙りこむのはおかしいだろう。

カッ、コッ、カッ、コッ、

と、僕らの足音が交互にする以外は、ほぼ無音の状態である。

「……………ねえ？フォリス？」

「……………」。

無視ですか。そうですか。

え？なに？コレもしかして怒ってるの？

だとするとますます意味が分からないんだけど。

「……………フォリス？……………何か喋ってもらわないと、非常に反応に困るんだけど。」

「……………え、あ、な、なによ、急に話しかけないでよね、あでも話しかける前に事前に伝えるっていうのも変な話よね、という事は今のも別に急に離しかけたというカテゴリには入らなくて、つまり」

？無視されてたんじゃないのか？

……………なんか良く分からないな。

もしかしたら、これが彼女の【代償】なのかもしれない。

だとしても、なんのこっちゃ分からないけど。

3話 認識―03

ああそうだ、忘れる所だった。

図書館から運んでもらったお礼を言わないと。

栞の口振りでは、直接運んでくれたのは、千鶴子さんと栞みたいだけど、まあそんなのは関係ない。

「昨日はありがとう。」

「？」

語尾を延ばしたまま固まるフォリス。器用な奴だ。

「図書館から運んでくれたんでしょ？助かったよ。」

「あ、ああそうね、そういう事もあったわね、でもそれは栞と千鶴子がやった事だから私には関係ないのよ、つまりそのお礼は」

「そんなの関係ないよ、ありがとう、フォリス。」

「え？え、ええ、いいのよ別に……………」

そういつて、珍しい事にフォリスは言葉をとぎらせた。

……………運ぶと言えば、昨日何かそういう事について考えたような気がするな。

一人では運べない、とか何とか。

確か二階の鍵が掛かつてる部屋の事だな。

その中の千鶴子さんを誰が運んだかって問題だ。

千鶴子さんいわく、そういうプレイらしいけど、鍵の問題からして、それはまず無いだろう。

と、いうような事を、 と二人で話したんだよな。

.....ん？.....誰.....だった？

.....誰と、話した？

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな。

忘れる筈がないんだ。忘れる筈が。

思い出せ、思い出せ、思い出せ。

英知だ。

そうだ、英知だ。

よかった。覚えていた。

.....何故僕は、こんなあたり前の事を、わざわざ思い出さなくてはならないのだろう。

4話 マシンガントーカー 03

「それで、私が見えないのにその子には見えてたのよ、本当に見えていたのかしら、そもそも幽霊なんて気持ち悪いわよね、信じる信じない以前に私はそんなに不確かな存在は気持ち悪いと思うのよ、でもいたらいたでそれはまた面白いわよね、最初は気持ち悪いかもしれないけど、いる事がしつかり分かってしまえば、それは面白い事だと思うのよ、幽霊側から見た世界とか、驚かせるコツとか、普段何をしているのかとか、普段聞けないような話を聞けると思うのよね、つまり、新しい経験が出来て、それはそれでかなり面白いんじゃないかしら、だから最初の気持ち悪いという嫌悪感、というより先入観を捨てて、話してみればきつと事態は好転すると思うのよ、あそつえば、幽霊と妖怪って何が違うのかしら、お化けとか妖精とか、他にもいろいろあるけれど、正確に分類してみると面白いかもしれないわね、あでも自縛霊とか怨霊とかに会うのは間違っても嫌ね、話とかする以前に殺されちゃいそうだから、そういう存在に殺される時って、普通の殺され方をしなさそうだから、あもちろん映画とかで見た事んだけどね、体中ぐちゃぐちゃにして殺されるなんて、考えるだけで寒気がするわ、会うならやっぱり背後霊とかがいいかもしれないわね、優しそうだし、つまり」

さつき黙り込んでいたのが嘘のように、フォリスは絶好調に喋り続けている。

僕は、時々相槌を挟みながら、そんなフォリスの話を、聞くとともに聞いていた。

「そつえばさ、図書館って、あのままなの？」

僕が昨日倒れてしまった後、図書館がどういう状態になっているの

か気になったので聞いてみた。
もっとも、あんなに目茶苦茶になってしまったのだ。一晩でどうも
うできるとは思えないけど。

「だからね、それでその子の見てた霊が え？あのままって？」

「いや、あんなに豪快に壊れたからね、これから片付けるの大変だ
なあ、って。」

「まあそうね、でも別に直す必要もないんじゃない？あの部屋使っ
てる人なんていないし、それに 」

「それなんだけどさ 」

フォリスの言葉を遮って、僕はずっと頭に引っかかっている事を聞
いてみた。

「 あの部屋って、本当に無人だったわけ？」

「……何を変な事を言ってるのかしら、そんな事はっかり言ってるから、何も無い所でいきなり倒れたりするのよ、そんな変な妄想癖は、なるべく早いうちに消し去った方がいいと私は思うわよ、というか貴方は」

フォリスは、僕の言っている事を、全面的に否定した。

「………やっぱり僕の気のせいなのだろうか？」

それにしても彼女の口の悪さは、もう少し何とかならないものか。別に僕に妄想癖なんて無いし、何も無い所で倒れたりしない。

「………何も無い所？」

「ちよつと真面目な質問なんだけどね、あの部屋に、【恐竜の骨】は有った？」

あの巨大な恐竜の骨を見て、「何も無い」というのは、やはり少しおかしい気がする。

「だから、つまり貴方は………真面目な質問って何よ、という事は今まで私に対して喋ってた事は全部適當って事？酷いわ、酷いわ」

「違うよ、そういう事じゃない。フォリスだって本当は分かっているんだろ？僕は今本当に真面目に聞いてるんだ。」

「分かっているわよ、分かっているわよ、そんな怒ったような顔をしな

いで欲しいわ、ちょっとした冗談じゃない、そんなに言うなら私も真面目に答えてあげるわ、といつても私はいつも大抵真面目に話してるから、いつも通りってことになるわね、あの部屋には貴方が言うようなものは無かったわ、だいたい貴方真面目真面目言っても

「

無かった？そんな筈はない。だってアレが原因で【図書館】は。

「ならフォリスは、なんであの部屋が壊れたと思う？もう一度真剣に、思い出してくれないか？」

「だいたい真面目って言うのは……なによ今度は真剣に？そんなの何回考えても一緒よ、それに私は常に真剣よ、分かったわ、分かったからそんな顔をしないで欲しいわ、というか貴方なんで今日はそんなに突つかかって来るのかしら、昨日頭でも打ったんじゃないの、壊れた理由なんてだから」

そこでふいに、フォリスは頭を押さえてうずくまった。

「大丈夫！？」

「だから、壊れたのは、アレ？でも、違うわ、壊れる理由は、だから、アレ？私？アレ？なんで？アレ？」

ぶつぶつと呟きながら、フォリスは頭を痛そうに押さえ続ける。そういえば、僕もこういう事があった、確か　と一緒に行った屋上での事だ。

真っ白な世界に困惑した僕は、何がなんだか分からなくなって。

ほどなくしてフォリスは、その場に崩れ落ちてしまった。どうやら、気絶しているようだった。

6話 拡散廊下―01

後から不当な文句を言われるかもしれないが、
かといってその場に放っておく訳にもいかず、
僕はフォリスを背負って、再び廊下を歩き始めた。

……………それにしても、軽いな。

気絶しているせいで、体から力が抜け切っている。
そのせいで少しは重くなっている筈なんだけど、それでも軽い。

まあそれはいいとして、だ。

自分で言っていて、全然疑問に思わなかったんだけど、
後から冷静になって考えてみると、さっきの僕の発言はおかしいな。
否、発言というか、思考か。

そもそも。

そもそも、【恐竜の骨】は有って当然なのだ。
さっきは有る方がイレギュラー、みたいに考えていたけど、それは
違う。

もともとあの骨はあったのだから。
動いていた事がおかしいのであって、骨自体は有っても不思議じゃない。

……だから、つまり、ええと。
フォリスがもし、骨は有って当然のものという認識だったとすると、さっきの発言の意味が微妙に違ってくる。

もしかしたらフォリスは、骨ありきで、僕に【何も無い所】で倒れた、と言ったのかもしれない。骨が原因だとは、思わなかったのかもしれない。

……いや、いやいや、まてまて。

さっきフォリスは、骨は【無かった】と言ったぞ。

………どういう事だろう。

何だか頭がこんがらがってきた。

そもそも骨が無かったのなら、何がフォリスをこんな状態にしたんだろう。

悩むような点なんて、他に何かあったかな。

いや、無かったからこそ、か？

骨の有無も含めて、もう一度【図書館】へ、いろいろ確認に行く必要がありそうだ。

………まあなにはともあれ、とりあえず【映写室】へ行こう。
フォリスをベッドで寝かせてあげないと。

………それにしても、廊下がいつもより長い気がする。

7話 拡散廊下―02

コツリ、コツリ、

と、一人分の足音が、廊下に響く。

「……………はあ。」

思わず溜め息がでる。

……………さすがに、重くなってきた。

いくら軽いとはいえ、人一人を背負ったまま、長距離を歩けるほどには、僕の足腰は発展していない。

……………というか、遠すぎだろ、さすがに。

もう、僕の部屋から【映写室】まで、往復する分くらい、歩いた気がする。

フォリスと話している間、歩いた距離なんてあまり意識していなかったから、その分と、

僕のこの筋肉痛のせいで、いつもより距離が長く感じてるのかな、とか、

色々と考えて、差し引いてみたけれど。

もうそろそろ、誤差で片付けるのは、不可能になってきた。

もうこれは確定的に。廊下に何か異変が起きているとしか思えない。

さつきから、同じ所をぐるぐる回っている気もするし。
さすがにそれは気のせいだろうけど。

誰かの【能力】か？

…………空間関係で、一番に思いつくのは、亜空だけど。
でも、亜空は今ダウンしてると思うんだよな。

僕でさえこの状態なんだから、昨日アレだけ【能力】も身体も酷使した亜空が、回復しているとは思えない。

まあ亜空の事だから、もう回復しているのかもしれないが。

それにしても、他にも僕が【能力】を知らない人もいるから、一概に亜空の【能力】とは決め付けられない。

もしかしたら【代償】の方かもしれないし。

…………あ、そうか、フォリスの【代償】かな？

…………本人に聞かないと何とも言えない所だけど。

どちらにしろ、迷惑である事には変わらない。

こんな悪戯みたいな事をして、何の得があるんだよ。

いろいろと考える間に、さらにもう一回【映写室】までいけるくらいの距離を歩いた。と思う。

が、以前として、目標の部屋は見えてこない。

8話 拡散廊下―03

「……………」

あー、疲れた。もう歩くのしんどい。

足を止めて、フォリスを壁にもたせ掛ける。

僕は、一度休憩を取ることにした。

……………考えてみれば、ただやみくもに歩いてても仕方ないな。とにかく早く休憩したい一心で、歩き続けていたけれど、前に進んでいる気がしない。

あー、余計な体力を使ってしまった。だいたい、【能力】なのかもしれないのに、ゴリ押ししようとしたのが間違いだった。

ちよつと休憩がてら、真面目にこの現象について考える事にしよう。

歩いていた感覚からすると、前に進んではいるようだ。

つまり、同じ場所をループしている、という事ではないように思う。というのも、古典的な手だが、その可能性も考慮して、床に目印を置いておいたからだ。

……………となると、亜空の【能力】かな？やっぱり。

でもそうするとお手上げなんだよな。

んん、できる事からしていこうか。

とりあえず、これがフォリスの【代償】である可能性をつぶそう。

僕は、フォリスを起こそうと、手を伸ばした。

肩を揺すってみる。首がガクガクなってるが、起きる様子はない。軽く顔を叩いてみた。ぺちぺち、と小気味いい音が鳴るが、やはり起きる様子はない。

……駄目か。これ以上はさすがに気が引けるので、僕は、もう一度思考に戻ることにした。その間に目を覚ますかもしれないし。

「あら、止めちゃうの？」

「……………！？」

びっくりした。急に後ろから誰かが声を掛けてきた。

「や！茉莉君。」

元気に挨拶して、千鶴子さんはビシリとポーズを決めた。

「あ、ああ、千鶴子さん。どうしてここに？」

9話 イケナイコト

「どうしても何も、あなた達がいつまで経っても来てくれないから、こっちから探しに来たのよ。」

そういえば、どれくらいの時間が経ったのだろう。

時間を確認したかったが、フォリスに急かされるように部屋を出たので、腕時計を付け忘れてしまった。

「ああ、それは、うん、すみません。」

「いや、別に謝らなくてもいいんだけど。……………それより、何で止めちゃうの?」

「え、何を?」

「分かってるくせに。」

分かってるくせに?

「……………いや、分かりませんけど。」

「んん?はぐらかそうとしても無駄だよ?」

「いや、だから何をですか?」

「だから、イケナイコトをしようとしてたんでしょ?フォリスちゃんに。」

「は?」

「何を使ったか分からないけど、眠らせて無抵抗なフォリスちゃんに、アレやソレのイケナイコトを。」

「いや！いや、いや！違いますよ！！断じて！！」

「隠さなくても分かってるわよ。」

「分かってないです！！違いますから！！」

「えー、違うのー？」

酷く不満そうな声を出す千鶴子さん。
何で不満そうなんだ。

「ええ、違います。」

「じゃあやってよ、今から。」

「はあ？」

「イケナイ暴走をしようとする男の子を、やさしく諭すお姉さん役がやってみたいから。やって。」

「嫌です。」

「…………ノリ悪いなあ、もう。…………まあいいわ、じゃあ本題に入るけど、何でこんなに来るのが遅くなったのか、理由があるなら説明してくれる？」

幾分真面目な顔と口調で、千鶴子さんは言った。

10話 拡散廊下 04

フォリスが部屋に来た所から、様々な話をして まあといって
も、話の主導権はほぼフォリスだったけど そして、倒れてし
まった事。

倒れてしまった理由は、少し悩んだ結果、省く事にした。ここでさ
らに千鶴子さんにまで倒れられたら困る。

さらに、廊下が異様に長い事など、とりあえず概略を話した。

その間千鶴子さんは、ふむふむ、と窺みたいな聞き方をしていた。

僕が話し終わると、千鶴子さんは言った。

「それで、いろいろ理由をつけて、結局は私の言ったとおりなんで
しょ？」

「……………え、いや、……………ん？」

言った通り？僕がフォリスに何かしようとしたって？

……………一生懸命話したのに、何だか悲しくなる。

「あ！ごめん、ごめん！！冗談だから、冗談だから。でもさ、何で
倒れた理由を隠すの？」

オブラートにやりわり包んだつもりだったのに、誤魔化しきれなか
った。

「……………いや、それは。」

「言えないの？やっぱり……………」

「違います。でも、その、理由は今は言えません。部屋にしたら話しますから。とりあえず今は、フォリスを休ませてあげないと。」

「ふうん。まあそれでもいいわ。だいたい、自分で言っておいてなんだけど、貴方がそんな事するようには見えないしね。信じてあげる。」

今の会話で、何か精神的にも疲れた。

「……………それで、この廊下の異変について、何か心当たりは？」

「ないわ！！！」

やっぱりそうですか。ちょっと期待したんだけどなあ。

自体は何もいい方に進んでいないが、二人になった事で、少しだけ気が楽になった。

少しだけ、だけ。

11話 拡散廊下―05

「それで、その時の友達が、やたらと歴史に詳しかったのよ。って聞いている。」

「ええ、聞いてます。」
「聞いてますよ、一応は。」

特に当ても無く、僕たちは廊下を歩き続けていた。

「確かに、今話してる話が、君にとって、とてつもなくどうでもいい話なのは私だって分かってるけど、君のその「ちよっとエロい話以外は基本スルーでいきますよー」的な空気は駄目だと思うな。」

そんな空気は醸し出していません。

「……………いや、まあ。うん。……………いつも千鶴子さんから振ってきますよね。」

「そんな事はないわよ。仮にそう見えるのだとしても、それは君の「微エロ話して欲しいオーラ」をお姉さんが敏感に感じ取ってたね……………」

どんなオーラだよ。

「……………それはオーラというよりは雰囲気ですよ。まあどちらにしろ僕はそんなもの出して無いけど。……………それであの、さっきから気になってたんですけど、「お姉さん」って何ですか？」

「はぁ？茉莉君は「お姉さん」の言葉の意味が分からない？これは深刻な悩みだねえ。」

「いやいや。だって見た感じ、同年くらいでしょ？僕と千鶴子さんって。」

「まあねえ。でもそう思うんならなんで敬語なの？」

「一応年上の可能性もあるので。」

「どうだろうね、まあ、そこで年を聞かないのが、君のポリシーなの？」

「ポリシーとまではいきませんが、まあ一応は。」

「はあん。まあ、年は教えないけど、もうめんどくさいからタメ口でもいいよ？お姉さんは寛大だから。」

その時点に至っても、お姉さんと呼んでいる時点で、何だかすでに少しおかしい気もするが。

まあ、そういう気分になったら、タメ口に変えよう。

それにしても、この廊下から、本当に抜け出せるのだろうか。

もういい加減飽き飽きして来た頃ふいに、後ろから声が響いた。

「……………まったく、君はいつも何かしら問題を抱えているね、茉莉君。闇雲に歩いてても無駄と、もっと早めに悟るべきだと、私は思うよ。」

12話 毒舌101

「いつもって、そんな僕をトラブルメーカーが何かみたいに言わないでくれないかな、栞。」

「そうだよ、茉莉君は、トラブルメーカーじゃないよ、ただのエロい人だよ。」

千鶴子さんが横からフォローの様なものを入れる。

「ふん、トラブルメーカーかどうかは別として、君がそんなに無能だとは思わなかったよ。……………千鶴子君も、二人して何をしているんだ？」

「何って、ここから出る方法が分からないから、とりあえず歩いてたんだ。」

「とりあえず歩く？馬鹿馬鹿しい。君は本当にそんな事でこの状況を乗り切れるとでも？」

「いや、思っていないけどさ、とりあえず何かはしないと落ち着かないから。」

僕のその返答を、栞はハン、と鼻で笑うと、千鶴子さんに向けて言った。

「千鶴子君も千鶴子君だよ。君は何がしたいんだい？茉莉君に教えてあげればいいじゃないか、これが亜空君の【能力】である事を。」

「いやー、何かさー、教えない方が面白そうだったから。それに、その事を教えても、どうせこの空間から出られないだろうし。」

「やれやれ。まあいいんだが。茉莉君、君も実は気付いてたんだろう？それで、この場所から出る手段の一つも思いついたのかい？」

いや、思いついてないから、歩いてたんだけど。

「その様子だと、何も思いついていないようだね。病みあがりだからといって、頭の回転の鈍さの言い訳にはならないんだよ？」

心底呆れた様子で、栞はそう言った。

13話　とうー・でい・あい

そんなに呆れられた様な顔をされても、正直困る。

というより、いつも以上に、今日は栞の機嫌が悪い気がする。いつも確かに口が悪い事は悪いのだが、いつもはもう少し緩い。まあ僕の気のせいかもしれないけど。

「……………なんか、栞今日機嫌悪くないですか？何があったか知ってる？」

ちようど今は、横に千鶴子さんがいたので、小声で聞いてみた。

「さっきから敬語とそれ以外が混じって気持ち悪いよ。早くどっちに統一してよ。」

千鶴子さんは、結構大きめの声で、そう返して来た。僕だけ小声なのが、何だか滑稽じゃないか。

「ああ、す……………ごめん。それで、栞の機嫌がいつもより悪いと思わない？」

それでも小声で、問いかける。

「そうだねー、……………きっとアノ日なんだよ。いわゆる「とうー・でい・あい」なんだよ、きつと。」

やはりそれなりの声の大きさで、千鶴子さんが返事をする。

……………とうー・でい・あい？

今日の……………目？

いや、とうーで一回言葉が切れてたから、二日……。……そうかなあ？

思わず栞を見ると、もの凄く僕の事を睨んでいた。

いやいや栞さん？何で僕を睨むんですか？言ったのは千鶴子さんだよ？

無言のプレッシャーに耐え切れず、視線を逸らそうとしたその視界の端に、杖のようなものが見えた。

栞の握り締めている黒いそれは、仄かな明かりを放っていた。

「ねえ栞、その手に持つてるのは何？」

「ああこれかい？私はもつと剣みたいだなデザインがよかったんだがね。亜空君が、それは止めておけと言うから、このシンプルなデザインで妥協したんだよ。」

いや、聞きたいのはそういう事じゃないんだけど。

また呆れられるかもしれないが、実際分らないんだからしょうがない。

「いや、そうじゃなくて、それは何なの？ちょっと光ってるけど。」

14話 空間破杖―01

「何言ってるの茉莉くん、アレはタクトだよ。いわゆる指揮者の持つ華麗なる一振りの棒！」

横から千鶴子さんがフロアのようなものを入れる。
「というかこれはもうガヤの領域だな。」

「いや、そういう事でもなくてね、僕が聞きたいのはもっと本質的な……。てかなんなんですかさつきから、「いわゆる」の使い方間違ってますよ、それ。」

「ほらまた敬語。そんな事ないよ、私ほど日本語を上手く使える人間なんて、世の中に数える程しかないよ、ねえ茉莉君。」

「なんでそこで僕に振る？」

僕が指摘したのに、その僕が同意するワケがないじゃないか。

「いや本当にそうだね、こんなマーヴェラスな日本語を聞いたのは、僕がこの世に生を受けてから初めての事柄だよ。」

勝手に口が動いた。僕の。

「……………なんだよマーヴェラスって。」

「やだ茉莉君。そこまで誉められると私照れちゃうわ。」

ほほに両手をあてる千鶴子さん。

その芝居的な仕草はなんですか。というか自分で言わせておいて自分で照れるとかどついう事だよ。

今思うと、千鶴子さんの【能力】ってある意味最強じゃないのか？
ある意味で、だけでも。

「……………それで、夫婦漫才はそれくらいにして、そろそろ本題に入らないかい？」

栞が、スルリと言葉を滑り込ませてきた。

その夫婦、という言葉に突っ込みを入れると、またループしそうな予感がしたので、そこはスルーした。

まあ栞の冗談だろうし、さっきまでより栞の機嫌がよくなっているように見える。

何でかは分からないけど、余りの馬鹿さ加減に、怒るのも馬鹿らしいとか、思ったのかもしれない。

「この杖だけれど、君には前に話さなかったかな？」

話された覚えは無い。

「……………その様子だと、してなかったみたいだね。おかしいな、私の勘違いか。これはね、亜空君につくってもらった、【空間を制御】
できる杖だよ。まあ彼の【能力】に比べたら、その【能力】ちからは微々たるものなんだが。」

15話 空間破杖Ⅰ 02

空間を制御？

まだよく分からないけど、つまりあの杖で、亜空みたいな事が出来るって事かな？

微々たるものとはいえ、亜空の【能力】が使えるというのは驚くべきことだ。

……使える【能力】というのはどのくらいなんだろう。

ああ駄目だ。聞けば分かる事なのに、考え込むのは僕の悪い癖だ。何でも聞けばいいってもものでもないだろうが、分からないものを自分だけで分かるうとしても無駄だろう。

「亜空の【能力】って言ったけど、どの程度使えるの？」

「ふん、だから微々たるものだよ。例えば」

言いながら、栞は光る杖を目の前で軽く振るった。

すると、3メートルくらい離れていた栞が、いつの間にか目の前に立っていた。

ん、アレ？別に僕今瞬きしてないけど。どういう事だ？

「まあこういうのだね。亜空君の【能力】の縮小版と考えればいいよ。」

「ほー、凄いね、そのタクト。ねえ栞、それって、逆に広げる事

も出来るの?」

千鶴子さんが聞くと、「当然だ」と言っで、また栞は杖を振るつた。

すると、栞は5メートル程離れた位置へ、瞬時に移動した。
なるほど、大体把握した。

亜空の【能力】の縮小版っていうのはそういう事か。

……ん、もしかして。

「ねえ栞、もしかして、昨日の図書館でもその杖使ったんじゃない?」

僕がそういうと、栞はにやりとして、
「ノーコメントだ。」
と言った。

つまり使ったと考えてもいいだろう。

そうすると、図書館のドアが急に開いて、誰も通らなかつたあの現象が、一応は説明できる。

……まあ、ノーコメントという言葉は便利な言葉だからな。
僕の考えが正しいという保障は無いけれども。

16話 空間破杖―03

「それでだね、茉莉君、今すぐ付いて来て欲しい所があるんだが。」
そこでチラリと千鶴子さんの方を見て、続いて僕の背中にいるフォルスへと視線を動かす。

そして、僕に向かって言った。

「ふむ。仕方ない。一度どこかの部屋へ行こうか。こちらの用は、なるべく急ぐんだけどね。」

「いや、でも、先に千鶴子さんの用を済まさないといけないし……」

「なんだ、そうなのか。……なるべく早く済ませてくれると有り難い。」

「あ、それなら大丈夫だよ。私の方は別にいつでもいいから。急いでるんなら、先にそっちの用事を済ませるといいよ。あ、でもフォルスちゃんを休ませる為にも、どっちみち一度【映写室】へは行った方がいいかも。」

「ふん、そうか。済まないね。それなら手早く部屋まで行こう。この埋め合わせはまた何か考えておくよ、千鶴子君。」

朶が埋め合わせを言った瞬間、千鶴子さんの目がキラキラと輝き出し、嬉しそうに

「あ、じゃあ今度また体を貸し」と言った。

「それは遠慮しておく。」
が、すぐにそう遮るように栞は言い、【映写室】のあるであろう方向へ向かって、杖を振った。ぼんやりとした明かりが、その瞬間だけ少し強く光ったように見えた。

すると、歪んでいた空間が正されたように、目の前に【映写室】が現れた。

.....。

.....こんな近くまで来てたのか。

.....なんにしろ、これで一度休めるな。

17話 此処ノ人―01

どこか手馴れた感じで、フォリスをベッドに寝かせる千鶴子さんを、
栞と並んで見ていた。

なんであんなに手際がいいんだろう。

看護士さんみたいに見える。と思ったがやっぱり見えない。千鶴子
さんだからな。手つきも何かちよつとエロいし。

指先を、あんなに忙しく動かす必要がないだろうに。

なんだか少し手持ち無沙汰になったので、栞に問いかけてみた。

「さっきの杖つて、一ヶ月くらい前に頼んでたやつ？」

と僕が聞くと、栞は少し驚いたように言った。

「ん、覚えていたのかい？驚いたな。」

「なんとなく、ね。それでそれって、どういう仕組みなの？」

「仕組み、とは？」

「どういうカラクリで動いてるの？【能力】って、物に込められた
りするんだっけ？」

「仕組みは私も知らないし分からない。鞘香君の様な【能力者】も
いる訳だし、一概に不可能と言い切る事は出来ない。ただ断つてお
くと、普通は出来ない筈だ。」

「普通は？」

「いくら私たちの持つこの【能力】が、物理法則を無視する程のものだとしても、世間で言われている、常識から外れるというのは、本当はとても難しい事なんだ。そうだからこそ政府も、病院に隔離するなんて馬鹿な真似をしているんだからね。」

「……………でもその杖は確かにそこにあるよね。」

「……………ふむ。前にも言ったと思うけど、【此処】にいる人間は、何故か全員、尋常じゃない程の【能力】を持っている。君もそうなんだろう?」

いや、僕は。

覚えてないんだけど。そうなのだろうか?

「……………という事は朧も?」

「ノーコメントだ。」

「……………。」

ノーコメントっていうの止めない?

何かずるいよ。まあ僕が言えた事でもないから、黙ってるけど。

18話 此処ノ人102

しばらく話していると、ふいに栞が黙り込んだ。
唐突だったので、少し驚いたが、栞の考えが見えないのはいつもの事だ。

気付かれない程度に顔を傾けて栞を観察してみると、何か考え事をしているようで、難しい顔をしている。

……………急いでるんじゃないかったのか？

まあ、僕はむしろ今の状態を歓迎なんだけれど。正直もう歩き疲れた。これは明日は筋肉痛を通りこしたよく分からない状態になりそうだ。

いらない事を言っただけでまた怒らせても仕方ない。

僕は栞をそっとしておいて、椅子に腰を落ち着かせた。

やれやれ、やっと一息つけた。

それにしても栞のあの杖は凄いな。

とうよりも、亜空の【能力】が凄いと言った方が正しいか。

あの杖が無かったら、今頃まだ歩き続けているんだろうか。
考えるだけでうんざりする。

そもそも何であんな状態になったんだろう。

栞はあれが亜空の【能力】だと言い切ったが、僕には亜空がそんな事をする意味が、どうしても分からない。

……さつき散々にけなされたけど、あの杖が無かったとしたら、栞だってあの空間から出られないんじゃないのか？
その事を栞に聞いてもどうせ、それを予測するのが、とかどうたら
こうたら言われそうだけど。

ん、予測か。

ああなる事が栞には分かっていたとか？

……いや、それはさすがに考えすぎか、いやでも……。

「茉莉君。」

考えに没頭している僕に、栞が話しかけて来た。
そして、真剣な表情で続ける。

「悪いんだが、私は急用を思い出した。この杖を貸してあげるから、
急いで【研究所兼探偵事務所兼占い所】へ行ってくれ。」

そう言った後、僕に質問の予知を与えず、栞は部屋を駆け出して行った。

……なんなんだ、いつたい。

9章 事象を見る女 1話 デジャヴ

ドアを開けようとして、手を止める。

その様子を、千鶴子さんが後ろから不思議そうに覗き込んできた。

「ん？どうかしたの？」

そうだった。このドアは左手で開けなければ。

【此処】に来て、そろそろ一ヶ月になるけれども、このドアを始めとする鞘香さんの一連の作品だけは、未だに慣れない。人間の心理の盲点を突いてくるというか、何というか。忘れた頃にやって来る、みたいな。

意識していなければ、ドアなんて利き手で開けてしまう。

「いや、別に。」

と答えながら、左手をドアの取つての部分に添える。

そういえば、千鶴子さんは鞘香さんの作品に「かかる」人なのだろうか。

「どうしたの？早く入ろうよ。」

……違うのかもしれない。もしそうなら、この反応は少なくともしないだろう。

鞘香さんの【代償】が、少しは改善されたって、昨日の夜に 　　から聞いたけど、実際どうなんだろうか。

確かその変わりに、様子がおかしくなった、とか言ってた気がするけど。

今部屋にいるのだろうか、というか用事ってその事なのかな、もし

かして。

「だから何してるのよ、貴方が開けないのなら私が開けるわよ。」

千鶴子さんがそう言うと、僕の体が微妙に重くなる。自分の体なのに。

だから僕は慌てて言った。

「いや！！大丈夫！！今開けるから！！」

身体を勝手に使われるのは、とてもではないがいい気はしない。

……千鶴子さんの【代償】って何なんだろうな、結構ばしばし【能力】を使ってる気がするけど。

「ん？いいのよ？お姉さんにそのまま身体を任せなさい？」

微妙に違う意味に聞こえるから止めてくれ。狙っているのかもしれないが。

「いや、大丈夫だから。」

「まあそう言わずに。」

半ば強引に。僕の身体の制御権を奪おうとする千鶴子さん。

そうはさせるかと、僕は何かよく分からないものに抵抗した。

「む、やるわね。腕を上げたんじゃない？茉莉君。」

ようやく諦めたようで、千鶴子さんが言う。

フォリスもすっかり落ちついた様子だったし、正直一人でまたあの廊下を歩くのは不安だったから、付いてくるという提案を受け入れた訳だけど。

こんな事なら、部屋を出るときに、しっかりと断っておけばよかった。

まあ、よく分からない杖を、使いこなしてくれたのは助かったけど。

何はともあれ。

ようやく、という感じで僕はドアを開いた。

「やっと来たのね、ずっと待っていたのよ、うふ。うふふふふ。」

部屋の住人の一人が、薄気味悪い微笑みとともに僕らを迎えた。

「……………」。

同じような事が、前にも、あったような気がしなくてもなかった。多分無かったと思うんだけど、とにかく、漠然とした嫌な予感がし

た。

2話 事象確定―01

「……………とりあえず、部屋、出ない？」

「え、何で？まだ何の用も済ましてないじゃん。」

「うん、そうなんだけど、凄く嫌な予感がするんだ。」

「シックスセンスってやつ？いつの間にそんな物を身につけたの？」

「そういう物を身につけた覚えはなかったんだけど。とにかくココは、この部屋には、これ以上居ちゃいけない気がする。」

「ふうん、君がそこまで言うのなら、そうなのかもね。」

自分でも、千寿さんに対して、失礼な振る舞いをしているのは把握しているが、それよりなにより、今はこの部屋から出たかった。

それが何故なのか、自分でもよく分からないけど。

「うふ。うふふ。無駄よ。うふふ。」

いつもと全く様子の違う千寿さんの手には、見覚えのある本が有った。

ん？何で僕はアレに見覚えがあるんだ？

いや、そんな事はどうでもいい。とりあえずこの部屋を出ないと。

何処か悲壮な思いとともに振り向いた僕の目の前に、出口のドアは無かった。

ドアと僕らの間には、いつの間にかもの凄いスペースが広がっていた。

何だ？何でこんな。この部屋にも亜空の【能力】が広がっているのか？

「うふ、だから無駄って言ったじゃない。」

千寿さんの様子があきらかにおかしいが、今はその確認よりも、部屋を出る事を優先する。

「千鶴子さん！！早く杖で！！」

千鶴子さんが杖を軽く振ると、僕らはドアの手前へと、一瞬にして移動した。

凄いな、千鶴子さん。さっき使い始めたばかりなのに、もう杖はお手のものだな。

背後から、少し驚いたような、それでいて落ち着き払った声が聞こえてくる。

「あら、そんなものが有ったの。でも、うふふ、無駄よ。そのドアの鍵は――」

急いでドアに左手を添え、一気に引いたが、ドアはびくともしなかった。

「 掛かっている事にしたら。」

内鍵を外そうとしたが、こちらもびくともしなかった。

こうして僕らは、宣託するようなその声の主と、向き合っしかなかった。

3話 事象確定―02

くそー！何だこれ！！どうなってる！？

懲りずにもう一度開けようと努力してみるが、やはりドアはピクリともしない。

これは、立て付けが悪いとかそういう事ではないな、どう考えても

「ちょっと、何遊んでるのよ茉莉君。君以外とパントマイムの才能あったのねー。……………ってあら？何これ、動かない。」

千鶴子さんも開けようとしてみたが、やはり無理なようだ。

「うふ。だから無駄と言ってるでしょ？悪あがきは美しくないわよ。」

「予想外に近くから千寿さんの声が聞こえた。」

「っな。」

振り向くと、千寿さんがすぐそばまで来ていた。おそらく、3メートルもないだろう。

そんな馬鹿な。僕は、杖の【能力】で飛んで来たんだぞ？こんなに早くに追いつかれる筈が無い。

「うふ。うふふ。どうしたの？何をそんなに驚いてるの？」

「……………」

何だろう。何で僕は、こんなにも千寿さんの事を警戒しているんだろう。

確かに様子はおかしいが、何でこんなに、僕の体は緊張しているん

だろう。

嫌な汗が、背中に一筋流れたのを感じた。

「うふ。黙られたら面白くないわ。お話ししようよ、茉莉君。いつもみたいに。」

「……。」

「うふふ。なら貴方の疑問を解消できる、話題を提供してあげる。私の【能力】は、【事象を確定する事】よ。」

「……………事象を確定する?」

「やっと話してくれたわね。そうよ、【事象を確定する】の。ドアが、【閉まっている】事にしたり、空間が【広がっていない】事にしたり。」

なるほど。そういう事……………なのか?

千寿さんは、じつとりと僕を眺め直し、くすくすと笑う。

そして、僕の目を覗き込みながら、言った。

「嘘よ。うふふ。全部ウ・ソ。うふ。そんなに簡単に、【能力】を教える訳ないでしょう?」

4話 事象確定―03

「うふふ、貴方のその困惑した顔、凄くいいわよ。」

いかどうかは別として、それは困惑もするだろう。

全部ウソって、どこからどこまで？

さっき言った【能力】の事か？それとももしかして、この変な雰囲気
気が全部演技って事か？

……いや、それはさすがにないだろう。

ここは額面通り、さっき言った【能力】が全部ウソという事でいい
と思う。

僕が返事に窮していると、千鶴子さんが発言した。

「貴方いったいどうしたのよ千寿。さっきから挙動がおかしいわよ
？」

困った顔がいいのは同意するけど。」

……真面目っぽい質問の後に、余計な意見を付け足さないで欲しい。

「うふ。ふ。そう？そんなにおかしい？私。」

「うん、何かこう……気持ち悪い。」

あっさりとそう言い放つ千鶴子さん。

普通そういつのって言いづらいと思うんだけど、意外とスッパリ言
うんだね。

「あは。そう。おかしいの。そうね。私もそう思うわ。あはあ。で

もね、分かってても止められないの。何だか体がね、うずうずするのよっ――」

「……………千寿さんが、自分の世界に入りつつある。まずいな、いろんな意味で。」

「ねえ茉莉君、千寿って、時々あんな風になったりしたっけ？」
少し小さめの声で、千鶴子さんが聞いてきた。

「いや、しないと思うよ。少なくとも僕の知ってる範囲では。」

「そうよね、私の知ってる範囲でもしないわ。じゃあ、何であんな風になってると思う？」

「僕が知ってる訳がないだろ、だいたいそれをいうなら、千鶴子さんの方が付き合い長いんだから……………いや、待てよ。」

ずっと、頭の片隅に引っ掛かってる事がある。

「断言は出来ないし、何でそう思ったのか、自分でも分からないんだけど――」

「周りくどいわね。で？」

「千寿さんが持ってる本、アレが怪しいと思う。」

5話 定期外報告Ⅰ 01

周りに誰もいない事を、念の為に確認し、するりと部屋に入ると、その人物は電話へと近寄る。

前回のような失敗を繰り返さない為に、部屋の中をもう一度見渡した後に、いつも通りの手順で電話を掛ける。

手順は全て定められた通りだが、今回は定例報告では無かった。

それだけに、相手が出るという保障は無かったが、それでもその人物は、電話を掛けた。

「……………なんだい？」

電話の向こうから、不機嫌そうな声が響いた。

「確認したいことがいくつかあるのですが。」

「んー面倒くさいなー。そっちで何とかやっついてよー。」

「……………」

そういう訳にもいかない。

その人物は、ここは沈黙するのが効果的と判断し、そしてその選択は正しかった。

「はーやれやれ、手短に頼むよ。」

「はい、では。まず、被験者【亜空】の【能力】が本人の意図しない所でも発現しているようですが、これは暴走と考えても。」

「さー？他人の【能力】の事なんて知らないよ。でも確かソイツ、

昨日滅茶苦茶【能力】を使いまくってた奴だよね、だったらそういう事もあるんじゃないの？知らないけど。」

「という事は、貴方が手を加えている　貴方の意図した現象ではないんですね？」

「うん、僕は全然関係ないよ。」

「分かりました。では次に、昨日の時点では確かに消えていた筈の記憶が、甦りつつある者がいますが、これは。」

「あーそれね、それは適宜そっちで対応してよ。」

「…………。了解しましたが、もう少し詳しく、貴方の【能力】について教えて頂けませんか？その情報は、今後の行動に、根本的に関わって来ます。」

「………………。その前に、もう一度確認しておこうか。君がもし裏切った場合、どうなるか　」

「　分かっていきます。」

「本当に分かってるんだろうね。まあもし裏切ったところで、困るのは君だからね。」

「はい、全て承知しています。」

「ふん。ならいいんだ。……………ええと、どこから話せばいいのかな。」

「記憶が甦る者がいる理由を聞かせて頂ければ。」

受話器ごしの声は、何かを言おうとして一度噴き出し、しばらく低く笑った後、笑いを堪えながら言った。

「絆だよ。笑えるね。僕の一番嫌いなものさ。いや、一番はさすがにいいすぎたかな。」

「仲の良かった者の記憶程、思い出し易いという事ですか？」

「まあそんな感じだね。反吐が出るよ。何でそんな妙な【条件】が付きまとうんだろうねえ、忌々しい。そのせいで使い難いっတာないね。」

「……………」。

「絆！！友情！！信頼！！まったく馬鹿馬鹿しい。そんなもの、何の役にも立ちはしない！！」

「……………」。

「どうしたんだい？さっきから黙り込んで。まさか君もそういうのを信じてるっていうんじゃないだろうねえ、クク。」

「いえ、そんな事は、ありません。」

「ククク、だろうねえ。君は、そういうモノから、ある意味一番遠い存在だからねえ！！ククククク。」

「……………。気になったのですが、そういう【条件】があるのなら、この実験自体が失敗する可能性もあるのでは？」

「その点は問題ない。被験者【茉莉】には、念入りに念入りに掛けておいたから。思い出すような事は、間違っても起きないよ。」

「分かりました。」

「……………。話はそれだけかい？ だったらもう切るよ、ドラマの再放送を見るからね。友情がテーマらしいんだけど、これがまた面白いんだ、友情なんていうチープでくだらないものの為に、命をかける少年が出て来るんだよ。クフフ。思い出しただけでも笑えてくる。君も今度一緒に見るかい？」

「……………。お断りします。では。」

複雑な感情を抱えたまま、その人物は受話器を置いた。

6話 ちらつく光

「ん？本？本って？……………あー、確かに何か持ってるわね。」
僕に言われるまで気付いてなかったようで、千鶴子さんは、よく気付いたわねーと、なにやらしきりに感心していた。

「ていうか、気付いてなかったの？あんなに目立ってたのに。時々光ったりしてたし。」

「……………いや、そこでその嘘はどうなのよ。もしかして千寿に対抗しちやったりしてるの？」

名前が出たので、反射的に千寿さんの方をちらりと見ると、どこことなく黒い笑みを浮かべていた。

ときどきくすくすと笑いながら、僕たちの会話を聞いている。

……………何だか本当に怖くなってきた。

「え？嘘って？何が？」

「んー、何かさつきから微妙に会話が噛み合っていない気がするわ。」

それは主に貴方のせいだと思いますけどね。変なガヤや、変な突っ込みをやたらめったら入れたがるし。

「会話の噛み合わせはおいといて、嘘なんて言っていないけど？」

「噛み合う、って言葉は微妙にエロいんじゃないかな、と思うのよ。」

「そうだね。で、嘘っていうのは？」

「そんなにさらっと流されると、さすがに何だか悲しいわ。お姉さん、困っちゃう。」

「……………」

無言で見つめる。少し呆れ顔になっているんじゃないかと思う。

「……………む。ごめん。なんか真剣な空気って苦手なのよね。言っちゃいけないとは思っただけど、ついつい口が……………」

「……………何となく気持ちは分かるけど、そろそろ話を戻さない？」

「………………。本は、一回も光ったりして無いわ。光ったりしたら、さすがに私だって気付くもの。」

光ってない？ そんな。僕の見間違いだともいうのか？

否、あんなに何度も光っていたのだから、見間違いという事もないだろう。

それは同様に、千鶴子さんの見落としという可能性も否定する事になるけれど。

……………考えられる可能性としては、僕だけに見えている、或いは千鶴子さんが嘘をついている。こんな所か。

……………。

千鶴子さんが嘘を付く意味は無い、と思うから、あの光は、僕にだけ見えていたのかもしれない。

こんな事をいつまでも考察していても仕方ないので、気になった事を聞いた。

「それより千鶴子さん、何だか、あの本に見覚えがあるみたいな事を言っただけだった？」

僕がそう聞くと、千鶴子さんは「あ、そうよ」と呟き、なんら躊躇する事なく、千寿さんへと問いを發した。

「ねえ千寿。なんで貴方がソレを持つてるの？それは私が頼む君に探してあげたものよ？」

7話 亀裂

「うふ、うふふ、あは。知らないわ。そんなの。朝目が覚めたら、枕元に有ったんだもの。私の元にコレがあるのは、だからある意味必然。つまりこれはもう私のもの。」

どという理屈だよ。

本自体が意思を持って、千寿さんの元へと歩いて来たみたいな言い方だな。

サンタさんが来る時期でもなし、普通は、もう少し本の出所が気になると思うんだけど。

どこから誰が何の為に持って来たのか、とか。

まあ、誰かからのプレゼントと解釈したのかもしれないな。

それよりも。

そんな事よりも、何かが頭に引っ掛かる。

それが何かは分からないけれど。

「ちょっと、何よそのガキ大将みたいな言い分は！！私がそれを見つけるのにどれだけ苦労したと思ってるの！！」

声を荒げる千鶴子さん。

怒るとまではいかないまでも、少し気分を害しているようだ。

「うふふ。知らないわ。知る訳もない。だってこれはもう私のもの。私の所有物。私のもとに至る経緯なんて、知らないし、知りたくも無い。」

何も無い場所をじつ、と見つめながら、千寿さんが言う。

嫌な予感が、強くなった。

早くなんとかしなければ、と思うものの、何をどうすればいいのか、分からない。

掴みかけては、その度に零れていく。

思考が空回りしているような、そんな気がした。

「そんな理屈は通らないわ！！返して！！それは私が頼む君のために見つけてあげた本なんだから！！」

まただ。

千鶴子さんが言った何かが、引つ掛かる。

それが何かは、やはり分からない。

「あは。返さない。だってこれは私のだから。」

「だから……！！千寿！？あんまりふざけると、私怒るわよ！！」
いつもどこか飄々としている千鶴子さんが、ここまで感情をムキ出しにしているのを、僕は始めて見た。

二人を止めなければ、と思うのだが、信じられないくらい頭が痛い。
燃えるような痛みで、そのまま何も考えられなくなりそうになる。

「あつは。面白いわ。それは面白い。怒ってみてよ。怒ってみれば。」

怒ってみた時。私は怒った。あはははは。あははははは。ああおかしい。」

「何がおかしいのよっ！！！！」

ヒートアップしていく二人を、止めることさえ出来ない自分が、とてもとても腹立たしかった。

8話 深まる溝

頭の痛みが治まらない。

むしろどんどん加速していくようだ。

このままこの痛みは、治まらないのではないかという、言い知れぬ不安感が、ひたすらに僕を襲う。

「あは、何をそんなにムキになってるの？うふふふ。」

どこか焦点の定まらない目で、嘲るように笑う千寿さん。

「貴方がいつまでもふざけてるからでしょ！！」

今にも掴みかかりそうな勢いで、怒鳴る千鶴子さん。

どうやら本気で怒っているようだ。

なんとか宥めたいが、痛み続ける頭に惑わされ、僕はそれどころでは無かった。

「うふふ、ふざけてなんてないわ。私は真剣よ。あは。」

「真剣だつて言うんなら、その気持ち悪い笑いを止めなさいよ！！」

「あは。それは無理よ。うふふ。それでも抑えている方なんだもの。うふふふ。」

「千寿っ！！貴方っ！！本当にいいかげんにしてよっ！！」

「……………うふ。貴方もしかして、その本を探してあげたつていう子の事好きなの？」

「っ！！何でそうなるのよ！！貴方のそのふざけた態度がムカつくだけよー！！」

「……………うふふ。本当にそうかしら？始めて見たわ、貴方がそんなに怒る所、うふふふふふふ。」

「だから何がおかしいのよっ！！！！」

「……………うふふ。別に何もおかしくないわ。……………うふふふふ。」

眩む僕の視界に、血管が浮き出るほど握り閉められたこぶしが見えた。

止めなければいけない、と思った。

9話 壊れた関係

「……………千鶴子、さん。」

これが本当に自分の声かと、疑いたくなる程に、掠れきつた声を、どうにか出すことが出来た。

とてもこんな声じゃ、聞こえないかもしれないと思ったけど、千鶴子さんは振り向いてくれた。

「何よ！！今とりこみ中だから……………どうしたの、茉莉君。ちよつと！！凄く顔が青いけど、大丈夫なの？」

途中まで怒鳴りつけるような声だったが、僕の様子がおかしい事に気付くと、心配そうに顔を覗きこんできた。

自分の怒りをひとまず置いてまで心配してくれるその心使いが、少し、否、とても嬉しかった。

「だいじよ、ぶ。」

頭が痛い。

大丈夫じゃないかもしれない。

けど、それを表に出す訳にはいかない。

「大丈夫、ってあなた。顔色が、本当に、ありえないくらい悪いわよ。」

「……………だから……………」

大丈夫だから、千鶴子さんも落ち着いて、と言いたかったのだが、上手く発音する事が出来なかった。

「………………。千寿！！？これもあんたがやったの！？もしそうだとしたら、私もう怒りを堪えられそうにないんだけど。」

「うふ、ふ。違っわ。それは濡れ衣。濡れた、衣。うふふ。茉莉君のそれは、どちらかというと、むしろ貴方のせいよ、あは。」

「黙れっ！！！その気持ちの悪い笑いを今すぐ止めろっ！！！」
先ほどの宣言通り、我慢の限界を超えたらしい。

……………千鶴子さんって、怒ると怖いんだね。
じゃなくて、僕の為にそこまで怒ってくれるなんて嬉しい。
でもなくて、止めないと。

止めなければ、いけない。

「あああ、だからそれは無理なのよ。無理なものは無理。それが必然。当たり前。」

「っ！！」
駆け出す千鶴子さん。
伸ばした僕の手は、全然届いていなかった。

「ああ、いいわ。その顔。その怒った顔。何だか、ゾクゾクするわ。」

「もう許さない。一発殴って、正気に戻してあげるわ！！！」

まさかとは思ったけど、やっぱり殴るつもりだったんだ。
もともと短かった千鶴子さんと千寿さんの距離が、みるみる縮まっ
ていく。

僕にはもう、何も出来なかった。

10話 とらわれ

眠りの世界から、ずるりと滑り込むように僕は目覚めた。

どこを境にして、いつから目が覚めたのかよく分からない。

そんな、曖昧模糊とした目覚めだった。

体全体がどことなくだるく、動くのも面倒だった。このままもう一眠りしたい。

「……………」

頭がふわふわとしている。

何か考えるべきなのだろうが、僕の頭は、しばらくの間思考する事を放棄していた。

不思議だった。自分がいつの間に寝たのか覚えていなかった。

「……………!？」

否。

違う。

そうじゃない。

僕は眠っていたのではなく、気絶していたのだ。

それは、意識を失っていたというその結果には、そんなに大きな違いをもたらさないかもしれない。

でも、途中の過程が、全く違う。

つまり、そうか。

だんだんと頭が働き出し始める。
思考という名の歯車が、少しずつ廻り始めるのを感じたような気がした。

あのまま僕は気絶してしまったのか？

またしても、だ。

大事な場面で、僕は何も出来ない。

違う。今はまだ悔やむ時じゃない。

現状を確認しなければ。

あの後二人はどうなって、誰が僕を寝かせてくれたのか。それを確かめるのが先決だ。

「……………っ！？……………はあ？何だこれ？」

しかし僕は、起き上がろうとして、それに見事に失敗した。
僕の手足が、僕の意味とは関係ない方向へと引っぱられた。

今まで頭がぼんやりしていて気付かなかったが　これに気付かなかったなんて、どうかしていると自分でも思う　僕の四肢は、ベッドの四隅へと、それぞれ乱暴に括り付けられていた。

「……………やれやれ。」

内心気が気ではなかったが、
少しでも自分を落ち着かせるためと、
僕を見ている誰か　その誰かが今の僕を見ているとは限らないけど　に舐められないように、

僕はぽつりと呟いた。

「……………あんまりいい状況じゃ、ないみたいだなあ。」

11話 おはよう

疲れた。

この拘束からどうにかして逃れようと、考え付く限りあらゆる努力をしてみたが、それは全て無駄に終わってしまった。

「……………」

落ち着け。

まだあきらめるのは早い。

本当に他に方法がないか、もう一度考え直してみよう。

まず、力任せ。

これはまあ無理だな。さっきから散々試してるし、紐が解ける気配もない。

次に、刃物のようなものを持っていないか。

なんだけど、これは考えてもあんまり意味ないかもな。

そもそも両手両足ともに、ほとんど動かすことが出来ないんだから。それに、ポケットに何かを入れた記憶もない。

縄抜けのような事も……………出来る訳がないし。

助けを呼ぶ手段……………なんかある訳がない。

んー、やっぱりどうしようもない……………気がする。

他に思い付く手段で、まだ現実的と言えそうなのは、僕を縛りつけ

た人間を、説得する事、なんだけど…………。

「……………誰か、いる、のか!?!」
控えめに、呼び掛けてみた。

呼び掛けた後、少し馬鹿馬鹿しくなった。
あれだけガタガタと騒がしかったのだ。
誰かいるのなら、とつくに気付いている筈だろう。

「……………ふう。」
小さく溜め息をつくくと、僕はこの、ほとんど何も無い部屋を、見える範囲で見回した。

「つつつつつわぁ!!!!!!」
そして僕はまた気絶しそうになった。

「おはよう、茉莉君。」
さっきまで何も無かった位置に、音も無く、いつの間にか千寿さんが佇んでいた。
にこやかな笑みを浮かべ、左手には【アル・アジフ】を大事そうに抱えている。

さわやかな笑みを向ける千寿さんに、僕はいいしれない恐怖を覚えてしまっていた。

12話 なにもなかった

「そんな顔しないで欲しいわ。」

にこやかな表情を少しも崩さないまま、千寿さんは言った。

こんな事を思ってしまう時点で、僕の精神は崩れかけてしまっているのだろうが、

今の僕には、千寿さんのそのまぶしいばかりの笑顔は、作り物めいて見えていた。

「……………」。

「どうしたのよ、茉莉君。なんだか幽霊でも見たような顔よ？」

落ち着け、自分。

僕は今から、彼女を説得しなければならんだ。
妙な恐れを抱いていてどうする。

「……………いや、何でもない、です、よ。ちょっとぼーっとしてて。」

とりあえずいつも通りの話し方を心掛ける。

「そう？それなら良いんだけど。気分の方はどう？」

「……………あんまり、良くはないですね。」

主に縛られてる所とか。

今はそこにはあえて触れないけれど。

「それは良くないわ。頭が痛い？吐き気がする？」

？

思ったよりも普通に会話が続く。

僕の杞憂だったのか？もしそうならそれが一番いいんだけど。

「いえ、そういう痛みじゃないです。放っておけば、その内治まる
と思います。それよりも、あの……どうなったんですか？」

「何が？」

笑顔を少しも崩さないまま、千寿さんが聞き返してくる。

「いえ、その……だから……。」

聞いてもいいのだろうか、千鶴子さんの事を。

少しも崩れないその笑顔が、やはり何処か……怖い。

「だから？」

「だから」

汗がつう、と背中を伝った。

でも聞かない訳にもいかない。

「あの後、僕が倒れた後、千鶴子さんと……。」

「……………千鶴子と？別に何も無かったけど。」

そんな馬鹿な。

というか、嘘をつくのなら、もう少し上手について欲しかった。
今の間は、酷すぎる。

気を抜かずに、会話を続ける必要がある事を、深く認識した。

13話 ほんとうにだいじょうぶ？

「……………何も……………なかった？」

戸惑いながらも、どうにかこうにか声を絞り出す。

「そうよ。」

眩しいばかりの笑顔で言う千寿さん。

その笑顔が作り物なのか、
それとも本物の笑顔なのか、

僕はしまいち判断する事が出来なかった。

「……………あのですね、うーん」

どう、言ったものか。

間違っても、下手な物言いは出来ないからなあ。

「ここまで、僕を運んで来てくれたのは、貴方、なんですか？」

「そうよ。」

ニコニコしながら言う千寿さん。
即答だった。

それは。

それを認めるという事は、僕を拘束しているのは、千寿さんの意思、
という事になるのだが。

またしても背中を、嫌な汗が伝った。

どのタイミングで、この拘束について切り出すべきなのだろうか。

「どうしたの、茉莉君？ やっぱりなんだか顔色が悪いわよ？ 頭は？ 背中は？ 痛い所は無いの？」

「いえ、あの、だ、大丈夫、です。」
何だか調子が狂う。

さっきまでの、完全に自我を失った感じでもなく、
かといっていつもの千寿さんからは程遠い。

「本当に？ 違和感を感じる部分も無い？ 体は万全の状態なの？」

「ええ、……………一応。」
強いて言えば、縛られてる部分が擦れて痛い。

「本当に？ 本当に大丈夫なのね？」

「……………ええ。」
答えながら、さすがに僕は、少し違和感を感じた。
どうやら千寿さんのそれは、ただ僕を心配しての事では無いようだ。

「そう。じゃあ。体の調子は。いいのね？ 少なくとも。悪くはない？」
僕の答えに満足したように、千寿さんは大きく頷くと、それまでとは微妙に異なる笑みを浮かべた。

14話 わからないのなら、いいの

千寿さんのその表情は、笑みである事には変わらないが、今までとはあきらかに違った。

何が違うか、具体的に表現するのは難しいが、

そこを無理に表現するとするなら、

今までの作り物めいた笑みから、

少し人間味を含んだ笑みになった、という所だろうか。

その表情は、どこか恍惚としているようにも見えた。

と、【アル・アジフ】が光を放った。

それを見下ろした千寿さんは、

「あ、いけないいけない。」

と言うと、また先程までの作り物めいた笑みに戻った。

本が光った瞬間に、僕が体を強張らせたのを敏感に感じ取ったのだろうか、

「ねえ、茉莉君。あなた、この本の事を……知っているの?」

と、千寿さんが聞いてきた。

「……………ええ。」

嘘をついても、仕方ないだろう。

僕が知っている事を、向こうも感じ取っているようだし。

「……………そう。……………」

何故か満足そうに頷くと、千寿さんは黙り込んだ。
何かを考えているようだ。

やがて千寿さんは、やはり笑顔のままで聞いてきた。

「………ちなみに、本の題名は？」

「？【アル・アジフ】、ですね？」

「………何でそんな事を聞くんのだ？」

「………じゃあ次。それを何処で知ったの？」

「………図書館ですけど。」

「そうね。じゃあ最後の質問。その本を、私の前に持っていたのは誰？」

「………。」

誰………だった、かな。

思い出せそうなのに、思い出せない。

なんだか無性にむず痒かった。

千寿さんは、しばらく僕の答えを待っていたようだが、僕が何も答

えないと判断すると、

「颯娃君って、知ってる？」

「エー？」

「分からないのなら、いいの。」

「………？」

質問の意図が分からない。

「…ちなみに、今は頭は痛くない？」

またその質問か。

「……………別に。」

千寿さんは、嬉しそうに笑うと、言った。

「なるほど。……………半分成功で、半分失敗、といった所かしら。」

15話 何を信じるかー01

「どういう事……………ですか？成功って、何が。」

僕がそう聞くと、千寿さんは、右手の人差し指を自分の唇にあてるジェスチャーをして、答えた。

「それは今は秘密。…………というより、言えないわ。」

「…………。」

僕は完全に、この後どう会話を運ぶべきかを、完全に見失ってしまった。

今の千寿さんは、見ようによつては、正気のようにも見えるのだ。それなのに僕はこうして縛られ、その事について、なんの説明も与えられてない。

この状況はどう捉えればいいのかだろう。

そろそろ束縛の説明を求めるべきか？

僕が迷っていると、千寿さんが、変わらぬ笑顔で話しかけて来た。

「ふふ、少し、話さない？」

今までも会話はしていたが、これはそういう意味の言葉ではないのだろう。

「…………ええ。…………そう、ですね。」

こうして、片や拘束された男、片や機械的な笑顔を崩さない女の、奇妙な会話が再開した。

「前から言いたかったんだけどね、君って結構、騙されやすいよね。」

「そうですか？」

「そうよ、それが悪い事とは私は思わないけど、度が過ぎると足元を掬われるわよ？」

「足元を掬われるって、また穏やかじゃないですね。」

「あは、私は忠告してあげているのよ。そんなに遠くない未来に、貴方が騙されて痛い目に逢うのが【見えた】から。」

「見えた？」

「そう、私の【能力】で。」

「【能力】！？」

「……………」。

「……………」。

「……………」。

「……………」なんでそこで黙るんですか！？」

突っ込みながら、僕は少しだけ安心していた。いつもの千寿さんに、やっと会えたような気がしたから。

ただ、それでも笑っている顔が、少々不気味ではあったけれど。

「……………嘘よ。」

「は？」

「ウソ。」

「あの……………何がですか？」

「さあ？」

「さあ、って……………」

「……………少し、考えてみて。無理しない程度に。何が本当で、何が嘘なのか。私には、貴方が考える事を半ば放棄しているように見えるわ。」

そう言う時に、少しだけ心配そうな表情になった千寿さんが、印象的だった。

16話 何を信じるかー02

千寿さんが心配そうな顔をした瞬間に、またも「アル・アジフ」が鈍い光を放つ。

僕は、無意識に少し身構えてしまう。

何でだろう。何故僕は、そこまであの本を警戒してしまうんだろう。

「ねえ？茉莉君。」

すぐに元の笑顔に戻り、千寿さんが問いかけて来る。

そして笑顔が作り物めいたものに戻ると同時に、やはり本も輝きを失う。

「これは結構ありがちな質問なんだけど、動物の中で、人間だけが唯一する事ができる感情表現って、何か知ってる？」

聞いた事がある。というか、読んだ事がある。それもつい最近。

に借りた小説の、

ちょっとシリアスな場面で出てきたそれは、確か。

「笑い、ですか？」

「そうよ。やっぱり知ってたのね。茉莉君は、そういう事を知っていそうな気がしたの。」

「たまたま、ですけどね。」

そう、たまたま、その小説を読んでいただけだ。

千寿さんは、たまたまでも、知っているという事が大事なのよとつぶやいて続ける。

「他の動物が、嬉しそうな顔をしていても、それは決して、本当に楽しい訳ではない、とそう言われているわね。」

それも書いてあった。

そして僕が読んだその小説では、笑うという行為は、人間だけに許された高尚な行為だ、という風に続いたと記憶している。

「そして、笑うという行為には、もう一つ特徴があるんだけど、何かわかる？」

「特徴？」

「そう、他の表情 感情 には無い、特徴。」

他の表情には無い特徴？そんなものがあるのか？

「なんなんですか？特徴って。」

僕がそういうと、千寿さんは呆れた様な顔をする。

【アル・アジフ】が強く光を放つ。

直ぐに笑顔に戻った千寿さんは続けた。

「私をあまり失望させないで。貴方はそんなに頭が悪くない筈よ。」

そうやって直ぐに答えを求めているのは、頭がどんどん鈍っていくわ。

「

17話 笑顔のペルソナー01

そんな事を言っただけ。

知らないものはしょうが

なくないのか。

しょうがなくはない。

そうだ。

考えればいい。

分からない事は、考えればいい。

そんな当たり前の事を、どうしてか僕は失念していた。

笑うというのは、つまり、

「どんな時でも、できるという事ですか。」

微妙にほほの端を吊り上げて、千寿さんが問ってくる。

【アル・アジフ】は、仄かな明かりを灯しただけだった。

「どういう事、かしら？」

「つまり、他の感情よりも、汎用度が高いんじゃないですか？他の

感情は、怒り泣きなんかの例外もありますが、そんなに

自由に扱えないと思います。」

「まあ、大方それで正解。大分、頭が回ってきたみたいね。」

「おかげさまで。」

皮肉を言えるようになれば上等だわ、とつぶやくと、千寿さんはさらに質問をして来た。

「さて、じゃあなんで私は、ずっと笑っているのかしら？」

僕との会話が楽しいから、ではもちろん無いだろう。そうだったら、平和的でいいのだけだ。

悲しい時にも、怒っている時にも、もちろん楽しい時にも、笑顔を
作る事は出来る。
つまり

「感情を、抑えているんですか？あるいは閉じ込めている？」

笑顔を崩さないまま、千寿さんは満足そうに大きく頷くと、言った。
「そう、私は【笑顔】でこの本の【能力<ちから>】を抑えている
の。感情がむき出しになればなるほど、この本の圧倒的な【能力】
に押し流されてしまうから。」

18話 笑顔のペルソナー02

「つまり、この笑顔は、ある種の仮面、という訳ね。」

「笑顔の仮面、ですか。」

「そうよ、面白いでしょ?」

面白いかどうかは別としても、感情を増大するあの【アル・アジフ】に対して、それは有効な手段なのかもしれない。でも、それなら、わざわざ抑えつけるくらいなら、

「その本は、必要なんですか?」

「必要、って?」

「だから、抑えるなんていう事をしなくても、その本を手放してしまえばいいんじゃないですか?」

「というか手放してくれ。その本が近くにあるというだけで、僕の体は緊張してしまっている。」

「それは、駄目よ。」

「にべもなく答える千寿さん。」

「何ですか?まさか まさか、その本の【能力】を使って、

【此処】を壊そうと考えているんですか?貴方も。」

「貴方も?」

「いや、あれ？おかしいな。……とにかく、そういう物騒な事を考えているんですか？だから」
だから手始めに、その力で僕を殺そうとしているんですかと、危うく言いそうになった。

さらりと殺す、という言葉を感じてしまった自分にぞっとする。僕も少しずつ、あの本に毒されてしまっているのかもしれない。

「そんなつもりはないわ。今の所は。」

「今の所は！？それは後々するかもしれないっていう」

つと、千寿さんの立てた人差し指が、僕の唇に触れる。

その流れるような一連の動作が、艶めかしく、ふいを突かれた僕は、黙ってしまう。

「そんなに興奮したら駄目よ、茉莉君。貴方は考えなければならぬ。冷静な、頭で。」

もとの位置に戻った千寿さんは、何も無かったように続ける。

「貴方は決定的に勘違いしているわ。」

「勘違い？」

「そう、私がこの本を使っているんじゃないくて、この本【ア
ル・アジフ】が私を使っているの。それに私は抗っている。
分かるかしら？」

「分かるかしら、って。」

「この本の【能力】を、一人の人間が抑えられる筈がないじゃない。」

「……………」

「私のこの笑顔の仮面だって、一時的なものよ。すぐに感情の高ぶりを抑えきれなくなるでしょうね。」

「……………」

「だから貴方は考える必要があるの、私からどうやってこの本を奪うか。」

「……………」なら、まずはこの縄を解いてくれませんか。手足が動かない事には、どうしようもならない。」

「だから、それは無理よ。」

「……………」本が、僕の拘束を解く気がないからですか。おかしい表現ですが。だから体が動かない?」

「そうよ。つまり縄をどうやって解かせるか、から考えてもらう事になるわね。」

千寿さんに気づかれないように、心の中で大きく溜め息をつく。本当に。

一難去って、また一難、だな。

19話 ときたくないこともないかもしれない

「…………… とりあえず、体を、どれくらい自由に動かす事が出来るんですか？」

これからの行動を決定する上で、一番重要かつ必要と思われる事をまず聞いた。

「うん、その質問はちよつと的外れね。さつきは分かりやすくする為に、あえてああいう言い方をしたけど、本当は正しくないの。基本的に、私の思った通りに体は動くわ。」

？

思ったとおりに動くのか？

「動くんですか？」

「そうね、でも貴方の縄を解くのはやっぱり無理よ。」

「それはどういう？」

「つまり、行動の一切を制限されているのでは無くて、ある一定の行動が出来ないのよ。」

「同じじゃないんですか？」

「全然違っわ。貴方の縄を、解けないのではなく、解かないのよ。」

「自分の意思で？」

「そうよ、私はその縄を解きたくないもの。」

「……………」

ややこしいな。

あの本は、あくまで補助的なもので、本人の負の意識を増大するか、そういう事か？

まあ考えてみれば当たり前か。物質が意思を持つ筈が無いもんな。

それにしても。

それならそれで別の問題も出てくる。

千寿さんは、てっきりこちらの味方かと思っていたけど、どうもそんな簡単な問題でもないみたいだ。

「でも、やっぱりそれだと、さっきの説明とつじつまが合わなくなりませんか？」

「どこが？」

「結局千寿さんは、僕のこの縄を解きたいんですか？解きたくないんですか？さっきから、意見がいまいち纏まってない気がします。」

「解きたいし、解きたくない。」

「それが分かりません。」

「私だってよく分からないわ。解きたいし、解きたくないの。理性では、解いた方がいいと思ってるんだけど、それをするのが、とても汚らしい事のような気がして。」

「…………汚らわしいって。」

「それはさすがに冗談だけど、とにかく、私はその縄を解きたくないわ。」

20話 ききたいのならいたみをとまなうべきよ

「でも、どっちみち、いずれは解く事になりますよね？」

「あら？どうしてそう思うの？」

「だって」

そうか、別に解く必要なんて微塵もないんだ。

このまま僕が何の手も思いつかなければ、【アル・アジフ】によって増幅された激情で、千寿さんが僕を殺してしまう可能性もある訳だし、

例えば殺す事を千寿さんが拒んでも、このまま放って置かれれば、いずれは飢えて死ぬ事になる。

あれだけ大声を出しても今まで外部から何の反応もないのだ。そう簡単に助けが来るとは思えない。

甘い考えは、もう捨てよう。

「いえ、やはり質問を変えます。貴方は、何の為に僕を縛ったんですか？」

「賢明な判断ね。私のこの仮面が何時まで持つか分からない以上、あまり無駄話をしている時間的余裕は無いから。……貴方を縛った理由はね、私の【能力】をさらに高めるためよ。」

「それは自分の意思で、ですか？」

「難しい質問ね。私の意志といえば、私の意志だけど、違うといえ
ば、違うわ。」

「……………分かりました。じゃあ、具体的には、僕はこの後どうなる予定なんですか？」

「いいの？聞いて？」

サディスティックな笑みを浮かべる千寿さん。【アル・アジフ】が僅かに光を取り戻す。やっぱりこの人、もともとSっ気があるんじゃないのか？

現時点で自由に動かす事の出来ない自分の体の行く先を聞くなど、怖いに決まっている。

でも、

「時間が、ありませんから。」

そう言った時の僕の声は、果たして震えていたのだろうか。それは僕には分からなかった。

千寿さんが、元の笑顔に戻って言う。

「このままいけば、貴方には、タロットカードを作る為の、生贄になってもらうわ。」

余りいい予想は立てていなかったが、生贄という言葉聞いて、どうやら予想よりも悪いらしい事が想像できた。

「……………生贄。」

今度こそ声が震えていたと思う。

「そう、生贄。……………どうしようかしら、時間がどれだけあるのか分からないけど、少し話をしましょうか？」

「それを聞く事に、何かメリットがあるんですか？」

自分がこれからどうなるか、なんて事。

それも悪い未来が確定の。それを変える為に頑張っているんじゃないのか？

「あるかも、しれないわ。」

「かも？」

「私の【能力】について、話してあげられるかもしれない。ただ単に情報を伝えるのは、今の私には余り出来ないけど、別の目的と同時になら　この場合、貴方を精神的に追い詰めるのと同時になら可能、かもしれない。」

「……………。……………。……………聞きます。」
何にしろ、情報は得るべきだ。

21話 タロットカード

「あなたは、タロットカードと言えば、何を思いつくかしら？」

「思いつく？思いつくと言うのは」

駄目だ、余計な事を聞く事は出来ない。
とりあえず思いついた事を言おう。

「そう、です、ね。………塔とか、女教皇とか、太陽とか、カードの絵柄によって、色んな種類があつて、そしてその向きによって、正位置と逆位置に分かれる、んだつたと思います。」

「じゃあ、アルカナっていうのは聞いた事がある？」

「アルカナ？」

「アルカナっていうのは、ラテン語で「秘密」とか、「神秘」とかを意味する言葉よ。まあ昔は、「切り札」って意味だったみたいだけれどね。」

「切り札、ですか？」

「そう、勘違いしている人が多いみたいだけど、もともとタロットカードは、遊戯の一種なのよ。トランプみたいなね。」

「それは知りませんでした。」

「まあ知らないのも無理はないわ。私だって、こんな【能力】を得なかったら、知らなかった知識だもの。あ、そうそう、トランプのカードも、もともとはタロットカードの一種なのよ。」

協道にそれそうなので、この話に乗っていくのは嫌だったが、千寿さんの機嫌を損ねる事の方が、今の僕には恐ろしい事だったので、素直に話に乗っていく事にする。

「トランプが？」

「そうよ。タロットカードっていうのは、小アルカナと、大アルカナに分かれているの。」

話している内に楽しくなってきたのか、彼女の舌は止まらない。僕としては頂けない雰囲気になりつつあった。

「これも知らない人が多いんだけど、タロットカードは、全部で78枚から成るの。大アルカナが22枚に、小アルカナが56枚。」

「……………そんなに種類ありましたか、絵柄の？」

「ちゃんと話を聞いていて欲しいわ。だから、トランプが小アルカナなのよ。」

「……………でも、トランプは52枚じゃないですか。ジョーカーを入れても53枚にしかない。」

「小アルカナにはページがあるの。」

「ページ？」

さつきからオウム返しが増えている。

まあ、全く知らないから、どうにもならないんだけど。

「そうよ、トランプのクラブに当たるワンド、スペードに当たるソ

ード、ハートに当たるカップ、ダイヤに当たるコインがまず有って、それぞれに1〜10、ナイト、クイーン、キング、そしてページがあるのよ。」

「絵柄的なものなんですか？」

「ええ、トランプでは使われていないけど、ページは小姓って意味ね。」

「はあ。」

それがどうしたんだ、と思った。
もちろん口には出さないけれど。

千寿さんは、少し興奮してきたようで、気持ち良さそうに喋り続ける。

「タロットカードは、それプラス、大アルカナの、22枚で構成されているわ。そして」

話について行けず、どこか気が抜けていた僕の心を、彼女の次の言葉が、貫いた。

「貴方には、その大アルカナを作る為の、生贄になってもらう。」

まだ彼女の笑顔は崩れていないが、その言葉を言った時の彼女が、僕は本当に怖かった。

笑顔が怖いと思ったのは、始めてだった。

22話 定期外報告Ⅰ 02

ぶるる、ぶるる。

という音が、部屋だけでなく、廊下にまで響いている気がした。それほど、今の【此处】は静まり返っていた。普段から、これくらい静かな筈なのだが、今日は特に静かに思える。まあ、それも私の主観的な問題なのだろうが。

「……………」

電話が繋がるのを、少しいらだちながら待つ。今回もまた、定期報告ではなかったが、必ず繋がる筈だった。

あの男の事だ。どうせ、私を焦らせて楽しんでいるのだろう。そんな事をして、意味なんてないのに。

「……………どうなった？」

ようやく繋がったかと思うと、開口一番に男は聞いて来た。

事務的な声を意識して、答える。

「はい。ロストしていた対象を発見しました。」

「全員か？」

「はい。3人とも。」

「同じ場所にいるのか？」

「いえ、茉莉と千寿は同じ場所にいるようですが、千鶴子は少し離れた場所にいるようです。」

「……………なるほど。」

少しの間、沈黙が流れる。

沈黙の後男は、急に耳障りな猫なで声になって続けた。

「で、どうしたい？」

「どうしたい、とは？」

嫌な予感がする。

「ク。助けたいのか？」

「誰を、でしょうか？」

「もちろん被験者【茉莉】の事だ。」

「……………」

またも沈黙。

この男が何を言いたいのか、全く分からない。

自分の研究の事にしか興味がない、この男が。

研究対象がどうなるうと、どうでもいいとアレ程言っていた男が。友情など糞食らえだと、あれほど豪語していた、この男が。

私は、少し混乱していた。

23話 冥途の土産

「あはああ、そんなにいい顔で怯えないでちょうだい、茉莉君。」

すべるように、体を寄せて来る千寿さん。

動けない僕の頬を、艶かしく右手で撫でる。

目が、さっきの部屋で見た時みたいに、少しイってしまっている。

むしろ、さっきの方がマシだったように感じる。

駄目だ。怖い。笑ってるのが、余計に。

光る物が目についたので、視線を一瞬ずらすと、【アル・アジフ】が、薄くではあるが、継続的な光を放ち始めていた。これは、本当に、そろそろ不味いんじゃないのか？
僕の体を取り巻く事態は、何も改善していないというのに。

「ちよ、ちよと待って下さい、千寿さん。」

精一杯の虚勢で、震えないように声を出す。

「なに？なんで？
なんで、と来たか。」

【アル・アジフ】に精神を支配されるといふのは、どういう感覚なんだろう。

自分の意思が、捻じ曲げられるのか、それとも。
さつき千寿さん自身が言っていたように、捻じ曲げられるという感覚ですらなく、自分がもたらさうしたかったのだと、誤認するようになるのか。

「あなたの【能力】について、教えてくれる約束だったじゃないですか。」

おかしい表現だが、この状況にもだんだん慣れてきた。思ったよりも、凜とした声を出す事に成功する。

「……………そう、だったかしら？」

厳密には、約束はしていないのだけでも。

「そうですよ、冥土の土産に教えてくれる、って。」

「……………。」

「……………。」

「……………。」

「……………。」

なんだこの沈黙は？

いい意味で受け取ってもいいのか？千寿さん特有の、いつもの沈黙だと受け取ってもいいのか？

あわてて【アル・アジフ】を見る。

光は、さっきより弱くなっているような気がした。ぼんやりとした光が、たつぷりと時間をかけて収斂していく。

「……………あんまり物騒な事を言っちゃ駄目よ、茉莉君。冥土の土産だなんて。まるで貴方が死ぬみたいじゃない。」

笑顔の仮面を再び被って、千寿さんが言った。

「でもこのままではそうなるんでしょう?。」

「それはまだ【確定】していないわ。」

「【確定】?。」

「説明の途中で話そうと思ったんだけど、余計な話はしない方がよさそうね、話してるとつい興奮しちゃうから。」

まったくだ。

なんで【此处】には、こんなにも話したがりが多いんだよ。と思ったけど、もちろんそんな事は口に出さずに、僕は千寿さんの次の言葉を待った。

「私は」

長い沈黙の末、どうあれ私は、私の答えを言おうとした。

だが、それをぴしりと男の声が遮った。

「おつと。君の答えはどうでもいいんだ。君がなんと言おうと、はたまたどう思おうと、そんなの関係ないのだから。」

「……そうですか。」

なら、考えさせるな。選択肢のあるような振る舞いをするな。

男の嫌らしい声が先を続ける。

「それにしても長い沈黙だったね。もしかして、本当に君は、【茉莉】を助けたかったりするのかい？」

「……いえ、そういう訳では。ただ、余りにも予想外の質問だったもので、少々答えに詰まってしまっただけです。」

「少々、ね。ふむ。ちなみに、答えを聞いておこうか。」

一度私が答えるのを遮っておいてそれか。本当に嫌らしい男だ。……助けるべきか、と。」

「助けたいではなく、助けるべきだと?」

「はい。【アル・アジフ】は、本当に危険な代物です。例えば彼が【能力】を使ったとしても、自力で抜け出すことは不可能かと。」

「その何が不都合なんだ？」

「……………」

「いいかい？君はまだよく分かってないみたいだけど、【茉莉】が死んだところで、僕には正直どうでもいいんだよ。」

「それは、この実験が失敗しても構わない、という事ですか？」

「そうだ。それも前に言った筈だが？」

確かに聞いた。でも、本気だとは思っていなかった。

「【茉莉】の【能力】を失ってもいいのですか？そうとう貴重なサンプルだと以前聞きましたか？」

「だからそう言っている。貴重だろうとなんだろうと、そんなものはどうでもいい。……………なんだ？冗談で言っているんだとばかり思っていたが、もしかして君、本当に彼を助けたいのか？」

「……………いえ。」

しばしの沈黙の後、男は宣言するかのように言い放った。

「まあいい。君の意見などどうでもよかったんだ。……………このまま観察を続ける。被験者たちには一切手を出すな。」

25話 千寿の能力―01

「私の【能力】は、【未来に起こる可能性のある事象から、自分の望むものを選ぶ】事よ。」

「……………え？……………やけに、長いですね。」

「正確に言うなら、そう言わざるを得ないのよ。」

正確に言うなら？

僕の表情を読んだように、千寿さんは言葉を続ける。

「簡単に言うと、【未来を変える能力】よ。」

未来を変える【能力】だって？

これまた、凄い【能力 ちから】が出てきたもんだ。

「……………そんな、事があるんですか？そんなとんでもない【能力】が、あり得るんですか？」

「あり得るか、あり得ないかで言えば、あり得ないでしょうね。」

「だったら。」

「だから、簡単に言えば、と言ったのよ。とてもじゃないけど、私は未来を変えられるような器じゃないから。」

「でもさっき、確かに【変える】って。」

「おおまかにくれば、そういう事になる、という事よ。さっきも言ったけど、厳密にはあくまで、【変える】んじゃなくて【選ぶ】の

よ。」

少し思案した後、千寿さんは続けた。

「マルバツクイズって、あるでしょ？」

なんだ、唐突に。

「それは、二択問題の事、ですよね。」

当たり前の事かもしれないが、質問の意図が掴めないので僕はそう聞いた。

「そうよ。その程度なら、私は100パーセント当てる事が出来るわ。」

「100パーセントですか？」

「ええ、だってあんなの、二つしか未来がないでしょ？」

当たるか、外れるか、という事か？

少し、彼女の【能力】が分かって来たかもしれない。

あくまでまだ、僕の予想だけだ。

話を円滑に進める為にも、僕は千寿さんに尋ねてみた。

「……………答え、というより問題自体知らなくても、貴方はそれに正解する事が出来るんじゃないですか？」

26話 千寿の能力ー02

「…………面白いわ。続けて。」

笑顔の仮面ではない、嬉しそうな含み笑いで、千寿さんは言った。

……………続けて？

僕今質問した筈なんだけどなあ。質問に質問で返されるパターンなら結構聞くけど、

質問に更なる説明を促す、っていうパターンは、なんというか斬新だな。

何が続けばいいのかよくわからないじゃないか。

いや、まあ、続けるというなら続けるけど。

「…………つまり、さっきの部屋で、鍵を掛けた覚えのないドアが開かなかったのは、貴方が【能力】を使って、【ドアが閉まっている】という状態を選んだんじゃないですか？」

自分でも何を言っているのか、それが本当に正しい事なのか、よく分からないままに、僕は言葉を続けた。

「同じように、亜空の【広げた】空間を、一瞬で移動できたのも、【広がったという事実】を無かった事にしたんじゃないですか？」

僕の言葉が進むにつれ、千寿さんの笑みも広がっていく。

【アル・アジフ】の光も、それに連れて、大きくなっていく。

話を止めるべきか？いや、でも、こんな中途半端な状態で止める訳には…………

「【未来を選ぶ】というのはつまり、そういう事、なんじゃないですか？」

「じゃあ聞くけど、そんな事ができると思う？【ドアが閉まった状態を選ぶ】なんて大それた事。知ってると思うけど、いわゆる【常識】から外れた事は、例えば【能力】を使っても難しいのよ？」
腕を組み替えて千寿さんが聞く。

「……………普段なら、無理なんでしょう？」

「……………聞くわ。」

続きを、という事だろう。

どうやら、僕は試されているみたいだ。

「今、貴方は普通の状態じゃない。【アル・アジフ】によって、【能力】が強化されている。」

「それで？」

【アル・アジフ】の光は、ますます強くなっていく。

「それで、だから、今の貴方なら、少々有り得ない事でも、可能なんでしょう？」

この仮説がもし間違っているなら、僕はそのまま生贄にされてしまうのかもしれない。

でも不思議と、間違えている気はしなかった。

正解だったからどうなのか、という気も、しないでもなかったが。

27話 ラストディスカッションー01

「…………面白いわ。」

くすくすと笑いながら、千寿さんが言った。

【アル・アジフ】は不気味に光り続けている。
大丈夫なのだろうか。

というか、面白って。

……………どういう意味で言ったんだ？

「何が、ですか？」

「やっぱり面白いわ、茉莉君、貴方。」

僕が？面白い？何で？

「……………だから、僕の何が面白いんですか？」

「その状況で、そこまで頭が回るなんて。……………嬉しいわ。私の予想通りの人で。」

回るも何も、回すしかないだろうに。回さなかったら、死ぬのだから。

「そりゃまあ、命が掛かってますからね。文字通り。」

「普通はね、テンパっちゃって、頭が回らないものよ。そんな状態では。」

僕の手足の縄を、嬉しそうに眺め回す千寿さん。
いや、怖い。怖い。そんなサディスティックな目をしないでくれ。

「……………そうですか？」

「そういう意味で、貴方はやっぱり面白い。生贄にするにふさわしいわ。」

「ま、待って下さい!!」

そんな軽いノリで殺されてたまるか。

せつかく千寿さんの【能力】が分かったんだ。

「?まだ何かあるの？」

「質問があります。」

「ふうん。……………仕方ないわね。私の【能力】を、完全では無いにしろ当てたご褒美に、答えてあげる。」

にやりと笑んだその顔は、もう完全に仮面のそれでは無かった。

【アル・アジフ】も、さつきより強く光っているし、そろそろ本当にタイムリミットかもしれない。

さつき千寿さんは、僕がこの場所で死ぬ事はまだ【確定】していないと言った。

それは、彼女が僕の死ぬ未来を【選んで】いないという事だ。

【選ばない】でいてくれたのか、【選べなかった】のか、それは分からないけど。

ここからどうにかする事も、不可能ではない。筈だ。

一度小さく深呼吸した後、僕は最後の質問タイムに入った。
「千寿さん。貴方の目的は、何なんですか？」

28話 ラストディスカッションー02

「目的？目的は……………」

少しの沈黙。数秒考えた後、千寿さんは言葉を続けた。

「目的は、そうねえ。より、強い【能力】を手に入れる事かな。」

より強い【能力】を手に入れる？

それはつまり、より強い力を手に入れたいという事で。

そんなのは、【アル・アジフ】によって後付された理由でしかない。そうじゃなく、僕が聞きたいのは

「千寿さん、違います。僕が聞きたいのは、その本を持つ前の貴方の答えです。」

「……………」

「そもそも貴方は何のために【此処】に居るんですか？」

聞いてから、その質問は、千寿さんに対するものであるのと同時に、自分に対してのものでもある事に気づいた。そうだ。

僕は何の為に【此処】に居るんだろう。

考えても、簡単に答えは見つかりそうになかった。

「貴方が、それを聞くのね。」

視線を、僕の背後に置きながら、千寿さんがつぶやくように言った。僕が聞く事に、何か特別な意味があるような言い方だった。

「どつという意味ですか？」

「いい意味でも悪い意味でも、この状況を変えられるのは、貴方しかいないわ。」

千寿さんは僕が質問した事とは、ずれた答えを寄越す。

「だからそれは、どういう意味ですか？」

「……………もうそろそろいいかしら。生贄になってもらうわ。」

「質問に答えて下さい。」

「……………いいわ。答えてあげる。私が【此处】にいるのは、貴方を殺すためよ。」

答えて欲しいのは、その質問じゃなかったのだが。
それに、そんな答えなら、必要なかった。

千寿さんの手に、いつの間にか握られていた肉切り包丁が、怪しく光った気がした。

29話 ラストデイスカッションー03

「待つて！！まだ話は終わってません！！」

必死で千寿さんを押しとどめようとする。

動かない両腕が、とんでもなくもどかしい。

声だけでどうにかなる訳もなく、じりじりと千寿さんは距離を詰めてくる。

「くどいわ。いい加減。もうあきらめなさい、貴方は失敗したのよ。」

冷たい目をして、千寿さんは僕に宣告する。

………つて、あきらめられる訳ないじゃないか！！

命だぞ！？死んだら全部終わりなんだぞ！？

「でもおかしいじゃないですか！？さつきも今も、貴方はさんざん、僕にまだ未来があるような事をほのめかせていたじゃないですか！

！」

「だから、そういう可能性もあった、という話よ。」

「……………でも……………じゃあ……………だからって。」

自分の声が、萎んでいくのを感じる。

駄目だ。ここであきらめちゃ駄目なのに。

さつきまでの余裕が嘘のように、僕の心は沈んでいった。

「……………死なないかもしれないわ。」
そんな僕を見かねたのか、
ぽつり、と、千寿さんが言う。

「？」

いまさら何をいうのか。

人の心をかき回して、何がそんなに面白いのだろう。
それでも、かすかな期待を込めて、千寿さんの言葉の続きを待つ。

「私が欲しいのは、貴方の血だから。……………いや、正確には、2リットルの新鮮な血液よ。それだけあれば、十分儀式は可能だから。」

「……………」

だから、なんだというのだ。
2リットルなんて、十分致死量じゃないか。
貴方がそれを知らない訳がないでしょう？

「だから、ね？死なないかもしれないでしょう？」
そう言う千寿さんの笑みは、相変わらず晴れ晴れとしていた。

「……………どうしたんだい？何か言いたい事があるなら、聞いてあげるよ？」

男は、耳に障る猫撫で声で、私に話しかけてくる。

本当に耳障りな声だ。

何故私は、こんな男に従わなくてはならないのだろう。

……………否。理由は分かっているのだ。

理性では分かっているのだが、感情を押し殺すのが、だんだん難しくなってきた。

どうせ今回のこの申し出も、私の話を【聞く】というのは、ただそれだけの事で。

聞くだけ聞いて、何もしないのだろう。

だから、この男に話した所で、何の意味もない。

と、分かってはいるのだが、ほぼ無いに等しい確立に期待を込めて、私は質問していた。

「……………やはり、助けた方がいいのでは無いですか？」

電話の向こうで笑い声が聞こえた。

幾分真剣になった声で、男が聞く。

「ク、理由は？」

「このままではまず間違いなく【茉莉】は死にます。」

「くだいね、君も。そんな事はどうだっていいと、さっきも言った

だろう。」

「ですが」

反論しようとした私の言葉を遮って、男は続ける。

「それにね、君が思っている程、彼は弱くないかもしれない。もしかしたら、意外とどうにかするんじゃないかなあ？」

どの口がそんな事を言うんだ。

「【アル・アジフ】相手に、それは無理でしょう。現在操っている【千寿】も、それほど意思が強いとは思えません。おそらく今頃は、完全に操られてしまっていると思われます。」

「なら聞くけど、君がその場に行って何が変わる？」

「それは。」

「何も変わらないだろう？君の【能力】が【アル・アジフ】に及ばないのは、奇しくも先ほど証明されたばかりだからね。」

「……………ですが、このまま放っておくというのは。」

「それにね、さっきから君の言い分を聞いていると、まるで自分は全く悪くないと思っているように聞こえるんだが？」

「……………」

「そもそも、君の【能力】がもっと強ければ、【茉莉】達を見失う

事はなかったんじゃないか？」

「……………」

急に猫撫で声にもどって、男は続けた。

「だからね、放っておくといいよ。」

私は

もう、駄目なんだろうか。

あきらめたら死んでしまうというこの状況にも拘らず、僕は考えるのが嫌になりそうだった。

何故僕なんだ？

何故僕はこんな場所

【此処】

にいるんだ？

何故僕は、【能力】なんて持ってしまったんだろう？

というより、本当に僕に、【能力】なんてあるんだろうか？

そもそも、これは全部夢なんじゃないか？

何故。なんで。僕は。

「……………結局、貴方もそうやって、力にしか興味がないんですね。さんざん偉そうな事を言っておいて、結局目的は、より強力な【能力>ちから】を得る事。はは、悪い冗談だ。笑顔の仮面？笑わせてくれる！！そんな大層な名前をつけておいて、結局は支配されるのなら、そんなものにはなんの意味もないじゃないか！！」

だからだろう、もう疲れてしまったから、僕は自暴自棄気味に、思った事を叫んだ。

「……………言いたい事はそれで全部？」

笑顔のまま、千寿さんは言う。

その崩れない笑顔が、無性に憎らしくなってくる。

「言いたい事はいくらでもありますよ！！何故結局こうなるのなら、何故希望を抱かせたりしたんですか！！一思いに殺してくればよかった！！助かるかもしれないという希望だけを抱かせて、見せ掛けだけの優しさをみせて！！偽善ならだれでもできるんですよ！！助かる可能性なんて、最初からなかったんじゃないのか！？最初から貴方は僕を殺すつもりで、その反応を楽しんでいたんじゃないのか！！どうなんだよ！？」

自分でも、支離滅裂になっているのは分かっていたが、一度溢れ出した言葉は止まらなかった。

「……………それは違う。貴方には確かに、助かる可能性があった。」
そこで千寿さんは、少し苦しそうに眉をしかめて続ける。

「そしてその可能性は、少ないながらもまだ」

「残っているとでも！？フザケルな！！もうたくさんだ！！殺すなら早く殺せよ！！もう嫌なんだ！！無駄に希望を持たせて、僕の心をゆさぶって、その苦しそうにしているのもどうせ演技なんだろう！！そうして僕の苦しむ様を見て、楽しもうとしているんだろう！！？もういいよ、もう！！僕の心は、そんなに強くないんだ！！僕はもう」

「……………」

「ほら！！何をぼーっと立ってるんだよ！！一思いにさしてくれ！！その包丁で！！それで満足すればいい！！その新たに手に入れた【能力】で、【此処】を出て行くつもりなんだろう！！どうせみんなそうなんだ！！」

相変わらず無言のままだったが、やがて千寿さんは、ゆらゆらと僕の腕に包丁を当てた。

「……………」。

「そっだー！早く刺せよー！」

「……………」その前に一つだけ、どうしても気になる事があるんだけど。……………貴方は私以外に、この本に取り付かれた人間を、知っているの？」

2話 ラストディスカッションー05

「知らないよ！！もう止めてくれ！！そうやってじらすのは！！」

「別に焦らしてる訳じゃないわ。単純に気になっただけ。さっきから貴方、私の他にも操られた人を知っているような、そういう表現が多かったから。……………無意識だったの？」

「無意識も何も、僕は本当に貴方以外にはっ！！……………？」

……………？

おかしいな。

なんだこの違和感。

知っている。

知らないはずなのに。

僕は、千寿さん以外にも、あの本に操られた人間を知っている。
また誰かの【能力】なのだろうか？
記憶を勝手に刷り込むような。

いや、でも、違う気がする。
そうじゃない。僕は確かに……………

「知ってるかもしれない……………けど。やっぱり知らないかも知れない。」

「煮えきらない答えね。まあいいわ。じゃあその人の事を教えて。」

「……………」

「どうしたの？ほら、速く教えてよ茉莉君。」

「……………貴方は僕を馬鹿にしているんですか？言う訳ないじゃないですか。言えは殺されると分かっているのに。」

「貴方こそ、分かってないんじゃないの？今はもう、取り引きできる状況ですらないでしょ？」

そう言いつつも、少し面白そうに、千寿さんは僕の腕に当ててあった包丁を、わずかに引いた。

落ち着け自分。

本当に本当に、今度ばかりはミスは許されないぞ。
下で唇を舐めてから僕は言った。

「いえ、取り引きとかそういう事ではなく、本当に思い出せないんです。」

「……………」

僕の言葉がそこで終わりではない事を分かっているかのように、沈黙したままの千寿さん。

「……………そうですね、あるいは、その【アル・アジフ】に触ってみれば、思い出せるかもしれません。」

3話 ラストディスカッションー06

「ふ。うふふ。」

実に嬉しそうに笑う千寿さん。

どこか真摯な目で見つめてくる。

手に光る【アル・アジフ】は、今までにないくらい光狂っているのに、千寿さんのその目には、確かに理性の光が強く残っていた。

「……………何がおかしいんですかね？僕も、もちろん貴方ですが、その本のせいで、何かしら狂い始めている。」

「そうね。面白いわ。」

面白い？まあいい。

「だから、僕もその原因を確かめたいんですよ。自分の手で。」

「ふうん、ふふ、それで？」

「だから、さっきから言っているように、その本を僕に貸して下さい。」

「それは無理ね。当たり前だけど。」

「少し触るだけでいいんです。」

「それで何が変わるのかしら。……………ほら。」

そう言いながらも、千寿さんは、僕の手になんかそれを、押し付けるように触らせようとした。

駄目だ。それじゃ駄目なんだ。せつかくここまできたのに。

「手触りとかっ！！ほら、いろいろ確かめたいですからっ！！」

「うふふふふふふふふふふふふふふふ。それで？何を言っているの？」

「だから」

自分でも、理屈が通っているとは、とてもじゃないけど思えないが、なりふり構ってられない。

千寿さんの精神力の強さに賭けてみるしかない。

「だから、色々確認するために、この縄、そろそろ解いても
らえませんか？」

僕がそういうと、千寿さんは、何がそんなにおかしいのか、狂ったように笑い始めた。

4話 ラストディスカッション107

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

何なんだこの沈黙は。

ひとしきり笑い転げた後、千寿さんはふと、黙ってしまった。
沈黙が、とても不気味だった。

僕を選択は、間違ってしまったのか？

またしても。

だとしたら、最後の最後まで、締まらないな。僕は。

でも、やるだけの事はやったのだ。

何度も諦めそうになったが、両手両足が動かない状態で、出来るだけの事はやった。

…………… 本当にそうか？

…………… 本当に、そうなのか？

考え出したら止まらないが、僕はそう信じて、千寿さんが何かを言うのを、ひたすら待った。

その後ゆうに10秒が経った。

さすがに沈黙に耐えるのが辛くなった頃、千寿さんが口を開いた。

「いいわ。」

「……………何が？」

「30点よ。」

「……………だから、何が、ですか？」
さつきから会話が微妙に噛み合わないが、僕は辛抱強く質問を続けた。

「分かるでしょ？さっきの貴方の見苦しいこじつけよ。もしくは屁理屈。【アル・アジフ】を詳しく調べたいとかいう。」

「それが、30点だと？」

確かに、自分でも酷い言い分だったと思う。

「そう。赤点すれすれだけれど、それで何とか妥協してあげる。それが例えとんでもないものでも、理由さえあれば、私はまだ、十分逆らえる。」

「?」

「本当なら、もっと高度な言い訳を考えて欲しかった所だけれど。というより、貴方には、そのくらいできそうなものなのだけれど。」

「??」

艶かしく舌を動かし、千寿さんは続ける。

「つまり、縄を解いてあげる、と言ってるのよ。」

5話 亜空と栞

どこだ、ここは。

どこなんだ、ここは。

もう嫌だ。出してくれ。

手も足も動かせない。

どうやら狭い箱の中らしい。

なんでこんな事に？

嫌だ。嫌だ。俺が何をしたんだよ！！
出してくれよ。

嫌だ！！怖い！！もう！！俺は！！

「俺はっ！！！」

周りをゆっくりと見回す。

その白い部屋には、見覚えがあった。

「……………俺の、部屋だ。」

【此处】に来た時からずっと使っている俺の部屋だった。

「……………夢、か。」

今は何時なんだろう。

俺はどのくらい寝ていたのだろうか。

それにしても、嫌な夢を見たもんだ。

思い出したくもない。

俺が【能力】を使えるようになったきっかけ。

昨日あれだけ無理をしたからだろうか。

だから。

こんな夢を見てしまったのだろうか。

だから？

よく分からない。

重い体を何とか動かし、ベッドの上で体を起こす。

体中、べつとりと汗だらけで気持ち悪い。

「……………亜空君。」

シャワーでも浴びようと、行動を起こそうとした俺の背後から、その声は聞こえた。

昨日あんな事があったからだろうか、俺は、身構えながら振り返った。

「……………栞か。どうした？昨日の件について、くわしい事情とやらを教えてくれるのか？だったらシャワーを浴びるから」

「違うんだ。」

俺の声を遮って、栞が言う。

「違う?。」

「君が。君が、それこそ疲れ切っているのは分かっている。だがそれでも、君しかないんだ。」

「俺しかない?.....話がよく分からんぞ。もうちょっと整理してくれ。お前らしくもない。」

「【アル・アジフ】に対抗できる【能力】を持っているのは、君しかない。.....私と一緒に、来てくれないか。」

「.....。それって、今日じゃないと、駄目なのか?俺今日はちよつと」

「頼む。」

そういつて、栞は頭を下げた。

.....俺の見間違いか?

あの栞が?頭を下げる?

それでも。

それほどに懇願されても、俺は迷っていた。

もう俺の体は限界なのだ。

【能力】なんて使えたものじゃない。

今日はゆっくり休みたい。

でも。どうする?

あの栞が頭を下げるなんて、ただ事じゃないぞ。

こんなに真剣に頼まれて、それを断るなんて、そんな事俺に出来るのか？

だがやはり体が……。

俺は

6話 開放

肅々と、作業は進む。

まず、右手が動くようになった。

その時点で千寿さんは、「これでやめておく？」と楽しそうに聞いてきたが、

もちろん辞退させていただいた。

片手だけ自由になった所で。いまさらだ。

次に、左足の縄を解きにかかる。

何だその順番？と思ったが、声に出して質問する事はしなかった。今は変な刺激を与えないようにしないと。

千寿さんは、僕の顔をちらちらと盗み見ているようだった。

突っ込みを期待しているのかもしれないが、そんな事は知らない。

左足の縄が意外と固かったらしく、途中で作業を中断し、千寿さんは僕の右足の縄を解きにかかった。

……まあ、そういう事もあるんだろう。

手に大事そうに持っている本か包丁、どっちかを一旦どこかにおけばいいんじゃないかな？言わないけど。

というか、包丁で切ればいいじゃないか？言わないけど。

その前に、包丁をおいてくれないかな、手が滑りそうでひやひやする。もちろん言わないけど。

次に、左手。

何のことはなく、解けた。

僕が何も言うつもりがない事が分かったのか、千寿さんも至って普通に縄を解いてくれた。

最後にもう一度左足。

これがどうしても固いらしく、ついに包丁を使おうとしたが、それを僕が諫める。

諫めて、自分で解いた。

千寿さんは不満そうだったが、動くようになった両手のリハビリとしては、なかなかいい仕事だった。

「さて、と。じゃあ、コレ。」

ようやく縄が全て解けると、

今まで宝物か何かのように抱えていた【アル・アジフ】を、あっさりと渡してくる。

あっさりとし過ぎていて、何か裏があるのではないかと疑いたくなつたが、おとなしく受け取る。

受け取る直前、千寿さんが何かを言った。

よく聞き取れなかった。聞く暇もなかった。

僕の体の中を、何かが乱舞するような違和感。

僕の体が。

僕の体、なのか？これは。

千寿さんは、もう一度、さっきよりも大きな声で言った。

「のまれないでね？」

7話 千鶴子とフォリス

「もーなんなの、意味分らない。」

さつきから、何回目か分からない独り言をこぼす。

独り言というより、一人愚痴か。

いやいや、独り言でいいのか。

……… 1人なんとか、ってなんだか卑猥な響きでいいわね。

じゃなくて、突っ込み役がないから、ボケてもしょうがないし、面白くない。

1人思考か、うふふ。

……… はあ。

気力を奮い立たせて、もう一度この部屋の観察を開始する。

四方を壁に囲まれている。

ドアはおろか、出入り口らしきものが存在しない。

本当に部屋なのだろうか、ここは。

私は、どこからこの部屋に入ってきたんだろう。

出口ないっておかしくない？ 隠し扉があるのかな、やっぱり。それ以外に思いつかないし。

でもなあ。もう30分ぐらい探してるのになあ。

【能力】も使えないみたいだし、本当に何なんだろう、この部屋は。部屋なのかしら、空間なのかしら。

響き的には空間の方がいいわよね、やっぱり。
秘密部屋より、秘密空間の方が。

それにしても、誰が作ったのか知らないけど、【此处】ってやっぱり変な所だ。

こんな面白い部屋があるのなら、もっと早くに教えてくれればいいのに。

こんな形じゃなく。

それにしても暑いわ。

空気がまったく循環してないんだから、当たり前なのかもしれないけれど。

……どうせ誰も見てないんだし、シャツ脱いじゃおうかな。

「……………千鶴子？……………何してるの？」

びっくりした。

タイミングが悪すぎる。いや、良すぎるのか。

シャツを腕にかけたまま、声をした方をみると、そこにいたのは、フォリスだった。

どこから入ってきたのかな。

それにしても、フォリスはやっぱりいつみても愛らしい。

二人して数秒固まった後、フォリスは、私の胸の辺りを見ながら喋り始めた。

「とりあえず服を着たらいいんじゃないかと私は思うわ、だいたいあなた」

「

8話 崩壊―01

頭が痛い。

体が痛い。

なにより、心が 痛い。

痛い？

痛いのか？これは。

この感覚は、痛いというよりは

「怖いの？」

千寿さんが、笑みを浮かべながら問う。

何故笑っているのだろう。

何がそんなにおかしいというのだろう。

僕がこんなに苦しんでいるというのに、それをこの女は、笑っている。

怖いなどと、ふざけた事を口にして。

怖いと、痛いは、全然違うじゃないか。

ふざけるな。ふざけるな。

何で、僕が、こんな目に。

「憎いの？」

笑みを崩さずに、千寿さんは飄々と言う。

もう仮面は必要ない筈なのに。

「怖いのもなく、憎いのもなく、それならば、壊したいのね？」

……私がそうだったように。」

壊したい？

そうかもしれない。

その表現が、一番正しいのかもしれない。

もう体は痛くない。

ただただ、力が欲しい。

そして、その力で、壊したい。

ありとあらゆるものを、ただただ壊したい。

「……私はもう行くから、ここにいたら危ないし。………また会えるといいわね、茉莉君。ちなみに確立は………4パーセントよ。」

そう言つて、女は部屋を出て行こうとする。

僕はその背中に襲いかかるうとして、何とか自分を押さえ込んだ。

………今、僕は何をしようとしたんだ？

千寿さんを、壊そうとした？

怖くなって、【アル・アジフ】を手放そうとするが、忌々しいその本は、手に吸い付いたように離れない。

力が、欲しい。

いや、違う。そうじゃない。

壊したい。

違うんだ。

僕は、千寿さんの行為を思い出して、むりやり笑う事にした。

9話 崩壊―02

なんだか、気持ちがよかった。

自分の中から、どんどん力が溢れてくるのが分かる。

僕の【能力】がなんだったのか、未だにそれは分からないが。

分からないが、そんな事はどうでもいい。

そんなもの使わなくても、今の僕なら誰にも負けない。

根拠なんてものはない。そんなものはくだらない。

今の僕は誰にも負けない。この本さえあれば。

そんな確信が、あった。

特に当ても無く、廊下をふらふらと歩いていた。

それにしても、この狭い廊下は本当にうっとしい。

何でこんなに狭いんだ？両手を目いっぱい広げたら、端から端に届いてしまいそうだ。

「……………ツチー！」

苛立ち紛れに、壁を殴ってみた。

ドス、と鈍い音がするだけで、傷もついていない。

「……………」

もう一発。

壁にはやはり傷がつかない。

何の素材で出来ているんだ？

「　　よ。」

「駄目　　ら。」

声が聞こえた気がした。

「でも　　のに？」

「　　ら、　　しょ？」

やはり聞こえる。

どこからだ？この廊下には隠れるような場所はない筈だ。
それなのに姿が見えない。

……ん？

5メートル程向こうの壁が、開いている。

開いている？

ドア？じゃないな。

なんだあの窪みは。

……誰かの【能力】か？

……まあ、いい。

僕がその中を覗くと、そこには二人の女がいた。

一人は金髪だ。外国人か？

……見た事があるような気がする。

が、やはりそれもどうでもいい。

ちようど、何かを壊したかった所だ。

「……茉莉、くん？……よね？」

少し怯えた様子で、背の高い方の女が、問いかけてくる。

何故僕の名前を知っているんだ？

……どうでも、いいか。

今から壊す奴の事情なんて。

どうやら、僕は笑っているようだった。

10話 栞と亜空

「あの本が原因なのは分かった。というかそれは前から分かってたしな。それで？結局俺は何をすればいいんだ？」

俺は、廊下を進みながら、隣にいる栞に訪ねた。

「……………分からない。」

顔色一つ変えずに、栞はそう答えた。

「分からない？お前さっき、俺にしかできないとかなんとか、言っただじゃないか。」

「む。そうなんだが。……………。」

そのまま黙ってしまいそうだったので、先を促す。

「そうなんだが？」

「……………具体的に何をすればいいかは分からない。もしかするともう……………。」

今日の栞は本当におかしい。

いつもなら、言わないでいいことまでズバズバと言ってくるのに、今日はやけに言葉を濁す。

濁すのだが、相変わらず涼しそうな顔をしている。
本当によく分からない。

「……………なあ、やっぱりもう俺帰ってもいいか？」

半分冗談っぽく言ったが、半分は本気だった。

少なくとも俺は、栞の返答いかんによっては、本当に帰ってしまうつもりだった。

「……………それは……………困る。」

「……………困るってお前な、俺だって疲れてるんだぞ？せめて俺は何をすればいいか、それだけでも教えてくれないか？」

「……………すまない。分からないんだ。」

本当に少しだけ、申し訳なさそうな顔をしながら、栞は言った。普段恐ろしい程無表情な栞だから、その微妙な変化を見て俺は、もう少しだけついて行みようか、と思った。

同時に、後回しにされている俺の様々な疑問は、いつになったら答ええてくれるんだろうか、と思った。

11話 千鶴子と茉莉

あゝ~~~~~!!もう!!

疲れた!疲れた!!疲れたっ!!

努力なんてものは、私に向いてないと思うのよねー。

キャラじゃないっていうか、生理的に受け付けないっていうか。

努力?

違うか。今のこの状態は、努力とは違う。

努力というよりは、むしろ我慢。そう、忍耐。

責められるのは、嫌いなんだけどな。

責めるのは、大好きだけど。

このままの状態が続くと、私どうなっちゃうのかなー。

気絶とか?

それならまだいいのだけれど。

後遺症とか残ったりしないといいな。

……むしろ、茉莉君のあの尋常じゃない状態からして

貞操、並びに命の心配をした方がいいかもしれない。

茉莉君の体を、私の【能力】で支配して、何秒くらいたつたのかしら。

少なくとも分の域には達してるわね。

180秒くらいは、経ったんじゃないかと、予測してみる。

もっとも、支配するといえる程に、支配できてはいない。

ただ動かないようにしている、そんな感じ。

.....そろそろ苦しくなってきた。

.....フォリスは.....ちゃんと逃げてくれたみたいね。
というか、何で茉莉君があの本を持っているのか。

千寿が持っている時にも思ったけど、あの本、どうも嫌な感じがするのよね。

本から嫌な感じを受けるなんて、私もついに危ない領域に入ってしまったかと思っただけ。

どうも、そういう訳でもないみたいね。

自分で言うのもなんだけど、私の【能力】は、相当強い部類の筈。
それなのに、特に【能力】を使っている様子もない茉莉君に、ほぼ相殺.....というか徐々に押しきられつつある現状からすると、あの本は、【能力増殖装置】といった所かな。

.....余裕をかましてる場合
じゃないわね、実際問題として。

なんだかんだで、今此处で何とかしないと、結局フォリスも危ないのだから。

どうにかできる気が、1%もしないのが苦しい所だけ。

もう限界かもしれない。諦めるのは嫌いだけど、

どうしようもない事も、この世界には確かにあるのだから。

私がこの【能力】を手にいれた時だって.....

いけない。ここでブルーな気分になんてなったら、終了してしまう。
このままではギリ貧で、かといってそれ以外の手段は無いけれど、
せめて精神だけでも強く保たないと。

とはいえ、精神論にももちろん限界はあるわけで。

「……………」

ついに限界を迎え、私の拘束が解けると、茉莉君は黙って私に近づいてきた。

笑っているようにも、泣いているようにも見える顔をして。

なんて顔をしているのか。

茉莉君の黙って振り上げたその手を見て、私は死を連想した。
なんて安易な、とは思う。

だって茉莉君は素手なのだ。

一回や二回殴られた所で、痛いのが関の山。

殴られ続けられ、そりゃあ死んでしまいかもしれないけど。

ふりあげた拳を見たというただそれだけで、死を連想するなんて、
どうかしているのだ。

でも、それを振り下ろされると、きっと私は死んでしまうのだと、
その時私は、そう思った。

一応衝撃にそなえて身構えていたが、いつまでたってもそれが来ない。

不思議になって顔を上げると、たった今まで直ぐ横に立っていた茉莉君が、10メートルほど向こうに立っていた。

意味が分からない。

事態が理解できない私の耳に、二つの声が飛び込んできた。

「大丈夫か千鶴子！！たく！！どうなってるんだ！？」

「ふむ。タイミングがよすぎるな。創作物でもあるまいし、誰かの意図が介入していそうで怖いな。……………そんな筈はないんだが。…」

……………。」

12話 茉莉と栞 - 07

「……………」

なんだ？どうなっている？今僕は、確かに、女を壊した筈なのに。何の手ごたえもない。それどころか、触った感触すらなかった。

何故だ？あきらめたような顔をしていたのに。

演技だったのか？まだ何か奥の手を隠していたのか？

しかし、10メートルほど離れた位置にいる女のその驚いたような顔を見る限り、その可能性は低いような気がした。

「大丈夫か千鶴子！！たく！！どうなってんだ！！？」
突然後ろから大声が響いた。

その声には、聞き覚えがある。ような気がする。

また邪魔が入った。

さっきも、金髪のカギを壊そうとしたら、突然体が動かなくなった。多少いらいらしながら振り向く。

目が釘付けになった。

声を出したと思いき男ではなく、その横に立っている女を見たせいだ。

その女の事を、僕は確かに見たことがあった。

囁くような声で、何事かを呟いている女を見ると、ふっふつと、今までよりも遥かに強烈な、破壊衝動が襲ってくる。

隣りの男に話しかけているのではなく、声に出す事で、考えを纏めているようだ。

そんな事はどうでもいい。

アノオンナヲ、コワシタイ。

衝動のままに、女に襲い掛かった僕の体が、再び引き離される。

「オイっ！！茉莉お前っ！！今本気だっただろ！！シャレになんねーぞ！！」

疲労感を漂わせつつ、激昂する男。それとは対象的に、落ち着き払っている女。

虚勢を張っているようには見えない。

どこか呆れたような、どこか哀れむような声で、女は僕に話しかけて来た。

「ふん。無事……………ではないようだけど、手遅れでもないようだね。まったく君は、強いのか弱いのか、よく分からない人間だね、相変わらず。」

13話 溜め込まれた感情―01

「やっぱりあの本なのか!!あれが原因なのか!!」
男が隣りの女に聞いている。

襲い掛かって、どうせまたはじかれるだけなので、僕はしばらく様子を見る事にした。

今弾かれたのが、女の【能力】なのか、男の【能力】なのか、それを見定めなくてはならない。

「……………何を興奮しているんだ、亜空君。」

少し腹が立つ程に冷静な口調で、隣りの女は答える。

今僕に襲われかけたのに、信じられない精神力だ。

僕が途中で止めるとでも思ったのか?

邪魔が入らなければ僕は。

……………僕は。

僕は、殴った。殴った、筈だ。殴ったと、思う。

何故だ、何故その事に自信が持てないんだ?

「え!?!あ、……………ああ。……………悪い。いや!!でも!!!!というか!!
!お前冷静すぎんだろ!!」

「そうかい?君が感情的すぎるんだよ。」

「ん!!んん。……………もう、そういう事でいいよ。」

「あの本が原因か、という質問だったね。それは言うまでもなくそうだよ。……………都合3人目だからね、感情も溜まりに溜まってるんだろっね。」

「感情が、溜まる？　どういう事だ？」

男まで冷静になりつつある。

後ろの女はしばらく動けないだろうが、2対1は少しまずいな。
負ける事はないだろうが、さっきの女のような【能力】を持っているかもしれない。

何より、自分の【能力】が分からないのだ。
挟み打たれるのは、避けたい所である。

「それで？　君はまだ会話が出来る程度には、意識があるのかい？」
急に僕の方を向いて、話を振ってくる女。
変な女だ。

……………調子が、狂う。

破壊衝動が、少し収まった。

あの女 栞、だったか と、もう少し話をしてみたいと思
った。

14話 溜め込まれた感情―02

「……………聞きたい事がある。」

僕が話に応じた事に、男　　確か、亜空といったか　　は、多少驚いたようだ。

が、やはりというべきか、栞の方は、眉を少し上げただけだった。眉を上げただけでも、この女にしては珍しいような気がする。どうやら、多少なりとも驚いているらしい。

「……………なんだい？」

「今僕を弾いたのは、どっちの【能力】だ？」

「ん？そんな事も忘れてしまったのか、あきれた奴だなあ、君は。

……………亜空君だよ。」

「な！？おい！？栞！？」

内心、聞くだけ無駄だと思っていたのだが、あっさりと返事が返って来た。

嘘と疑う事ももちろんできたが、隣りの亜空の焦りようから、それはどうやら本当の事だろう。

それが本当の事だとしても、やはり調子が狂う。
なんでそんなあっさり言ってしまうんだ？
理屈に合わない。意味が、分からない。

「栞莉君。」

やはり感情の読めない声で、栞が呼びかけて来た。

「……………なんだ？」

「私の名前を、覚えているかい？」

「……………栞、だろ？」

「違うよ。」

「違う？。」

「そう、違う。」

隣りの男が何か言おうとしたようだが、栞？は乱暴に口を押さえつけてそれを止めた。
何だ？仲間割れか？

「でもお前は、さつきその横の男 亜空 に、栞って呼ばれてただろ？」

「ちなみに彼の名前も亜空じゃない。」

横の男を指差しながら、女は言う。

また何か言いたそうな素振りを男は見せるが、女が睨みつけて黙らせた。

「……………。」

「いわゆるコードネームというやつだ。君に本名を晒す意味がないだろう？」

女は、僕の目を覗き込みながら、そう言った。

15話 溜め込まれた感情―03

「おい！！いい加減にしろよ栞！？さっきから言ってる事全然意味分かんねーぞ！！」

しびれを切らしたのか、男が女に怒鳴った。

じつとりと睨みつけながら、やれやれといった様子で、栞 結局どっちなんだよ は応じる。

「……………君を連れてきたのは……………ふむ、まあ、失敗、ではないんだが、はあ。」

「んだよそれ！！もう帰るぞ！！俺はマジで疲れてんだ！！」

「いやまあ、君のその怒りも、もっともなんだが。でも、分かるだろ？」

「わっかんねえ！！」

「……………だそうだ。」

僕の方を向き、栞はそう言った。
いや、何故そこで僕に振るんだ？

「…………つまり、お前の名前は栞でいいんだな？」

「ほら、台無しじゃないか。」

今度は男 亜空 の方へと向けてそう言う栞。

「ん！？あ！！そうか！！分かった！！茉莉が本当に俺や栞の名前を覚えてるかどうか、確かめようとしてたんだな！！」

「……………声がでかい。あと一から十まで全部喋るな。」

「どうせばれてたみたいだしいいじゃないか。それに、そういう事なら、事前に伝えておいてくれねーと。」

「……………君はもう少し察しがいい人間だと思っていたのだが。疲れで頭が回ってないのかい？」

「ああ、もう倒れそうだぜ！！」

何故か自信満々に言う亜空。

栞が続いてこいつまで。

その倒れそうという情報を僕に伝える事は、
百害あって一利なしなんじゃないのか？

それとも嘘？……………を言っているようにも見えないし。
本当に、調子が狂う。狂ってしまう。

16話 溜め込まれた感情―04

「……………まあ、結果オーライだ。」

栞は、何かを吹っ切るように、言った。

口調は全く変わらず平坦だったが、何となくそう思った。

「ん？何がだ？俺のせいでお前の作戦は失敗したんだろ？それが何が結果オーライなんだ？問題ないなら、もう部屋に帰って寝ようと思っただが。」

亜空が問う。

「……………失敗なんかじゃないよ、現に、彼が私たちの名前を覚えていなかったのが、分かったじゃないか。」

「は？何で？」

「覚えていたのなら、私の嘘に、騙されそうになる訳がない。というか君と話すのは疲れるから、少し黙っていてくれないかな。」

「おっ前!!」

あまりの言い分に、亜空が声を荒げる。

「悪い。言い方が悪かったね。そういう事じゃない。」

「悪かったってお前、じゃあどどういう事なんだよ。」

「私はしばらく茉莉君と話し合うから、君は少し黙っていてくれ。」

「おまつ！！それほとんど同じじゃねーか！！」

わずかに違和感を感じた。

「少し黙っていてくれませんか？」

やはり何かおかしい。

「礼儀正しければいいってもんじゃねーぞ！！」

違和感の正体が掴めない。何かがおかしいのは間違いないのだが。

「黙っていて下さいますか？」

分かった。栞の、顔だ。あまり表情に変化が無いから気づかなかったが、今の漫才のような会話にはまるでそぐわない、不愉快そうな顔をしている。

「だから丁寧さの問題じゃないって！！」

気づいてみれば、亜空の方も、やはり何かおかしい。どこかきこえない。

違和感だらけの、おかしいな会話を、しかし僕はただ眺めていた。毒気を抜かれたとも言うのか、闘争意欲が、いつのまにか完全に萎えてしまっていた。

17話 作戦タイム

「はぁ？準備？」

少し間の抜けた声が出てしまった。

会話しながら走る事に慣れていないので、こけそうにもなった。

「そう、準備が必要だ。」

隣りを走る栞は、体の軸も、声もブレがない。

汗も全然かいていないようだ。

いくら俺が疲れているとはいえ、栞の体力にはまったく恐れ入る。

「やっぱりお前、何が起こっているのか知ってるのか？」

あーやっぱりきついなあ。

どれだけやばい事になってるか知らないけど、やっぱり部屋で寝てた方がよかったかも。

「詳しい事は、分からないが。間違いなくこの異変の原因は【アル・アジフ】だよ。」

左右を確認しつつ、栞が応じる。

「【アル・アジフ】？それって、図書館で……えっと……」

何だったか。誰が、持っていたんだったか。

うーん、ここまで出てきているのに。

というか、昨日の今日でもう忘れるとか、ちょっとやばいんじゃないか？俺。

「そう、その本だ。……覚えてるのか。」

「あ？何か言ったか？」

本の実事を肯定した後、ぼそりと何かを呟いたようだが、聞き取れなかった。

「いや、何でもなし。それで、作戦なんだが……」

「おう！ ！体力使うのはなるべくごめんこうむりたいけどな。」

「それは、……おそろく大丈夫だろう。亜空君、君は【アル・アジフ】という本を、どの程度知っている？」

「どの程度も何も、ほとんど知らないぜ？ 本当だったら今日、茉莉から詳しく教えてもらう筈だったんだけどな。」

「ふむ。……時間もなし事だし、単刀直入に言うよ。あの本は、人の 人といつても、主に【能力者】限定なんだが 負の部分の感情を取り込み、それを【能力】へと変え、さらに増殖する事が出来る。」

「……能力者以外の人を持ったらどうなるんだ？」

俺がそう聞くと、少し呆れたように、朶が言う。

「……何故そこにくいつくんだ？ 時間がないと言ってるだろうに。」

「別にいいだろ？ 気になったんだから。」

「……。普通の人間が持ったところで、別に何もない。少し嫌な感じがする程度だろう。【能力】を持っている人間というのは、かなり高い確率で、心の中に深い闇 トラウマ を抱えている。君も覚えがあるだろう？ そこに、あの本は入り込むんだ。入

り込み、刺激し、その感情を【能力】へと変換する。……………その結果、暗い感情に、持った人間は取り込まれる。」

トラウマ、か。

それを無理矢理暴き出されるなんて、考えただけでぞつとする。

「……………そうか。それで、その本を、今茉莉が持つてるのか？」

「おそらくね。」

「……………。作戦つてのは？」

「…………それがね、思いつかないんだよ。」

「は？」

「だから、思いつかない。……………気をそらせればいいような気がするが。」

「気をそらす？」

「ああ。おそらく茉莉君は今、とてつもない負の感情に翻弄されている筈なんだ。……………何でもいいから、それ以外の感情を紛れ込ませる事が出来れば、あるいは。」

「なんだ、ちゃんと作戦あるんじゃないか。」

「いや、だからその手段がね。問題なんだよ。」

本気で悩んでいる栞に、俺は一つの案を出してみた。

「コントでもするか？」

「……………は？」

今まで乱れなく続いていた足並みが乱れた。

面白い。栞が動揺している。

足を止めてしまった栞の元へと戻る。

「コントだよ。というか、コントもどきの事をしようぜ？」

「……………いや、……………その。」

うを。面白い。面白いぞ。あの栞が、動揺しまくっている。

ふふふ、これはこの案を通すしかないだろう。

「他に案もないんだろ？時間も無いんだ、ほら、行こうぜ！..」

俺は、栞の手を引いて、半ば無理矢理走り始めた。

「……………いや、……………確かに、……………しかし、……………」

……………そんな事……………」

後ろで栞は、しばらくぶつぶつと呟き続けていた。

18話 希薄な存在感

背後に、気配を感じた。

それは、うつかりすると気づかないような、そんな希薄な気配だった。

まさか、謀られたか？

僕を油断させて、その隙に、さっきの金縛り女が、後ろから本を奪おうという魂胆か？

慌ててふりむく。

正直やられた、と思った。完全にふいをつかれた形であつたし、後ろの女は、完全に疲弊していて、しばらく動けないだろうと思っていたからだ。

つまり、僕はその時、油断しきっていたのだ。

「……………」

おかしいな。誰もいない。

金縛り女も、遠くで倒れこんでいる。顔だけはこちらに向けているが、やはり疲弊しきっていて、しばらく動けそうに無い。

それどころか、僕があわてて振り向いた事を、不思議そうな、怯えたような顔で見ていた。

栞と亜空の方へと、再度振り向く。

二人の反応は、正反対だった。

亜空の方は、啞然として、何故僕が振り向いたのかを考えているよ

うだ。

栞の方は、僅かに身構え、僕の動向をつぶさに観察している。

どういう事だ？この二人が何かやったんでもないのか？

今確かに、何かの気配が……。

気の、せいかな？

いや、気のせいじゃない。

僕は、自分の感覚を信じて、何も無い空間へと手を伸ばした。

「うを！！なんで分かったのよ！！」

何もない空間から突如として現れた女は、僕をじっとりと睨みつけていた。

誰だ？

「鞘香っ！？」

「……………鞘香、君？」

僕のその疑問は、栞と亜空の声によって、解消された。金縛り女も驚いたようだが、もう碌に声も出せないらしい。

もつとも僕には、名前が分かった所で、特に意味は無かった。

また敵が一人増えた、という、ただそれだけの事だった。

僕の中で、また闘争心が湧き上がりつつあった。

19話 その者の名前を

目の前の女は、僕を睨み続けている。

なんだ？僕はこの女に、恨まれるような事を、何かしたのか？

……覚えはないが、女の視線には、確かに憎しみが混じっていた。

「……まったく、次から次へと、なんで……」

背後から、珍しく感情もあらわに、狼狽した声を出す栞。

しかし今そんな事はどうでもいい。

順番に問題を片付けていかなければ。

とりあえずは、目の前の女から。

どうする？壊すか？

……それは何だか気が進まない。

……ちつ、栞と亜空のせいで、気持ちは何だか落ちつかなくなってしまうた。

「………しないよ。」

目の前の 鞘香と呼ばれた 女が、何かを僕に訴えかけてくる。

「何だよ。」

「英知を返しなさいよ!!」

英知、というその名前を聞いたとき、体の芯がぶれたような気がした。

「……誰だよ、それ、何の事が分からないよ!!」

「嘘！！嘘よ！！英知を！！早く英知を返してよ！！何処を探してもいないの！！」

「そんなの僕は知らないよ！！」

「そんな訳ないでしょ！？貴方と最後に会ったのは、分かってるんだから！！」

「知らない。知らない。僕は、何も、知らないよ。」

胸が、えぐられているような気がする。
何だろう、何故だろう、思い出せない。
違う、思い出しては、いけない事のような気がする。

「……………鞘香君、……………その。」

「外野は黙ってて！！」

後ろから、栞が何かを言おうとするが、それをぴしゃりと止める鞘香。

「ほら！！速く言つてよ！！英知をつ！！返してっ！！」

僕の服を両手でぐわしと掴み、上下左右に乱暴に動かす。

冷静な判断力を、失っているようだ。

そんな風に凄まれても、困る。

僕は本当に知らないのだ。

「……………おい、鞘香……………」

「返して！！返して！！なんで！？なんで私から英知を奪おうとす

るの!？」

亜空も止めようと声を掛けるが、全く耳に入っていない。

それにしても、あまりにも理不尽な怒りだ。

「僕は知らない。」

「嘘よ!!」

「嘘じゃない!!」

「嘘よ!!嘘よっ!!」

「嘘じゃないって言ってるだろ!!」

何だ？

この女は何なんだ？

いきなり現れて、今にも殴りかかりそうな勢いで、僕を責める。

.....壊してしまうか？

そうだ。

壊してしまえば、いい。

何を僕は迷っていたんだ？

こんなに簡単な答えが、あつたじゃあないか。

「.....おい、栞、まずいよな、コレ？」

「.....ああ。」

背後で、誰かが会話していた。

20話 一つ、或いは二つの崩壊

鞘香と茉莉の言い争いがヒートアップしていく過程で、カチリと歯車が噛み合うように、或いは辛うじて引つかかっていた歯車が外れるように、茉莉の雰囲気が変わった。背中越しなので表情を見る事は出来なかったが、茉莉の放つオーラのようなものが、変化したのだ。もちろんオーラなんてものを見る事は出来ないが、部屋全体の空気が張り詰めた感じがした。そんな不穏な空気をひしひしと感じながら、俺は隣りに立つ栞へと問うた。

「……………おい、栞、まずいよな、コレ？」

否定してくれ。と、そう思った。いつものように、何処から来るのか分からない余裕で、俺の言葉を否定してくれ。と、そう思った。

「……………ああ。」

だが、そんな俺の願いは叶わず、栞は彼女らしくもない真剣な表情と声で、俺の言葉を肯定した。

俺と栞のエセまんざいにより、弛緩しつつあった空気は、再びきりきりと絞り尽くされ、今にも爆発してしまいそうだ。それでいて、部屋はやけに静かだった。誰かが動く事で、否、声を出すというただそれだけの事でも、この微妙な均衡を壊す起爆剤に成り得る事を、皆が無言の内に理解していたのかもしれない。さっきまであれほど喚きたてていた鞘香でさえも、押し黙っている。

怯えているのか？よくよく見ると、鞘香の体は小刻みに震えていた。視線はただ一点、茉莉の顔を見つめている。

時間が進むのがやけに遅く感じる。喋ることも動く事も出来ないまま、俺は目の前の二人から目が離せないでいた。どれくらいの時間が経ったのだろう。1分か2分か、それとも10秒くらいかもしれない

ない。ピクリと茉莉の腕が動いた。それが契機であつたかのように部屋が再び動き出した。

「……………いや。来ないで」

呟くように鞘香が言う。その言葉に何の反応も示さず、茉莉の腕は少し後ろに引かれた。

……………まさか、殴る気か？

ふとそんな考えが頭に浮かんだ。しかし俺は慌ててその考えを打ち消す。何を考えているんだ俺は。アイツは、茉莉は、そんな奴じゃない。

「私と鞘香君との間の空間を【縮めて】くれ!!」

隣りから、怒鳴るような朶の声が聞こえた。

「は？」

そのやりとりの間にも、茉莉の腕はさらに後ろに動く。まるで俺たちに見せ付けるように、ゆっくりとした動作だった。それは、茉莉の中の迷いだつたのかもしれない。

「速くしろ!!」

再び朶が怒鳴る。

どうやら茉莉は鞘香を殴ろうとしているようだ。その様子を見ても、しかし俺は動けなかった。ひたすらに現実感が希薄だった。

「おいっ!!」

自分は動けないが、どうやら朶は動けるらしい。朶の要求に答えるという事は、朶が鞘香のいる位置に行くという事で。それはつまり……………。

いや、それでも。茉莉はそんな奴じゃない。朶にも何か考えがあるのかもしれない。彼女の【能力】で、防ぐ算段があるのかもしれない。そんな甘い考えで、俺は朶の要求に従い、空間を【縮めた】。

予想通り、鞘香の前に、庇うような形で栞が割り込んだ。

……………うお、しんどい。やっぱりもう限界だな。こんな事は早く終わらせて、帰って寝よう、という俺のどこかずれた考えは、目の前に起こった事実を見て吹き飛んだ。

茉莉が栞を殴った

パーではなくグーで。いやそれは今はどうでもいい。殴る対象が栞になった途端、茉莉は何やら反応したようだったが、勢いは止まらないまま、それは栞の顔に当たった。栞は倒れこそしなかったものの、その衝撃に体制を崩す。

そんな。そんな。おい？おい？おい茉莉？俺は信じていたんだぜ？

21話 引き返す道

「茉莉い！！お前なあ！！」

僕の背中に降りかかる怒声。そのかすれ具合から、声の主が本気で怒っている事が如実に伝わってくる。

僕の体は震えていた。しかしこの震えは、怒声に対する恐怖から来るものでは無かった。恐怖から来るそれならば僕はよく知っている。しかしこんな感情は始めてだった。何故僕は震えているのだろう。目の前で呻き声があがる。反射的に僕は身構えていた。大きく一つ、理由の分からない震えが起こる。右手がじんじんと痛かった。硬い壁を殴っても何とも無かったこぶしが、今は何故か無性に痛かった。

「く。うふふ。やれやれ、手加減してくれなかったらどうしようかと思っただよ。ああ亜空君、無理しなくてもいいよ。君はもう限界なんだろう？」

手加減？手加減だって？そんなものをした覚えは無かった。壊すつもりで殴ったのだ。文字通り壊す　殺す　つもりで。そう考えると、収まりかけていた震えはまた大きくなった。体が震えるのを止めることが出来ない。どうして？壊す事は楽しく、正しい事の筈なのに。どうして僕は震えているんだ？

「ちょっと待てよ栞！！確かに限界だが、それでも」

答える亜空の声は、予想外に近い所から聞こえた。後ろを見ると、1メートル程の位置まで迫ってきていた。

「大丈夫だ」

「何の根拠があるんだよ」

「大丈夫だ」

「だから。お前は今殴られたんだぞ。分かってんのか？」

「大丈夫だ」

「……………」

「信じてくれ、私と」

「分かったよ。好きにしる。どうなっても俺はもう知らないからな」

しばらく言い争いを続けていたが、やがて亜空の方が折れ、吐き捨てるようにそう言つと、亜空は壁に背をつけて座り込んでしまった。

「さて。茉莉君……………おつと」

呼ばれて反射的に首を向けると、朶が口を手の甲で拭っていた。血が薄く紅を引いた。

「あ……………朶……………それ」

自分の声とは思えないほどに情けない声が、自分の口から漏れた。

「これ？血だよ」

「……………う。痛くないのか？」

「馬鹿な事を聞かないでくれ。そりゃ痛いよ。殴られたんだからね。場合によつてはこうして血も出るだろう。というか第一、こうしたのは君なんだよ？茉莉君」

「そう……………だけど」

「だけど？だけどなんだい？言い訳があるなら聞いてあげるよ」

言い訳など無い。ある筈が無い。

「思いつかないかい？ならはつきりと言つてあげるよ。君は私を殴つた。この事実揺るがない」

右手がずくずくと痛み出す。

「ま、もう少しのダメージは覚悟していたから、この程度で済んだことには驚いている。だから褒めてアゲルヨ。この程度で済ませるなんて凄いいね、ありがとう、茉莉君」

褒め、御礼を言ってくる朶だが、その表情は少しも変わらない。怒っているのか、悲しんでいるのか、笑っているのか、分からない。

でも今の言葉が皮肉である事はなんとなく分かった。

「あ、僕、は、うう」

「そうだ、君が殴った。威力の大小は関係ない。私を、人を、女を、君は殴ったんだ」

「う、うう」

「それはもう消えない。事実だよ、茉莉君。受け入れるんだ」

右手が、というより右手を媒介として心が震えた。とても痛かった。

「……痛いかい？茉莉君。でもそれは受け入れるべき痛みだよ」

「く」

「人を殴ることができる人間は、どこかしらおかしくなってしまうているんだ。それが一時的なものか永久的なものか、先天的なものか後天的なものか、等々の違いはあれど、何かしら壊れてしまっている。殴り合いの喧嘩だって、それが起こった段階で、双方共に文字通り「キレ」ている訳だからね。」

「ううう」

「人を殺す手段にしたってそうだよ。「殴り殺す」なんて手段は滅多なことでは選択されない。何故だか分かるかい？手に感触がリアルに残るからだよ。それが楽しいなんて人は、これはもう本当に壊れている」

僕は、思ってしまった。今はともかく、実際に殴る前までは、それはとても面白い事だ、と。つまり僕は壊れているのか？そうなのかもしれない。それならばいつそ

「茉莉君。君はまだ戻れるよ」

「え」

心を読まれたようだった。

「あいにく私は、女を殴る奴は無条件で最低……なんてフェミニスト的な考えを持っていない。確かに褒められた行為ではないが、それには理由があつたのかもしれないし、男女問わず、一発殴って目を覚ましてやった方がいい人間がいくらでもいる。…ま、そういう人種にそんな事をしたら、キレてしまってどうしようもなくなる

が。だからまあ、そういう意味では、殴ったのが私でまだよかったね」

「……………」

「いいか、君は、まだ、戻れる。戻って来い」

戻れるのか？許してくれるのか？僕は、君を。

「茉莉君。本を、手放せ」

左手を見る。禍々しい雰囲気を放つ本。さっきまでとても愛おしかったのに、今ではとても醜く見えた。へばりつくように手から離れない、否、僕の手が頑なに開こうとしなかったが、それでもむりやり、僕は手から引き剥がした。

心を縛っていた重苦しい何かが剥がれた。ような気がした。憑き物が落ちたような気分だった。

同時に僕の体から力も抜けていく。力が全く入らない。あ、だめだ。これは倒れる。受け身 も取れそうにないな。

前のめりに倒れる僕の体を、しかし誰かが受け止めてくれた。

包みこむ温かい手の持ち主に向かって、僕は心から言った。

「……………ごめん。それと、ありがとう。栞」

栞も何か返事をしてくれたようだったけど、それを聞く前に僕の意識はそこでとぎれた。

22話 どこかで見たような男

ぱち、ぱち、ぱち、と間の抜けた音が響いた。
何だ？誰かが拍手している？……けど、誰だ？
そう思つて俺は、部屋を見回してみた。

茉莉は気を失っているようだ。アイツには、目を覚ましたら色々と言ひ聞かないといけないな。それで、場合によつては俺がつてたように
1 発殴つてやらないと。ま、最後のやり取りを見た感じじゃあ、そんな心配もなさそうだけど。

茉莉はその茉莉を両手で支えている。別に茉莉に対して怒っている訳でもないようだった。殴られたら普通は切れる……まではいかなかったも、もう少し感情を出してもいいような気がするんだが。うーん、茉莉はよく分かん。

鞘香は、部屋の端の方で縮こまつて、ぶるぶる震えている。両手で頭を抱えているので、拍手なんてしている筈が無い。というか、事態が一応の終わりを迎えた事に、気付いてないんじゃないのか？茉莉が謝つただけで済むようにも見えないし、事情を説明するにしても、骨が折れそう。

となると、千鶴子か？

しかし千鶴子の手は両方とも床に着いている。呆けた顔で入り口の方を見ていた。反響してよく分からなかったが、拍手も、その方向から聞こえてくるようだった。

「いやいやいや、実に面白い見世物だったよ。【茉莉】がまさか生き残ると思わなかったが、それもまた面白い」
ドアから白衣を着た男が姿を見せた。

誰だ？コイツ。いや、俺はコイツとあった事がある。ん？いや、どうだろう。やっぱり、気のせいだろうか。

「何であなたが」

「誰だ？お前は」

栞の声と俺の声が重なった。栞はコイツの事を知っているのだろうか。男は、栞の問いかけを無視して、俺の方へと顔を向けて言った。「くくく、酷いなあ亜空。お前とは仲がいい設定だっただろ？短い間ではあったがな。それを誰だとは……いやいや酷い」

「設定……だと？それは、どういう」

「まあ、忘れるなというのが無理な話かもねえ。くくくくく」

「いや、待て、お前………木霊、か？」

俺がその名前を言うと、白衣の男は少し驚いたような表情になった。「お？マジで思い出したの？いやあ実になかなか。本当に君たちは興味深い。でも違うなあ。確かにその名前の方が君にはしっくり来るだろうが、僕の名前は【木霊】じゃない」

「は？じゃあ誰なんだよ……」

「君に答える必要はないね。………ふむ。いい感じにみんな弱っているな。これもまた一興、か。一度に実験を進めてしまうか。二人足りないようだ、それもまあ何とかなるだろう」

「実験だと！？いきなり出てきて意味分かんねえ事ばっか言ってるなよお前……」

「………少し静かにしててもらおうか」

白衣の男は俺の方を睨みつけて、近付いてくる。

逃げようと体を動かそうとするが、思うように動かない。さっきまでは何とか持っていたが、茉莉の件が終わって、俺は安心して力を一度抜いてしまった。男はやすやすと俺を捕まえると、首筋に何かを注射してきた。

痛くはなかったが、だんだんと視界が朦朧としてくる。

……とにかく意識を保とうとしたが、どうやら無理なようだった。閉じていく視界に、栞と白衣の男が話しているのが見えた。

幕間に変わる3つの光景（栞×木霊？）

「それで、何でここに貴方がいるんですか？」

「何で？気分さ。強いて言うなら、可愛い栞ちゃんの顔をふいに見たくなってさあ」

どの口がそんな事を言う。人の命でさえ何とも思っていない癖に。

「……………そうですか。それで、彼女たちはどう処理すれば？また閉じ込めておきますか？」

「つれないなあ。その返事だと自分が可愛い事を認めているように聞こえるよ？まあ僕はナルシストは嫌いではないけどねえ。…………好きでもないけれど」

どうせこの男は、ナルシストがどうかでなく、人間自体にさほど興味がないのだろう。精神的肉体的に弱り切った亜空たち三人に、容赦なく睡眠弛緩薬を注射した事からもそれが伺える。健康な人間を瞬時に眠らせる薬を、弱っている体に打たれて大丈夫なのかと、多少心配しながら観察していると、白衣の男は言葉を続けた。

「……………そうだなあ。もう今回の実験には必要ないだろうし、下に【降ろし】ておいてくれ」

「分かりました。……………昨日閉じ込めた二人はどうしますか？」

「昨日？……………ああ【英知】と【穎娃】か」

本当に忘れていたのだろうか？思い出したように男は言う。

「ん、そうだな。彼らももう【降ろし】ていいよ。何か使い道があるかと思っただが、結局役に立たなかったな。あいつらは今どうしてるの？まだ寝てるの？」

「いえ、その注射は確かに強力ですが、さすがにそろそろ目を覚ます頃かと」

「あ、そう。じゃあ戻す前にもう一度眠らせないといけないかな。めんどくさいな。薬渡すから、やっといてくれる？」

「……………分かりました」

あの二人に気付かれないように注射するなんて至難の技だが、何とかやってみるしかない。上手くすれば、まだ眠っているかもしれない。あの薬の強力さは、茉莉君を見ていてよく分かっている。

「じゃ、そっちは君に任せるとして、【茉莉】を渡してくれ。念入りに記憶をいじらないといけないから」

「……………」

「どうした？まさか情が移った訳でもないだろう？」

「……………」

私は、黙って男に【茉莉】を手渡すと、部屋に寝転がる三人を【降ろす】作業に移った。

幕間に変わる3つの光景（千寿×フォリス）

私は廊下を歩いていった。窓の外を見る。でも見えるのは空ばかり。いくら辺境の地に【此処】があつたとしても、山も見えないというのは少しおかしいような気がしていたが、分かつてみれば納得だつた。逆に今までその事に深く疑問を抱かなかつたのが、恐ろしい。私の思考を押さえ込んでいた【能力】はどれほど強いものだったのだろうか。

たたた、と向こうからフォリスが慌てた様子で走つて来る。
……………ん。フォリスが逃げて来るという事は……………。

凄いわね、茉莉君。こうなる可能性は1パーセントにも満たなかつた筈だ。彼は幸運の星の元に生まれて来たんじゃないかしら。

「あ千寿ちよつと聞いてまずいのよ茉莉が急におかしくなつてそれで」
「

私を見つけたフォリスが、走りながら話かけてくる。

「落ちて着いて、フォリス。千鶴子は無事よ」

「私を逃がすために千鶴子が……………って何であなたあれおかしいわ千寿はあの場にいないと思つただけと何処かに隠れていたのかしらそれとも」
「

「ええ、確かに私はいなかつたけど、私には分かるのよ。茉莉君が変な本を持つてたでしょ？アレを私も持つていた事があるのよ。それで【能力】が強化されて未来の可能性が凄く詳しく見えるようになったの」
「

「何を言っているのか分からないわ、というかあの本を貴方も持つていたというんなら私は貴方に近づかないほうがいいのかしら、そうなのかしらもしかしたら私は以前としてピンチなのかしら」
「

フォリスが喋っているのにも構わず、私は一気に言葉を繋げた。フォリスは、自分が話している間もちゃんとこちらの話を聞いているみたいだから、向こうが話していても話すくらいでちょうどいい。「まあ、ピンチといえばピンチかもしれないわ。この場に留まっていたらあの男に捕まるから、貴方に行つて欲しい場所があるの?」

「あの男つて誰なのかしら茉莉ならそう言う筈だし貴方の言葉はさつきからよく分からないわ、それに――
ああ確かに分かりにくいかもしれない。

分かり過ぎているというのも、駄目なのかもしれない。

茉莉君に「アル・アジフ」を無事に渡して、狂気から開放されたのは良かったけど、【能力】は強化されたままだった。もっとも、未来を選ぶ事はできないようだ。やたらと未来の可能性が見えるようになってしまった。この分かり過ぎるという苦悩と、これから一生付き合い続けるかと思うと、自然と溜め息が零れる。私は、目の前で喋り続けるフォリスに、とにかくいけば分かるから、と、その場所の位置を伝え、とにかくこの場所に居るのは危ないから、とフォリスをその場所へと向かわせた。

フォリスは走り出すと一度振り向いて、「千寿も一緒に行かないのか?」という意味の事を聞いて来たが、やる事があると言って、半ばむりやり一人で向かわせた。

フォリスの【能力】を使えばあの場所に入る事も可能だろう。閉ざされたあの部屋に。

そして私は、【木霊】を名乗る男が来るのを黙って待った。今はあの男に大人しく捕まった方が、私が【此处】から出られる可能性は、どうやら一番高いらしい。注射は嫌いなんだけどなあ。

……まったく、分かり過ぎるというのは碌なもんじゃない。

幕間に変わる3つの光景（英知×頼娃）

「どうですか？ありましたか？」

正立方体の部屋の、俺の位置とはちょうど逆の端を調べていた頼娃が、呼びかけてきた。その声は些か疲れているようだ。どうも向こう側にも出口は見つからなかったらしい。それでも俺はもしかしたらという思いを込めて聞いた。

「いや、見つからないな。そっちはどうだ？」

「こつちもです。隙間すら見つからないというのはいただけませんか」

そうなのだ。俺もそこが気になっていた。

この部屋に出入り口らしきものがないのはまあいいとしよう。俺たちを閉じ込めておくためなんだろう。これは納得できる。でもそれにしても、隠し扉が何かにしても　隙間さえないというのは、おかしいじゃないか。これではもともとドア何か存在しないようではないか。

「そうですね。……僕たちの探し方が甘いのかもしれませんが」俺の考えを【見て】、頼娃が賛同を示す。心を見られるのはもう慣れた。例え読まれても、頼娃はこちらに都合の悪い事は発言しないようにしているようなので、別に悪い気はしなかった。向こうも見たくて見ているのではないのだから尚更だ。

「それにしたって、だ。痕跡を完全に消しさる事は不可能だと思うんだが」

「どこか見ていない場所があるのかも。天井という可能性もありますし」

「…………天井、か」

「調べてみますか？」

「いや、一旦休憩しよう。焦ったってしょうがないし、疲れた」
「そうですね。僕も疲れました」

二人並んで腰を下ろす。暫くお互いに黙っていたが、やがて頼娃が口を開いた。

「僕たちを同じ場所に閉じ込めているのには、どういう意味があると思いますか？単に閉じ込めておくのなら、メリットが無いと思うのですが」

「うーん。分かんね。部屋が無かったとか……いやそれはないか。まあ、強いて言うなら仲間割れとかかもな。少し前まで、対立してた訳だし」

「……………ありがとうございます」

「何がだ？」

お礼を言われる心当たりは無かった。

「【アル・アジフ】に囚われた僕を助けてくれた事です。それと、今も普通に話してくれている事」

「まあ気にすんな。そっちも辛いみたいだからな」

「それでもですよ。大抵の人は、僕の【能力】を気味悪がって、離れていきます。たまに同情してくれる人も居ますが、そういう人もどこか距離がある。……………だから貴方と居るのは楽です。茉莉さんもそうですが、心が休まります。だから、ありがとうございます」

「やめてくれよ。何か恥ずかしいから。それより、一つ思いついたんだが聞いてくれるか？」

もう頼娃は【見て】いるのかもしれないが、はいと頷いてくれた。

「いやまあ、この部屋の事じゃないんだが……………【此処】はもしかして、浮いているんじゃないか？」

「建物全体が、という事ですか？」

「そうだ、そうすれば、屋上から見える景色にも納得がいく」

「それにしたって、建物全体を浮かすのは無理がありませんか？」
「……………普通は無理だと思うけどな。どうも【此处】には桁外れに【能力】が強い奴が集められているみたいだし、もしかしたら。それに【アル・アジフ】の件もある」

「あの本に限らず、何かで【能力】を強化して、って事ですか。：

……………確かに、可能性はあるかもしれませんがね」

「だろ？だから」

俺と頼娃は、同時にそちらを向いた。人の気配を感じたのだ。

そこには、どこから入って来たのか、フォリスが立っていた。
俺たちの事を見て、何だか泣きそうな顔になっていた。

終章 世界の狂う重さ 1話 いつもと変わらない今日

目が覚めると、頭が少し痛かった。
ずきずきと、奥の方が痺れるように疼く。

僕は黙って体を起こすと、ベッドから降りた。
いつもと変わらない日常が、また今日も始まる。
変わらないこの毎日が、僕は好きだった。

変わらないというのは、
狂っていないという事だ。
狂わない事は大事なことだ。
狂わないということは、
正常であり続けるという事だ。
だから僕は、この代わり映えのしない毎日を愛してもいた。

。

頭痛が。でもこの程度なら我慢できる。
僕は顔を洗い、服を着替え、いつものように屋上へと向かった。

途中、図書館の前を通った。
でもそこは、台風が通り過ぎたようにぐちゃぐちゃだった。

片付ければいいのに。
何故そうなったのかは知らないが、部屋をそのままにしている理由が、いまいち分からなかった。
でも、この部屋は前からそうなのだ。別に片付けようとも思わない。

所々白い突起物が見えるし、転んで怪我でもしたらたまらない。近付かない方がいい。

コノヘヤハ。

屋上についた。

今日もまた、快晴だった。

【此処】に来てから、晴れ以外の空を見た事がない。でもそれは大した事じゃなかった。なんせ晴れなのだ。これがもし毎日雨なんて事になれば困ったものだが、晴れているうちは何の問題も無い。

オカシイ。

頭が痛い。

でもこんなにも空が青いから、そんな事は些細な問題だった。痛む頭を抑えながら、空を仰ぎ見る僕に対して、

いつもの場所で、

いつものように、

いつもの口調で。

いつものように栞が話しかけて来た。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが。」

2話 日常に忍ばせる非日常

私は、感情をいつもより念入りに押し殺し、詰め込み、いつものように無表情でそのどこか小さく見える背中に問いかける。

「一つ質問があるのだけれど」

と。すると、目の前の男　茉莉君　は、さもそれが当然のように返してくれる。

長い時間繰り返し返されてきた儀式のように。
そうする事が当然であるかのように。

昨日、一昨日と続いたあの様々な事件を全て忘れてしまったように否。本当に忘れてしまったのだろ。否否、これも正確ではない。忘れてしまったのではなく、思い出せないのだ。

なにしろあの男が、一晩かけてストーリーを【刷り込んで】いたようだから。

昨日茉莉君への記憶の【捏造】を終えた男から聞いた話では、今刷り込まれているストーリーは、

「【此处】に来て、そろそろ一年になる。共にすごした仲間、徐々に消えていった。それは【茉莉】の目の前で、あるいは気付かぬ所で、徐々に進行して行き、いつの間にか【此处】には私と【茉莉】しか居なくなってしまった。だから【茉莉】は、最後に残った私だけはせめて消えてしまわないように、変わらぬ日常を維持しようとしている。変わらぬ日常を過ごさえすれば、周りの環境が変わる事がないとひたむきに信じている」

とまあ、簡単に纏めればこんな感じだったか。

私は、今から自分がしなくてはならない事を考えると、気が進まな

かった。

一ヶ月たらずとはいえ、共同生活してきたのだ、情が移らない方がどうかしている。

あの男などは何も思わないのだろうか。

それに。彼は、茉莉君は、私と気が合うようだった。それも気の進まない一つの要因なのかもしれない。

しかし。

しかし、だ。私の【代償】の事を考えると、いつそ調度いいのかもしれない。

私から大切なものを奪う、この忌々しい【代償】。

「あのね、一回死んでみようと思うんだ」

いつもの受け答えから逸脱して、ふいに私は言った。もちろん指示された言葉だが、少しは本気も混じっていたかもしれない。

茉莉君の目から目線は外さなかった。外したくなかった。

3話 理解したくない言葉

その何でもないような言い方に思わず聞き逃してしまう所だが、僕の耳が正常ならば、今栞は「死んでみる」とか言わなかったか？いや言っていない。言っていない筈だ。そんな事は有ってはならない。だからこれは必ず聞き間違いなのだ。僕の耳も取り替える時期が来たのかもしれない。

チガウ。

聞き間違いだったとして。それでは僕は、僕たちが作り上げて来たこの日常はどうなる？

もう消えないように、せめて僕たちは【此处】に居続けられるように 理由なんて関係ないんだ 作りあげた予定調和はどうなるというんだ。

だから。

だから僕は、冗談だ。と思った。

そんなものは冗談だ、くだらない、と。

またいつもの悪ふざけだと思ったし、そうである事を心の底から望んだ。

けれど。

覗き込んでくる彼女の瞳は、これ以上ない程に澄んでいて迷いを全く感じさせない。

悲しむように。慈しむように。怒るように。

少なくともその目は、冗談を言っている瞳ではなかった。

それで僕は、これが冗談ではない事を、認めざるを得なくなったのだ。

そうか。

ついに。

彼女も。

彼女までも、狂ってしまったのだろうか。

「どうしたんだい？ぼーっとして。いつになく間抜けづらだよ。新手の顔芸なんだとしたら、大して面白くもないから、即刻やめてくれないかい？」

「ああ、ごめんごめん。君が急に変な事を言い出すから。それにしても、何気にさらっと酷いことを言うね、栞」

「酷くはないさ。本当の事だから。君がそんなだから私は」

最後は呟くように栞はそう言った。尻すぼみになってしまった最後の方はよく聞こえなかったが、どうせ僕を馬鹿にする言葉を吐いたのだろう。

「いや、それが酷いんだよ。ところで栞」

ん？と首を傾げる栞。長い髪がさらりと横に流れる。いつ見ても綺麗な髪だ……じゃなくって。

「んん？また顔芸かい？止めときなよ。君の顔芸のスキルの無さは哀しい程だよ。」

「いやいや違うよ！！顔芸のスキルとか欲しくもないし。というか、何で今日はそんなに攻撃的なのだ。」

「じゃあ何だい？君の顔がクルリクルリと変わるから、私もそういう風に誤解してしまうんだよ？」

「いや、だからね」

そうか。もう先程の彼女の発言には触れないで、このまま流してしまおう。とそう考えた矢先に、彼女によってあっさりと話題は戻された。

「あのね。何でも無いのなら私の相談に乗ってくれよ。私は至極真面目に君に相談しているんだよ?。」

やはり。

彼女は。

ゆるやかに、しっかりと。

狂い始めて。いるのだろうか。

「私、一度死んでみようと思っただけど。」

4話 信じさせるべき言葉

【茉莉】が【能力】を得る事になった【契機】は孤独らしい。らしいという言い方しか出来ないのが自分でも不甲斐ないが、あの男がそう言っていた。

あのいけ好かない男は、自分の【能力】の事についてはなんでもない事のように喋る癖に、【茉莉】の【能力】については一切教え、てくれない。

同じように【代償】も教えてくれなかった。

今回【契機】を私に教えたのも、必要だったから。ただそれだけの事なのだろう。

死んでも構わないと言っていたのに、よく分からなかった。

奴は、孤独によって得た【茉莉】の【能力】を、私たち【此处】に居るメンバーを使ってさらに強めるつもりらしい。一度信頼関係を築いた上で、完全な孤独を与えるらしい。その上で、【茉莉】の反応をみる。奴にしてみれば、それで【能力】が強化されれば願ったり叶ったりだし、【茉莉】が孤独に耐え切れずおかしくなってしまうたとしても、それはそれで面白いのだろう。信じられないほど悪趣味だと思った。その片棒を担ごうとしている私も、たいがい悪人なのだろうが。

仕組まれた事とはいえ、幾つかの危機を共に乗り越え、ある程度の友情を育んだ上で。もっとも、私のそれはきつと張りぼてなのだろうけど。

茉莉君は、私の言葉に酷く動揺したようだ。

必死に今の発言が嘘だった、自分の思い違いだった事にしようとしている。

それが見え過ぎて、私は何だか悲しくもなっ
たし、彼を少し哀れん
だ。情けないと、怒りもした
らう。

だけど、話を戻させる訳には
いかない。
私は、悪いと思いながらも
再び言った。

「私、一度死んでみよ
うと思っただけ
だ。」

5話 彼女が消えてしまわないように

落ち着け。落ち着くんた僕。とりあえず、落ち着け。

確かに冗談では無いのかもしれない。でも彼女は、栞はまだ狂ってはいない筈だ。

だって彼女の瞳はそれ程に澄んでいて、その彼女が狂っている筈がない。

だから僕は、確認するように彼女に問いかける

「……………いや、あのね、【一度】死んでみるっていうのは何？」

「何を言ってるのさ。そのままだよ。言葉どうり」

「それだと余計に困るんだよ」

「何がさ。君は言葉も理解できなくなってしまったのかい？」

「理解はしてる。でも、栞も分かっているだろうけど、一回死んだら生き返れないだろ？人の命は一つしか無いんだから」

何故僕はこんな話をしているのだろう。

「そんな事はやってみなければ分からないじゃないか」

ケロリとした顔で彼女は言う。

「やってみなくても分かるよ」

「そうかい？」

「そうだよ。君も何度も見ただろう。ゆるやかに狂って、消えていく人たちを！」

僕が叫ぶようにそう言うと、彼女は驚いたような、いぶかしげな顔をした。

何を驚く事があるのだろうか？僕の言っている事は、そんなにおかしいだろうか？

やがて栞は「ふむ、なるほど」と何かを納得したように頷くと、言葉を返す。

「……………その件なんだけどね、茉莉君」

少しの、間があった。

「彼らは、本当に死んでしまったのかな？」

それが当然の事だと。

それが当たり前前の疑問だと。

僕を誘導するように、

妖艶なその口唇で、

彼女は言葉を紡いでいく。

「【此処】から出て、【元の世界】に戻ったんじゃないかな？それだけの事なのさ、きっと。だから」

もうこの世界で存在を保っているのは、僕たち二人だけだ。

他の人々は、狂いながら、悶えながら、死んでしまった。

否、彼女の言うように、正確にはそれを確認した訳ではないのだ。ある日目が覚めると、当然のように彼、或いは彼女たちは、いなくなってしまうのである。

だから僕は、本当は、彼女の言わんとする事が分かっている。分かっているのだが、その決断は、取り返しのつかない結末を迎えそう
で。

だから僕は、変わらないこの毎日を感じたくて。

彼女を引きとめようとしている。

でも彼女は、そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、笑いながらこ
う言うのだ。

「私、一回死んでみようと思うんだけど」
と。

6話 私が消えてしまえるように

私の言葉は、きつと冗談には聞こえていないだろう。

本当に死んでしまうつもりは無いが、どちらにしろ【茉莉】とはこれでお別れだ。

もう会えなくなってしまうのは本当なのだから、迫真の演技とは言えないまでも、それなりの真剣さを感じさせている筈だった。

「でも、一回死んだら生き返れないだろ？人の命は一つしか無いんだから」

ふいに、会話の途中で茉莉くんがそう言った。

その通りだ。人が生き返るなんて馬鹿な事がある筈がない。私が信じてきた【常識】を、これまで何度も何度も打ち砕いてきた【能力】だが、未だに人を生き返らせる【能力】なんてものは聞いた事が無い。死というのは一方通行なものなのだから、そこをぼかす事は、さすがに出来ないのだろう。

……そうか。茉莉君は本当に。みんなは死んでしまったと思って
いるのか。

でも本当は生きている。【英知】や【颯娃】は、こちらの意図に

英知は自らの推理によって、颯娃はその【能力】によって

それぞれ薄々気付いていたようだから、もう別に殺してもいいという命令だったが、私はあえて生かした。そう、生かしたのだった。奴の命令に背いて。

奴の命令に背く事が、私にどれだけの不利益を生むのかは分からない。でも私は、それでも殺す事は出来なかった。私は、冷酷になりきれない、どっちつかずの駄目人間だった。

「そうだよ。君も何度も見ただろう。ゆるやかに狂って、消えていく人たちを――」

私の言葉に、茉莉君が激昂した。何を言っているのか一瞬分からなかったが、整合性を持たせるために死んだとされている人間は、「狂ってから」死んだ事になっているのか。

「……………その件なんだけどね、茉莉君――」

私は、どういう返事をしようか、少し迷った末、言った。

「彼らは、本当に死んでしまったのかな？【此处】から出て【元の世界】に戻ったんじゃないかな？それだけの事なのさ、きつと。だから――」

だから。

だから、何なのだろう。私は何と続けようとしたのだろう。
う。私は……………私は。

「私、一回死んでみようと思っただけど――」

7話 やけに大きく響いた言葉

「…………じゃあ、私は行くよ」

「ちよつ、ちよつと。待つて。待つてくれよ。い、行くつて。何処へ？何処へ行くつていうんだ？」

「…………そうだなあ。特に何処か場所をはつきりと決めてはいないけれど、それなりの場所へ」

「それなりの場所つて？違う。ちよつと待つてくれよ栞。そうじゃない。そうじゃないんだ。君のその言い方だと。それはまるで

」

「やれやれ。もう少し整理してから喋りなよ。それに、君の想像は間違つちやいないよ、きつと」

「…………間違つて、ないつて。栞。君は、本当に」

「ああそうさ。死に場所を探しに行く。芝居がかったセリフは嫌いなんだけどね、そういう事だよ」

「……………」

「死ぬ場所くらいは、ベストな場所を選びたいからね」

ナニカガ、オカシイ。

何だか頭が痛かった。今日は朝から頭痛が連続して起こる。でもそんな事は今はどうでもいい。何がおかしいのだろうか。否、それは分かっている。栞の様子がおかしいのだ。栞は確かに真剣そのものだが、それなのにどこかリアルじゃない。矛盾した考えだが、それが間違っているとは思わなかった。

「お、おかしいじゃないか」

「ん？」

「例え死んでも、【此処】から居なくなるだけだと、君はそう思っているんだろ？」

「……………そう言ったね」

「なら、場所なんて関係ないじゃないか」

「……………。……………どちらにせよ、君の目の前で死ぬというのは気が進まないからね」

オカシイ

栞の目は、真剣そのものだ。それなのに、それだから、やはり何かが決定的におかしかった。

「ふむ。……………そういう事だ。それじゃあね、茉莉君」

実にあっさりと、そう言っ僕に背を向ける栞。

「……………待ってくれっ！！！」

僕は必死で呼び止めていた。栞が簡単に死ぬような人間だとは、僕は未だに思えなかった。どれだけ真剣に訴えられようと、僕はそれでも栞の言葉を心のどこかでは冗談として処理していた。

でも。栞の「それじゃあね」の言葉だけがやけに大きく聞こえて。

本当に消えてしまうような気がして。僕は必死で栞の背中に声を掛けた。

8話 微妙に響く言葉

「……………何、かな？」

僕の呼びかけに振り返る事はせず、しかし足は止めて、栞は答えた。それは何かを期待しているような、何かを恐れているような、何かを迷っているような、そんな微妙な口調だった。

……………声の間と抑揚だけでそこまで分かるなんて、僕も大概だな。もしかしたら全て気のせいでも、間違っているのかもしれない。栞はただ振り返るのが面倒だっただけの事なのかもしれない。死のうとしている人間の気持ち何て分からないのだから。でも僕は、栞が本気で死のうとしているようには、どうしても見えなかったのだ。

「待って！！待ってくれっ！！」

「だからこうして「待って」いるだろう？」

それでも栞は振り返らない。

「こつちを向けよ！！そんな言い逃げみたいな事！！君らしくないだろ！？」

「……………」

やはり振り返らない。

「栞ッ！！」

「……………言い逃げとはまた変な言い回しだね。別に私は逃げも隠れもしないよ」

それでも振り返らない。

「でも死のうとしてるだろ！？それは逃げじゃないのかよッ！！」

「……………」

……………君は本当に不思議な男だね。つたない言葉だけれど、微妙に心に響くよ、君の言葉は。「微妙」にね」

やっと振り向いた。しかし少し俯いているせいで、その表情は前髪に隠れてしまつて、伺う事は出来なかった。

微妙に、という部分にやたらと力を入れて来たのが気になるが、どうあれ栞は振り向いてくれた。

僕が説得しなければならぬ。頭をきしむような痛みが襲い続けているけれど、僕はなんとしてもここで、栞を説得しなければならぬのだ。

9 話 例えばの話だけねど

「……………例えば、」

栞が、呟きと共に歩き出した。僕は少し慌てたが、栞が向かう方向が出入り口とは明らかに違ったので、言葉の続きを待った。

歩みを止める事無く、トツ、トツ、と軽い足音を立てながら栞は歩いて、やがてこちらを向いて止まった。その背後には大きな穴が開いている。

何だろっあの穴は。ここは屋上だぞ？あんな位置に穴が有ったら危ないじゃないか。それよりも僕は何をしていた？栞が止まったからよかったようなものの、あのまま飛び降りていた可能性もあるんだぞ？否、そんな事よりも、何故僕はそこに穴がある事に気付かなかった？忘れていた？馬鹿な。そんな筈はない。じゃあ何故？何だこれは？何であんな場所にあんなにも大きな穴があるんだ？ああ、ああ、頭が痛い。

「そう、例えばね、茉莉君。私はここから落ちたら死ぬのかな？」

言いながら栞が指差す先は、もちろんそこに有る大きな穴だった。

「それは。それは、死ぬだろう」

「何故？君はこの穴の底がどうなっているのか、知っているのかい？」

そんな問いかけとともに、栞は僕の目を覗き込んでくる。

その問いかけは、どういう意味なのだろう。あの穴の底がどうなっているかなんて、もちろん僕は知っている。あの穴の底は……………。

……………おかしいな。思い出せない。

栞の言うように、もしかしてあの底は意外と浅いのだろうか。そうだっただろうか。よく思い出せないが、違った気がする。……………気

がする、のだ、が。確信が、持てない。僕はそんな当たり前の事に確信が持てないのだった。

「例えばね、」

僕の混乱に追い討ちをかけるように、栞は言葉を続ける。

「君はこの穴がどうして出来たか分かるかい？」

「分か……らない」

「君は、私を死なせたくない、つまりは、救いたいんだろう？」

「そうだ。そうだよ。僕は君を死なせたくない。……救いたい」

「ならもう一度聞くよ。君は何故この穴が出来たのか知っているのかな？」

それが栞を救う事と、どう関係するのだろうか。それでも僕は必死になつて思い出そうとするが、やはり穴が出来た理由は分からない。頭の痛みが酷くなるだけだった。そんな僕を、先ほどのように複雑な感情を込めた瞳で見つめながら、栞は言葉を続けた。

「それが分からないようじゃ、奴の【能力】ちからに抗えないようじゃ、私を救う事なんか出来ないよ」

10話 殺風景な図書館

「……なんというか、まあ、酷いなあ。コレは。……うん、コレは酷い。もう酷すぎる」

「酷い酷いって、同じ言葉を繰り返してますよ、英知さん。……そういう僕も、咄嗟には酷いという言葉しか思いつきませんでした」が改めて部屋の中をざっと見回す。本が散乱していた。……ん。あの本は読んだ事があるな。……あれは、今度読もうと思ってたのになあ。ああ、ああ、あんなぐちゃぐちゃになっちゃって。

本棚に使われていた木や、天井に使われていただろうコンクリートや、その殺風景な部屋に彩りを与えるカラフルな本の残骸や、……あと、骨と、それらがごっちゃごちゃになっていて、以前は図書館だった部屋は、本当に酷い状態だった。

自分で天井を崩す作戦を立てておいて何だが、これはさすがにやりすぎたかもしれない。……いや、かもしれないじゃなくて、やりすぎたな。

「気にしないでいいですよ？」

「んあ？ああ、まあそう言ってもらえるのはありがたいが」

「僕も別に気にしてませんし。あれは僕の方に落ち度がありましたから」

「……………っ」

「ん？今何か言ったかフォリス？」

フォリスは、今日俺たちにあってから、塞ぎこんでしまっていた。だから状況がどうなっているのか、よく分かってないのだが。……喋れるようになったのか？

しかしフォリスは、黙って首を横に振った。

「少し黙って。上を見て下さい」

「おいあれ！！むぐ」

「だから黙ってください。変に声をかけてもし落ちたらどうするんですか。少なくとも僕とフォリスは受け止めたり出来ませんよ」

「……………俺も無理だろうな」

榊がこちらに背を向けて、見える位置に立っていた。ここから見えるという事は、屋上のかなり穴よりの場所に立っているという事だ。変に刺激したら落ちてしまうかもしれない。誰かと喋っているようで、こちらに気付く様子は無かった。表情は伺えないが、榊は自殺するようなタマじゃないだろう。

「ここに居ても何も出来ないだろうし、屋上に行くか？」

「そうですね、それがいいと思います。……………一つ、気になる事もありますし」

「気になる事？」

「ええ。まあそれは移動しながら話します。とりあえず屋上を目指しましょう」

11話 本当におかしいのは

「奴のちから？」

僕が聞き返すと、栞は困った様な顔をして、言いつくろった。

「……………ああ、別に大した事じゃないよ。……………だから、気にしないでくれ」

気にするなと、言われても。

気になってしまつに、決まっているだろう？

「奴って誰なんだよ、栞？」

「奴は……………奴だよ。それ以上でも以下でもない……………今は。今となつては。……………なんでだろう、今日の私は少しおかしいみたいだね」
自嘲気味に栞は言った。

それはおかしいだろう。おかしくなければ、自殺なんて考えないだろう。

否、違う。本当は分かっている。おかしいのは、本当は僕なのかもしれない。

栞は散々迷った末に、言った。

「……………もう一つ聞くけれど、聞いておくけれど、君は【此处】で消えた人間の名前を、覚えているかい？」

何を聞くのだ。そんな事。そんな当たり前の事。覚えていない訳が。

「……………」

僕が答えないでいると、栞は溜め息を一つついて言った。

「……………そういう事だよ」

何がそういう事なんだろう。そういう事とは、どういう事なんだろう。何故僕は、【此处】で共に暮らした仲間の名前を、覚えていないのだろう。

「……………英知という名前は？覚えていないかい？君と一番」

栞からその名前を聞いた瞬間、頭の軸がぶれたように感じた。

そして栞のその言葉は、僕の背後から聞こえた声によって遮られた。

「おいおい！！どうしたどうした、栞！？君らしくもない！！黙って見ていようかと思っただが、少し喋りすぎじゃないか！？何か考えがあつての事ならいいが、そうでないなら君の処遇を考え直さなければいけないねえ」

12話 気になった事

「それで、気になる事っていうのは？」

フォリスの歩幅が小さいので、普段に比べて少しスローなペースで走りながら、俺は頼娃に聞いた。一刻も早く屋上に行きたい所だったが、塞ぎこんでしまっている今の不安定なフォリスを、独りにしておく訳にもいかない。それに、いつしか俺はその小さな体に、鞘香を重ねて見ていた。彼女には嫌われてしまったようだけど、そちらの方も放っておく訳にはいかない。

「ええ、さつき屋上に3つ気配があつたんですよ」

3つ？それはおかしい事なのか？別に屋上に3人いたからといって特別おかしい事だとは思わなかった。

「それが何かおかしいか？」

「いえ、それ自体はおかしくも何ともないんですが」

微妙に言いよどむ頼娃。屋上にいるうちの2人は、栞と茉莉だ、と何の疑問も無く俺はそう思った。もう1人いるとしたら、それは誰だろう。自分でも気付かぬうちに、自分の希望を込めて俺は呟いていた。

「…鞘香……か？」

「鞘香さん？いえ、鞘香さんではありません。今上にいるのは茉莉さんと栞さん。それと」

鞘香じゃないのか。顔には出さなかったものの、俺は少し落胆していた。

「いえ、やっぱり僕の勘違いでしょう。今の事は忘れて下さい」

「おいおい。それはちょっとねえんじゃねえか？言うなら最後まで言ってくれよ。もう1人が何だって？」

「…最後の1人なんですが、誰だか分からないんです」

「……………？まあ、心が【見える】ったって万能な訳じゃないんだろ？ならそれくらい」
「有り得るんじゃないか、と続けようとした。したのだが、穎娃の顔が予想外に真剣だったので、俺は口を閉じた。」

「英知さん。貴方を信頼しているからこそ、これは言うんですけど。僕の【能力】は、今有り得ない程に強力になっています。それこそ、姿を見ていない人間の気配が探れるくらいに」

確かにそうだった。何となく聞き流していたが、「3人居た」という発言はそもそもおかしいのだ。図書館から見えたのは栞だけだったのだから。その栞が誰かと話していたようだったから、「2人以上居た」のは確かだろうが、「3人居た」という根拠は何もない。

【能力】が強まったのは、【アル・アジフ】のせいだろうな、と予想はついていたものの、それでも俺は聞かすにはいられなかった。

「何でそんなに【能力】が強まったんだ？」

「……………貴方の考えている通りです。本を手放せば、【能力】も弱まると思ったのですが、どうやらそうじゃなかったみたいです」

そんなに便利な本なら、俺も触っておけばよかったな、と思い、すぐにその考えを打ち消した。今の一連の考えも【見られて】いるのだろうな、と少しだけ苦く思いながら、話を逸らすように言った。

「まあ、実際に行けば分かるさ」

「そうですね。……………それに、貴方の【能力】は、あんなものなくても十分すぎるほどに強力じゃないですか」

何もかもお見通しか。普通の人ならそれを恐れたりするのだろうか、俺は別に悪い気はしなかった。

13話 ある一つのノイズ

「どうしたどうした？もしも何か考えの事があつての事なら、早めにそう言つてくれ？そうやって黙っているのなんて、そこいらの人情だつて出来る。それともやつぱり、怖くなつたのか？まさかそんな筈はないよねえ？」

「……………止めませんか？」

「はああ！！？今「やめる」とか聞こえた気がしたけど、僕の聞き間違いだよねえ？」

「……………」

「なあ栞ちゃん？君、まさかとは思うけど、【茉莉】に同情したとか言わないよねえ？そんな訳ないかあ！！何たつて栞ちゃんは、【良心】なんてもの持つてないんだもんねえ？」

栞に良心が無い？

いるはずの無い男が急に現れた事に、混乱を来たしていた僕の思考が、その一言で戻ってきた。

「待てよお前！！栞に良心が無い！？急に現れて何言つてるんだ！？そんな馬鹿な事があるか！！」

怒鳴っていた。そんなつもりは無かつたのに。何故か僕は男に対して声を荒げていた。どうしてだろう。この男は、この男だけは許せない。初対面の筈なのに、僕はこの白衣の男を心底嫌悪していた。

「……………やれやれ、実験体は実験体らしく、おとなしくしていたまえ」

「何だとつ！！」

「ああ五月蠅い五月蠅い。どうせ君はもう直ぐ死ぬか、狂うんだ。」

最後まで静かにしている」

「黙れっ!!」

「……お前ももしかして、微かに覚えているのか？」

「何の事だよ!!」

「……………その怒りは、何に対しての怒りだ？黙っているとわかれた事か？実験材料と言われた事か？それとも」

「栞に酷い事を言っただからだ!!」

本当はそれだけでは無かった。自分でもよく分らないほどに、この男が憎い。

男は、僕の言葉を聞くと、何を言っているのか分からないというように、呆けた顔をした。

「ははは。そうかそうか。それはまた下らない理由だな。的外れでもある。別に嘘など言っていない。この女は、心など持っていないいや、正確には【良心】など持っていない」

この男は何を言っているのだろうか。栞に良心が無い筈がない。それなのに、何故栞は男の言葉に反論しないのだろうか。

様々な考えが頭を巡った。その中の一つが、ノイズのように僕の頭を掠める。

部屋に帰った後、無意識のうちに触れるような所に置いて下さい。無意識の内に、というのが重要です。

だから僕は、無意識では無かったが、その誰とも分からない言葉に導かれるように、ポケットを探った。

14話 ばれていた嘘

何故この男が、ここにいるのだろう。

亜空や千鶴子を、別の施設に移しに行ったのでは無かったのか？

必死に冷静さを保とうとする私。【良心】が無いと思われる私。確かに状況は悪いが、その部分がばれていなければ、まだ何とかなる。

茉莉君が、男と会話を交わしていた。聞こえてはいるのだが、内容が頭に入ってきて来ない。

それほどに私は焦っていた。

やがて、茉莉君が頭を抱えて座り込んだ。どうしたのだろう。心配ではあるのだが、今の状況を思うと駆け寄る事もはばかれた。

「さて、朶」

【茉莉】を本当に物でも見るように見下ろしていた男は、やがて私の方に振り向き、話しかけて来た。今までの寒気のような猫撫で声ではなく、真剣そのものの声で。そしてその目は【茉莉】に向けられたのと大差ないものだった。

やめて。

そんな目で私をみないで。

「君ももう用済みだな。僕の実験を手伝いたいと、あれほど熱心に言うから、使ってやっていたのに。君には失望したよ」

「……そんな。待って下さい。これからちゃんと」

「次なんてないよ。それにね、上手く隠していたようだけど、僕の目は誤魔化せない」

「……………」

まさか。まさか。

「君は【良心】を失ってなどいない」

ばれていたのか。

私の【代償】。

【良心】。

それは、嘘ではないけれど、本当でもない言葉。

私の体が細かく震えだした。はっとして抑えようとするが、自分の意思ではどうにもならなかった。

止めをさすように、男は言葉を続ける。

「いい気なもんだな、人からは奪っておいて、自分は何も失わないなんて。【良心】なんてそんなくだらないものが【代償】になるという時点で、君は人間として腐っているんだ」

15話 思い出した事

思い出した。

もちろん全てを思い出せた訳ではない。が、【此处】に来てからの事を、どうあれ僕は思い出した。思い出す事が出来た。

穎娃君から渡された紙を見ても、最初は何の事が分からなかった。白地の紙に、

栞

茉莉

鞘香

フォリス

千寿

穎娃

亜空

千鶴子

英知

木霊？

と、ただ文字が羅列してあっただけからだ。

意味が分からなかったが、何故自分がこんな紙を持っているのか？という事を考えた途端、頭が割れるような痛みが走った。これまで慢性的に感じていた痛みとは違い、本当に頭が壊れるかと思う程の痛みだった。

やがて痛みが治まると、いままで曇っていた思考が、一気に晴れた。

そして一番の収穫は、自分の【能力】と【代償】を思い出した事だ。

僕の【能力】は、【他人の能力を強化する】事。

そして僕の【代償】は、【自分の意思に関わらず、能力者を引き寄せる】事だ。

だから僕が【此处】に居るのは、ある意味必然なのかもしれない。

栞がたとえ実験の為に近付いて来たのだとしても、僕は彼女を憎むつもりは無かった。

栞に言わせると、僕のその感情は、どこか間違っているのだろう。

どうしても僕には、栞とあの白衣の男が、協力しているようには、思えなかったのだ。

16話 私と私

「あ…………あの…………いつから……………」

気付いていたんですか？と聞こうとしたが、惨めな事に私の震える声は、最後まで言葉を続ける事が出来なかった。

しかし白衣の男は、にんまりと笑うと、私の聞こうとした事に答えた。

「最初から、とか言いたい所だが、正直途中までは気付かなかったよ。栞ちゃんはなかなかの演技派だねえ。残酷な事を躊躇無くこなすから、本当に【良心】が無いのかと思っていた」

騙せていたのだ。今回までは。

殺せと言われれば、見つからないように逃がした。

危ない注射を頼まれた時は、可能な限り薄めた。

それでも男が横で見ている時には、どうしようも無い事もあった。

そんな事を繰り返している内に、いつの間にか私は、もう1人の自分を作っていた。

本当の私と、作られた私を区別する為に、喋り方も変えた。

他人に感情移入しすぎないように、【実験体】とは、仲良くなならないように気をつけた。名前を呼ぶ時も、男女に関わらず「君」と呼ぶように統一した。

他人を傷つけているのは、だからもう1人の私で、私ではないのだと思うようにした。

それはつまらない騙りだったが、徹底する事で、自分くらいはせめ

て騙す事が出来るレベルになった。

そしていつの間にか、私は偽者の私と入れ替わった。
もはや、どちらが本当の私なのか、分からなくなっていた。

事情を知っている人から見れば、私は実に滑稽だっただろう。
残酷な事をしているのに、残酷な人間に徹しきれない。
かといって、嫌だと跳ね除ける事もできない。

そんな中途半端な人間なのだ。男の言うように、私はすでに人間として腐ってしまっているのかもしれない。
自分のやりたく無い行為を

「それが今回はどうした？【茉莉】に対して偉く肩入れするじゃないか。それまでも何度かおかしいとは感じてはいたが、今回の事で確信に変わった」

暗く光る目で私をじっとりと見据えながら、男は続けた。口元には嫌らしい笑みがこびりついている。

そうか。もしかすると、本当にこの男は最初から気付いていたのかもしれない。

それで、右往左往して慌てる私を見て、一人悦に入っていたのかも知れない。

そんな事を、男の目を見ていると考えてしまう。

「くふ。そんな泣きそうな目をするな。チャンスをあげよう。君自信の手で【茉莉】を殺せ。それが出来れば、【良心】が無いと認めてやらないでもない。無い事にしてあげよう」

何を言うのか。そんな事、私は。

「素手ではさすがに無理か？ならコレを貸してあげるよ」
そう言つて男は、鈍い光を放つ黒い物体を押し付けた。

銃だつた。

17話 ふらつく銃口

これは何の冗談だろう。

全くタチの悪いジョークだ。

最高級に笑えない。

そんな事を考えていても、目の前の状況が変わる訳もないのに、僕の頭はくだらない事をぐるぐると考え続けていた。

どうしても、僕は目の前の光景が理解できなかった。

否、理解はしている。

ただ、信じたく無かったのだ。

栞が僕に対して銃を構えていた。

栞は体中で震えていて、銃口は一向に定まる気配がなく、狙いも何もあったものじゃないが、重要なのは「栞が僕を撃とうとしている」事だ。

「うつ！！動かないで！！」

栞が震える声で言った。

これほどまでに感情をむき出しにしている栞は、始めて見るかもしれない。

「……………どういう事だよ栞」

途方に暮れた僕は、深く考えず、そう口にする。

「動かないで、って！！言っている、でしょう！？」

栞の構える銃は、未だに上下左右に震え続けている。

栞は何だか口調までおかしかった。

「……………おい！！栞に何をしたんだ！！」

栞は明らかに、僕を撃つ事に躊躇いを覚えているようだった。

だから僕は、下手に動かなければ今直ぐに撃たれる事は無いだろうと見切りをつけた。

そして、いつの間にか栞の背後に回っていた男の、目を見ながら怒鳴った。

「…何もしていない。僕はただ、提案しただけだ。君を撃つのはどうかなあ、って」

「それで何で栞がこんな風になるんだ！！本当の事を言えよ！！」

「こんな風、ねえ。実験体に過ぎない君に栞の何が分かるのか。…」

…それよりもその目。もしかして君、思い出したのか？」

男の言葉にどう答えるべきか迷った。

僕の記憶が戻ったという手札は、まだ伏せておくべきなのか？

「その反応を見ると、本当に戻ったみたいだな。……………僕とお前の【能力】の強さを考えれば、有りえない筈なんだが。どうやったんだ？」

今までへらへらとした笑みを貼り付けていた男が、急にドスを利かせた声で睨んでくる。

駄目だ。ここでびびったら負けだ。ふんばれ僕。

「お前に答える義理はない」

「……………ま、いいさ。お前はもう死ぬんだからな。もういい、撃て！！栞！！」

栞はビクリと体を大きく震わせ、下がり掛けていた銃身を僕に向かって上げ直す。

僕の見間違いかもしれないが、その目には涙が溜まっていた。

【此処】に来てから、僕が死に掛けるのはいつたい何度目だろうか。栞に殺されるのなら、それもまあいい。訳がない。

こんな何も分からないまま死んでたまるか。

銃を構える栞を睨みつけると、栞はどこか怯えるように、銃口をふらつかせた。

そうだ。僕は栞を助けなければならない。

「何をしている！！早く撃て！！」

「待―て待て待て待て待て！！何だこの状況は！！！」

怒鳴るような白衣の男の声に重なるように、別の男の声が響いた。

そんなに時間が経っていない筈なのに、なんだか無性に懐かしい。見なくても分かる。声の主は、英知だった。

18話 予定外のモルモットたち

「ああああああああああ！！！！次から次へと！！何なんだお前たちは！！モルモットはモルモットらしくしてろ！！榊！！という事だ！！何故こいつらが生きている！！」

英知たちの登場に、狂ったように叫び出す白衣の男。

自分の思い通りに物事が進まないのが、我慢ならないタイプのようなのだ。

榊を睨みつける目には、鬼気せまるものがある。

一方睨みつけられた榊は、へなへなと崩れ落ちてしまった。

何やらぶつぶつと呟いている。

やはりいつもの榊じゃない。いったいあの男に何を吹き込まれたのだろうか。

……………どうあれ、変な分析でもしていないと、僕自身混乱を抑える事が出来そうにない。

とにかく、英知も頼娃君も無事でよかった。本当によかった。

「おい！！何とか言えよ榊ちゃんよお！！」

さらに怒鳴る男。

「ごめんなさいすみません許してくださいもうしません……」

榊は、自分を庇うように両手を上げ、ひたすらに謝罪の言葉を重ねている。

何をそんなに怯えているのか。あの男に弱みでも握られているのか？そうかもしれない。そう考えれば、奴を手伝うような素振りなど納得が行く部分もある。

「大丈夫ですか？茉莉さん。ぎりぎりまで出るタイミングを伺おう
と思っていたのですが、英知さんが飛び出しちゃって」

「俺が悪いみたいと言っなよ。あれがぎりぎりじゃなくて、他にど
のタイミングがあるんだよ」

「栞さんは撃てなかったと思いますよ。あの男にどれだけ責められ
ようかね」

「それでも弾みつてものがあるだろう」

「まあそれは否定しませんが。それより茉莉さん。どうやら無事に
思い出せたみたいですね。あんな紙一枚では不安だったんですが」
頼娃君の質問に、僕は気になっていた事を聞いてみる事にした。

「そうなんだ。以前はあれほど解くのに苦労した奴の【能力】を、
何故今回はあんなにあつさりと解けたんだろう」

聞いてから、僕は何を聞いているのだろうと思った。頼娃君だって、
何でも知っている訳では無いのだ。彼のその【能力】から、つい勘
違いしてしまうのだが。

しかし頼娃君は、落ち着いて答えた。

「恐らく茉莉さんも、あの本に触れたんじゃないですか？」

「え？そうだけど。何で？」

「そうなのか！？何だよー俺だけ仲間外れかよー」

「いや、触らない方がいいよ。仲間外れとかそんなの関係なしに」

「じゃあ茉莉も頼娃みたいになつたのか？」

答えにくい事をさらりと聞いてくる英知。僕はあの本に取り込まれ
て、栞を殴つたのだ。他にもいろいろと。僕らが話しているのを、
黙って聞いているフォリスにも、怖い思いをさせてしまった。答え
あぐねていると、頼娃君が割って入った。

「今は悠長に話している時間が惜しいです。あの男の興味が、いつ
こちらに移るか分かりません」

頼娃君に言われて二人を見ると、白衣の男が一方的に栞をなじって

いた。

いてもたってもいられず、止めに行こうとした僕の体を、英知の手が押さえつけた。

「本に触れたのなら、あなたの【能力】は強化されている筈です。とんでもなく強力に」

「でも僕の【能力】は」

「強化できるのなら、弱体化も出来ますよ。マイナス方向に強化すると考えればいいんです」

「…なるほど」

「おい何の話だよ。【能力】思い出したんなら、俺にも教えてくれよ茉莉」

「そうだね。いつかのお返しに」

「ああもう全部めんどくせえな！！アイツらを殺したら、お前もじつくりと殺してやるよ！！そこで好きなだけ震えてろ！！」

白衣の男はひときわ大きな声で怒鳴り、懷に手を入れると、鈍く光るものを取り出した。

僕はそっち方面に明るくないが、あの銃が朶のもつそれより数倍強力であるう事は、その無骨さから容易に想像できた。

と、僕たちを庇うように、英知が一步前に出た。

「おいちよつと英知」

「まあまあ、俺に任せておけ、アイツは俺もマジでム力ついてるんだ。【此处】の事しかり、朶やお前の事しかり」

何か考えがあるのか、そう言つて英知は不敵に笑つた。

19話 能ある鷹は爪を隠す

「ほう、お前から死にたいのか？」

チャキツと、何の躊躇いもなく、銃を構える男。きっと人を殺すことを何とも思っていないのだろう。信じ固い事だが。

「いや、別に死ぬ気はねえよ。これっぽっちもな」

飄々と言つてのける英知。本当に何か考えがあるのか？僕は心配で気が気じゃ無かった。

「ははは、何を言っている。状況が分かっているのか？お前たちはもう皆殺し決定なんだ。それともこれが見えないのか？」

言いながら、手に持つ大口径の銃を振る。

「そんなもの持ってた所で、何も変わらないさ」

「はあ？そうだな。変わらないな。どちらにしろお前たちは全員死ぬよ。さ、まずはお前だ」

狙いをつける男。引き金を持つ指に力が入る。

「動くな」

英知がそう言つた瞬間、僕は心底震え上がった。

怒鳴った訳でも、叫んだ訳でもないのに、その声はよく響いた。

英知を見ているのも何だか怖くなった。

次元が違う。世界が違う。桁が違う。規格が違う。同じ場所に存在するのが恐れ多い。

白衣の男も、銃を構えたまま固まっていた。

「馬鹿なっ…。お前の【能力】は、【此处】に居る者の中でも、一

番弱かった筈。こんな、事は」

「ひやはははは。何言ってるんのお前。隠してたに決まってるじゃん。よく言うだろ？能ある鷹は何とやら、だよ」

「馬鹿な。ふざけるな。機械ならともかく、それ専用の【能力者】を欺ける訳が」

「欺けたんだよ。ひひひ。その【能力】を測る【能力者】が大した事無かったのかもなあ！？」

「……っ！！それほどに強力な【能力】を持っているなら、何故今までじつとしていた？」

「ひやはっ！！そんな事答える義理はねえが、特別に答えてやるよ。冥途の土産にな。色々制約があんだよ。その中でも一番大きいのが、【相手に対して一定量以上の憎しみを持つ】だけだな。他にも色々あるんだが。おめでとさん。あんたはその全てを満たした。俺が花々しく殺してやるよ！！」

怖い。英知が怖い。でも、このまま黙っていたら、英知は男を宣言通り殺してしまうだろう。

英知が人を殺す所なんて見たくなかった。【此处】に来るまでもう殺しているのかもしれないが。それでも。

「……英知。何も、殺す、事は」

「悪いな茉莉。止めらんねえんだわ。【能力】使ってる時の俺は最高に昂ぶってるからな！！」

「それでも」

「五月蠅え！！邪魔すんな！！」

怒鳴られ、僕はもう何も言えなくなっていました。とにかく今は英知の事が怖かった。

「さあさあまずは銃を構える位置を変えようか。自分のこめかみに

当てるよ」

英知がそう言うと、男は信じられないという顔をしながらも、自分のこめかみに銃口を当てた。

「ひやはは。反省したか？自分のやった事を少しは悔やむ気持ちになったか？今更もう全部遅えけどな」

「ふふふ。面白い。やはり【能力者】というのは面白い。実に研究のしがいがあるよ」

白衣の男は本当に面白そうにそう言った。自分に銃を向けているのに、少しも怯えていなかった。

「そうか。でも残念だったな。もうお前は死ぬのさ！！」

「それはそれで別にいい。もともといつ死んでもいいと思っていたからな、【良心】を失ったあの日から」

「はあ？【良心】？無くしたのかお前。傑作だな」

「まあな。面白いと言えば面白い。皮肉も利いている」

「ははは。もういい、死ねよ」

「やめてっ！！」

突然栞が、英知に掴みかかった。

「お願い！！やめて！！殺さないで！！お願いします！！あの人を殺さないで！！」

予想外の反撃に、英知はあきらかに困惑している。

もちろん僕だって意味が分からなかった。

「おいおい、何であいつを庇うんだ栞？」

困ったように言う英知。

「そうだよ、君はあいつに色々酷い事をされたんだろ？殺すとまで言われていたじゃないか」

僕も続く。

「ごめんなさい。それでも駄目なの。どうしても駄目なの。憎もうと、憎もうと、どれほど努力してもやっぱり駄目なの。自分の意思をどれだけ曲げようとしても駄目だったの。お願いします。殺さないで下さい」

「……………意味が分からない。質問に答えろよ朶！！返答如何によつては、お前も敵とみなすぞ！！」

「……………あの人は私のお父さんなの」

朶の言葉が、僕の聞き間違いである事を、訳もなく祈った。

20話 曲げない意志

「そんな馬鹿な。アイツはお前を殺そうとしてたんだぞ朶！？」

「そうだよ朶。脅されてるのかもしれないけど、もう奴を庇う必要なんてないんだ。そんな嘘までついて」

英知の言葉に、僕も自分の希望を微妙にのせつつ言う。

「嘘なんかじゃない。あいつは……あの人は本当に、私のお父さんなの」

「……………本当だったとして、親があそこまで殺意を剥き出しになれるのか？子供に対して。……………ま、なれるかもしれないか」

自分で疑問に答えを出す英知。なれるかもしれないと言っている時、遠くを見ているように見えた。昔両親と何かあったのだろうか。

「…もしかして、アイツに記憶を刷り込まれてるんじゃないのか？朶？」

一つ思いついた事を言ってみた。【此処】という大きな記憶を、複数人に同時に作れるくらいだから、それもまた可能かもしれないと思った。

「そんな訳ない！！本当なの！！だってお父さんが【良心】を無くしたのは、私のせいだもの！！」

「さつきから要領を得ないな。お前のせいだってんなら、その理由を言ってくれ」

「……………私の【代償】だから」

「ん？【能力】じゃなくてか？」

「そうよ」

「あーなんかあれだな。今更だけどお前のその喋り方は……………何とていうか……………その……………気持ち悪いな」

「話を逸らさないでよ。お父さんを殺すのを止めてくれるの！？ど

うなの!？」

「それとこれとは別だな。それによく考えてみるよ栞。今アイツを殺しておかないと、結局お前も殺される事になるんだぜ？栞？」

「それでもよ!!」

「…………話にならないな。とりあえずお前がどれほど反対しようと、俺はアイツを殺す。そうしないと昂ぶりも収まらないしな」

「この外道!!」

「…………なんだと？言っに事かいて……………いいか栞俺はお前の味方なんだぞ？今の所は、だけどな」

不穏な空気になりつつある。僕はとにかく間に割って入る事にした。
「ちよつと待ってくれ!!その【代償】うんぬんの所も含めて記憶を作られている可能性はないのか？」

「残念ですが、その可能性はありませんね」

否定の声は、後ろで黙って聞いていた少年が発した。

「栞さんの心が【視え】ない理由がようやく分かりました。自分を守るために、もう一人の自分を作っていたんですね。いわば簡易的な二重人格です」

「なんだよ頼娃。じゃあこの変な喋り方の栞は、作られた方だっって言うのか？」

気が相当立っているのか、英知の頼娃君を見る目が、少し睨むようになっている。

「いえ、今表に出ているのが、本来の栞さんでしょう。いつもの毅然とした方が、作られた人格です」

「そうか。で？それがどうかしたか？」

「ええ、ですから、あの男が栞さんの父親である事は間違いないでしょう」

「……………なあ英知。僕からも頼むよ。殺すのは止めてくれないか？」

「自分が何を言ってるか分かってるか、茉莉。お前だってアイツを憎んでいたみたいじゃないか!？」

「そうだけど。それでも、だよ」

「はっ!! お前は本当の本当に呆れたお人よしだな!! 茉莉!!」

次元の違う存在となった英知が睨みつけてくる。

僕の足が、少しでも気をぬけば震えようと構えている。

英知の目をみつめているのが怖い。本当に怖い。

でも、一度目を逸らしてしまったら、もう二度と見る事が出来ない事は分かっていたから、僕はありったけの勇気を振り絞って英知の目を訴えるように見つめ続けた。

「……………チツ、わーかったわかった。俺はお前のそういう所が気に入ってるんだったよ。だけど【能力】を解く前に、あいつから銃だけは取り上げておけ。そうだな、ついでに縛っちまうか」
やがて英知はそう言った。言ってくれた。

21話 君を救うと決めたから

「さてと、後は【此处】から脱出するだけだな」

どうやって縛ればより効率的なのかという事を誰も知らなかったの
で、縄でとにかくぐるぐる巻きにした上で床に寝かされている男を
見下ろしながら英知が言った。

「脱出って……具体的な案があるのか、英知？」

「ああ、穎娃とも話してたんだが、俺は食堂が怪しいと睨んでる。
いくら何でもありの【能力】とはいえ、何も無い場所から食物を作
るのは厳しいだろ。メニューもやたらと充実していたしな。だから
俺は、あの場所が外に繋がっているんだと思ってる」

英知のその推測を聞いて、白衣の男が笑いだした。

「ふふふふふふ。そこまで分かっているのなら、出て行けばい
い。必ず後悔する事になる。【此处】から出た所で、お前たちが【
能力者】である限り、平穏な生活など送れないぞ？せいぜい【特殊
警察】の存在に怯え続けて生活しろ」

聞き覚えのない言葉が聞こえた。でも僕は、今の二人に割って入れ
るほどの無神経さはいにく持ち合わせていなかった。その響きか
ら、【能力者】専用の警察だと推測をつける。自分が捕まった時の
事を思い出せないのが齒がゆかった。僕もその【特殊警察】なるも
のに捕まったのだろうか。

「そんなのやってみなけりや分かんねえだろうが！！口の減らない
ヤロウだな！！」

「くくく。まあそう邪険にするなよ。優秀な実験体に対するご褒美
として、いくつか情報をあげようじゃないか」

「……………ああ？……………とりあえず言うだけ言ってみろよ」

「……………食堂を出て最初のカドは必ず右へ曲がれ。それともう一つ、
他の実験体を探しても無駄だ。もう【此处】にはいない。別の施設
に移した後だ」

「言いたい事はそれだけか？」

「まあそうだな。行きたまえ」

「最後の最後まで気に食わない奴だ！！行こうぜ茉莉！！」

「でも栞が……。僕は栞を救うって決めたんだよ」

「救う……。なあ。どうなれば救った事になるんだろうな。まあお前の好きにしるよ。俺たちは他のみんなが居ないか探してみるよ。こいつの言葉なんて信用ならないからな。食堂で、待ってるよ」

「分かった」

「茉莉。変な考えは起こすなよ」

「……分かつてる」

「じゃあ、行こうぜ、颯娃、フォリス」

フォリスは僕を睨むようにして、颯娃君は一つ僕に対して頷くと、それぞれ英知に続いて屋上を出て行った。

僕は、改めて栞の背後に立った。

縛られた男の前に座り込んでいる、栞の背後に。

「……栞」

「……」

栞は何も答えない。

「……行こう、栞」

「……」

「僕は、君を、救いたいんだ」

「……」

「さっき英知が言ってたようにどうなれば君を救えるのかは分からないけれど」

「……」

栞は僕の言葉をちゃんと聞いているのだろうか。それは分からなかったが、僕は言葉を続けた。白衣の男は、興味深そうに僕を眺めている。それこそ実験動物でも見るような目で。でも今はそんなものは気にならなかった。

「君はもう知っているかもしれないけれど、僕の【能力】は、【他人の能力を強化する】事なんだ」

「今日まで気付かなかったんだけど、それは【弱める】事も出来るらしい」

「だから。これはまだ可能性の話だけど。【代償】を弱める事も可能なんじゃないかと思うんだよ」

「僕と一緒にいこう、琴。今はまだ無理だけれど。いつかその男君の、お父さんが失った【良心】を取り戻すことも出来る

「だから。お願いだから栞。僕と一緒に【此処】から出よう」

.....

「………少しだけ、待ってくれる？」

「言いたい事は全て言った。それでも栞は長いこと沈黙を保っていた。やがて栞はそう言った。」

僕は短くそう答えた。いつまでも待つつもりだった。

「……………私は、行くよ。……………お父さん」

菜のその言葉に、それでも男は特別な感情を抱かない目のまま言った。

「好きにするといい」

取りようによつては、言葉少なに送り出す親の言葉のように聞こえない事もないが、男の表情には慈愛の欠片も無かつた。心の底からどうでもいいというような表情だつた。本当にこの男には、【良心】

が無いのだろうと、この時僕は始めて確信した。

「……………うん。好きにする。……………それじゃ」

栞とともに屋上を出ようとしたとき、何を思ったか白衣の男が、聞こえるか聞こえないかくらいの声で、

「左だ。食堂を出た後すぐのカドは左へ曲がれ」

と言った。さつきと逆の方向だった。それは奴に残った最後の親心なのだろうか？分からなかったが、栞が立ち止まらなかったで、僕たちはその場を後にした。

食堂に着いて、英知と簡単に情報を交換する。やはり他のみんなは居なかったらしい。あの男の言葉も、全てが嘘ではなかったらしい。僕たちはよっぽど注意して観察しないと気付かないような場所に隠された扉を開け、先へ進んだ。直ぐに問題のＴ字路にたどり着く。

「どっちだと思っよ？」

と英知。

「正直分かりません。どちらも罠っぽく思えます。茉莉さんはどう思いますか？」

とこれは頼娃君。

「僕は、右だと思う」

と答えた。

「そうか？あいつがそんなタマかよ。俺は左だと思うぜ？」

「どちらも罠……………だよ。……………フォリス……………君、この壁を【開けて】くれない、か？」

栞がどこか喋りにくそうに言った。

「……………」

無言のまま、フォリスが壁に手をかざすと、壁が開いた。どういう原理が分からなかったが、それが彼女の【能力】なのだろう。

「ここから飛び降りる」

そう言っただけが指差した先には、しかし何もない空間が広がっていた。

「馬鹿な。悪いが、お前おかしくなっちゃったんじゃないのか？間違いないで死ぬ高さだぞ？」

「大丈夫だ。私はもう、大丈夫。信じてくれ、必ず君たち全員を【浮かせて】見せるから」

それが言っている意味はよく分からなかったが、彼女を信じると決めた僕は、先陣を切って飛び降りる事にした。

終

「ここまでくれば大丈夫だろう」

僕たちが【此処】と呼んでいた場所から、ゆうに3キロは離れた位置まで来ると、やっと足を止めて栞が言った。

栞と英知は比較的涼しげな顔をしているが、僕と頼娃君、それにフオリスは肩で息をしていた。

僕はあらためて【此処】を見上げる。空中に浮くその建物は、ここからでもよく見えた。

「あれも、栞が浮かしてるのか？」

巨大な建物を指差して、信じられない思いを込めて僕は聞いた。

「私の【能力】は、溜めておけるんだ」

「ほー、そういう【能力】は始めて聞いたな、それにしてもあんなもんを浮かしちまうなんてお前の【能力】も大概だな」

「……【能力】の強さは、失ったものの大きさに、基本的には比例するらしいですからね。栞さんの【能力】がそれほど強いという事は……」

英知の関心するような声に、頼娃君が続いた。言っつて気まずくなつたのか、その言葉は尻すぼみになつたが。

「……そうだよ。私の【代償】は、【親しい人間の良心】だ」

「だった、じゃなくてか？」

英知がそう聞いた。

「そうだ。それは現在進行形の【代償】だ。……だから、私と親しくなるのは止めた方がいい。そんな心配もないか」

「断る。俺はあんな風にはならねえよ」

「……というか、茉莉さんの近くに居れば大丈夫な気がしますけどね」

顥娃君が、僕を見ながら言う。

「そうだよ。君の【代償】は僕が必ず消してあげるよ」

「で？これからどうするんだ？何も案がないのなら、俺は他のみんなを探しに行こうと思うんだが」

「具体的な案もないのですか？どこにいるか分かってないんですよ？」

「そうだけどー！！」

「すぐに殺されたりはしないと思いますよ。強力な【能力】を持つ人は、研究材料として、利用価値があるみたいですから、ね」

「でも安全とも限らないだろー！！………… お前はどうかんだフォリス？いつまで黙ってるつもりだよ」

「…………… 私は。私は、今はあの人から離れたい。怖いから。信用できないから。…………… 今はまだ」

やっと喋ったと思ったら、フォリスから怖い人間だから離れたいと言われた。かなりショックだが、仕方ないかもしれない。剥き出しの殺気を向けてしまったのだから。

「茉莉さんは、あなたが今思ってるような人じゃないですよ」

「分かってるわ。だけど今はどうしても怖い」

「おいおい茉莉。嫌われたもんだな、お前。何やったんだよ」

「それは…………」

言いよどむと、顥娃君が助け舟を出してくれた。

「まあまあ。それよりも、二手に分かれるのは僕も賛成です。全員固まってるいても、捕まえてくれと言っているようなものですからね」

「それはいいけどよ、連絡は取れるようにしておきたい所だな」

「…………… そういう事なら、コレを渡しておこう」

榊が、英知に何かを渡した。

「お？これ携帯じゃん？何でこんなの持ってるんだ？」

「…………… お守り、みたいなものだ」

「大事なもののなか？それじゃ受け取れねーよ」

「いや、いい。友達にはなれないが、君たちには感謝している。受け取ってくれ。次にあった時に返してもらえればいい」

英知たちと別れて暫らく経つと、栞が聞いてきた。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが」

そのいつもと変わらない問いかけには、きつと何か意味があるのだろつ。

【此処】から出ても何も変わらないと言いたいのか。

自分がもう完全に立ち直った事を暗に伝えたいのか。

正確な所は分からなかったけれど、僕もいつものように返した。

「うん。何かな？」

「これから、どうしようか？」

「栞はどうしたい？」

「君が決めてくれ、茉莉君」

「そうだなあ。とりあえず一休みしたいかな」

「ふふ。それは私の質問の意図とはかなりずれてるよ。でもまあ、私も賛成かな。何だかとても疲れたんだよ、茉莉君」

「僕もだよ」

「関係ない事を一つ聞くけれど、私の喋り方、おかしくないかな？」

「……………おかしいの基準にもよると思うけど、何もおかしくないよ」

「女らしくないとは、思わないかい？」

「今更だね。君がそういう喋り方をする事は、僕の中ではもう当た

り前になってるよ。それに、どんな喋り方でも、栞は栞だよ」

「……………一応聞いておくが、そのセリフは素で言ってるのか？」
「何が？」

「何でもないよ」

急に黙ってしまった栞と共に、何も無い道を歩いていく。

ここは何処なのだろう。そもそも日本なのだろうか？

どこか休める所に着くまで、どのくらいの時間が掛かるか分からないのに、このまま栞が喋ってくれなかったら困るなあ。と僕は思った。

終（後書き）

最後まで読んで下さって本当にありがとうございます。

実の所、最初はこんなに長くなる予定では無かったのですが、気付けばなんと全200話にもなっていました。

冒頭に、物語の核心部分を持ってきたのは、京極夏彦さんの【女郎蜘蛛の理】を意識したのですが、全然上手くいきませんでした。難しいです。力不足です。

この終わり方なら予想はつくかと思いますが、続編を書きたいなと思っています。主人公はもちろん茉莉と栞です。次回はあとほんの少しだけ明るい雰囲気になると思います。それにあたり、現時点での各人の【能力】と【代償】、【現時点の状況】を纏めたいと思います。

・茉莉 まつり

能力―他人の能力を強化する事ができる。アル・アジフに触った事で強化され、能力を弱める事も出来るようになった。

代償―自分の意思に関わらず、能力者を引き寄せる。トラブルメーカー体質。

脱出後栞と行動を共にしている。

・栞 しおり

能力―物を浮かせる？能力の蓄積が可能。詳細不明。

代償―親しい人の良心。家族ではなく親しい人。

脱出後茉莉と行動を共にしている。

・英知 えいち

能力―他人を支配する？発動には様々な条件がある。詳細不明。
代償―体に穴？詳細不明。

鞘香達を探すために手がかりを探している。

・フォリス（ふおりす）

能力―ドアを作る？詳細不明。

代償―現時点では不明。

とりあえず英知と穎娃と行動を共にしている。

・亜空 あくう

能力―空間を広げる事ができる。

代償―把握出来ない空間がある。

不明。

・鞘香 さやか

能力―物を作る。詳細不明。

代償―作る度に見合った存在感を失う。

不明。

・千鶴子 ちいし

能力―他人を操る。詳細不明。

代償―現時点では不明

不明

・千寿 せんじゅ

能力―未来を選ぶ事ができる。アル・アジフに触れた事で強化され、かなり先の未来まで選ぶ事ができるようになった。

代償―現時点では不明

・えい穎娃

能力―他人の心を見る事ができる。アル・アジフに触れた事で強化され、人の気配を探れるまでになった。

代償―同上。

英知、フォリスと行動を共にしている。

木霊？（こだま？）

能力―他人の記憶をいじる事ができる。詳細不明。

代償―現時点では不明。

私は物語独特の理不尽さが、嫌いで、好きです。

タイミングを計っていたかのような都合のいい登場。

意味もなく自分の力を話す敵役。

完全無欠のハッピーエンド。

などです。嫌いだけど、好きなので、おかしくないように見えるように、都合よく登場せましたし、おかしくないように見えるように自分の能力を話させました。

おかしくないように見えていればいいのですが。

完全なる悪を登場させたいです。ほとんどの物語において、悪役にも仕方のない事情というものがあります。今回でいう栞の父親みたいな、です。そんなのではない、悪たる悪を書いてみたいです。ちなみにそういう見方でいくと、栞の父親は最初に出てくる悪の四天王みたいな感じです。最初に主人公にやられていろいろあって一

番強くなつて、主人公にやたらとライバル意識を燃やしたあげく、結局最後に主人公を「お前を俺以外が倒すなんて許せねえんだ」とか何とか言いながら助けるみたいな位置です。まあ私の書く物語では助けないと思いますけど。分かりません。

一言感想をいただけると本当に嬉しいです。一番好きなキャラとか書いてくれるともっと嬉しいです。

長い長い後書きを読んで下さって、改めてありがとうございます。よければこれからも茉莉と栞の物語を読んでやって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8931e/>

世界の狂う重さ

2010年10月11日05時14分発行